

両総農業水利事業第3揚水機場建設工事 埋蔵文化財調査報告書1

— 山武郡成東町八幡神社南（1）遺跡 —
— 山武郡成東町八幡神社南（2）遺跡 —

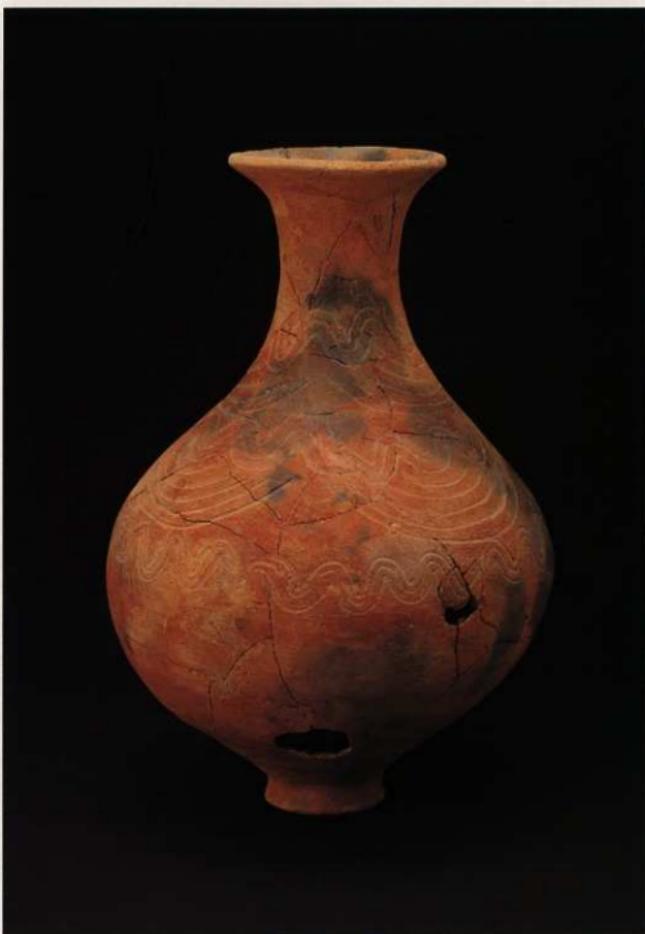
平成18年3月

関東農政局両総農業水利事業所
財團法人 千葉県教育振興財団

両総農業水利事業第3揚水機場建設工事 埋蔵文化財調査報告書 1

— 山武郡成東町八幡神社南（1）遺跡 —
— 山武郡成東町八幡神社南（2）遺跡 —





SS001出土の壺

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第528集として、山武郡成東町の両総農業水利事業第3揚水機場建設工事に伴って実施した八幡神社南（1）遺跡・八幡神社南（2）遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代から奈良・平安時代の集落を中心とした遺跡から多数の土器類が出土し、なかでも弥生時代中期の竪穴住居や方形周溝墓からは良好な土器群が出土しており、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人千葉県教育振興財団

理事長 佐藤 健太郎

凡　例

- 1 本書は、両総農業水利事業第3揚水機場建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、次の2遺跡である。
 - 八幡神社南（1）遺跡（遺跡コード404-009） 山武郡成東町成東字廣台2,344-1ほか
 - 八幡神社南（2）遺跡（遺跡コード404-013） 山武郡成東町成東字廣台3,261-1ほか
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、関東農政局両総農業水利事業所の委託を受けて財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は上席研究員 今泉 漢が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、成東町教育委員会、（財）山武郡文化財センター、関東農政局両総農業水利事業所の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1:25,000 地形図
「成東」(N1-54-19-11-1 平成13年発行) 原寸で使用
「上総片貝」(N1-54-19-11-2 平成10年発行) 原寸で使用
「八街」(N1-54-19-11-3 平成10年発行) 原寸で使用
「東金」(N1-54-19-11-4 平成12年発行) 原寸で使用

第2図 「迅速測図一成東町」(明治15年測量、明治20年発行 佐倉近傍第4号
参謀本部陸軍部測量局作成 1:20,000) 原寸で使用

第3図 「成東町平面図11」(平成12年修正 成東町作成 1:2,500) 50%に縮尺して使用
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成16年1月撮影（約1:5,000）のものを使用した。
- 9 本書で使用した座標値はすべて日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 10 土器類の色調の表記に当たっては、小山正忠・竹原秀雄 1999『新版標準土色帖』（財）日本色彩研究所を参考にした。

第 1 編

本文目次

第1編 八幡神社南（1）遺跡

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯	1
2 調査の方法	2
3 整理の方法	4
第2節 位置と歴史的環境	5
1 調査地の位置	5
2 歴史的環境	5
第2章 造構	10
第1節 弥生時代	10
第2節 古墳時代	18
第3節 奈良・平安時代	40
第4節 その他の遺構	49
第3章 出土遺物	52
第1節 土器類	52
A 弥生時代, B 古墳時代, C 奈良・平安時代, D 墨青土器	
第2節 土製品	73
A ミニチュア土器, B 土玉, C 棒状土製品, D 管状土錘, E 土器砥, F 瓦塔, G 支脚, H 瓦	
第3節 金属製品	77
第4節 石製品	77
A 旧石器, B 石鎚, C 石製模造品, D 凹石, E 支脚, F 砥石, G 輕石	
第4章 まとめ	79
A 弥生時代, B 古墳時代, C 奈良・平安時代	

挿図目次

第1図 八幡神社南（1）遺跡と八幡神社南（2）遺跡	36
（中扉裏）	37
第2図 遺構位置図	38
第3図 調査地の位置と周辺のおもな遺跡	39
第4図 調査地の位置（迅速測図）	41
第5図 八幡神社南（1）遺跡の調査範囲	42
第6図 SS001	43
第7図 SS001	45
第8図 SS002	46
第9図 SS003	47
第10図 SI007	48
第11図 SI020	49
第12図 SI027	50
第13図 SI001	50
第14図 SI002	53
第15図 SI003	55
第16図 SI005	57
第17図 SI008	59
第18図 SI009	61
第19図 SI010	63
第20図 SI011・SI012	65
第21図 SI013	68
第22図 SI014	72
第23図 SI015・SI016	74
第24図 SI018	75
第25図 SI019	78
SI019	35

表目次

第1表 石製品観察表	78
------------	----

図版目次

卷頭図版	SS001出土の臺	3	SI016全景（北西から）
図版1	航空写真（平成16年1月撮影 約1:5,000）	4	SI017全景（南から）
図版2	1 調査地近景（南西から）	5	SI017遺物出土状況（北東から）
	2 航空写真（北西から）	図版11	1 SI018全景（南東から）
図版3	1 SS001航空写真（上空から）	2	SI018遺物出土状況（北から）
	2 SS001東溝（北西から）	3	SI019全景（南東から）
	3 SS001西溝（北西から）	4	SI019カマド全景（南東から）
	4 SS001南溝遺物出土状況（北東から）	5	SI019南柱穴全景（北西から）
	5 SS001南溝遺物出土状況（北東から）	図版12	1 SI020全景（南東から）
図版4	1 SS002航空写真（上空から）	2	SI021全景（南東から）
	2 SS002西溝全景（北西から）	3	SI023全景（北西から）
	3 SS002北溝全景（西から）	4	SI024全景（南東から）
	4 SS003東溝全景（東から）	5	SI026全景（南西から）
	5 SS003北溝全景（東から）	図版13	1 SB001全景（北から）
図版5	1 SI001全景（南東から）	2	SB002全景（南西から）
	2 SI001遺物出土状況（北東から）	3	SK002全景（南東から）
	3 SI002全景（南西から）	4	SK003全景（北西から）
図版6	1 SI003全景（南東から）	5	SK004全景（西から）
	2 SI004全景（南東から）	6	SK005全景（北東から）
	3 SI004カマド全景（南東から）	3	SK001全景（北東から）
	4 SI004遺物出土状況（西から）	4	SK006全景（南東から）
図版7	1 SI006全景（南東から）	5	SK008全景（南東から）
	2 SI007全景（南西から）	図版14	SS001出土土器・弥生土器
	3 SI008全景（南西から）	図版15	SI001～SI003出土土器
図版8	1 SI009全景（南東から）	図版16	SI003・SI008～SI011出土土器
	2 SI010全景（北西から）	図版17	SI011・SI014・SI018・SI019出土土器
	3 SI010遺物出土状況（北西から）	図版18	SI019・SI028・SI004出土土器
図版9	1 SI011全景（南西から）	図版19	SI006・SI017・SI021・SI024出土土器・墨 晝土器
	2 SI012全景（南東から）	図版20	墨晝土器・土製品・土製支脚・瓦
	3 SI013全景（北西から）	図版21	金属製品・石製品
図版10	1 SI014全景（南東から）		
	2 SI015全景（北東から）		

第 2 編

本文目次

第2編 八幡神社南（2）遺跡

第1章 はじめ	107
第1節 調査の概要	107
1 調査の経緯	107
第2章 遺構	107
第1節 A地点 (SI001・SD001～SD003・SK001)	107
第2節 B地点 (SI002～SI006)	111
第3節 C地点 (SI007～SI018・SB001)	116
第3章 遺物	127
第1節 土器類	127
A 繩文時代, B 弥生時代, C 古墳時代, D 奈良・平安時代	
第2節 土製品	142
A 支脚, B ミニチュア土器, C 棒状土製品	
第3節 墨書き土器	144
第4節 金属製品	144
第5節 石製品	144
第4章 まとめ	147
第1節 弥生時代	147
第2節 古墳時代	147
第3節 奈良・平安時代	148

挿図目次

第1図 調査地の位置	108	第11図 SI011	119
第2図 SI001	110	第12図 SI012	121
第3図 SI002	112	第13図 SI013	122
第4図 SI003	112	第14図 SI014	123
第5図 SI004	113	第15図 SI015・SI016	124
第6図 SI005・SI006	115	第16図 SI017	125
第7図 SI007	116	第17図 SI018・SB001	126
第8図 SI008	117	第18図 繩文土器・SI006出土土器	128
第9図 SI009	118	第19図 SI009・SI010出土土器	130
第10図 SI010	119	第20図 SI011・SI012・SI017・遺構外出土土器	132

第21図	SI001・SI004出土土器	134	SI007・SI018・SI013	140	
第22図	SI014出土土器（1）	136	第25図	土製品・墨書き土器・金属製品	143
第23図	SI014（2）・SI008出土土器	137	第26図	石製品（1）	145
第24図	SI003・SI015・SI016・SI005・SI011		第27図	石製品（2）	146

表 目 次

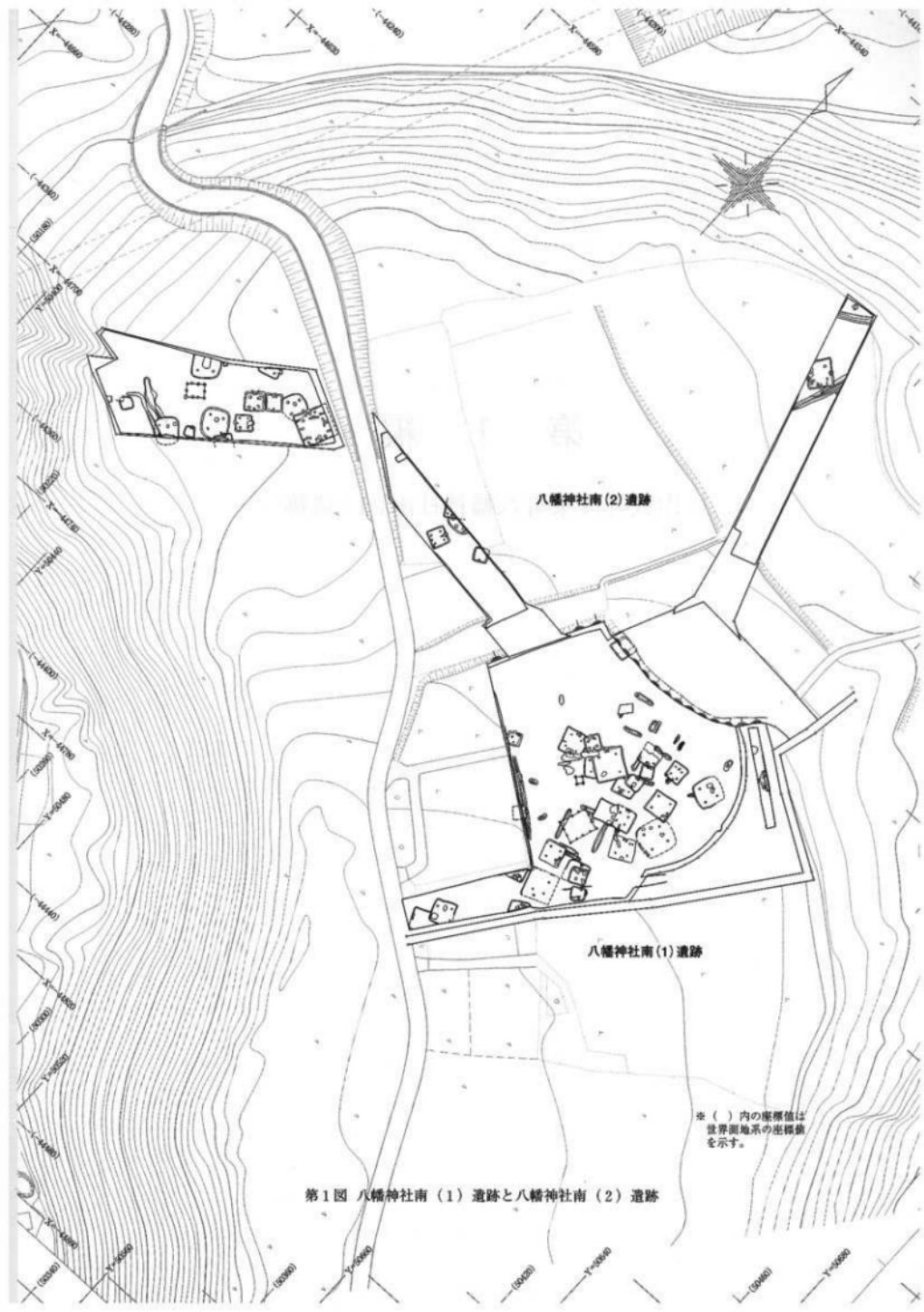
第1表	石製品観察表	146
-----	--------	-----

図 版 目 次

図版 1	1 A地点調査前近景（南から）	2 SI014全景（東から）	
	2 SI001全景（南東から）	3 SI017全景（南東から）	
	3 SI003全景（南東から）	図版 6	1 SI015全景（南東から）
図版 2	1 SI004全景（東から）	2 SI016全景（南から）	
	2 SI004カマド全景（南から）	3 SI018全景（西から）	
	3 SI004遺物出土状況（南西から）	図版 7	SI006出土土器
	4 SI005・SI006全景（南東から）	図版 8	SI006・SI009～SI011出土土器
図版 3	1 C地点調査前近景（北東から）	図版 9	SI010・SI012・SI001・SI004出土土器
	2 SI008全景（南西から）	図版 10	SI004・SI014出土土器
	3 SI007全景（東から）	図版 11	SI014・SI008出土土器
	4 SI009全景（北東から）	図版 12	SI003・SI005・SI007・SI015・SI016・ SI018出土土器・墨書き土器・縄文土器
図版 4	1 SI010全景（北東から）	図版 13	土製支脚・棒状土製品・金属製品・石製品
	2 SI011全景（南から）		
	3 SI012全景（北西から）		
図版 5	1 SI013全景（南から）		

第 1 編

—山武郡成東町八幡神社南(1)遺跡—



第1図 八幡神社南（1）遺跡と八幡神社南（2）遺跡

※（ ）内の座標値は
世界地図系の座標値
を示す。

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯

両総用水は、北は利根川沿岸から九十九里平野まで、千葉県北東部を中心に灌漑する農業水利施設で、千葉県の水田の約20%を灌漑している。用水の総延長距離は78kmに及び、わが国の農業水利施設のなかでも大規模で広範囲にわたる施設のひとつである。用水が敷設されるまでは、利根川沿岸は極端な排水不良地域で度重なる湛水害にさらされ、いっぽう大きな河川のない九十九里平野の水田は、雨水に依存する天水田で干魃被害が絶えなかった。とくに昭和8・9年（1933・1934）に続く、昭和15年（1940）の九十九里地域を襲った大干魃が事業化の原因となった。こうした被害を解消し、水田地帯の治水対策と安定した農業用水を供給する目的に、昭和18年（1943）に国営両総用水土地改良事業として工事に着手し、戦後のインフレで一時中断はあったものの、昭和40年（1965）に用水は完成をみた。

両総用水の完成によって、この地域の農業の発展と高生産性農業の実現に重要な役割を果たし、県内でも有数の穀倉地帯となるまでになった。しかし完成から30年から50年が経過し、水路やトンネルのヒビ割れや変形、施設の老朽化と能力低下が著しく、大規模地盤や台風でも施設に被害が出るまでになり、老朽化した施設の更新が急務となつた。そこで平成5年度（1993）より「両総農業水利事業」として事業を進めることになった。これは用排水施設の改修・新設等を行って、排水機能を維持・向上するとともに、水管管理の合理化及び維持管理の節減を図り、併せて県営事業等による保場整備等を行い、農業経営の安定化を目的とするものである。さらに平成10年（1998）には更新事業に含まれなかつた旧事業の施設の改修及び施設の新設への取り組みが始まり、関東農政局両総農業水利事業所で全体的な施設の更新を行う事業計画を立て、山武郡成東町成東には第3揚水機場を設置することになった。

事業計画の実施にあたって、両総農業水利事業所から平成13年9月7日付け13両総第411号で「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査の結果を踏まえ、同年9月28日付け教文第13号の14で事業地の一部に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨の回答をした。事業計画では台地の高台に吐水槽を設置し、そこから圧送管と送水管の2本の管路が延びることになっており、この台地一帯が周知遺跡の八幡神社南遺跡になり、そして北側の台地下が周知遺跡の八幡神社北遺跡になる。そしてこの回答を受けて、その取り扱いを関係機関で協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。今回の調査にあたって、八幡神社南遺跡の吐水槽を中心とした範囲を八幡神社南（1）遺跡とし、管路部分を八幡神社南（2）遺跡とした。また八幡神社北遺跡については、現両総用水を挟んで右岸の第2調整池部分については八幡神社北（1）遺跡、左岸の機場部分を八幡神社北（2）遺跡とした。なお平成16年5月18日付けの13両総第411号で、機場部から延びる管理用道路部分について追加照会があり、全域に埋蔵文化財が所在する旨の回答があつて、その部分を八幡神社北（3）遺跡として、調査を実施することとなった。

発掘調査は事業スケジュール等を調整した上で、平成16年2月より八幡神社南（1）遺跡の確認・本調

査を開始する運びとなり、平成16年度には八幡神社南（1）遺跡の調査と併行して、八幡神社北（1）遺跡、八幡神社北（2・3）遺跡の調査も併行して開始し、平成17年3月に八幡神社南（2）遺跡の発掘調査終了をもって、現地での作業をすべて完了した。

八幡神社南遺跡（1）の整理作業から報告書刊行までの作業は、平成15年度と平成16年度の2か年にわたり、一部の整理作業は現地の発掘作業と併行して行っている。その間の調査組織及び発掘調査と整理作業の担当者は以下のとおりである。なお八幡神社南（2）遺跡については、本書の第2編で述べる。

発掘調査

平成15年度 東部調査事務所長 折原 繁 調査担当者 今泉 潔

調査遺跡 八幡神社南（1）遺跡

平成16年度 東部調査事務所長 鈴木定明 調査担当者 土屋満一郎

調査遺跡 八幡神社南（1）遺跡

整理作業

平成16年度 東部調査事務所長 鈴木定明 整理担当者 今泉 潔

整理遺跡 八幡神社南（1）遺跡 水洗・注記から報告書刊行まで

2 調査の方法（第1・2図）

調査にあたっては、3地点の調査地（八幡神社南（1）・（2）遺跡・八幡神社北（1）・（2）（3）遺跡）全体を覆うように、国土地理院標準（第IX座標系）のX = -44,300, Y = 50,400を起点¹¹に40m×40mの方眼網を設定し、これを大グリッドとした。名称は起点から南北方向に南へ1, 2, 3、東西方向には東へA・B・Cとし、この数字とアルファベットを組み合わせてグリッド名とした。そしてその大グリッドをさらに4m四方のマスで100分割し、北西隅を00、南東隅が99になるように割り振り、これを小グリッドとした。現地ではこれを組み合わせて、たとえば11E36というように表記した。この表記は現地調査の記録類から、遺物の注記にあたっても踏襲した。なお本調査終了まで年度を跨ぐことが確実だったので、記録類の一部には年度の別がわかるように、遺跡コードの後に（1）・（2）を付してあるものがある。ただこれは便利的なものなので、遺物の注記等にあたっては省略している。

調査はまず確認調査を調査対象面積の10%を目安に、調査地の形状や微地形等を考慮に入れて、任意にトレチを設定した。また遺構の性格・時期・深度等を把握するために、遺構の埋土を一部掘り上げた。調査の結果、調査地全体が以前にかなり削平されていることが明らかになり、一部の堅穴住居では床が露呈しているものもあった。なお地元住民からの聞き取りで、台地下にある調整池の土堤を築堤するために、調査地内から用土を供給したことだったので、その際に調査地内が大きく削平されてしまったことがわかった。また調査地内の畠地は調査直前までネギを栽培していたこともあって、トレチの確認面にかなりローターの痕跡が縞状に残り、11ラインより南側に顕著であった。なかでもSI006とした堅穴住居は、確認トレチで難航ながら遺構の存在はわかったものの、輪郭まで把握できなかった。そこでトレチ内を一部掘り下げ、さらにサブトレチを設定して、堅穴住居の輪郭を推定した。

確認調査の結果、一部のトレチでは、遺構の重複状況も確認でき、調査地の中央部を中心にかなり遺構が密度高く存在することがわかった。調査地北部の一段下がった一帯は、中央部よりもさらに削平されていることが明らかになり、遺物もほとんど出土しなかったことから本調査範囲から除外した。また工事の施工で掘削の及ばない範囲についても本調査の対象から除くことになった。

D

E

F



9

X = -44.660

10

SK025

SK008

SK023

SK015

11

X = -44.770

SK024

SK003

SK001

SK028

12

X = -44.780

SK001, SK002, SK003, SK004, SK005, SK006, SK007, SK008, SK009, SK010, SK011, SK012, SK013, SK014, SK015, SK016, SK017, SK018, SK019, SK020, SK021, SK022, SK023, SK024, SK025, SK026, SK027, SK028.

第2図 造構位置図

本調査にあたっては、各遺構に遺構の種別をアルファベットで表記し、竪穴住居をSI、土坑・陥穴をSK、方形周溝墓SS、柱穴のみを確認した遺構についてはSBとした。遺構の種別ごとに3桁の1番から通し番号を付し、重複する遺構については枝番等の表記はせずに1つの遺構番号をあたえている。

調査にあたっては、単独の竪穴住居の場合、住居の4辺の中心を基準に十文字に上層観察用の土手を残し、カマドがわかるものについては、その部分をとおして土手を残した。重複する竪穴住居の場合は、重複関係を把握できる位置に上層観察用の土手を残したが、実際の調査では平面的に新旧関係を確認して調査を進めのために、一部の断面図に図化されているような、新しい住居の立ち上がりの線は観察した結果の線ではない。柱穴は上面径が小さいこともある、とくに断面を断ち割るような調査はしていない。

遺構平面図の図化にあたっては、遺構が重複しているものもあって基本的には簡易造り方を用いて20分1で行ったが、単独の遺構で平坦部に位置する遺構は平板測量も併用した。住居内の諸施設（炉・カマド・貯蔵穴等）を図化するときは、平面・断面とも10分1で図化するのを基本とした。なお竪穴住居内の遺物の取り上げについては、マッチ箱の大きさを目安にして、それ以上の大きさのものを平板測量で出土地点をおさえて取り上げた。それ以下の遺物は、観察用の土手で住居内を区分し、その地区分けにしたがって一括して遺物を取り上げた。土器類の出土状況の微細図については、竪穴住居の施設に関わるものについては10分1、それ以外は20分1で図化し、断面図等については適宜作成した。また住居の床面を中心炭化材が出土した例もあったが、いずれも板状で遺存状態も悪く、範囲を図化したものがほとんどで、とくに資料として取り上げたものはない。ただし遺存状態のよいもので、建築用材と判断したものについては、現地で材を断ち割り、その断面形状等を記録した。

3 整理の方法

今回の報告にあたっては、とくに遺構番号を追加・変更した例はなく、現地調査において付けた遺構番号をそのまま使用している。遺物への注記作業もすべてこれに則っている。ただSK007は、最終的に方形周溝墓（SS003）の溝の一つと判断されたので、調査時に遺構番号の変更を行った。整理作業にあたっては、遺構ごとに遺物を種別に分類してから、接合作業等を実施した。なお遺構の年代が比較的似通っていても、とりたてて遺構間接合という作業手順は踏んでいない。せいぜい特徴のある、目についたものに限って行ったにすぎない。また土器類の接合の結果は、遺物出土図や台帳に記載された高さをもとに、接合状況図を平面図と縦・横断図で作成した。ただし本書への掲載にあたっては、遺物量が少なかったり、遺構が浅い場合に適宜掲載を省略した。

注1 主要な地点の世界測地系の座標値（第9座標系）は以下のとおりである。なお計算結果はWeb版TKY2JGD Ver. 1.3.79 パラメータVer. 2.1.1による。

地点	Bessel格円体（日本測地系）		GRS格円体（世界測地系）		(日本測地系)	
	X座標	Y座標	X座標	Y座標	北緯	東經
基 点	-15,250	7,300	-14,895.0141	7,006.8356	35°51'56.59602	139°54'39.31984
11E00	-15,300	7,300	-14,945.0120	7,006.8370	35°51'54.97367	139°54'39.31828
12E00	-15,450	7,350	-15,095.0075	7,056.8397	35°51'50.10527	139°54'41.30679

第2節 位置と歴史的環境

1 調査地の位置（第3～5図、図版1）

成東町は千葉県の東部、九十九里平野のはば中央に位置する。成東町を含む九十九里平野を臨む山武地域は、下総台地の一角をしめる洪積台地と、海蝕崖下に広域に広がる海岸平野とにわけられ、調査地はそのちょうど境界の洪積台地上に位置する。調査地はJR総武本線の成東駅の南西約2.3kmの地点にあたり、東金市との行政界には接する位置にある。調査地の位置する独立丘陵上の台地は、作田川下流域の右岸に位置する。この台地は北東・南西方向に細長く、長さ2.5km、幅約1kmになる。台地裾には北から南下する作田川がこの台地の中央部に突き当たり、台地の東裾を迂回して、九十九里平野を横断して太平洋に流入する。JR成東駅周辺から台地の南側裾部にかけては市街地が広がり、それ以外には台地を浸食した谷の出口池の湿地帯を利用して湿田が広がる。

この台地は背後に控える樹枝状台地の基部から、太平洋側に切り離された一つの独立丘陵のように見える。しかし『迅速測図』（第4図）によれば、細長い台地も実は南北方向に深く浸食をうけて、大きくは五つの台地に分断されていたことがわかる。現在、個々の台地については北から富士見台・愛宕台・宮脇・八幡台・姫島などの小地名を拾い出すことができる。調査地はそのうち八幡台と呼ばれる台地に位置することになる。なおこの一連の台地にはさらに小丘陵の台地も取り付いている。富士見台の北に位置する浪切不動院がある台地があり、一帯は「石塚の森」として県の天然記念物に指定されている。

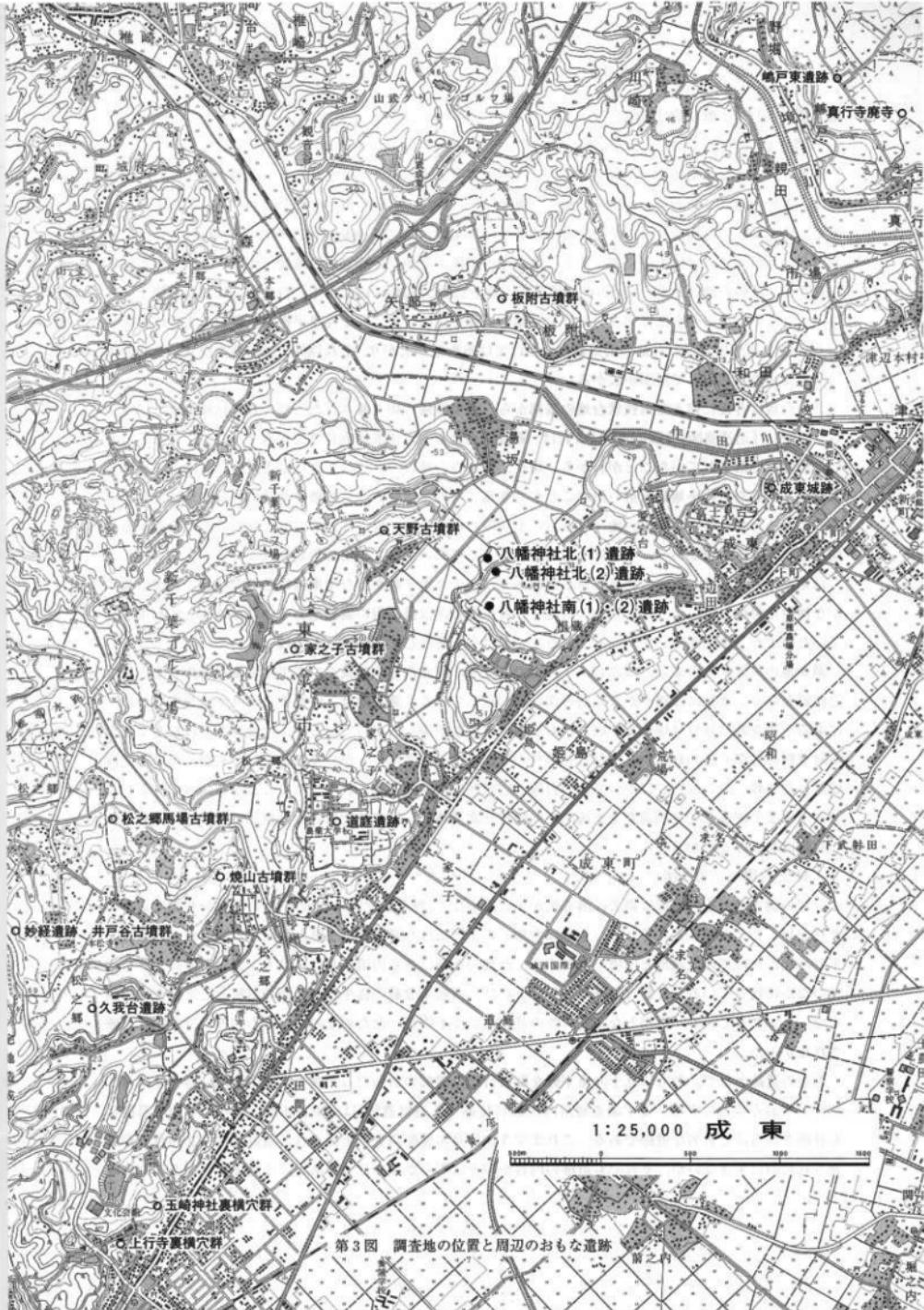
台地上の平坦部はいずれも標高50mが前後あり、九十九里平野を臨む南東側は急峻な崖で、北側は緩やかな傾斜を形成している。また個々の台地を分断する谷津は農業用の調整池あるいは溜池として利用されていた様子が『迅速測図』から読みとれる。一部は今も築堤して調整池として残っている。

調査地の位置する台地は、標高40m～50mで、南東から北西方向に長く、太平洋を臨む南東・北西側は急傾斜となり、北側には緩やかな傾斜の深い谷が迫っている。調査地は、台地中央よりやや北寄りの地点にある。調査地の地目は畠地で、周辺にも畠地や荒蕪地が少し広がっているが、台地の多くは杉を主とする針葉樹林に深く覆われている。ただし杉林のなかには、斜面部でもかつて畠地として利用した形跡が段成形として残っているので、かつてこの台地が広範囲に農耕地として利用されたことを物語っている。なお同一事業で継続して発掘調査を実施した八幡神社北遺跡は、調査地北側の台地裾部に位置し、調査地との比高は30mほどになる。

2 歴史的環境（第3図）

今回の調査地とその周辺は過去に調査例がまったくなく、埋蔵文化財分布地図¹⁾等の遺跡分布図で遺跡の存在を知ることができる。それによれば台地上の平坦部は八幡神社北遺跡として、古墳時代から奈良・平安時代にかけての包蔵地と円墳1基とする。台地の南端にある円墳1基は、今も1mほどの高まりを山林のなかに残している。なお「道庭遺跡」²⁾によれば、台帳未登載の弥生時代中期の遺跡として調査地周辺をマーキングしている。根拠となる資料等の詳細について不明だったためなのか、その内容は分布図に反映されなかった。

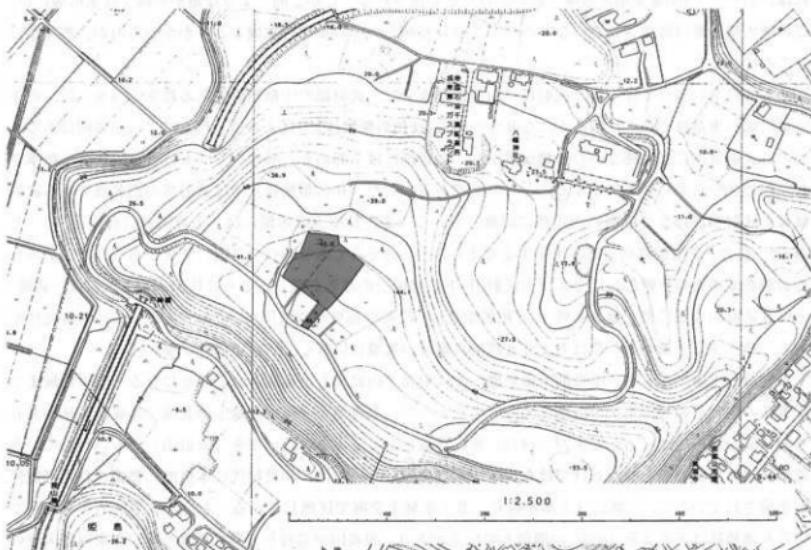
周辺の遺跡として、おもに九十九里平野を臨む台地先端部のおもだった調査例を中心に、時代を追って紹介しておくことにする。まず調査地南西1.5kmに位置する道庭遺跡³⁾は、東日本最大級の方形周溝墓群とも評価されるほど著名な遺跡である。これまで3次に及ぶ発掘調査が実施され、遺跡全体の20%程度が調査されたのにすぎないが、それでも遺跡の内容が徐々に明らかになりつつある。これまでの調査で弥生時



第3図 調査地の位置と周辺のおもな遺跡



第4図 調査地の位置(迅速測図)



第5図 八幡神社南(1) 遺跡の調査範囲

代中期の方形周溝が74基みつかり、遺跡全体では100基を超える方形周溝墓が広範囲に造営されていたようである。方形周溝墓はいずれも四隅で溝が途切れ、埋葬施設にはおもに木棺直葬の土壙墓が採用されている。集落は弥生時代中期から後期にかけての堅穴住居が數十軒あり、中期に環濠に囲まれた集落が成立し、中期の終わり頃から環濠外にも集落を拡大することがわかってきた。宮ノ台期を中心とする集落・墓域としてはもっとも典型的な様相を示している。なお近隣における弥生時代の調査例としては、東金市の成東町側の台地上に中期の資料が出土した平蔵台遺跡⁴があり、後期の調査例としては久我台遺跡⁵等がある。また最近では平野部の砂丘列上でも縄文時代前期末から資料を散見するようになり、近隣でも弥生時代後期の散布地も確認されはじめている⁶。

律令以前の一帯は『国造本紀』にある武社国造の領域に含まれ、集落・古墳群から国造支配の一端をうかがうことができる。集落の台地縁辺部での調査例はまだ少ないが、縁辺部からやや奥まった台地上では、後期に本格的な集落の形成がはじまり、ほとんどの集落は断続はあったにしても、奈良・平安時代までほぼ同じ規模を維持しながら継続していく。道庭遺跡⁷・平蔵台遺跡・久我台遺跡・妙経遺跡⁸、東金台遺跡群（井戸向遺跡・妙経遺跡等）⁹などがある。一方、当地域で大型の前方後円墳が造営されるのは6世紀後半で、その前後から中・小の古墳群が急増する。周辺では道庭古墳群や、終末期の大型墳を含む板附古墳群¹⁰をはじめ、多くの古墳群を造営され、それぞれが拠点的な首長墓群を形成している。なお調査地の谷を挟んだ北西側の対岸には、東金市域でもっとも大規模な古墳群となる家之子古墳群¹¹がある。総基数は80基程度あり、一部の古墳が調査されている。また東金市域では、北幸谷川流域の九十九里平野を臨む海蝕崖斜面の中位に、谷横穴群をはじめ横穴群が高塚古墳とは別に群在している¹²。消滅したものも含めれば、おそらく100基を超える横穴群があったと想像される。しかし同じような地形が続く成東町域には、この種の横穴群は確認されていないので、この分布がかつての集団の領域とどうかかわるのか、興味深いところである。

そして律令の施行に伴って、武射郡・山辺郡が成立し、武射郡の中枢施設である郡衙（郡家）は、近年、成東町鷲戸東遺跡で徐々に明らかになりつつある。『和名類聚抄』¹³によれば、刊本によって異同はあるものの、武射郡内には10郷ないし11郷が置かれ、山辺郡には7郷ある。郷のいくつかは近世の村名に継承され、現地名から遺称地を推定することも可能である。ただ『和名類聚抄』では武射郡の郡名郷である武射郷は、武射郡ではなく隣郡の山辺郡に記載している。また長屋王家木簡には「上總國武昌郡高舍里」¹⁴とみえ、「高舍」を山辺郡高文郷に比定する考え方もあり、おそらくある時点で郡境に変更があったのであろう。なお調査地南東の平野部には今も「上武射田・下武射田」の地名が残り、さらに作田川の上流には「武勝」という武射の音韻に似た地名も残り、『和名類聚抄』段階の郡境が作田川か、その支流としていた可能性がある。そうすると調査地一帯はちょうど郡境再編時の郡境に位置していた可能性が強い。

平安時代末頃になると、中世的所領形態へと武射郡・山武郡も再編成されることになる。この地域まで千葉氏の流れを組む印東氏の版図に入っていたようで、調査地と一連の台地上の北端には成東城跡があり、その一族の印東四郎入道が応永22（1415）年に築城したと伝えられ、一帯を「入道山」ともいわれている。成東城跡は発掘調査を経たわけではないが、地表の観察所見では、16世紀代に本格的に整備された可能性が指摘されている¹⁵。主郭には土塁が巡り、Ⅱ・Ⅲ郭を空堀で区画している。ちなみに遺跡名ともなっている八幡神社は天安2年（858）の開創との伝えがあり、源義国が巡行した際に勧進とも、印東四郎入道の孫である平清風が産土神として祀ったともいわれている¹⁶。

- 注1 千葉県教育委員会 1998『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）－香取・海上・匝瑳・山武地区（改訂版）』
- 2 有沢 要ほか 1983『道庭遺跡発掘調査報告書』第1分冊 道庭遺跡調査会
- 3 有沢 要ほか 1983『道庭遺跡発掘調査報告書』第1分冊 道庭遺跡調査会
- 渡辺修一 1988「20 道庭遺跡」『第9回 三県シンポジウム 東日本の弥生墓制－再葬墓と方形周溝墓』北武藏古代文化研究会
- 川島利道 1994『東金市道庭遺跡－農業大学校バイテク棟埋蔵文化財調査報告書－』（財）千葉県文化財センター
- 城田義友 1998『東金市道庭遺跡－農業大学校バイテク棟埋蔵文化財調査報告書2－』（財）千葉県文化財センター
- 4 丸子 亘 1970『東金市平賀台遺跡発掘調査概報』千葉県教育委員会
- 5 萩原恭一ほか 1988『東金市久我台遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 6 千葉県教育委員会 1998『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）－香取・海上・匝瑳・山武地区（改訂版）』
- 7 道庭遺跡の発掘調査報告は、旧石器時代から古墳時代中期までが報告されており、古墳時代後期以降、奈良・平安時代については未報告のため詳細は不明である。
- 8 谷 句ほか 1994『東金市井戸ヶ谷遺跡－房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書II』（財）千葉県文化財センター
- 糸川道行 1994『妙経遺跡・井戸谷9号墳－房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書III』（財）千葉県文化財センター
- 9 横山林維ほか 1980『東金台遺跡I』東金台遺跡調査団
- 10 輕部恵忍 1955『千葉県山武郡板附不動塚古墳』『日本考古学年報』4
- 軽部恵忍 1958『千葉県山武郡板附不動塚西ノ台古墳』『日本考古学年報』日本考古学協会
- 白石太一郎ほか 1987『千葉県成東町駄ノ塚古墳の調査』『日本考古学協会第53回総会発表資料』日本考古学協会
- 白石太一郎ほか 1996『国立歴史民俗博物館研究報告第65集－成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』国立歴史民俗博物館
- 11 丸子 亘 1968『千葉県東金市家之子古墳群緊急発掘調査概報』『立正大学文学部論叢第30号』立正大学文学部
- 12 津田芳男 1993『上総国地域－東上総地区』『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会
- 13 池邊 瑞 1976『和名類聚抄地名考証 増訂版』吉川弘文館
- 14 千葉県 1996『千葉県の歴史 資料編 古代』県史シリーズ13 財團法人千葉県史料研究財團
- 15 織田頼彦 1972『成東城跡調査報告書』成東城跡調査団
- 16 小笠原長和 1996『日本歴史地理大系第12巻 千葉県の地名』株式会社平凡社

第2章 遺構

第1節 弥生時代

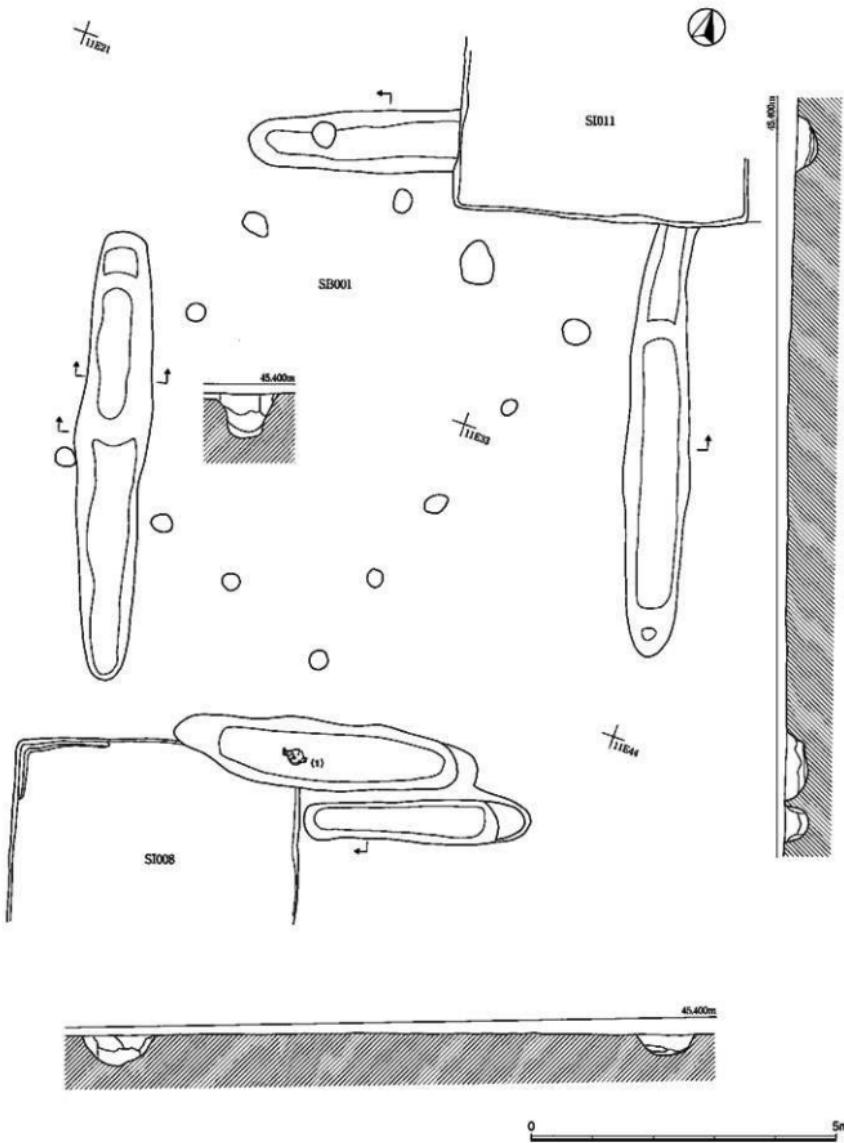
遺構としては、いずれも周溝の四隅が切れる方形周溝墓が3基と、竪穴住居が3軒ある。3基の方形周溝墓は、調査地のほぼ中央に南南東から、緩斜面に向かう北北西方向に並ぶ。竪穴住居はSI007とSI027がその並びの東側に、SI020が西側に位置する。調査した範囲でこれらを面的にみれば、縦に連なる方形周溝墓群の左右に、竪穴住居が衛星のようにとりつくようにみつかっていることになる。なお竪穴住居については、住居から時期を特定できる資料が出土しているわけではないが、住居の平面形態からこの時期に含めている。ただし方形周溝墓群よりは新しくなる可能性が強い。ここでははじめに方形周溝墓、そして竪穴住居の順に説明していく。

SS001（第6・7図、図版3）

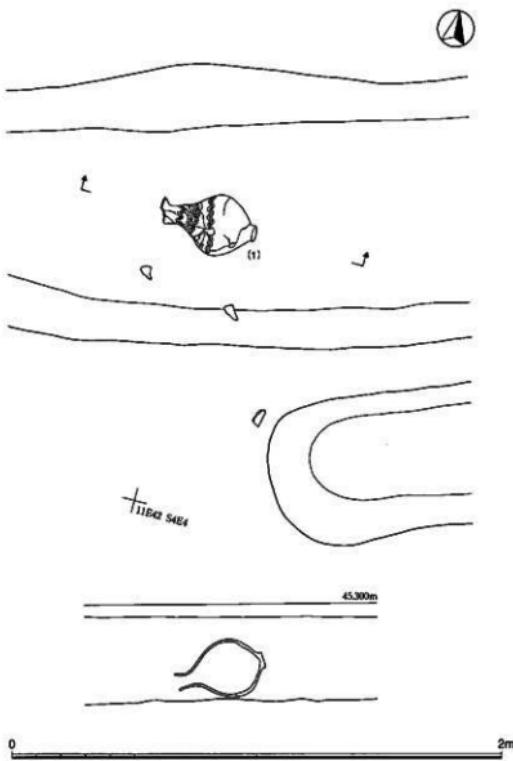
11E12・11E13、11E21～23、11E31～34、11E41～43の範囲に位置する。北溝・東溝の一部がSI011に切られ、南溝の西端部がSI008に切られている。また方台部には掘立柱建物SB001が平面的に重なっている。3基の方形周溝墓のうち、もっとも規模の大きい方形周溝墓である。主軸はN-20°-W前後にとる。各溝の配置は南北方向に長い長方形になり、北・南溝との心々距離は10.0m、西・東溝との心々距離は8.8mになる。埋土は観察地点によってそれぞれ相違はあるが、基本的な堆積土層は上層が褐色系、下層は暗褐色系の土である。

西溝は全長7.3m、最大幅1.2mである。溝の両端から北半分の一段掘り込まれた部分まではおよそ40cm前後の深さになる。断面の形状は逆カマボコ形で、平坦な底面を作り出している。一段掘り込まれた部分は78cmの深さがあり、溝底面との比高は40cmほどになる。壁面での掘形の平面形は長方形になる。底面の長さは2.08m、幅は92cmある。掘込みの形状から周溝内の埋葬施設の可能性があるが、埋土の断面を観察しても、棺部や裏込めの形跡は確認できなかった。出土遺物もとくにない。東溝はその北端部が、重複するSI011より浅かったために全長は不明だが、現存長は7.0mになる。消失した長さは、北溝との位置関係から30cm程度と思われる所以、全長は7.3m前後と推定しておきたい。最大幅は1.0mで、深さは35cm前後、北半部に段がついて浅くなる。断面は逆カマボコ形で、底面は平坦である。北溝は、東溝と同じく溝の東半分がSI011に切られているために全長は不明である。また溝のほぼ中央にはSB001の柱穴が1本重複している。現存長3.4m、最大幅1.0mの素掘りの溝である。深さはもっとも深いところで、37cmになる。断面はやはり逆カマボコ形で、底面は平坦である。南溝は1条の溝とさらに南にそれと平行する細長い落ち込みがあり、両者は上端の輪郭線を共有している。周溝墓の周溝としては北側部分の溝が相当する。溝の西側がSI008と重複するが、重複部分の溝底面が住居床面より深かったために、SI008の床面下にかろうじて溝の底面を残していた。全長4.6m、最大幅1.1mの素掘りの溝である。深さは40cm前後で、断面の形状は逆カマボコ形になるが、他の周溝に比べて上面が開き気味である。溝のほぼ中央部の底面近くから、完形の壺（1）が、口縁部を西に向けて、横倒しの状態で出土した。なお方台部からは埋葬施設等の痕跡は確認できなかった。

南溝の南に平行する細長い落ち込みは、形状・規模から周溝外の埋葬施設の可能性が高い。ここではそ



第6図 SS001



第7図 SS001

の想定のもとに、遺構の規模・形状等について説明していく。棺部と考えられる長方形の落ち込みは、棺部とするには全長がやや長すぎるくらいはあるが、全長3.0m、幅0.6m、底面での全長は2.8m、幅0.4mになる。深さはもっとも深いところで44cmある。断面の形状は「U」字状で、壁の立ち上がりは直立気味で、底面に凹凸はない。埋土は他の周溝とはやや異なり、他の周溝では下層で確認した暗褐色系の土がおもに堆積していた。東側には長さ50cmほどのさらに一段浅い掘込みが連続し、その線は南周溝の上端の輪郭まで連続する。西側はSI008があるために不明である。なお南周溝から出土した壺(1)の破片1点が西端部外側からも出土している。

SS002 (第8図、図版3)

10E62・10E63、10E72～10E74、10E72～10E84にあり、台地北側の緩斜面部になり、約40cmの高低差がある。しかも竪穴住居が密集する一角でもあり、東溝は大半がSI001に切られ、西溝はSI010と重複し、南溝は西半分がSI017に切られ、北溝の西端部は擾乱を受けるなど、すべての周溝が何らかの損壊を被り、

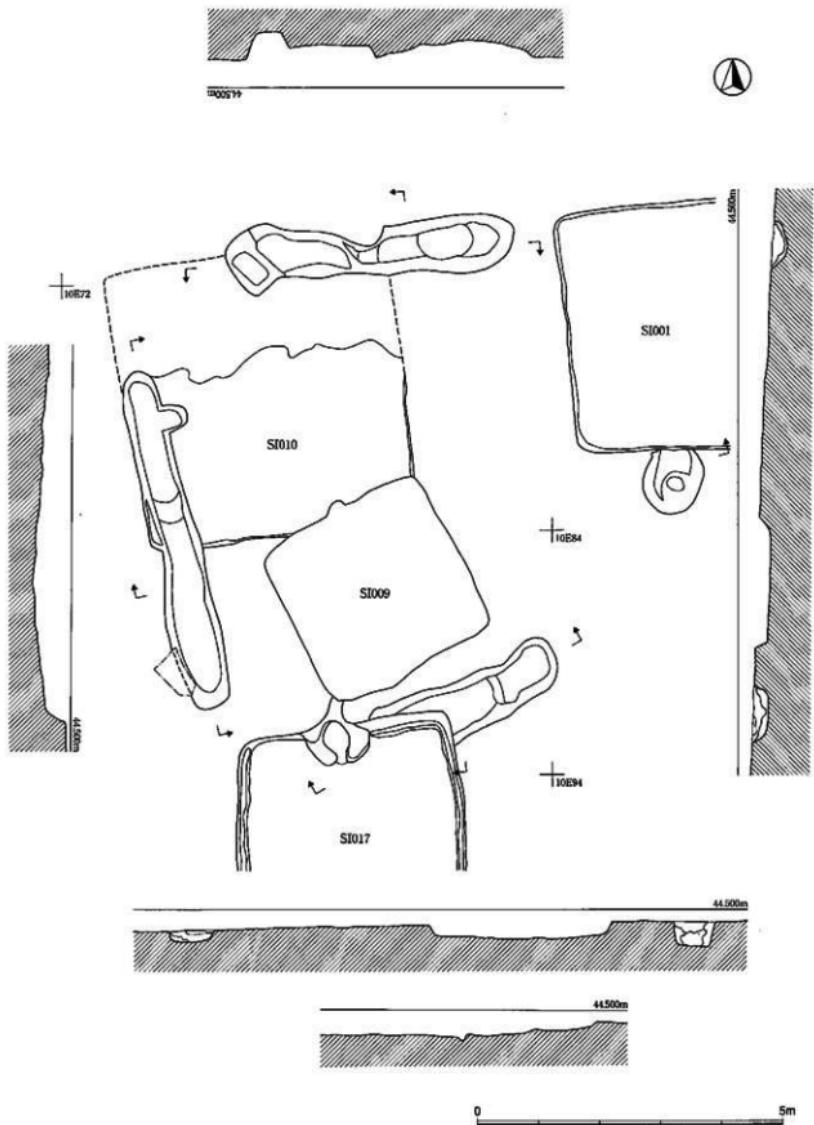
遺構の遺存状態はよくなかった。各溝の位置関係は、全体に台形を基調とするような配置になる。つまり北溝と西溝の延長角度が 82° と直角に近く、北溝と東溝の位置関係もほぼ直角に近くなると思われるのにたいして、西溝と南溝の中心の延長角度は 76° と鋭角になる。北・南溝との心々距離は水平距離で7.6m、西・東溝との心々距離は8.4mになる。西溝の中心で方位を測ると、N- 12° -Wになる。埋土は観察地点によつて相違はあるが、基本的にはローム粒を含む暗褐色土である。

以下、遺存状態のよい周溝の順から説明していく。西溝は全長5.6m、最大幅0.8mで、北半分はSI010の床面下に残っていた。底面はやや凹凸がある。深さはもっとも深いところで33cmである。溝の断面は、壁の上面がやや開く箱形である。中央部の底面に微量の白色粘土塊がみつかった。東溝は西端部が搅乱によって破壊されているが、端部の形状から破壊されているのは端部のごく一部と思われる。全長は推定も含めると4.4mになる。断面は逆カマボコ形になる。溝の東西を二分する位置に括れ部があり、それを境に東と西で細部に相違がある。幅は東側のほうがやや広く0.9m、西側では0.7m、括れ部では0.5mほどの幅になる。深さは東側がやや深く30cm、西側は20cmほどである。括れ部は底面が20cmほど高くなり、それを境に西側は比較的の平坦な底面で、東側の底面にはやや凹凸がある。このように括れ部の底面の立ち上がりと形状の差異は、溝の東西で遺構の性格が異なることを物語っているのかもしれない。しかし溝を縦断する裁ち割りを実施していないので、詳しいことはわからない。南溝は西半分をSI017に切られ、溝底面も住居より浅かったために、東半分の状況しかわからない。遺存長は3.1mで、幅は0.9mになる。東端部が一段浅く深さは17cm、深い部分で28cmになる。溝断面は、やや幅広の逆カマボコ形になる。東溝は南端部しか残っていないために、不明な部分が多い。南溝の東端部とは約3m離れるものの、北端部を北溝との位置関係から推定すると、全長は4mほどと考えられる。溝断面は、南溝と同様、やや幅広の逆カマボコ形になる。深さは深いところで34cmある。また方台部のほぼ半分ほどをSI009・SI010が占有するが、調査したなかに埋葬施設の痕跡は確認できなかった。なお伴う出土遺物はない。

SS003 (第9図、図版3)

10E50・10E51、10E50～10E62、10E70～10E71にあり、調査地北側の緩斜面に位置する。東溝は、当初SK007として調査していたものだが、その後、北溝・南溝、そして西溝の存在が明らかになるとことによって、SK007も含めて四隅の途切れる方形周溝墓と判断するに至った。主軸を北溝・南溝の心々で測るとN- 15° -W前後になる。各溝の配置は、ほぼ正方形に近く、北・南溝の心々距離は7.5m、西・東溝との心々距離は7.4m前後になる。埋土は基本的には、粗いローム粒が多い暗褐色土である。

南溝は全長4.2m、最大幅0.9mで、平面形態は両端がやや尖る結錠形である。溝の両端部がやや浅く、中央部で深くなり、もっとも深いところで30cm程度になる。断面は丸みをおびた逆台形である。北溝は全長4.6m、最大幅1.2mで、平面はかなり丸みをおびた長方形である。やはり溝の両端部がやや浅くなり、深いところで40cm程度の深さがある。断面は逆カマボコ形に近い。東溝は当初土坑と考えて調査したもので、平行する2基の縦に長い造構が横に連結したものとしていた。東溝となるのは、西に位置する、全長2.3m、幅は推定も含めて1.1mの掘込みである。平面はかなり丸みをおびた長方形である。比較的の平坦な底面だが、8cm程度の深さしかない。東側の落ち込みは最大長2.4m、幅は0.9mほどで、各隅に丸みのある長方形と基調とする平面形態である。規模・形状から判断すると、周溝に接する埋葬施設の可能性がある。ただ調査時における両者の断面観察では、溝の埋土を東側の落ち込みが切っていると理解していたが、溝の掘込みが8cm程度と浅く、上面にローターの搅乱があったこともあって、必ずしもこれだけで新旧関係を決める

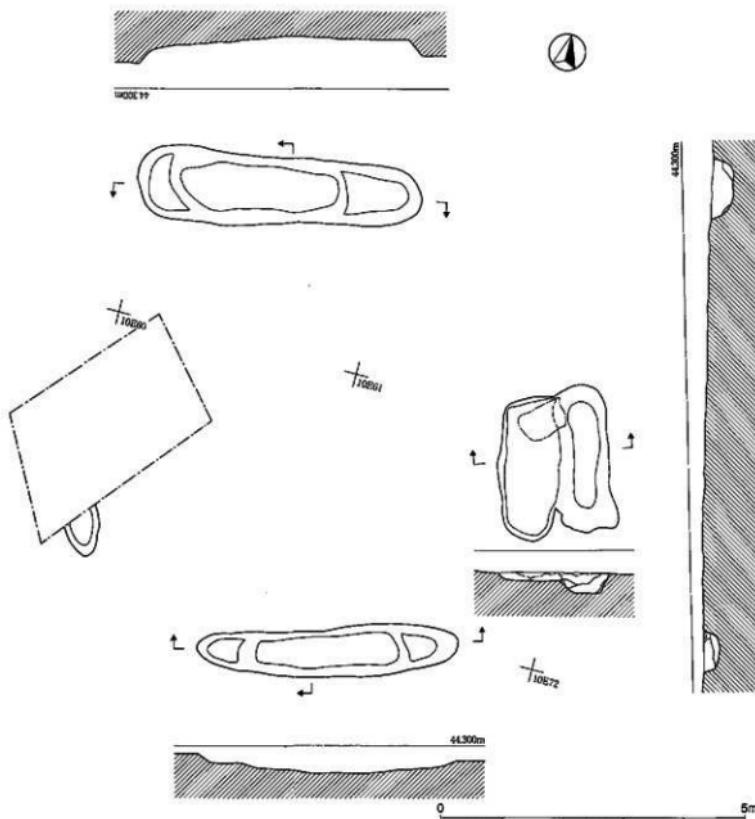


第8図 SS002

のは心許ない。東側の落ち込みが埋葬施設ということになれば、その線引きは再考する必要がある。ここではその可能性のあることも踏まえて、あえて調査当初の断面図を掲載しておく。西溝は大半が擾乱坑によって破壊され、溝の南端部しか残っていなかったために全容は不明である。ただ擾乱坑の大きさから推定すると、溝の全長は、最大でも2.8mにしかならず、東西に位置する溝は、南北に位置する比べて全長が短くなる傾向がある。これはあるいは、南北方向に傾斜する斜面部に位置することと関係するのかもしれない。出土遺物はとくにない。

SI007 (第10図、図版7)

北側緩斜面の10E66を中心位置する。住居南側には、南壁を跨いで、縄文時代の階穴SK001が重複する。住居の深さが10cmもないほど浅く、斜面部側の3分の1ほどを消失している。また住居中央部のやや北側には、1辺が1m近い擾乱坑が2か所あり、小さい擾乱坑も数カ所あり、全体に遺存状態は悪かった。



第9図 SS003

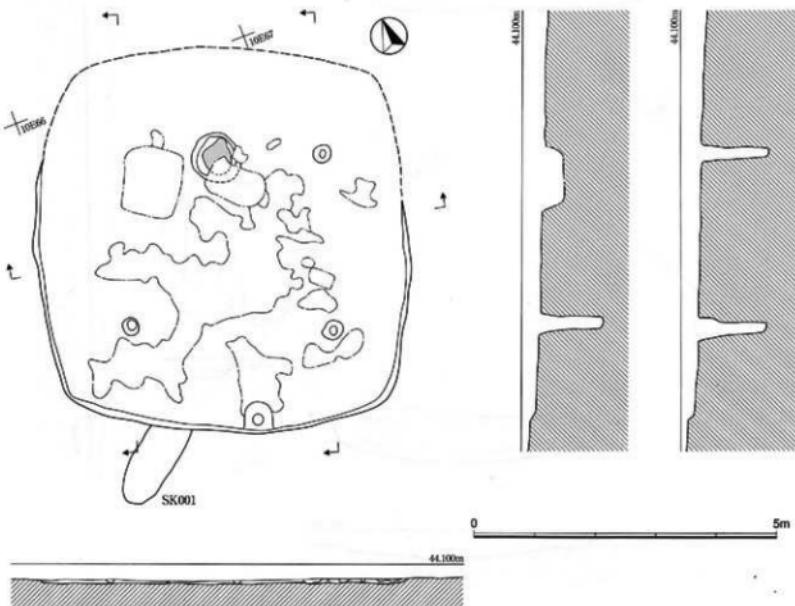
主軸長は推定で6.2m、副軸長は6.1mで、隅丸方形の平面形態と思われる。主軸をN-21°-Eにとる。埋土は粗いローム粒を含む暗茶褐色土である。主柱穴は4本構成と思われるが、床面上で3本が確認でき、北西の1本は擾乱坑の位置に推定できる。柱穴は径30cmほどの円形で、深さは110cm前後あり、細く深い掘形である。壁溝は確認できなかった。また炉の対向壁の南壁中央のやや東よりに、壁に取り付く深さ13cmほどの掘込みを確認している。位置的には梯子穴と考えてもよい位置にあるが、確証はない。床面の硬化範囲は南壁近くから住居中央に向かって広がるが、住居中央から北側は、かろうじて削平を免れた範囲と考えたほうがよいであろう。床面には焼土・炭化材等は確認できなかった。

炉は住居中央よりやや北に位置する。約4分の1を擾乱坑で消失しているが、径80cmで、深さ25cmのほぼ円形の掘形になる。最下層は被熱でハードロームがボソボソになっていた。焼土は10cmの厚みで堆積し、断面には横縞状の線を確認できたので、焼土が層をなして堆積していたことがわかった。

住居がかなり削平されていることもあって、遺物量は非常に少ない。住居南側の2か所から、土器片が数点まとまって出土した程度である。またミニチュア土器(1)が1点出土している。

SI020 (第11図、図版12)

11E00を中心に位置し、住居の大半をSI019に切られる。また北東側も擾乱坑によって破壊され、遺存状態は悪い。住居の南東隅は鈍角に開き、やや丸みもおび、隅丸方形の平面形態になるであろう。平面規模を柱穴から復元してみると、以下のようなになる。柱穴は住居の床面では、南東隅で1本あつただけだが、SI019の床下から1本、SI019の主柱穴の掘形内から1本、擾乱坑の底面で相当する掘込みを1本確認した。



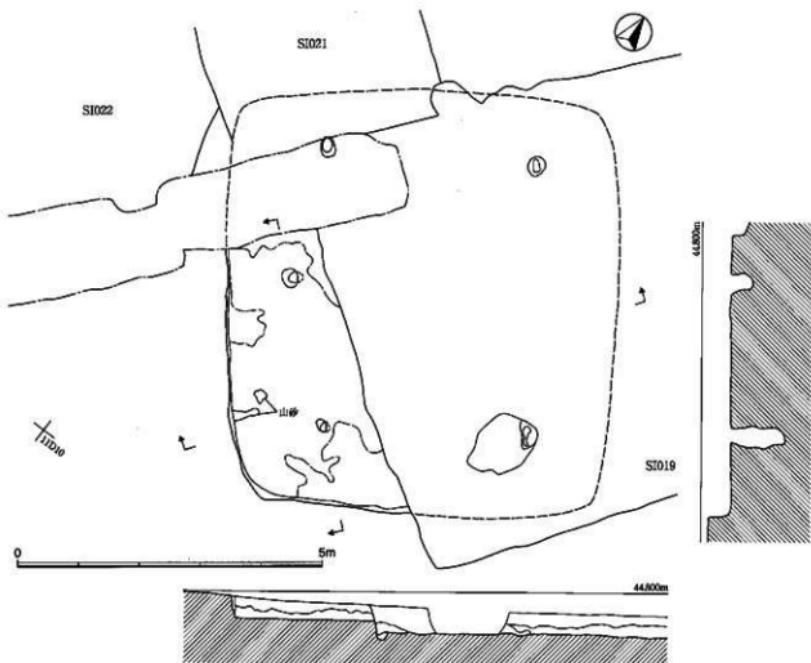
第10図 SI007

これら4本を結ぶ線は、ほぼ北西・南東方向に長い長方形になり、SI020の主柱穴と考えてよい位置関係にあたる。また底面の標高もほぼ一定する。そこでこれら4本の柱穴を主柱穴とみなして、その縁から住居の壁への距離、そして住居の掘形が及んでいない部分を勘案して復元してみると、およそ6m×7m程度の規模にはりそうである。主軸は南西壁で測ると、N-39°-Wになる。住居の深さは35cmで、SI019の床面との比高は20cmほどになる。住居の床でみつかった1本の主柱穴は、上面径は20cm程度小さいが、深さは87cmある。SI019の南主柱穴の掘形内にある1本は、掘形の下端がやや縦に細長くなる。残りの2本にもその傾向がある。床面の硬化範囲はかなり壁際まで広がる。なお南壁の近くに砂の堆積を確認した。砂はいわゆる山砂と同質で、粘性がなく、混和物もない。

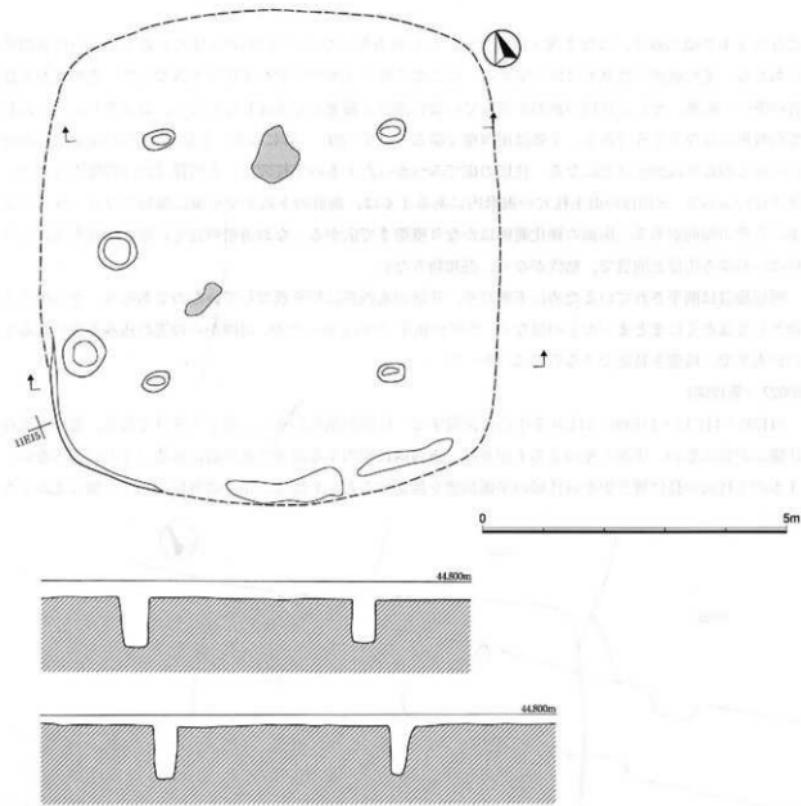
厨房施設は削平されているために不明だが、住居の北西部に炉を敷設していたのであろう。なお出土遺物としてはとくにまとまったものではなく、小片が46片で248gあったが、周囲からの流れ込みと思われるものが大半で、時期を特定できる資料はなかった。

SI027（第12図）

11E05・11E15・11E06・11E16を中心に位置する。住居の掘形が浅く、削平もうけており、遺構の遺存状態は非常に悪い。床面と壁の立ち上がりは、南西隅に相当する部分で部分的に確認できたに過ぎない。4本の主柱穴の柱位置と炉から住居の平面形態を推定すると、主軸長8.1m、副軸長7.5mで、隅に丸みをも



第11図 SI020



第12図 SI027

ち、やや脇の張った長方形の平面形態と思われる。住居の主軸はN-20°-Eにとると思われる。4本の主柱穴の掘形はいずれも副軸方向に長く、長径45cm~50cm、短径は40cm前後で、板状の柱を建てた痕跡を残している。深さは70cm~90cmと、比較的深い掘込みで、そのなかで北西隅の主柱穴がもっとも深かった。また住居の西壁中央近くに2個の円形の掘込みを確認した。北側のひとつは径60cm、深さ13cmで、底面は比較的平坦である。南側のはそれよりも一回り大きく長径76cmあるが、深さは浅く9cmほどしかない。住居に伴う施設かどうかは不明である。炉は北側の主柱穴の中間に位置する。ほとんど火床部しか残っていなかったが、確認できた範囲では長軸長94cm、短軸長80cmになる。本来は長軸1m前後の長円形の炉であろう。

第2節 古墳時代

今回報告するなかでは、もっとも主体となる時期で、本格的な集落の初源的な時期にもなる。もっとも

古いと思われる住居は炉を敷設した中期のSI001が該当し、その後、後期になるとカマドを敷設するようになり、SI012などが継続し、6世紀代にかけて集落が拡大していく。遺構としては竪穴住居が中心で、調査地の東側に分布する傾向がある。

SI001（第13図、図版5）

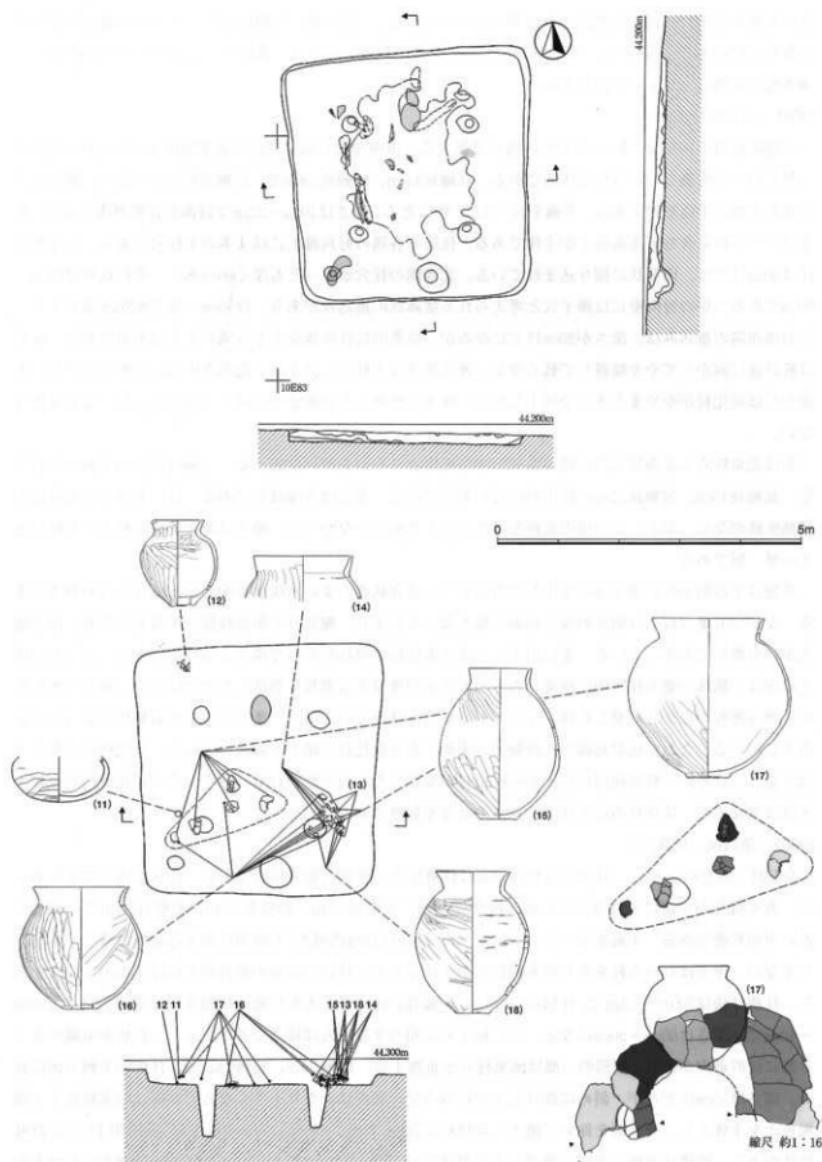
北側緩斜面の10E74にあり、SI007の西に位置する。南壁中央に弥生時代の方形周溝墓SS002の東周溝の一部を切って構築している竪穴住居である。長軸長4.0m、短軸長3.8mで、長軸方向にやや長い、隅に丸みのある方形の平面形態である。主軸をN-5°-Wにとる。深さは10cm～23cmで斜面の谷掘が浅くなる。埋土はローム粒を含む暗茶褐色土が主体である。住居の各隅の対角線上には4本の主柱穴があり、いずれも径は30cmほどで、円筒状に掘り込まれている。北西隅の柱穴がもっとも深く90cmあり、それ以外は70cm～80cmである。炉の対向壁には梯子穴と考えられる擂鉢状の掘込みがあり、径50cm、深さが20cmほどある。なお南西隅の掘込みは、深さが20cmほどになるが、位置的に住居構造とどう関わるかは不明である。床面は緩斜面に向かってやや傾斜して低くなる。硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲を中心に広がっていた。床面からは炭化材がややまとまって出土したが、床面に被熱した痕跡までは残していなかった。なお壁構はない。

炉は北東柱穴と北西柱穴の中間にあり、住居中央よりやや北側に位置する。主軸は住居の主軸と平行する。長軸長45cm、短軸長32cmの楕円形に近い形態である。深さは5cmほどである。はっきりした火床面や被熱痕跡がなく、炉としての使用痕跡をほとんどとどめていなかった。埋土は焼土・炭化材を含む暗褐色土の單一層である。

遺物は土器類が住居南半部に集中して出土した。遺存状態のよい煮炊具を中心床面近くにややまとまる。なかでも壺（17）は個々の破片がある塊となって出土し、塊どうしが直接接合するものでも、出土地点がやや離れて出土している。また出土した高さも住居中央にむかって深くなる傾向がある。こうした出土状況は1個体の壺を住居内に廃棄したものが住居が埋没する過程で散乱したのではなく、破片の塊を住居の埋没過程のなかで廃棄した様子がうかがえる出土状況といえよう。また勾玉形の石製模造品（3）も出土している。なお住居対角線の北西側で、床面上から炭化材と焼土が散乱していた。炭化材のほとんどは土化しているが、散布範囲の状況から屋根材が炭化したものと思われる。焼土もその炭化材の散布範囲とほぼ重なるが、炭化材の出土状況に比べるとやや散漫である。

SI002（第14図、図版5）

10E94・95を中心とし、SI017・SI018の東に位置する、単独の竪穴住居である。住居が浅いこともあって、所々攪乱が床面にまで及んでいる。南壁長5.8m、東壁長5.5m、西壁長5.2m、北壁長5.4mで、台形に近い平面形態である。主軸をN-5°-Eにとる。深さは13cm内外だが、斜面に面する北壁は浅く、4cm位しかない。埋土はローム粒を含む暗茶褐色土が主体である。住居の各隅の対角線上には4本の主柱穴がある。柱間寸法は3.1m～3.2mで、住居の台形に近い輪郭に比べると方形に近い柱配りになる。上面径は30cm～40cmで、深さは80cm～90cmになる。なお梯子穴に相当する柱穴は確認できなかった。住居南東隅のカマド脇には貯蔵穴があり、掘形の一部は南東柱穴と重複する。長軸1.2m、短軸0.8mで、住居の主軸方向に長い。深さは55cmほどだが、斜めに掘り込んでいるので、底面はかなり小さくなる。埋土は暗黄褐色土・暗褐色土を主体とし、最下層を除いて焼土・炭化粒を含み、住居廃絶時にはその上面までが開口していた可能性がある。壁溝は南壁・西壁で確認できただけである。硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲からカマド前



第13図 SI001

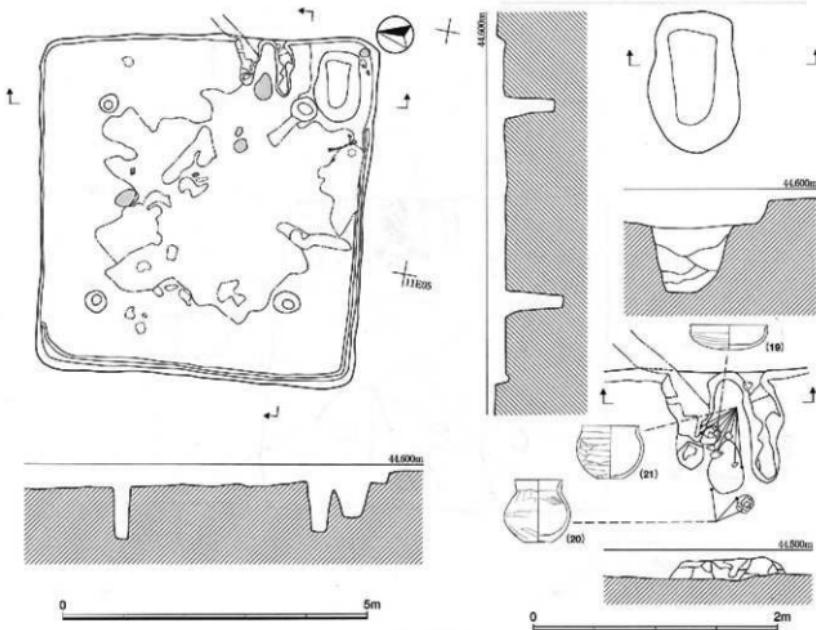
面に向かって広がる。床面には焼土と炭化材が散漫な状態で出土した。

カマドは、東壁中央よりかなり南に寄った位置にある。ローターによる擾乱を受けており、遺存状態はよくない。煙道部の住居の壁への掘込みはない。床面を5cmほど掘りくぼめて火床面としており、地山に被熱した痕跡をよくとどめていた。火床部付近の両袖内側が被熱で赤化していた。両袖は灰白色の山砂と暗茶褐色土を構築材としていた。

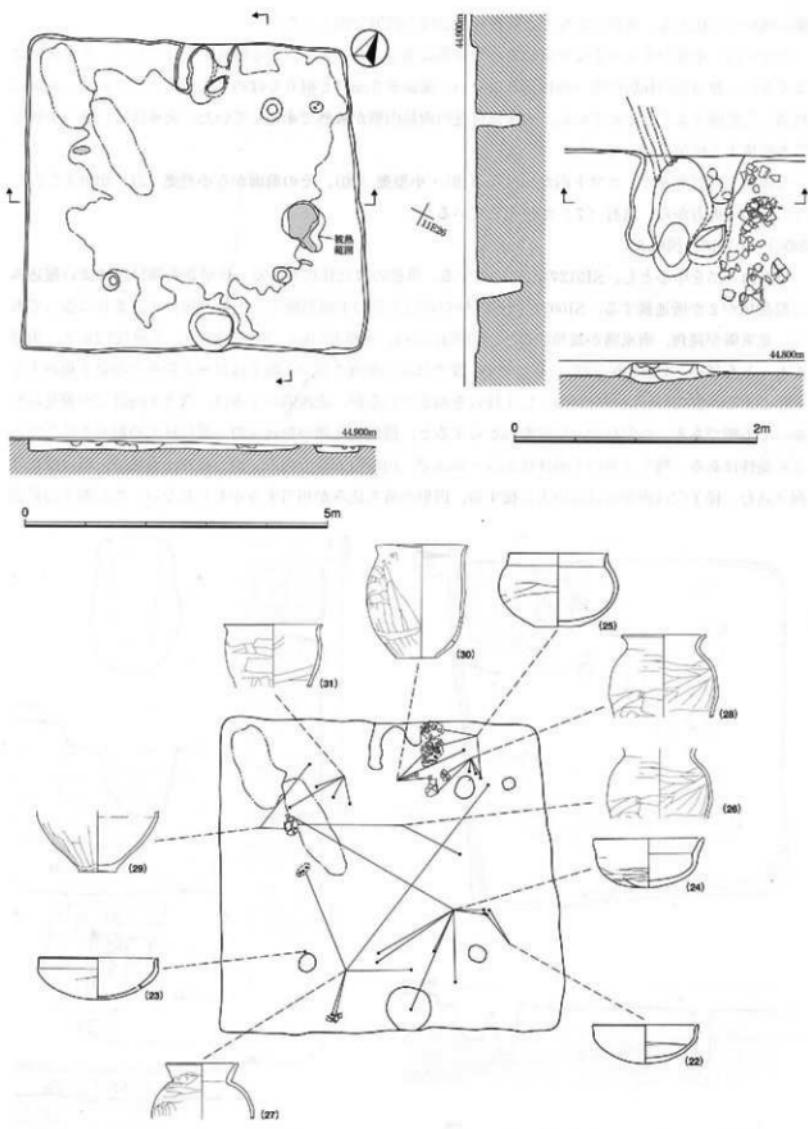
遺物は土師器のみで、カマド内からは壊(19)・小型壺(20)、その前面から小型壺(21)が出土した。なお住居の掘方から、砥石(7)が出土している。

SI003 (第15図、図版6)

11E 24・25を中心とし、SI012の南に位置する。単独の竪穴住居である。住居北西隅付近に深い掘込みの擾乱坑が2か所連続する。SI002と同様、やや歪な方形の平面形態で、主軸方向に寸詰まりになっており、北東隅が鈍角、南東隅が鋭角になる。南壁長5.7m、東壁長5.0m、西壁長4.8m、北壁長5.2mと、南壁がもっとも長い。主軸をN-25°-Wにとる。深さは10cm程度と浅い。埋土はローム粒を含む暗茶褐色土を主体とする。住居の各隅の対角線上に主柱穴を据えているが、北西隅の1本は、深さ90cmほどの擾乱坑があって不明である。ただ柱穴の位置関係からすると、擾乱坑北側の掘込みの一部に柱穴の掘形を残している可能性はある。残り3本の上面径は30cm~36cmで、円形の掘形である。深さは75cm前後で、ほぼ垂直に掘り込む。梯子穴は南壁のはば中央に接する、円形の落ち込みが相当するかもしれない。ただ埋土の底面



第14図 SI002



第15圖 SI003

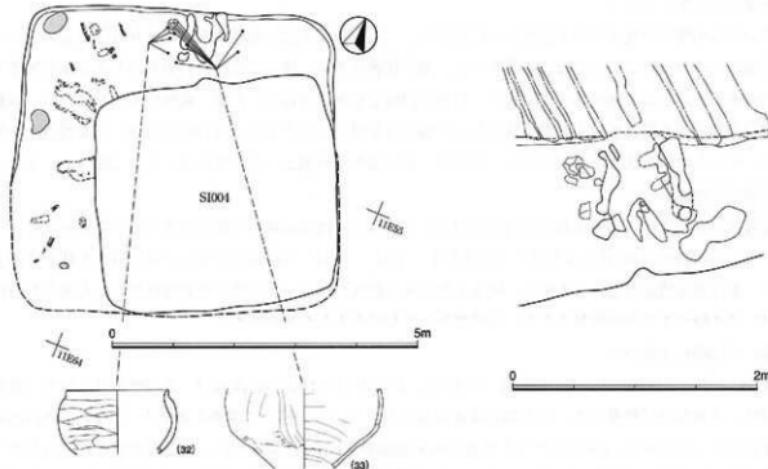
近くまで、住居の埋土が連続すると観察している。そうなると住居廃棄時にこの落ち込みは開口状態だったことになるので、梯子穴というよりは貯蔵穴のような落ち込みになる可能性もある。径70cm、深さは約30cmで、底面は平坦である。壁溝は確認できなかった。床の硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲から、住居北東隅に向かって広がる。なお南東柱穴と北東柱穴の間で焼土の堆積を確認したが、焼土を除去すると、その下に60cm×90cmの範囲で床面が被熱した痕跡が残っていた。

カマドは北壁の中央よりやや東に寄った位置にある。ローターによる擾乱が甚だしく、右袖の一部は掘形まで削平され、遺存状態は悪い。煙道部は住居の壁をほとんど掘込んでいない。床面を10cmほど掘りくぼめて火床面としており、地山には被熱した痕跡がよく残っていた。左袖の内側の一部が、被熱で赤化していた。両袖は灰白色の山砂と暗茶褐色土を構築材としていたようである。

遺物は住居全体から散漫に出土しており、壺(24)などはかなり広範囲に散乱する。ややまとまって出土しているのはカマドの左脇で、広口壺(25)・甕(28)・瓶(30)が出土した。破片もさほど散乱していないので、本來の収納場所を示しているのであろう。なお甕(28)・瓶(30)はセットとして組み合わせても、口径等にとくに不都合な点はない。なお土玉(2)が1点出土している。

SI005 (第16図)

11E54・53を中心にあり、住居南東部がSI004によって破壊されている。SI004の調査途中にみつかった住居である。造構上面がかなり削平され、住居自体も浅いこともあって、SI004と重複している部分では壁の立ち上がりを確認できなかった。住居の主軸長は推定で5.0m、副軸長は5.1mで、ほぼ正方形の平面形態になる。主軸をN-14°-Wにとる。深さはもっとも残りのよい北壁で3cm~5cmである。住居中央部にSI004が重複していること也有って、主柱穴や梯子穴の存否については不明であるが、もともとなかった可能性が強い。壁溝はない。また床面の硬化範囲は、カマドの右袖の前に、狭い範囲で確認できたにすぎない。床面上に焼土と炭化材がかなり散乱していたが、ローターに引きずられ遺存状態はよくない。とく



第16図 SI005

に炭化材は土化した部分が多かった。

カマドは、北壁中央にあるが、上面が削平されているために両袖と火床部の基底部しか残っていないかった。煙道部の壁への掘込みについては不明である。両袖は灰白色の山砂と粘土を構築材とする。またカマド内から土製支脚（11）が粉碎された状態で出土した。図示した遺物の点数は少ないが、カマド周辺にまとまっている。壺（33）はカマド周辺に散乱して出土したものである。

SI008（第17図、図版7）

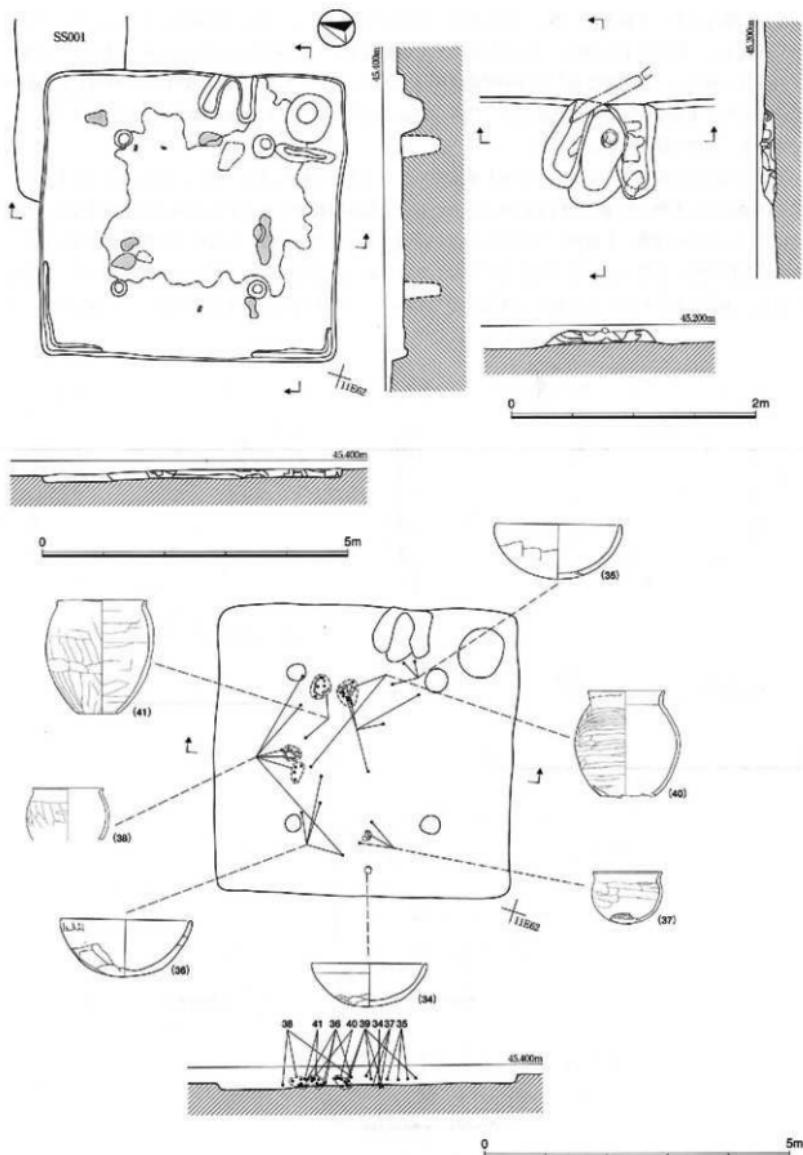
11E52を中心に位置する。周囲の遺構としては、西にSI004・SI005、北にSI013がある。また住居の北東隅の一角には方形周溝墓SS001の南周溝の一部が重複する。主軸長4.7m、副軸長4.9mの方形に近い平面形態である。主軸をN-74°-Eにとる。深さは15cm程度と浅く、ローターの痕跡が一部住居床面まで及び、遺存状態は必ずしもよくない。埋土は粒径1cmのロームブロックと粗いローム粒が多い、黄みをおびた暗茶褐色土を主体とする。住居の各隅の対角線上に、ほぼ円形の主柱穴を据えている。上面径・深さとも、柱穴によって出入りがある。上面径は南東柱穴がもっとも大きく40cm、それ以外はほぼ30cm程度である。深さは北西柱穴がもっとも深く89cm、それ以外は63cm～67cmにおさまる。またカマドの右脇、住居の南東隅付近に貯蔵穴がある。上面径は80cm×50cmの長円形で、深さ31cmの断面擂鉢状の掘形である。埋土は暗茶褐色土を主体とするが、住居廻絶に伴うと考えられる焼土・炭化材は貯蔵穴の上面だけにしか確認できなかったので、住居廻絶時に貯蔵穴はほとんど埋め戻されていたようである。貯蔵穴内から遺物はほとんど出土しなかった。また南壁と南東柱穴の間で、南東隅の一角を区切るように、貯蔵穴の西側が上手状に盛り上がっていた。高さは4cmほどと低く、幅広く、不明瞭な高まりである。壁溝は西側の2隅を中心として、部分的に確認できたにすぎない。床の硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲から、南東隅の貯蔵穴部分に広がる。なお梯子穴に相当する落ち込みはみつからず、床の硬化範囲も壁際にはほとんど広がらないので、住居への出入りについては不明である。焼土・炭化材は住居全体から散漫に出土したが、炭化材はその多くが土化していた。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りの位置にある。左袖の先端は、南東柱穴にかなり近くなる。カマドの上面はローターによってかなり搅乱をうけ、遺存状態は悪い。煙道部は住居の壁をほとんど掘り込み、また火床面もほとんど掘り込んでいない。右袖の内側と左袖の内側の一部が、被熱で赤化していた。両袖は灰白色の山砂と暗茶褐色土を構築材とし、左袖では基礎に黒色土を多く含む粘性の強い暗茶褐色土を使用し、その上に白色粘土を積んで袖としている。火床部のやや奥まった位置から、土製支脚（9）が、立った状態で出土した。

遺物はおもに主柱穴に囲まれた範囲から出土しているが、比較的個々の破片はまとめて出土しており、なかでも煮炊具の（40・41）などはとくにまとまっており、（41）は口縁部を上に、床に置いた状態で出土した。また遺存状態の悪いものほど、破片が散乱する傾向がある。なおカマド対向壁近くから出土した壺（34）は2分の1ほどが遺存するが、口縁部を上にして出土したものである。

SI009（第18図、図版8）

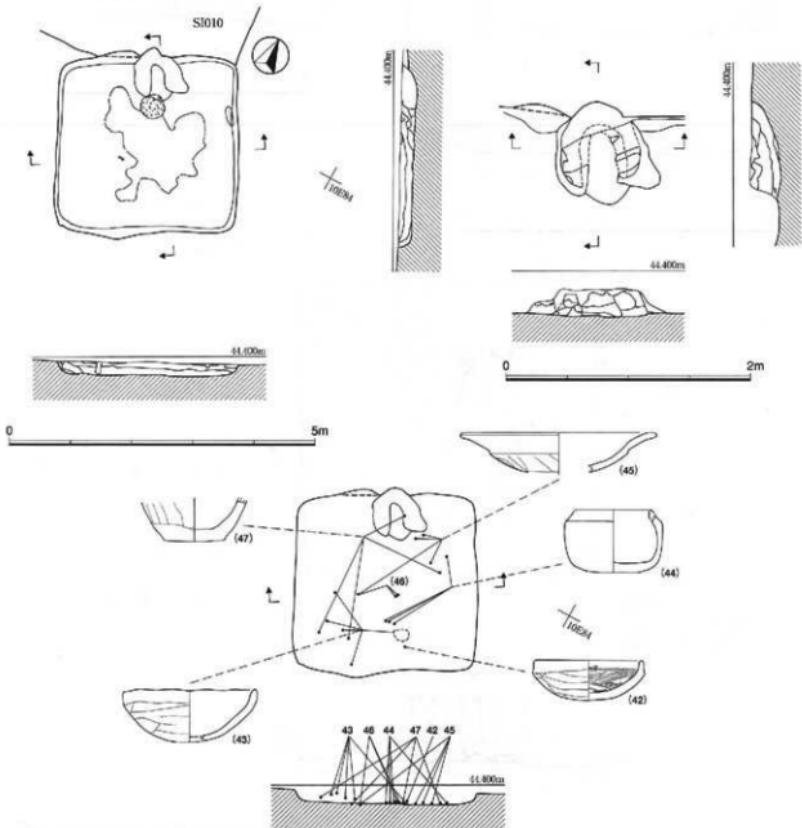
10E83を中心に位置する。SI010を切っており、またSI017に住居の西南隅の一部が切られている。遺構確認時、重複部分に搅乱があったために重複部分はないものと判断して調査を進めた。しかしSI017の調査を進めているおりに、SI017のカマド煙道部の先端部がSI009まで延びていることが判明した。なおカマド左脇は、SI010の落ち込みと重なり、壁の一部を掘りすぎている。主軸長2.9m、副軸長3.0mのほぼ方形



第17図 SI008

の平面形態である。主軸を N- 29° -W にとる。深さは20cmほどで、北側の緩斜面の肩にかかる部分が、少し浅くなる。堆土は上層が粗いローム粒を含む暗茶褐色土で、下層にいくにつれ黒みをおびる。床面上に主柱穴・梯子穴に相当する落ち込みや壁溝は確認できなかった。床面の硬化範囲は住居中央の狭い範囲に広がるが、床面全体にやや凹凸がある。住居床面から焼土・炭化材が散漫に散布していた程度で、とくにまとまった出土状態ではなかった。

カマドは北壁中央に位置する。カマド上面はローターによって搅乱されており、遺存状態はよくない。煙道部は住居の壁を約12cm、半円形に掘込んでいる。また火床面といえるような焼上の堆積ではなく、底面のほとんどと袖の内側にも被熱した痕跡がなく、使用痕跡が稀薄である。ただカマド底面から煙道部までを覆う粘性の強い黒色土は、焼土塊を多く含み、この層のなかを火床面としていた可能性はある。両袖は灰白色の山砂と暗茶褐色土を混合して構築材としている。カマド内部から坏類を中心として遺物が出土し



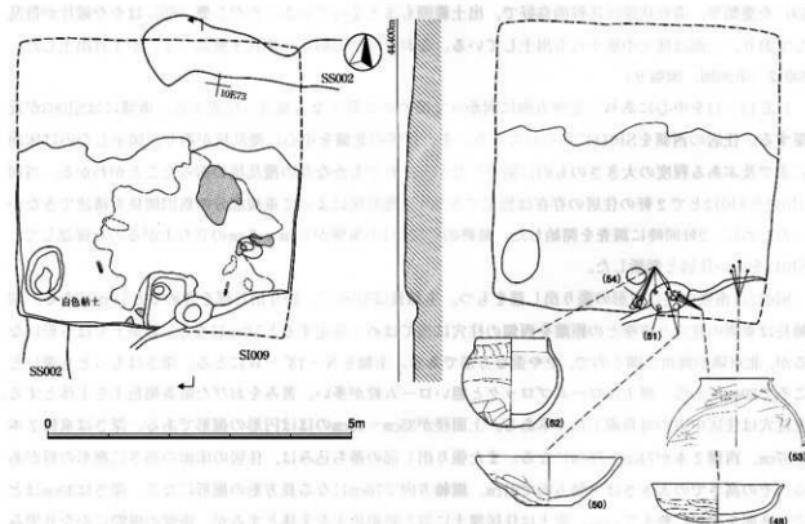
第18図 SI009

ているが、いずれも被熱痕跡がなく、カマドの廃棄に伴って廃棄されたものと思われる。なお支脚は抜かれ、存在しなかった。

出土遺物は多くはないが、住居の南側に偏る傾向がある。壺(42)が完形で出土した以外は、いずれも遺存状態は悪く、個々の破片資料も住居内の床面に近い部分でかなり散乱していた。ただ壺(43)だけは、床面より浮いた状態で出土した。

SI010 (第19図、図版8)

10E83を中心に位置する。高低差30cmの北側緩斜面にあり、住居の北側はほとんど削平され、遺構を確認した時点では床面の大半が露呈していた。また住居の北東隅がSI009に切られる。方形周溝墓SS002とは、西周溝が南壁の一部で重複し、北周溝とは住居の推定輪郭線のなかで重複する。主軸を南北にとる、ほぼ方形に近い平面形態と思われる。主軸長は推定で4.6m、副軸長は4.5mになる。主軸をN-8°-Wにとる。深さは山側部分で、12cmほどになる。埋土は、床面に焼土・炭化材が散乱していることもある。暗茶褐色土中にそれらを多く含んでいる。床面上に柱穴に相当する落ち込み・堆溝は確認できなかった。南東隅付近に、長径40cmの落ち込みを確認したが、深さが7cmほどしかなく、柱穴といえる証左はない。南壁中央に、壁に接して77cm×88cmの大きさで、深さ数cmに浅く窪んだ長方形の範囲があった。そしてその東側に接して、長径65cmの落ち込みがあり、上端の輪郭は長方形の掘込みに半分ほど食い込んでいる。この状況が掘込みの新旧を物語るものかどうかわからない。深さは17cmほどで、南側がSI009のカマドに接する。これらの内部及び周辺から、遺存状態のよい壺類(48・50)などが出土しているので、貯蔵穴のような機能を備えた掘込みなのかもしれない。なおSS002の西周溝が住居床面まで延びる位置で、長径88cmの西周溝の底面にまで達する落ち込みらしきものを確認した。精査した結果、底面に粘土塊があり、その周辺に炭化材が少量散乱し、明らかにSS002の埋土とは異なる性状だったので、SI010の付属施設として平



第19図 SI010

面図中に書き加えてある。床面の硬化範囲は南壁から住居中央に向かった範囲に遺存していた。焼土・炭化材は住居の南東側からややまとまって出土した。出土土器から厨房施設にはカマドを敷設していたものと思われるが、削平されたためかみつかなかつた。

SI011（第20図、図版9）

11E12・13を中心に位置し、SI012の西側を切って構築されている。住居の南壁と西壁の一部に方形周溝墓SS001の北周溝と東周溝の一部が重複する。SI012同様、かなり擾乱をうけており、とくに北東隅には大きい擾乱坑もあり、遺存状態はよくない。住居の平面形態はやや歪な方形で、南東隅が鋭角で、北東隅が鈍角になる。南壁長4.8m、東壁長は推定で4.6m、西壁長4.5m、北壁長も推定で4.5mである。主軸をN-74°-Eにとる。深さはもとより深い南壁で30cmほどになる。埋土はSI012の埋土と似通った、ロームブロックと粗いローム粒を含む暗茶褐色土を主体とする。住居の床面上で柱穴は確認できなかつた。住居の南東隅、カマドの右脇に貯蔵穴がある。長軸長110cm、短軸長80cmで、住居の主軸方向に長い長円形の掘込みである。深さは30cmで、かなり斜めの掘り込みで、底面が小さくなる。貯蔵穴内からまとめて出土遺物はなかつた。床の硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲から、カマド前面と貯蔵穴周辺に広がるが、住居北半部に擾乱が多いこともあって詳しいことはわからない。焼土は東壁近くの2か所に堆積していた程度で、炭化材はほとんど出土しなかつた。なお住居の南西隅で山砂が長径20cm~40cmの範囲で、3か所に堆積していた。厚みは4cmほどで、ほぼ床面に接して出土した。肉眼での観察では、カマド構築材の山砂と同質であった。

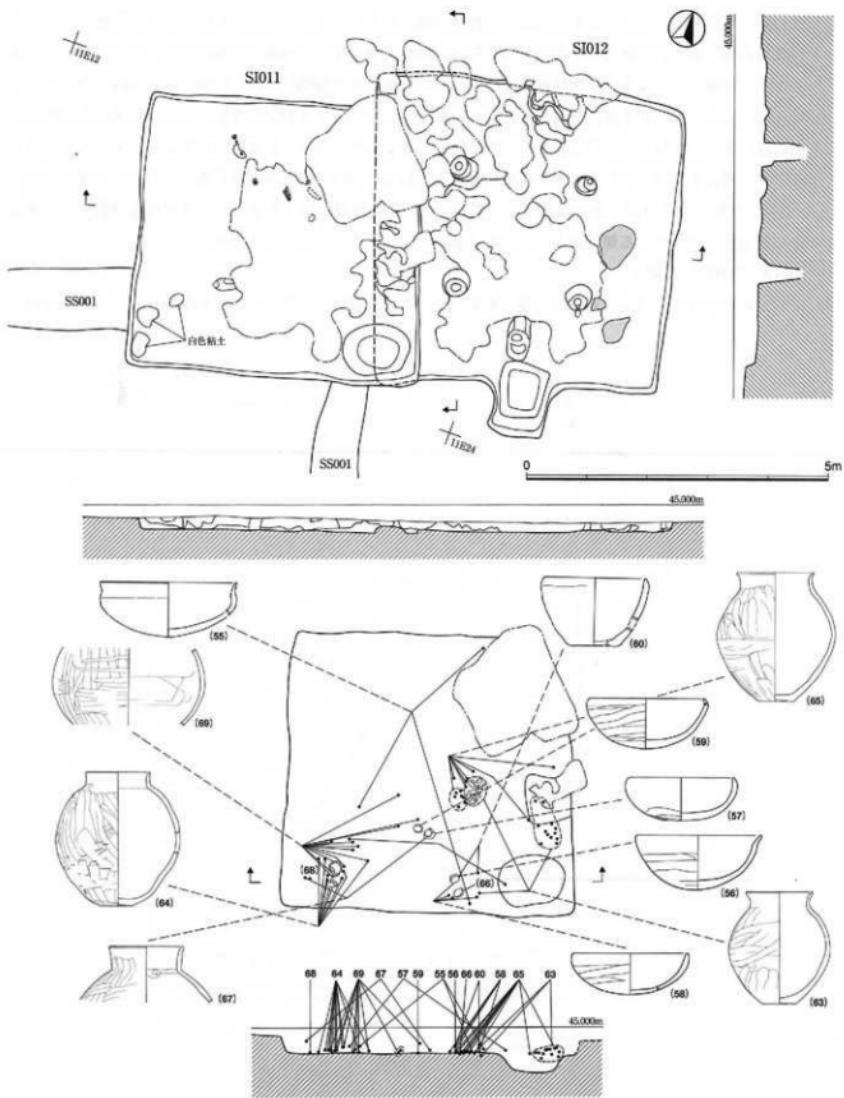
カマドは東壁の中央よりやや南寄りにあるが、擾乱をうけており遺存状態は極めて悪かった。焼土と山砂の散布範囲から、両袖と火床部の位置をある程度確認できる程度であった。

遺物は住居全体から出土しているが、まとまった資料は住居の南半分から出土している。环頬（56・57・59）や壺類等、遺存状態は比較的良好で、出土範囲もまとまっている。ただし壺（69）はやや破片が散乱しており、一部は埋土中層からも出土している。なおカマドの脇から棒状土製品（4）が1点出土した。

SI012（第20図、図版9）

11E13・14を中心にあり、北西方向に向かって緩やかに低くなる地点に位置する。南側にはSI003が近接する。住居の西側をSI011に切られている。また住居の北側を中心に擾乱坑があり、図示したのは床面にまで及ぶある程度の大きさのものに限定したが、それでもかなりの擾乱坑のあったことがわかる。当初SI011とSI012とで2軒の住居の存在は想定できたが、擾乱坑によって重複部分の新旧関係を確認できなかつたために、2軒同時に調査を開始した。最終的にSI011の東壁が5cm~7cmの立ち上がるのを確認して、SI012を古い住居と判断した。

SI012は南壁中央に方形の張り出し部をもつ。主軸長は5.0mで、張り出し部を含めると5.9mになる。副軸長は東側の柱穴と東壁との距離を西側の柱穴に当てはめて推定すると5.0mになる。数値上では方形になるが、北東隅が鈍角に開くので、やや歪な方形である。主軸をN-13°-Wにとる。深さはもとより深いところで20cmである。埋土はロームブロックと粗いローム粒が多い、黄みをおびた暗茶褐色土を主体とする。主柱穴は住居中央の対角線上に4本ある。上面径が35cm~45cmのほぼ円形の掘形である。深さは東側2本が67cm、西側2本が74cm~76cmになる。また張り出し部の落ち込みは、住居の床面の高さに掘形の肩がある。その高さでの大きさは主軸方向で91cm、副軸方向で76cmになる長方形の掘形になる。深さは30cmほどで、底面を平坦に整えている。埋土は住居埋土に似た暗茶褐色土を主体とするが、南壁の壁際にかなり黒み



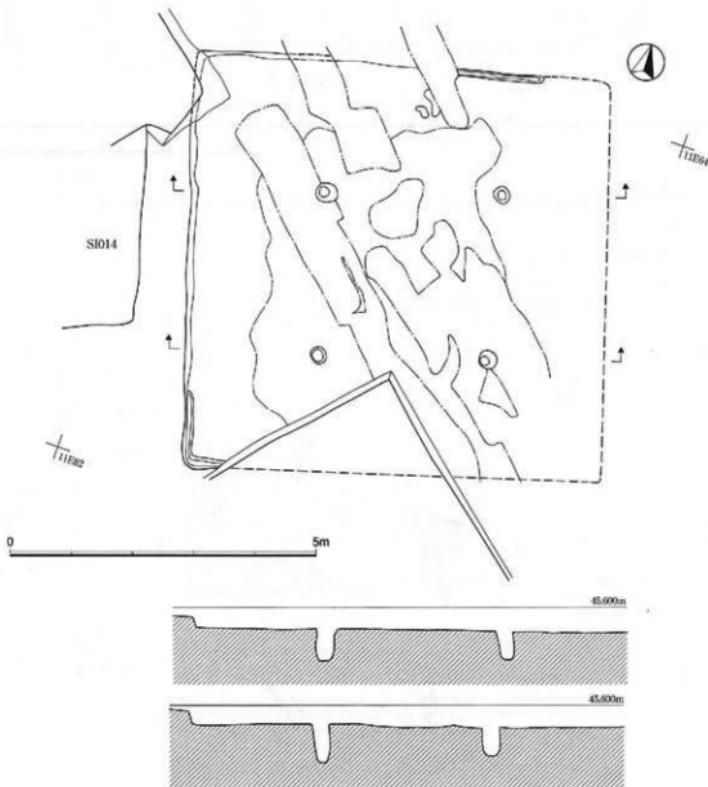
第20図 SI011・SI012

をおびた層があり、あるいは壁を保護する板材の痕跡かもしれない。またこの落ち込みに隣接して、さらに住居内側に縦に長い掘込みがある。長さ72cm、幅は27cmになる。両端に中端があり、中心がもっとも深くなり、30cmほどになる。壁溝は確認できなかった。床の硬化範囲は主柱穴に開まれた範囲を中心とするようであるが、住居北半部に擾乱が多いこともあって詳しいことはわからない。焼土は住居の南東隅3か所に堆積していた程度で、炭化材はほとんど出土しなかった。カマドは北壁の中央よりやや東寄りにある。ほとんど擾乱をうけており、カマド構築材である灰白色の山砂と焼土が痕跡程度しか残っていなかった。

遺物は住居の北半分が大きく擾乱をうけているせいか、散漫な出土状態だが、住居南壁の張り出し部周辺に遺物がやまとまる傾向がある。なお土製品として、土玉（3）が1点出土した。

SI013（第21図、図版9）

11E62・63を中心とする。調査地南部の幅約5mの進入路部分に位置し、一部は調査区域外となる。SI014

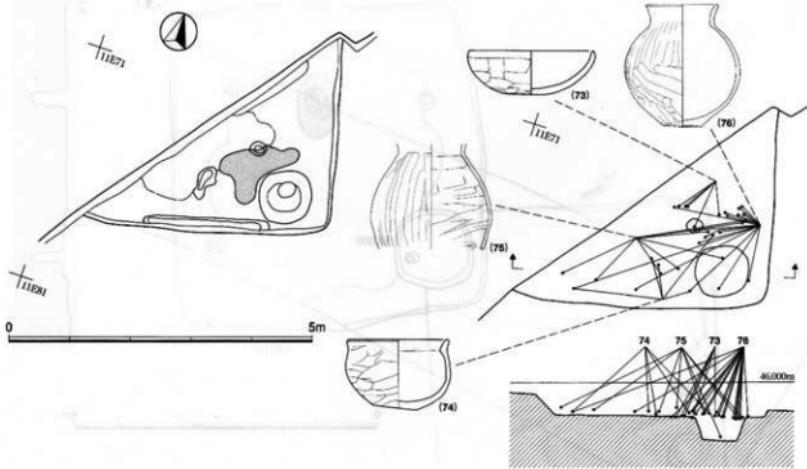


第21図 SI013

の東に接する。遺構上面はほとんど削平され、一部では床面が露呈しており、幅広のローテーで搅乱もされており、遺存状態は悪い。主軸長は6.8m、副軸長は東壁をまったく消失してしまっているために推定の域をでないが、ここでは西壁から主軸長と同じ長さをとって推定した。ただその場合、西側主柱穴と西壁との距離に比べて、東側柱穴のそれはやや短くなる。主柱穴と壁との距離を同距離に復元すると、南軸方向に40cmほど長い平面形態になる。主軸をN-18°-Wにとる。深さはもっとも残りよいところで16cmである。主柱穴は住居中央の対角線上に4本ある、ほぼ円形の掘込みで、上面径は24cm~30cmの小振りな掘形である。上部を削平されている南東柱穴を除けば、深さは47cm~62cmのなかにおさまる。床の硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲を中心とするが、西側では主柱穴西壁の間まで広がる。住居東半部は削平されており、不明である。梯子穴を想定できる部分は、調査区域外になるためにわからない。壁溝は部分的に確認できたにすぎないが、壁の立ち上がりが残るところでも、壁溝のないところもあるので、本来部分的にしか存在しなかったのであろう。カマドは北壁のほぼ中央で、焼土とカマド構築材の散布が2か所あった。位置関係から、右袖と火床部分に相当するであろう。

SI014 (第22図、図版10)

11E 80にある。住居の南東隅部分を3m~4m調査しただけで大半が調査区域外になり、規模については不明である。住居の軸方向を東壁で測るとN-14°-Wになる。深さは10cmほどで、削平されているため、浅い住居である。南東隅に貯蔵穴があり、84cm×88cmの、かなり丸みをおびた方形の掘込みである。深さは36cmほどで、掘形はやや斜めになる。埋土はロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とし、上層に焼土を多く含む。貯蔵穴脇に焼土の堆積範囲があるので、それらと一緒に焼土であろう。その焼土の散布範囲の下から主柱穴と思われる掘込みを確認した。径24cmの円形で、深さは38cmになる。壁溝は南壁の一部で確認できた。おそらく厨房施設としてカマドを敷設していたと思われるが、調査した範囲にその痕跡



第22図 SI014

は確認できなかった。

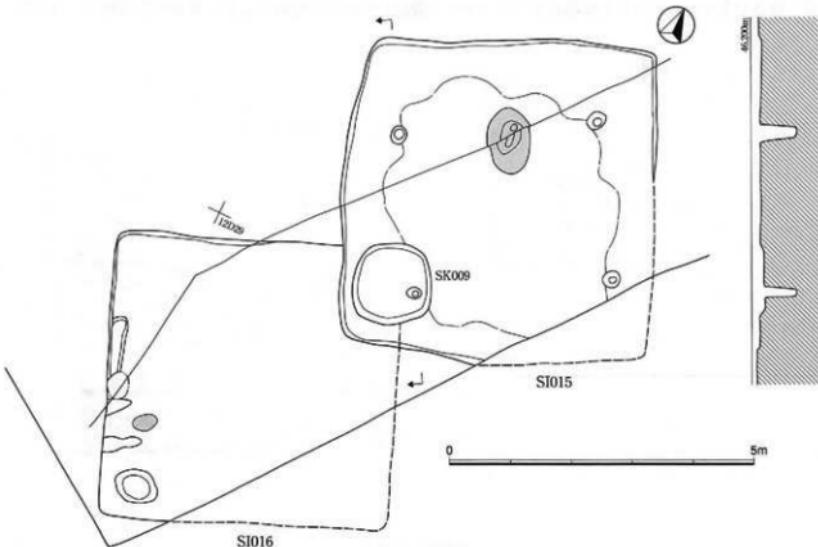
出土遺物は貯蔵穴の周辺から、壺類を中心に散乱した状態で出土している。そのなかで壺(75)の接合資料の1点が貯蔵穴の底面近くから出土し、一方、壺(76)の接合資料は貯蔵穴の上面から出土している。これを土器の廃棄と貯蔵穴を埋め戻す微妙な時間的経過を示すともいえなくもないかもしれないが、検証する手立てが少なく、ここでは貯蔵穴の開口状態については不明としておく。

SI015 (第23図、図版10)

12D19・12E10を中心に位置する。事業計画の都合で、はじめに住居の北半分を調査し、その後、期間をおいて南半分を調査した。南側でSI016と重複し、SI015の上にSI016の床があることを確認し、また炉とカマドという違いからも、SI015のほうが古い住居になる。平面形態はやや歪な方形になり、主軸長5.3m、副軸長5.0mで、主軸長方向にやや長い。主軸をN-25°-Wにとる。住居のある一帯はかなり削平を受けているために、住居の深さは5cm程度と浅く、部分的に壁を消失しているところもある。4本のうち主柱穴のうち、南西の主柱穴はSK009の底面からみつかったが、いずれも住居の四隅近くにある。ただし主柱穴の配置は、主柱穴を結んだ線と住居の輪郭線が平行せず、主柱穴を結んだ線が住居の主軸にたいして約7°西にずれる。主柱穴は掘形径30cmほどの円形で、深さは60cm前後になる。床の硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲に広がる。焼土・炭化材の散乱はとくに確認できなかった。

炉は北側2本の主柱穴の間に位置する。長軸110cm、短軸66cmの主軸方向に長い平面形態である。炉の掘込みの最深部は北側にあり、17cmの深さがある。

遺物は住居の南半分に偏っているが、これは住居の北半分が攪乱をうけているためであろう。土器の小片が25点出土し、総重量が312gあったが、時期を特定できるような資料はなかった。



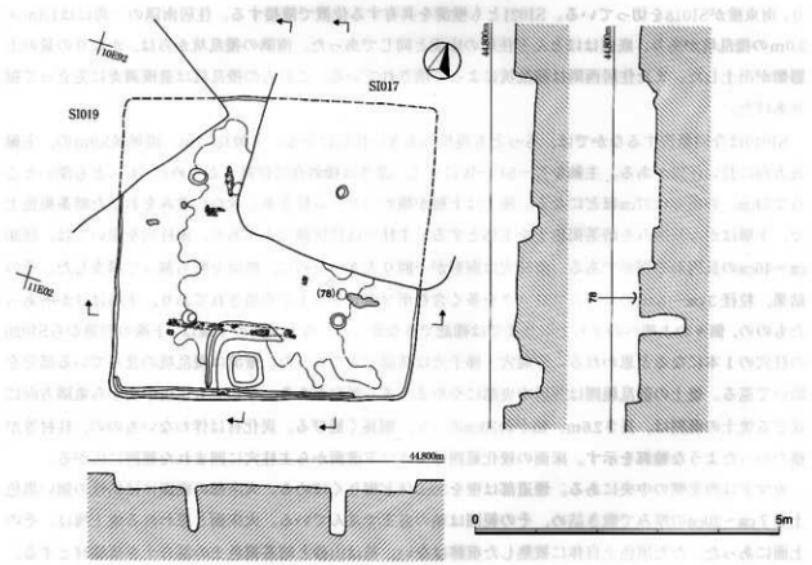
第23図 SI015・SI016

SI016 (第23図、図版10)

12D28・12E29・12E39に位置する。SI015と重複し、SI016のほうが新しい。またSK009が南隅近くに重複する。住居の約5分の1が調査区外になり、ほとんど床面近くまで削平されて、西隅で3cmの立ち上がりしかなく、調査条件は悪かった。平面形態は、ここでは住居の西隣と貯蔵穴の位置から方形に推定しておく。西壁長は推定で4.7mになる。主軸をN-74°-Eにとる。住居の床面はソフトロームとハードロームの境付近にある。床面が部分的に削平されていることもあると思うが、はっきりした床の硬化範囲はなく、焼土や炭化材の散乱も確認できなかった。また柱穴は1本も確認できなかった。住居の南隅近く、カマドの左脇に貯蔵穴がある。長軸長74cm、短軸長55cmで、住居の主軸方向にやや長い長円形の掘込みである。深さは35cmで、垂直に近く掘り込まれ、底面の平坦である。貯蔵穴内から、出土遺物はとくになかった。櫛溝は西壁の中央付近の、カマドの脇で部分的に確認できただけで、全周するものではない。カマドは西壁の中央より南寄りにあるが、削平されたためにカマドの基底部しか残っていなかった。煙道部の掘込みはなく、左右の袖は、右袖が60cmほどの長さがあり、その先端部に火床部と思われる40cm×30cmの範囲に焼土があった。遺物は散漫に出土した。甕の小片が多く、時期を特定できるまでの資料はなかった。総点数27点で、重量は356gになる。

SI018 (第24図、図版11)

10E92を中心に位置し、住居の北東隅をSI017に、北西隅をSI019に切られる。主軸長4.9m、副軸長4.9mで、計測値上では方形の平面形態になる。しかし住居の南東隅が鈍角に開くので、やや歪になるのである。主軸をN-17°-Wにとる。深さは16cm~24cmで、SI017の床面とは約20cmの比高がある。埋土は粗い



ローム粒・ロームブロックを含む暗茶褐色土を主体とする。主柱穴は住居隅に4本を配り、北東柱穴はSI017の擾乱坑の底面でみつかった。北東柱穴を除けばいずれも25cm~30cmの円形の掘形で、深さ77cm、底面の標高が44.300m付近にあり、ほぼそろっている。南壁中央から東寄りに、56cm四方の貯蔵穴がある。深さは41cmである。そして貯蔵穴の西・北側を鉤の手に土手状の低い高まりが取り囲む。高まりは高さ6cmで、幅は広い。壁溝は南壁の一部で確認できた。焼土は散漫だったが、炭化材はややまとまって出土した。もっとも大きい炭化材は、南西柱穴と南東柱穴結ぶ線上で、土手状の高まりの上から出土したものである。土化した部分もあるが、全長で210cm遺存していた。西側の遺存状態が比較的よく、断面を逆三角形にした状態で埋土中にめり込み、東側は板状にしか残っていなかった。厚みは7cmあり、角材の断面の一部を思わせる。出土位置から、梁材であった可能性が強い。すると柱間寸法は240cmだから、それよりも30cmほど短いことになる。北西柱穴の周辺にも炭化材がややまとまっている。断面を観察した結果では、いずれも厚さ1cmほどの板状であった。焼土も床面に散乱しているが炭化材ほどのまとまりはない。床面の硬化範囲は、貯蔵穴の周辺から住居中央に広がる。なお厨房施設は、住居の時期からカマドと思われるが、調査した範囲ではその痕跡すらみつかなかったので、SI017が重複する北壁・東壁のいずれかに敷設されていたのであろうが、貯蔵穴の位置からすると、北壁に敷設された可能性が高い。

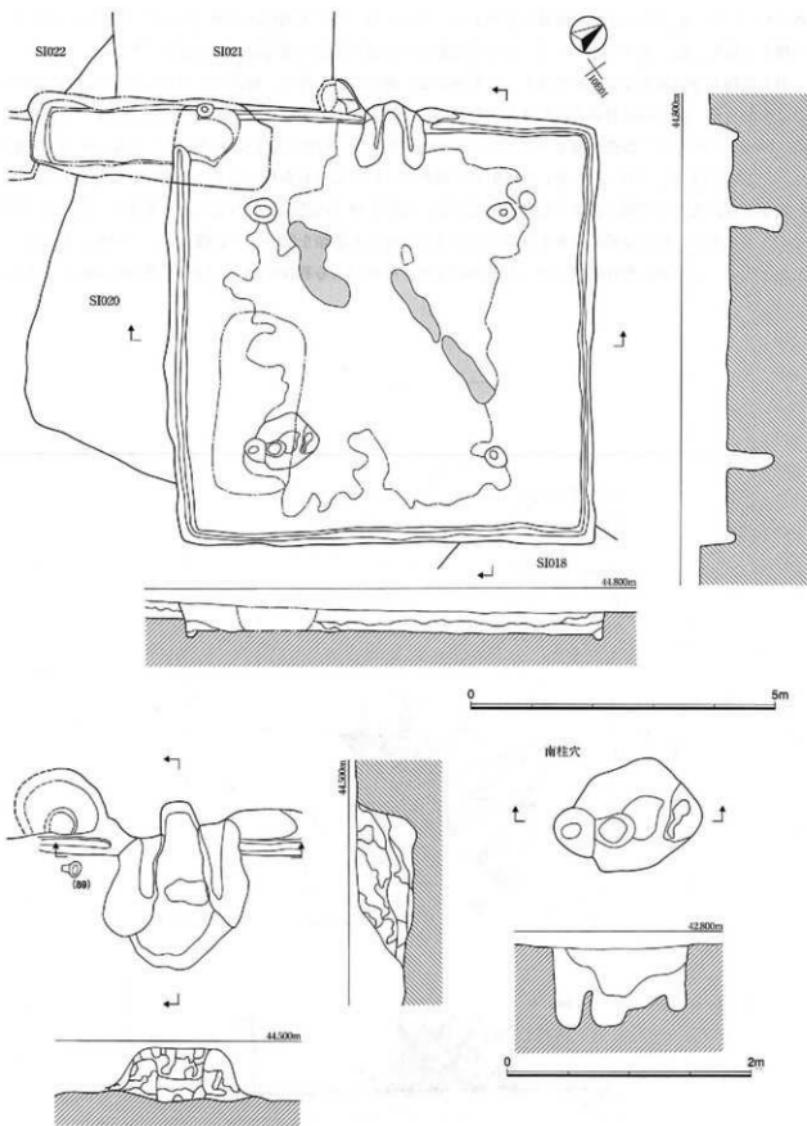
出土遺物は、厨房施設周辺が他の住居によって破壊されているためか非常に少ないが、遺存状態のよい土器器皿2点(77・78)が床面近くから出土した。

SI019(第25・26図、図版11)

10E90・91を中心とし、住居群が密集する一角のほぼ中心に位置する。住居の南東壁がSI020を切っており、南東壁がSI018を切っている。SI021とも壁溝を共有する位置で隣接する。住居南隅の一角には1.3m×3.0mの擾乱坑があり、底面はほとんど住居の床面と同じであった。南隅の擾乱坑からは、かなりの量の土器類が出土した。また住居西隅は擾乱坑によって壊されている。これらの擾乱坑は遺構調査に先立って掘りあげた。

SI019は今回報告するなかでは、もっとも規模の大きい住居になる。主軸長7.2m、副軸長5.9mの、主軸長方向に長い住居である。主軸をN-54°-Wにとる。深さは緩斜面に位置するために、もっとも深いところで54cm、谷側では37cmほどになる。埋土は上層が細かいローム粒を多く含む、黄みをおびた暗茶褐色土で、下層はかなり黒みを暗茶褐色土を主体とする。主柱穴は住居隅に4本あり、南柱穴を除いては、径30cm~46cmの長円形の掘形である。南柱穴は掘形が一回り大きいために、断面を断ち割って調査した。その結果、粒径3cm~5cmのロームブロックを多く含むボソボソした土が充填されており、下端は3か所あつたものの、個々の上端への立ち上がりまでは確認できなかった。なお北側の下端は、下端の形態からSI020の柱穴の1本になると思われる。貯蔵穴・梯子穴は確認できなかった。壁溝は擾乱坑の及んでいる部分を除いて巡る。焼土の散乱範囲は住居中央部にややまとまる傾向がある。なかでも住居中央から東隅方向に延びる焼土の範囲は、長さ2.6m、幅が約30cmあって、細長く延びる。炭化材は伴わないものの、柱材等が横たわったような輪郭を示す。床面の硬化範囲は、カマド前面から主柱穴に開まれた範囲に広がる。

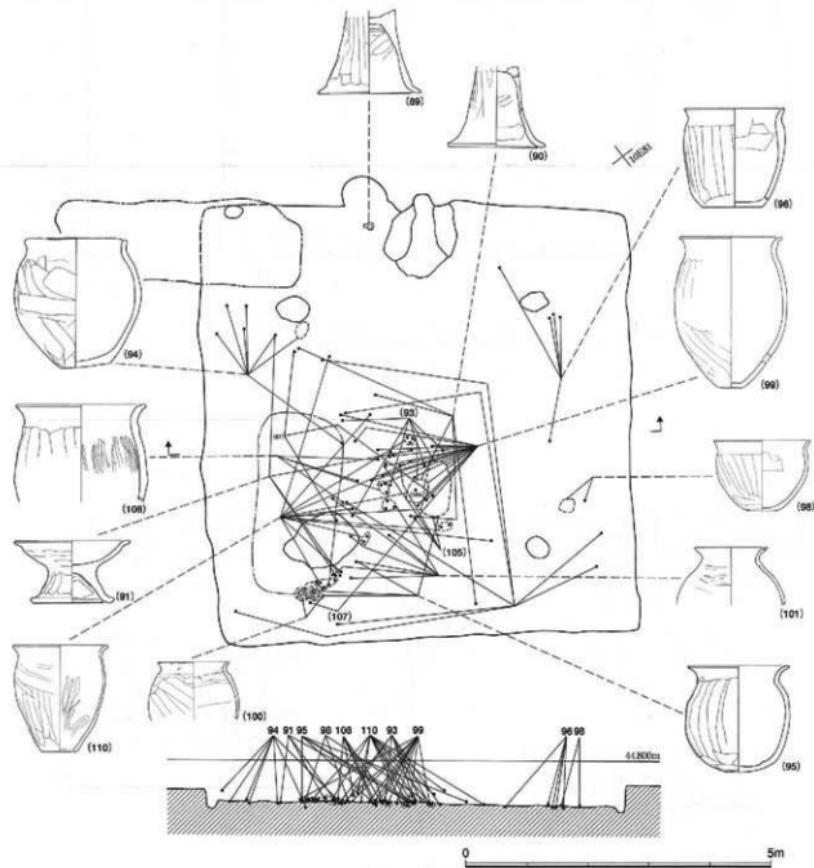
カマドは西北壁の中央にある。煙道部は壁を30cmほど掘りくぼめる。火床部の底面には粘性の強い黒色土を7cm~20cmの厚みで敷き詰め、その範囲は袖の前まで及んでいる。火床面と思われる焼土塊は、その上面にあった。ただ黒色土自体に被熱した痕跡はない。袖は山砂と暗茶褐色土の混合土を構築材とする。カマド内からはとくに出土遺物はなく、支脚も抜かれていた。なおカマドの右袖の壁が、部分的に掘り落



第25図 SI019

められていた。何らかの工作的痕跡と思われる。また左袖の壁にも階段状の掘込みを確認したが、SI021の埋土に紛れではっきりしなかった。これらはあるいは棚状施設の掘込みである可能性もある。

出土遺物も今回報告するなかではもっとも多いが、破片資料が多く、個体として残っていたものはほとんどなかった。埋土の中層以上にはほとんど遺物がなく、多くの破片資料が床面近くから出土し、住居廃絶に伴ってこれらの土器群が廃棄されたことをうかがわせる。破片の接合状況をみてもかなり広範囲に散乱したものが接合しており、なかには放射状に散乱しているものもある。こうした破片の散乱状況は、土器類を床面に落として割ったような印象を受ける。これを埋土の性状と合わせて、1案として次のように考えておきたい。住居廃絶後にあまり時をおくずに床面に土器類を割るように投棄し、その後、黒色系の土が堆積しているあいだ住居は窪地として放置され、それがある程度埋没した段階で埋め戻されたと考え

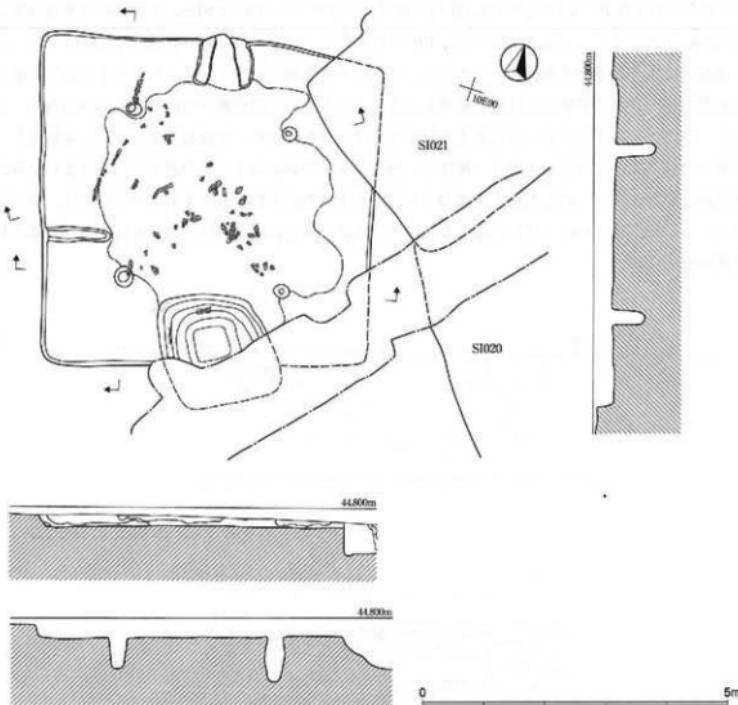


第26図 SI019

ておきたい。ほかには管状土錐（5）・土器砥（6）等の土製品も出土した。

SI022（第27図）

10D98・10D99を中心に位置する。東壁の北側がSI021によって切られ、東壁の南側と南壁の半分近くまでも擾乱坑によって破壊され、遺存状態はよくない。またSI021同様、住居周囲には硬化したローター痕が残っていた。西壁長は残存長で5.4mで、それ以外は推定値になる。東壁長4.9m、北壁長5.6m、南壁長が5.3mになり、東壁が短くなつてやや歪んだ方形の住居になると思われる。主軸をN-15°-Wにとる。住居の深さは8cm~27cmで、SI021の床面との比高は45cmほどになる。埋土は暗茶褐色土を主体とし、床面近くの一部に炭化粒を多く含む。主柱穴はほぼ住居対角線上に4本あるが、その位置関係は住居の壁とは平行ではなく、南北に位置する柱穴間で柱間距離に20cmの開きがある。柱穴の掘形径は比較的小さく、25cm~30cmである。深さは50cm~73cmで、掘形径に比べると掘込みは深い。またカマド対向壁の住居南壁中央には、歪んだ方形の掘込みがある。掘込みの下端が壁の直下に位置するので、掘込みの一部は壁外に張り出していたものと思われる。ただちょうどその部分が擾乱坑によって削平されているので、壁外にどの程度張り出していたのか不明である。ここでは壁の立ち上がり角度から、壁外に70cmほど張り出すもの



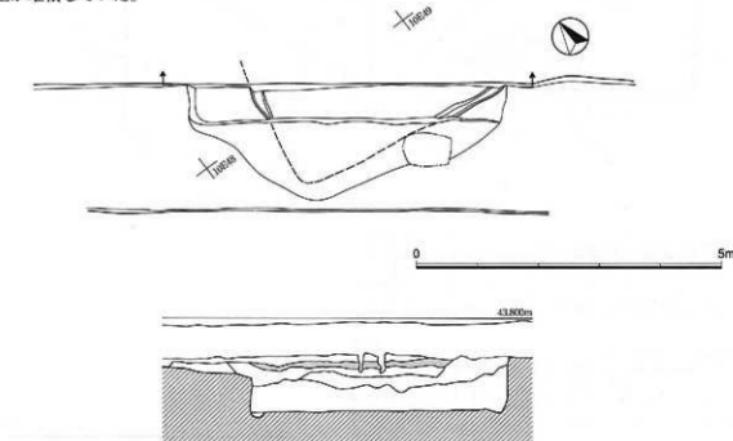
第27図 SI022

として推定線を加えてある。この掘込みは深さが45cmあり、底面は方形で1辺が45cmほどになる。掘込みは緩やかで、段状の掘込みを残す。壁溝はないものの、西壁の中央より南寄りに、壁から直角にのびる根太痕跡の溝が1条ある。長さ100cm、幅25cm、深さは10cm前後になる。床面の硬化範囲は、カマド前面から住居の張り出し部にかけて、主柱穴に開まれた範囲を中心に広がる。なお住居床面の西半分を中心炭化材が散乱していた。長いものが少なく、幅の狭いものが多い。散乱状況から屋根の構築材の一部と思われる。ただその範囲をみると、住居の廃棄にあたって、屋根の東半分の構築材を解体していた可能性がある。焼土はとくに確認していない。

カマドは北壁の中央にあるが、住居が浅いこともあって、ほとんど基底部しか残っていない。煙道部は壁を10cmほど掘りくぼめ、袖は山砂とローム土の混合土を構築材としていた。火床部と思われる焼土が狭い範囲で残る程度で、袖の内側にもとくに被熱した痕跡がなく、使用痕跡は希薄である。カマド内から出土遺物はなく、支脚も抜かれていた。出土遺物は土器が数点出土しただけで、住居の廃棄にあたって、日常雑器類は片づけられたようである。

SI026（第28図、図版12）

確認調査における第3トレンチのほぼ中央で確認した住居で、SI025と同様、本調査の対象外範囲に位置するため、トレンチ内で調査を完了した。10E48を中心に、台地北側斜面の肩部近くに位置する。調査当初、遺構としての輪郭が不明確だったために、トレンチの北壁に沿ってサブトレンチを設定して精査した。その結果、竪穴住居の外側には住居の輪郭よりもさらに大きい、暗黄褐色の浅い落ち込みのあることがわかった。住居が位置するこの一帯はあまり削平をうけていないため、比較的プライマリーな状態だったために残った痕跡かもしれない。表土（耕作土）層は厚さが約50cmあり、その直下に10cmほどの厚みで帶状の黒褐色土層がある。この黒褐色土層はおそらく旧表土層の最下部に相当するものと思われ、住居外側の輪郭は、この黒褐色土の直下に広がる。それ以下には他の竪穴住居と同様、ローム粒が混じる暗茶褐色系の土が堆積していた。



第28図 SI026

部分的な調査のために、規模やカマドや住居内の施設等についてはわからない部分が多い。サブトレーン内で確認した南壁と西壁の延長がほぼ直角になることから、平面形態は一辺4m以上の方形を規範とするであろう。住居の主軸は南壁で測ると、N-81°-Wになる。住居の深さは80cm前後で、住居本体の深さに近いものかもしれない。壁の直下にはやや幅広の壁溝が巡る。床面は狭い範囲での調査のために詳細は不明だが、調査した範囲では焼土・炭化材等は散乱していなかった。出土遺物としては図示できる資料もないが、出土資料の大半はおそらく7世紀段階の土器様相と思われる。

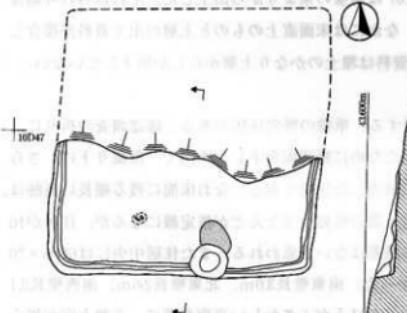
SI025 (第2図)

10D47にある。調査地北部で台地が一段低く削られて緩斜面を形成し、その台地の肩部に位置する。したがって住居の北半分はすでに削平されている。また一帯には籐竹が繁茂しており、遺存状態はよくない。今回の調査区のなかではもっとも西北に位置する、単独の住居である。東西長4.4m、主軸をN-0°-Eにとる。住居の深さは、遺存のよい南壁では37cmほどになる。埋土は暗茶褐色土が主体とする。南壁中央より東側にやや円形の掘込みがあり、梯子穴に関連する痕跡かもしれない。ただその北側の床面上には焼土が堆積し、その範囲はこの掘込みの上面に一部及んでいた。床面上には柱穴ではなく、床の硬化範囲もとくにない。壁溝は壁の遺存している範囲では確認できたので、おそらく全周していたのである。厨房施設は炉またはカマドが考えられるが、削平された部分に敷設されていたのである。出土遺物としては、土器類にはまとまったものではなく、研磨面のある石製品が南壁中央の床面近くから出土している。

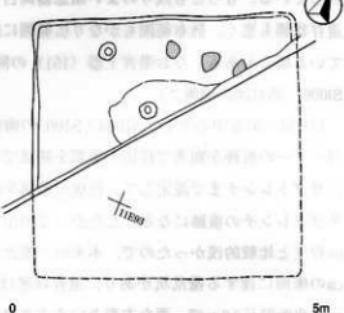
SI028 (第29図)

11E82-11E83に位置する。住居の約3分の2が調査区外になるために全容は不明である。住居の北隅にややはっきりしない部分があるが、一辺4.3m前後の方形を基調とする平面形態と思われる。住居の主軸を南西壁で測ると、N-23°-Wになる。深さは浅く、5cm~9cmしかない。確実に主柱穴といえるような掘込みは確認できなかったが、径28cm前後で、深さが16cm~18cmの深い掘込みが住居の西隅と中央の2か所でみつかった。掘込みの深さと位置から、住居の上層構造に直接関連する掘込みではなさうである。床面の硬化範囲は、調査した範囲では、住居の中央付近を中心とした狭い範囲で広がっている。厨房施設は、出土土器から考えるとカマドが相当すると思われ、壺底部の破片資料の器面にカマド構築材と考えられる山

SI025



SI028



第29図 SI025・SI028

砂がこびりつく資料が1点あったので、カマドはおそらく調査区外に位置するのであろう。炭化材・焼土は住居の東半分を中心に散布するのにたいして、土器類は住居の西半分から出土している。

第3節 奈良・平安時代

奈良・平安時代の集落は、ほぼ古墳時代後期の集落と重なるように、6軒の竪穴住居がみつかっている。ただし集落の継続性という観点からみると、今回報告する資料のなかには8世紀第1四半期と特定できる資料は見あたらず、また8世紀末から9世紀前半の資料も非常に希薄で、調査した範囲では集落が連続と継続していくという様相ではなさそうである。なお掘立柱建物は2棟あり、時期までは特定できないが、とりあえず、奈良・平安時代のなかで解説しておくことにする。

SI004 (第30図、図版6)

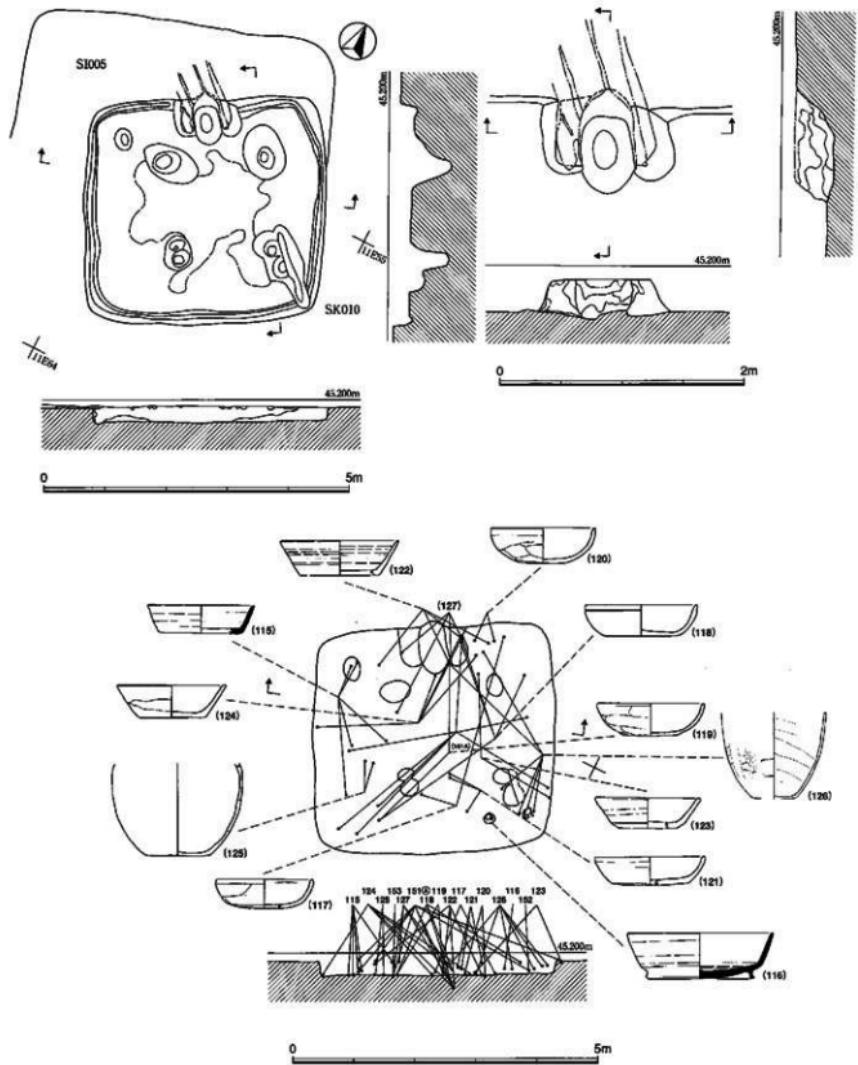
11E44・54を中心とし、SI006の北に位置する。SI005の南東部を破壊して作られている。一帯はローターの痕跡が著しく、埋土もその影響でかなり引きずられていたこともあって、当初、住居の輪郭を1軒として調査を開始した。そして調査を進めるなかで、SI005の東壁と南壁の一部を共有する位置にSI004が存在することがわかった。また住居の南東隅には縄文時代の縮穴SK010が重複する。住居の主軸長は3.7m、副軸長が3.9mの、副軸長方向にやや長い方形の平面形態である。主軸をN-30°-Wにとる。深さは23cm~30cmになる。埋土は粒径1cm~3cmのロームブロックを多く含む暗茶褐色土が主体とする。住居の四隅には4本の主柱穴があるが、それらを結んだ線は住居の輪郭線のやや東よりも位置し、主軸から6°ほど西に振れる。床面上での上面径は30cm程度だが、掘形径はそれよりもかなり大きくなり、なかでも北側2本の長径0.9m~1.0mにもなる。また南側2本の主柱穴には下端が2か所あり、柱の建て替えた痕跡が残っていた。深さはいずれも60cm前後ある。梯子穴に相当する柱穴は確認できなかった。壁溝は全周する。床面の硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲を中心に広がるが、入口が想定されるカマドの対向壁近くまでは、硬化範囲は広がらない。焼土・炭化材は散乱していなかった。

カマドは、北壁中央にある。住居がやや深いものもある、比較的遺存状態はよい。煙道部は住居の壁をやや切り込んでいる。両袖は灰白色の山砂と粘土を構成材とし、内側には被熱痕跡を顕著に残していた。

遺物は土器類を中心に、住居内に散乱した状態出土しており、接合資料もかなり離れたものどうしが接合している。もっとも残りのよい須恵器高台付坏(116)は南壁の東よりから出土した。それ以外の坏類は遺存状態も悪く、散布範囲もかなり広範囲に広がる。なかには床面上のものと上層の出土資料が接合している場合もある。なお墨書き器(151)の同一個体資料は埋土のかなり上層からしか出土していない。

SI006 (第31図、図版7)

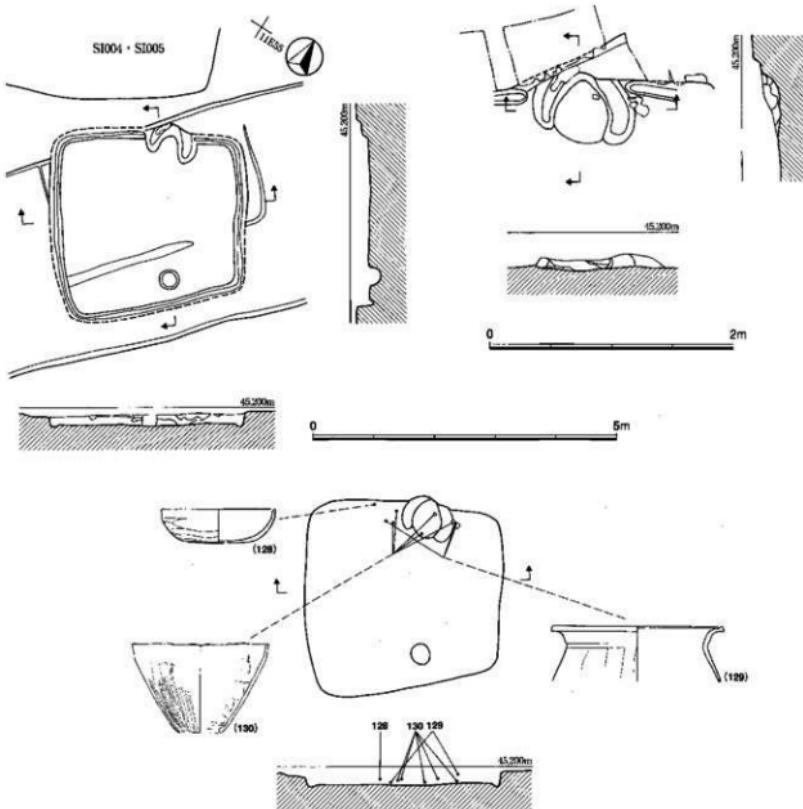
11E54・55を中心とし、SI004・SI005の南東に位置する、単独の竪穴住居である。確認調査の折りに、ローターの痕跡が顕著で住居の輪郭を確認できなかつたために確認面をトレンチ内で一部掘り下げ、さらにサブトレンチまで設定して、住居の輪郭を推定して調査した住居である。なお床面に残る細長い痕跡は、サブトレンチの痕跡になる。したがって同示した住居上端の輪郭はほとんどが推定線になるが、住居が10cm程度と比較的浅かったので、本来の上端とさほどの誤差はないと思われる。また住居中央には60cm×70cmの床面に達する擾乱坑があり、遺存状態はよくなかった。南東壁長3.0m、北東壁長2.6m、南西壁長3.1m、北西壁長3.2mで、歪な方形というよりは台形といったほうがふさわしい平面形態で、主軸方向が短くなる。今回報告するなかでは、小型な住居の部類になる。主軸をN-32°-Wにとる。埋土はローム粒を含



第30図 SI004

む暗茶褐色土を主体とし、床面近くに一部黒褐色土が堆積する。床面上に柱穴ではなく、カマドの対向壁近くに梯子穴と思われる、円形の掘込みがある。掘込みは径40cmほどで、深さは約20cmになる。壁溝は四周にめぐる。床は硬化範囲としてとくに図示するほどの硬度はなかったが、床面は全体にそれなりには堅められていた。なお床面上に焼土・炭化材等は確認できなかった。

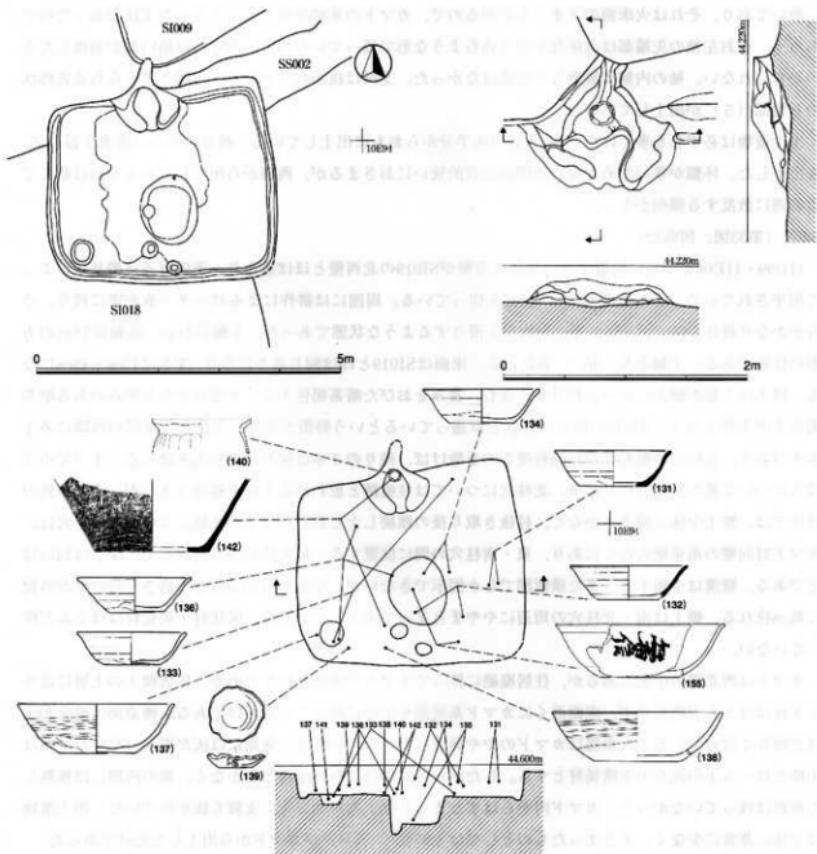
カマドは北壁の中央よりやや東に寄った位置にある。右袖の一部は掘形まで削平され、遺存状態は悪い。煙道部は住居の壁をほとんど掘込んでいない。床面を10cmほど掘り下げて火床面とし、地山には被熱痕跡が良好に残っていた。袖の内側は左袖の一部が赤化していた程度で、あまり被熱痕跡は残っていなかった。両袖は灰白色の山砂と暗茶褐色土の混合土を構築材とする。遺物は住居全体から散漫に出土し、個体としてやまとまるものは、カマドの左脇から出土している。完形に近い土師器杯(128)はカマドの左脇から出土したものである。



第31図 SI006

SI017 (第32図、図版10)

10E93の、住居群が密集する一角にあり、緩斜面にややかかる。SI009・SI018を切っており、また方形周溝墓SS002の南周溝の一部と重複する。住居中央の南壁寄りに長径112cmで、深さ40cm前後の、不正円形の擾乱坑がある。その埋戻し土から、SI017に伴うと考えられる遺物も出土している。なおその底面からは、SI018の北東柱穴の掘形がみつかっている。主軸長2.9m、副軸長3.7mで、副軸方向に長い長方形の平面形態である。主軸をN-2°-Wにとる。深さは30cm~35cmである。埋土は暗茶褐色土を主体に、下層にいくにつれロームブロックが多くなる。はっきりした主柱穴ではなく、住居の南壁の西半分で、深さ11cm~13cmの掘込みを3か所確認したにすぎない。南壁中央近くにある2か所の落ち込みは、あるいは梯子穴になる可能性はある。なお南東隅の落ち込みは、径が40cmほどと他より大きい掘形になる。この掘込みの近



第32図 SI017

くから、床面より浮いた状態で土師器壺（137）が出土した。壁溝は北壁のカマド左側の一角を除いて全周する。床面の硬化範囲は、カマド前面からカマド対向壁に向かって、幅1.5mほどの範囲で広がる。床面は全体にやや凹凸がある。埋土中に焼土粒・炭化粒を確認しているが、散布範囲としてまとまった出土状態ではなかった。

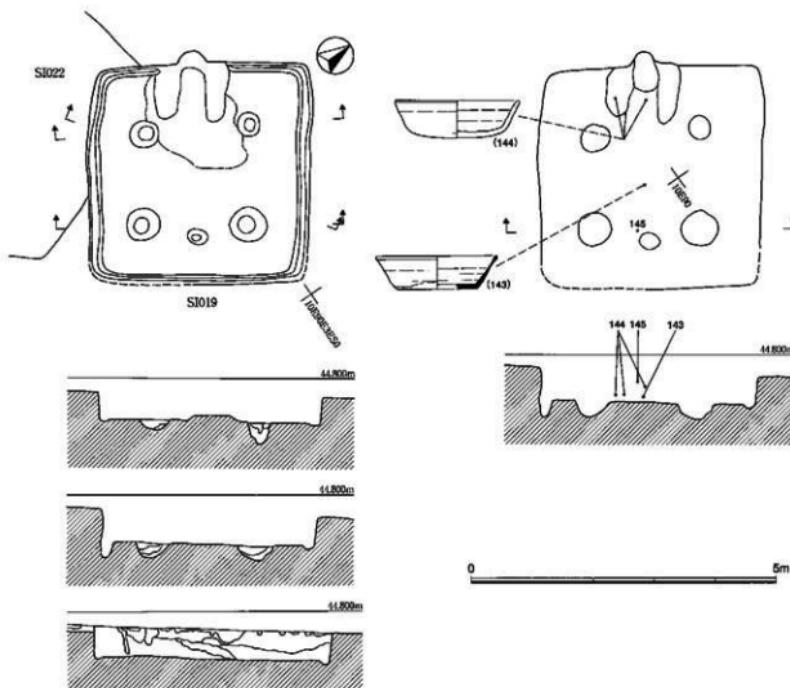
カマドは北壁中央に位置する。カマド上面は、おそらく住居廃棄時に破壊したようで、袖として残っている高さは10cm程度しかなかった。煙道部は住居の壁を細長く掘込み、先端はSI009の埋土中まで伸びていた。火床面はカマド内部の後半分に広がり、その中央には下半部を欠く壺（140）が正位の状態で置かれ、その内側には壺の口を覆うように須恵器壺（142）の破片が出土した。壺の接合資料は、住居南側の埋土中とSI109からも出土している。袖は山砂を主体にしているが、その基礎部分には粘性の強い黒色土を一帯に敷いており、それは火床面の下までも広がるので、カマドの基礎地業としてこうした工法があつたのであろう。なお左袖の先端部は火床部を巻き込むような形で残っていたので、あるいは掛け部が崩落したものかもしれない。袖の内側に被熱した痕跡はなかった。支脚は抜かれていたが、支脚と考えられる乳棒状の石製品（5）が出土している。

出土遺物は必ずしも多くはないが、住居の南半分からおもに出土している。擾乱坑からは墨書き器（155）も出土した。壺類が多いためか接合範囲は比較的狭いにおさまるが、西側から出土しているものは絶じて広範囲に散乱する傾向がある。

SI021（第33図、図版12）

1ID99・1IE09を中心に位置する。住居の南壁がSI019の北西壁とほぼ重なり、南隅付近は擾乱坑によつて削平されている。また南西部分はSI022を切っている。周囲には耕作によるローター痕が密に残り、それがかなり硬化して、ジョレン等の刃物が上滑りするような状態であった。主軸長3.6m、副軸長3.6mの方形の住居である。主軸をN-36°-Wとする。床面はSI019とほぼ同じ高さになり、深さは45cm～49cmになる。埋土は上層が細かいローム粒を多く含む、黄みをおびた暗茶褐色土で、下層はかなり黒みのある暗茶褐色土が主体となり、SI019の埋土の性状と似通っているという特徴がある。主柱穴は住居の四隅に各1本ずつあり、北柱穴の掘形径が35cm程度なのを除けば、残りの3本は掘形径が50cmを超える。すべての主柱穴について裁ち割りを行った結果、北柱穴については柱痕と思われる土層を確認できたが、それ以外の柱穴では、埋土全体に縫まりがなく、柱抜き取り後の埋戻し土と思われる土が充填していた。梯子穴は、カマド対向壁の南東壁の近くにあり、東・南柱穴の間に位置する。最大径34cmの長円形で、深さは24cmほどである。壁溝は全周する。また横断図でしか示すことができないが、床面から20cmほどの高さ一帯の壁が外側に数cm抉れる。焼土は南・北柱穴の周辺にややまとまって出土しているが、炭化材・炭化粒はほとんど伴っていない。

カマドは西北壁の中央にあるが、住居廃棄に伴つてカマドが破壊されたためか、住居埋土の上層にはカマド材はほとんど散乱せず、床面近くにカマド基底部を中心にして残つていただけである。煙道部は壁を20cmほど掘りくぼめている。火床部はカマドのやや奥まったところにあり、底面には灰が混じっていた。袖は山砂とローム土の混合土を構築材とする。したがつて両袖は高さ10cmほどしかなく、袖の内側には被熱した痕跡は残つていなかつた。カマド内からはまとまった出土遺物はなく、支脚も抜かれていた。出土遺物は全体に非常に少なく、まとまったものとしては土師器壺（144）がカマドから出土しただけであつた。

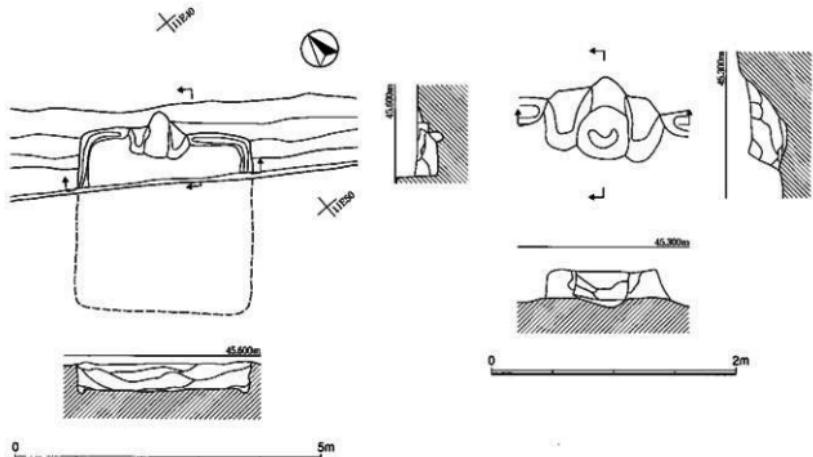


第33図 SI021

SI023 (第34図、図版12)

11D49を中心位置する。住居の南西側、約3分の2が調査区外になり、住居を幅80cmの溝掘りで調査したことになる。また住居の上面には近世以降のSD001が覆っていたこともあって、調査条件はよくなかった。副軸長は2.9mで、主軸長もそれと同程度と思われる。主軸をN-43°-Eにとる。住居の深さは40cmになる。埋土はロームブロックを含む暗茶褐色土を主体とし、調査部分にカマドがあったために、カマドの構築材である山砂や焼土が粒状に飛散していた。主柱穴や出入口関連の施設は、調査した範囲ではみつからなかった。また床面の硬化範囲も調査範囲が狭かったために不明である。壁溝は調査した範囲ではカマドを除いて全周する。

カマドは北壁中央のやや西寄りに位置する。煙道部は壁を20cmほど掘りくぼめ、袖は山砂と暗褐色土の混合土を構築材として、床面の直上から構築してあった。両袖の内部には被熱した痕跡がかなり厚く残っていた。また火床部には焼土が厚く堆積し、部分的に灰層の堆積も確認した。カマド内にまとまった出土遺物もなく、支柱も抜かれていた。出土遺物は、カマド周囲を調査したにもかかわらず、出土遺物は少なく、図示できる資料はなかった。ただ壊の小片のなかに8世紀中頃と思われる、いわゆる箱形壊の底部資料や、それと同時期と思われる壊の小片も数点あったので。とりあえずここでは8世紀中頃の住居と考え



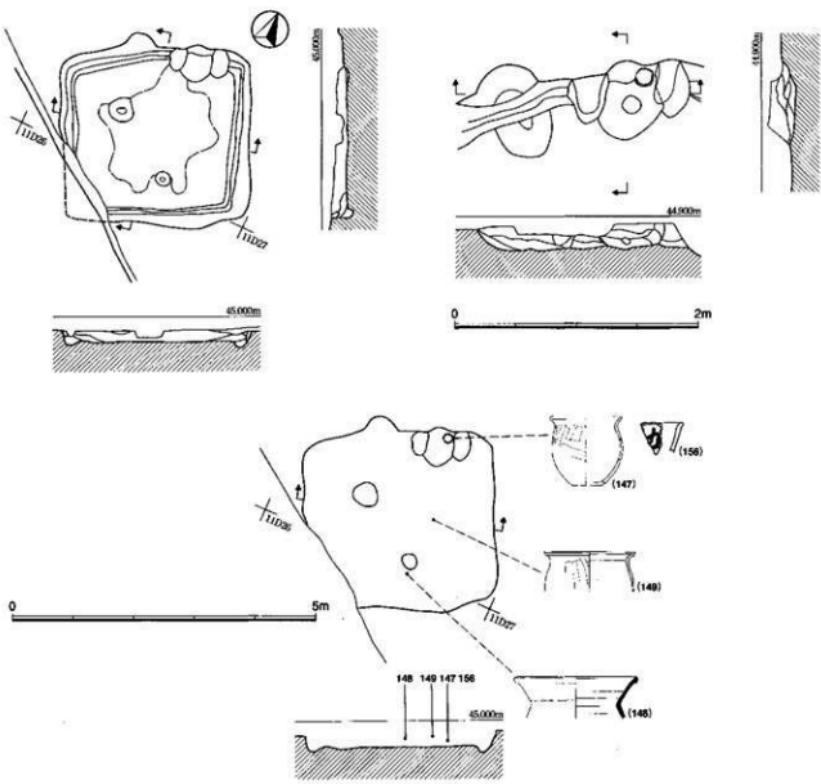
第34図 SI023

ておきたい。出土土器は土師器壺の破片を中心に64点あり、総重量は510gであった。

SI024 (第35図、図版12)

11D16・11D26にあり、今回の調査区のなかではもっとも西に位置する。調査した範囲では単独の住居である。住居の南隅の一部が調査区外になるが、およそ全容をつかむことはできた。主軸長は2.9mで、副軸長も3.0mで、副軸長方向にやや長い平面形態である。主軸をN-27°-Wにとる。住居の深さは22cm~30cmで、壁面の掘込みはやや傾斜がある。埋土はロームブロックを含む暗茶褐色土を主体とし、カマド周辺ではカマド構築材がやや散乱する状況であった。主柱穴はとくなく、梯子穴と思われる掘込みが南壁近くにある。掘形径25cm、深さは21cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。そしてやや幅広の壁溝が巡る。床面の硬化範囲は住居中央を中心に広がっていた。なお住居中央から北西側で、径40cmほどで、深さ数cmある、炉のような痕跡の落ち込みがあった。小銀治等に関連する施設の可能性もあるが、鉄滓等の出土資料はなく、詳細は不明である。

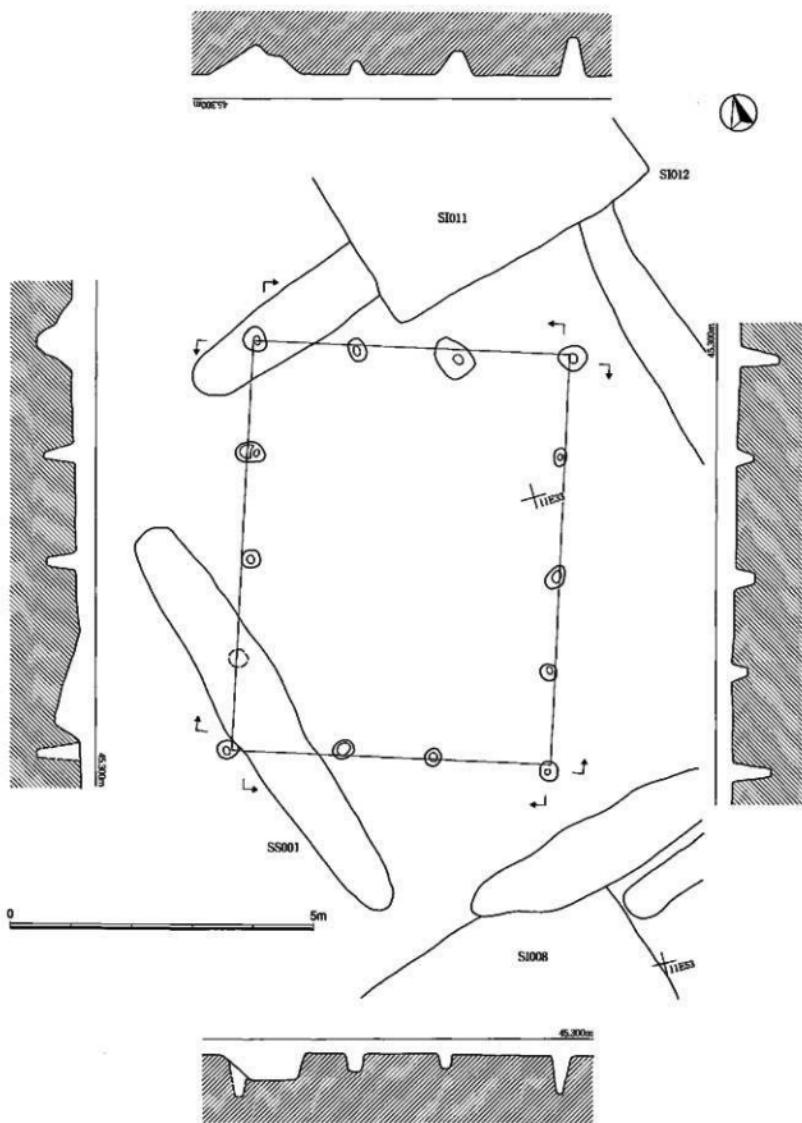
カマドは北壁に2基あり、西から東へ作り替えられている。東側のカマドは、住居の北東隅にほとんど接した位置にある。煙道部は壁を10cmほど掘りくぼめ、袖は山砂とロームブロックの混合土を構築材としていた。両袖の内側には被熱した痕跡が残り、それなりの使用痕跡をとどめていた。火床部には7cmほどの厚みで焼土が堆積し、その直上に山砂と焼土が混じる灰層が堆積していた。カマド内の奥部から、土師器壺(147)が口縁部を下に向けた状態で出土した以外、とくに目立つ出土物ではなく、支脚も抜かれていた。そして北壁中央にある作り替え前のカマドは、掘形しか残らず、火床がかろうじて残る程度であった。煙道部は東側のカマドより大きく、壁外に20cmほど半円形に掘りくぼめている。なお袖はその基底部の痕跡すらはっきりしなかった。出土遺物は、住居中央を中心に、散漫に出土しているが、埋土中層から出土したものが多い。



第35図 SB001

SB001 (第36図、図版13)

11E21~23, 11E31~33, 11E42にあり、SS001と重複し、SI008とSI011に挟まれた空間に位置する。埋土での重複関係は確認していないが、SS001よりは新しい。4間×3間の南北棟の側柱建物で、主軸をN-19°-Eにとる。桁行長6.9m、梁行長は5.3mになるが、柱間寸法は1.6m~1.9mまでばらつきがあり、柱筋の通りはあまりよくない。柱掘形は円形に近いものが多いが、長円形になるものもある。柱穴の掘形径は小さく、北側梁行の1本が長径70cmと大きい以外は、総じて30cm程度しかない。深さは隅の4本の柱が65cm前後の深さがあって、深くなる傾向があるが、それ以外は20cm~40cmの深さになる。遺構上面で柱痕跡や抜き取り痕は確認できず、掘形径が小さかったこともある、柱穴の裁ち割りは実施していない。遺構に伴うと思われる出土遺物はとくになく、時期の特定はむずかしい。確たる根拠はないが、4間×3間というやや大きめの間取りで、掘形径がやや小さく、奈良・平安時代~中世の幅のなかで考えておきたい。



第36図 SB001

SB002 (第37図, 図版13)

11E00・11E10にあり, SI020の南に位置する。4本の柱穴からなる1間×1間の造構である。軸方位はほぼ45°に振れる。柱間寸法は心々で1.4m~1.5mになり, 正方形の柱配置になる。掘形は径50cm~60cmのやや歪な円形で, 深さは29cm~36cmある。埋土は, 南側の2本がローム粒の多い暗褐色土の單一層で, 北側2本は中層に粗いローム粒を多く含む暗褐色土があり, それを褐色土が上下から挟んでいた。底面は北の1本が「U」字状で, それ以外は平坦な底面である。柱痕跡等は確認できなかった。

なおここでは便宜的に掘立柱建物として説明したが, 造構の上面が削平されて, 4本の主柱穴だけが残った竪穴住居の可能性も捨てきれない。ただその場合, やがやカマドの痕跡がまったくみつかっていないので, そうした痕跡を残さないほど深く削平されたということになる。それにしても他の竪穴住居の主柱穴と比較すると, 柱間寸法の割りに柱穴径が大きいくらいがある。つまり柱間寸法が短いので住居の規模もさほど大きくなは復元できないから, 竪穴住居の主柱穴とした場合, 柱穴径の大きさが不釣り合ひな印象を受ける。出土遺物もなく, 時期を特定できないが, 古墳時代後期~奈良・平安時代と考えておきたい。

第4節 その他の造構

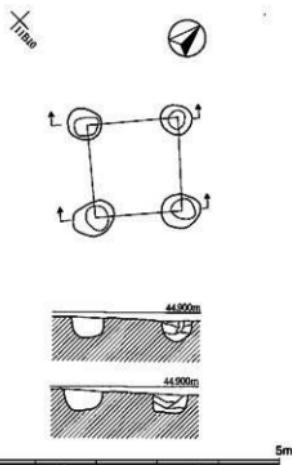
ここでは上記以外の造構群でとくに土坑としたものをとりあげる。これらのなかには形態から明らかに縄文時代の陥穴と考えられるものが5基 (SK001・005・006・008・009) ある。いずれも出土遺物ではなく, 底面に逆茂木を据えたような形跡もなかった。それ以外にもいわゆる性格や時期を特定できない造構もあるが, 埋土はいずれも竪穴住居の埋土と同じ暗茶褐色土系に似た土層である。なお南西の調査区間に境内に沿って走行するSD001がある。形状・位置から, 近世以降の地境溝と考えられるので, ここでは説明を省略し, 全体図にその位置を記すにとどめた。

SK001 (第38図, 図版7・13)

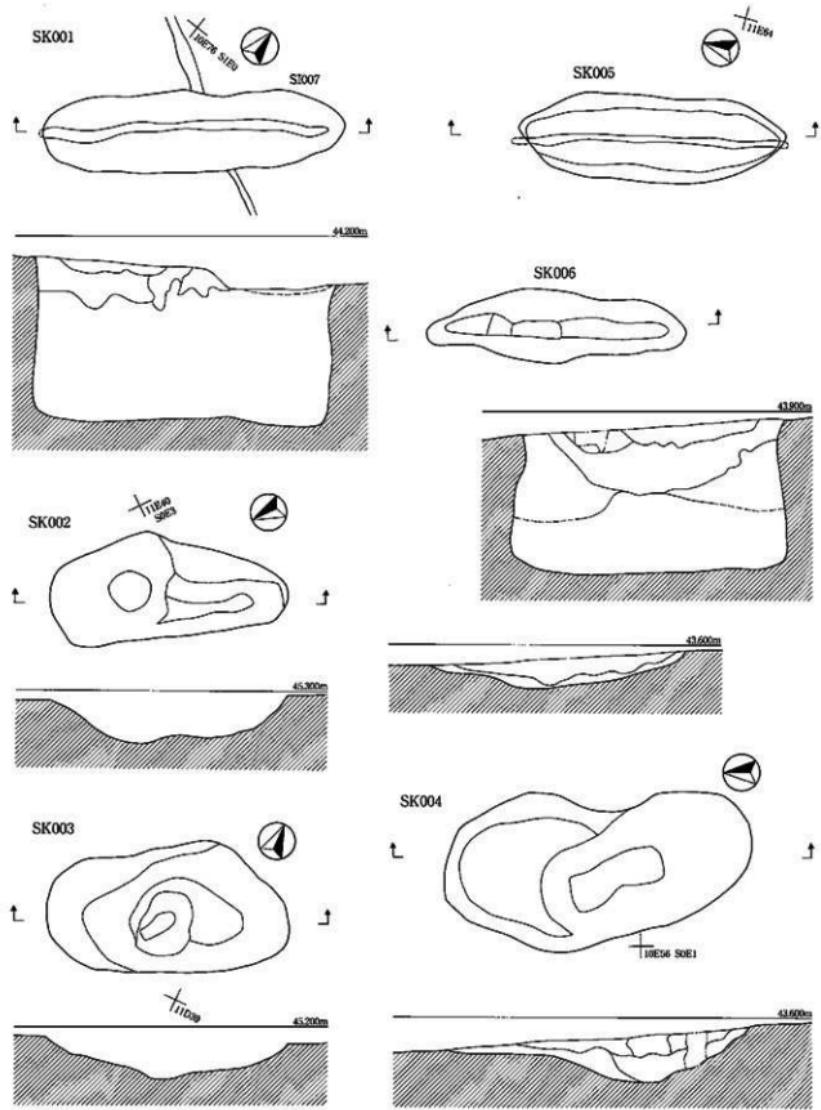
10E76にあり, 北半分はSI007の床面下になる。緩斜面部に位置する陥穴である。長軸2.45m, 幅0.67m, 深さは約1.3mである。主軸はN-55°-Eで, 等高線の流れにたいしてほぼ直交する位置になる。平面形態は縦に細長い長椭円形になる。長軸方向の端部がほぼ垂直の掘込みで, 一部オーバーハングする部分がある。底面は幅が10cmほどで, 副軸方向の断面が「V」字状になる。

SK005 (第38図, 図版13)

10E53・63にあり, 緩斜面の肩部に位置する。等高線の流れにたいしては, やや斜めになる。長軸2.18m, 幅0.70m, 深さは約1.2mになる。主軸はN-14°-Wである。平面は両端部がやや尖る, 縦に細長い長椭円形である。底面は幅約5cmしかなく, 非常に狭くなっている。両端部の下半にはややオーバーハングする



第37図 SB002



第38図 SK001・SK005・SK006・SK002・SK003・SK004

部分がある。副軸方向の断面は、上端から30cmほどの高さでいったん肩を作り、それ以下を鋭く「V」字状に掘り込んでいる。

SK006 (第38図、図版13)

SK005の西1mの位置にある。長軸2.2m、最大幅0.6m、深さは中央部のもっとも深いところでも20cmしかない。主軸はN-15°-Wで、SK005とほとんど平行する。深さが浅いことを除けば、平面形態・規模・主軸方位とも、SK005とかなり似通っていることがわかる。陥穴の場合、深さは重要な要素の一つになるが、かりに作りかけて放棄されてしまえば、深さは浅くてもよいことになる。SK005とSK006の同時性を明らかにする手ではないが、近距離に位置し、規模等の共通項も多いことを重視して、以上の理解にたって、2基の遺構を有機的に関連づけると、以下のようになる。つまりSK006は作りかけで何らかの理由で放棄された陥穴で、場所を変えて掘りなおされたのがSK005と理解しておきたい。なおSK006は、埋土に粗いローム粒を多く含むので埋め戻した可能性もある。

SK008 (第38図、図版13)

10D95・96にかけて位置し、一帯はほとんど平坦な場所になる。平面図を紛失し、横断面図しか残っていないために、平面形態や規模について一部不明なところがあるが、写真・横断面図と全体図からそれぞれ判断すると、次のとおりになる。平面形態は側壁が直線的に平行し、両端部に丸みをもつ。主軸長は2m前後で、深さは98cm、上端幅58cm、底面幅15cmで、壁はほぼ直線的に立ち上がる。主軸はN-45°-W前後にとる。

SK010 (第30図)

SI004内の東隅に位置する、やや小型の陥穴である。SI004の主柱穴と同時に調査したために記録類に不備がある。SI004の床面上での規模は、長軸約1.5m、幅0.3mで、底面は幅10cm程度である。深さ1.1mになる。主軸はN-45°-Wにとる。

SK002 (第38図、図版13)

11E49・59に位置する。遺構の北側に最深部がある、長方形の平面形態で、長軸1.95m、短軸0.88m、深さはもっとも深いところで40cmほどになる。埋土は粗いローム粒を暗茶褐色土である。出土遺物はとくになかった。

SK003 (第38図、図版13)

11D38・39に位置する。不正な長円形の平面形態である。中央部に最深部がある。長軸1.97m、短軸0.99m、深さは35cmほどである。底面には凹凸がある。

SK004 (第38図、図版13)

10E46・56にあり、緩斜面部に位置する。底面の北側に浅い平場があり、それとそれよりやや深いところに底面があり、2基の掘込みからなるような土坑である。長軸2.53m、短軸1.30mで、深さはもっとも深いところで38cmある。埋土は全体に埋戻し土と考えられるような土層で、粗いローム粒を多く含み、部分的に3cm大のロームブロックも含む。

SK009 (第23図)

12D19・29に位置し、SI015・SI016を切って構築されている。径1.3mのほぼ円形の平面形態で、深さは14cmほどである。底面は比較的平坦に整えている。埋土には3cm~5cm大のロームブロックを多く含み、埋戻し土と考えられる。

第3章 出土遺物

概要

出土遺物としては、土器類が大半をしめ、それらの大半は竪穴住居から出土した。ただ遺構の遺存状態が必ずしもよくないものが多いために、遺物の遺存状態もあまり良好ではない。土器類から判断できる資料でもっとも古いものは弥生時代になる。弥生時代の資料については、方形周溝墓から出土した1点の壺が唯一で、それ以外は破片資料が調査地内から散発的に出土している程度である。古墳時代については、集落の盛期にもなるために、当該の住居からは出土量の多寡はあるものの、まとまって出土している。ただ須恵器は非常に少なく、断片的なものしか出土していない。奈良・平安時代の資料については、岡示した資料は決して多くはないが、その割りには墨書き器の内容が充実している。土器類以外では、土製品・金属製品・石製品があり、それらを遺物の種別に、遺構ごとに説明を加えていくことにする。なお番号はそれぞれの種別に通し番号を付したものである。

第1節 土器類

A 弥生時代

SS001（第39図1、巻頭図版、図版14）

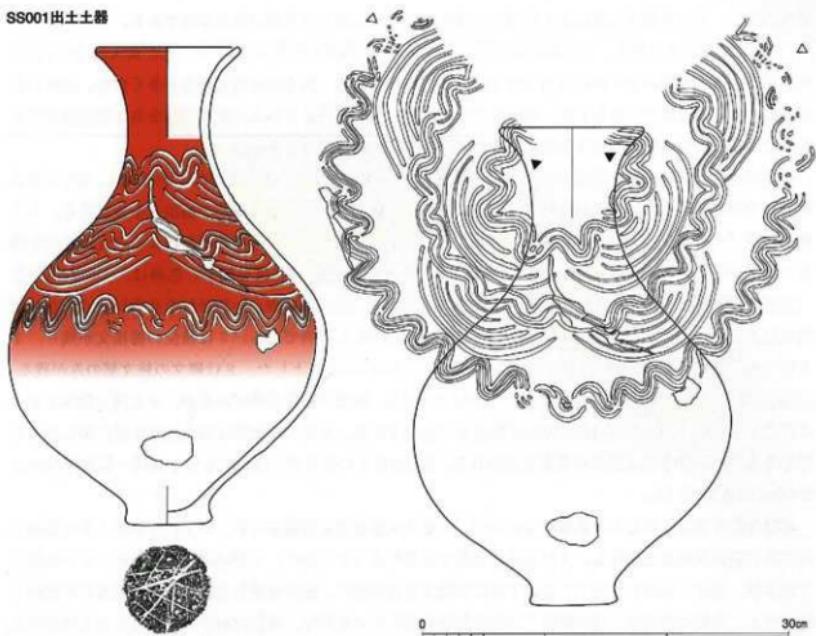
1の壺が1点だけ出土した。口縁部の一部をやや欠くが、ほぼ完全な形で出土した。口径12cm、器高39cm、体部最大径26cmで、体部に強い丸みがあり、頸部が鶴首状に長くのび、口縁部が逆「ハ」の字状に外反する壺である。体部の下面には1か所、3cm×4cmの大きさで、外側から穿孔した穴が残る。文様は頸部の下位から体部の中位まで、やや幅広の沈線を主文様とする文様帶があり、沈線は3本1組に整列した工具で、円の基点を右方向へ交互に変えながら施文した、いわゆるコンパス文が3段めぐる。施文の基点は3段ともほぼ同じ位置から始まっており、最下段と中段ではその崩壊点で文様の連続性が損なわれているのを確認でき、その位置は体部下部の穿孔箇所とほとんど同じにも位置になる。最下段の文様帶では周邊点で弧線の一部を省略し、中段では弧線を間延びさせて、文様割付の過不足を解消している。なお最下段の文様帶は、器面のミガキ調整によって一部擦り消されているところがある。そして各コンパス文の間を充填するように、4条～6条の沈線で、下弦の弧線文が施文される。上段には2単位あり、下段は3単位にある。外面には体部下位まで赤色塗彩が施されているが、全体にかなり擦れています。確認できる範囲では、沈線の溝部分には赤色塗彩痕跡は確認できないので、赤色塗彩は体部中位から上の、文様施文部以外のところに塗彩したようである。胎土にはやや粗い砂粒を多く含み、色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）～にぶい褐色（7.5YR5/4）である。

その他の弥生土器（第39図2～11、図版14）

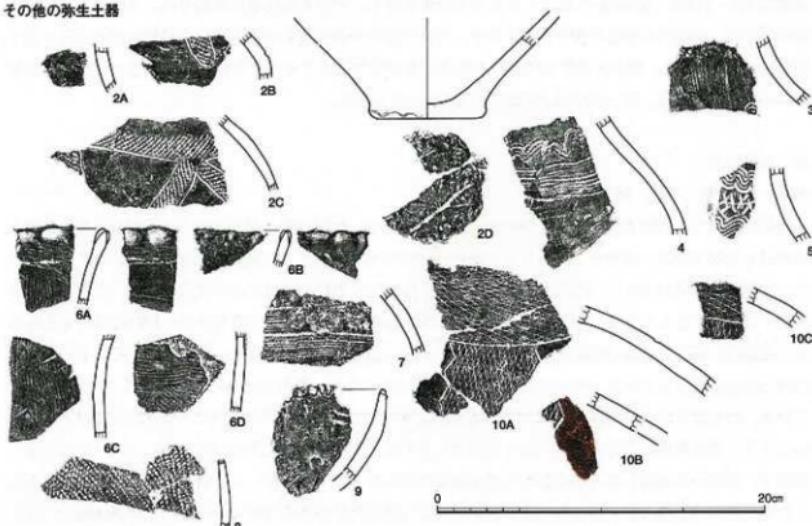
調査地の南半分を中心に弥生上器が散漫に出土しており、本来は何らかの遺構に伴う可能性のあるものだが、遺構がすでに削平されていることもあって不確かなので、ここでまとめて紹介しておくことにする。

2は壺の底部から頸部までが、断片的にSI005と11E64から出土したものである。Aは頸部下端と思われる資料で、擗描波状文が残る。B・Cは体部上部の資料で、帶縄文とその下に下向きの結縄文を連結して

SS001出土土器



その他の弥生土器



第39図 SS001出土土器・その他の弥生土器

主文様とし、それを棒状工具による沈線で区画する。Cは結縄文の末端が残る資料である。Dは底部が残り、底面に木葉压痕を残す。2の断面はいずれも特徴的で、外面は橙色(5YR6/6)、芯が黄灰色(2.5Y4/1)、内面は1mmほどの厚みでにぶい褐色(7.5YR5/4)になっている。胎土には白色砂粒を多く含む。図示した以外に同一個体資料が8点あるが、ほとんどが縄文の施文部を残している。散布範囲をある程度限定できるので、何らかの遺構の存在を想起させるが、調査時には確認できなかった。

3は櫛描文のみで文様が構成される、壺の頸部直下の資料になる。波状文がわずかに残る。SI011の出土資料である。4も頸部直下の資料で、上部に波状文を施文し、その下に横位の櫛描文を施文する。5は体部が逆「ハ」の字状に聞く壺である。6はA・Bが刷毛目調整後に、端部を指頭による交互押捺でを残す口縁部の資料である。C・Dは部位を特定できないが、刷毛目調整痕を残す。色調は、表面が黒褐色(10YR3/1)で、内部がにぶい黄橙色(10YR6/3)になる。胎土には細かい雲母粒を非常に多く含む、精緻な胎土である。A～CはSI004から出土し、DがSI013の出土資料である。7は横位の櫛描文が残り、4と似た文様構成である。胎土に白色砂粒を多く含む。SI018から出土した。8は縄文の施文部のみが残る。SI019から出土したものである。SI019からはほかに2点、同種の破片資料があるが、8と同一個体かどうか判然としない。数少ない北関東系の要素をもつ土器である。9は口縁端部に棒状工具を横に押しあてて刻みを入れた、鉢または皿状の器形と思われる。SI019からの出土で、ほかにもう1点同一個体資料がSI019から出土している。

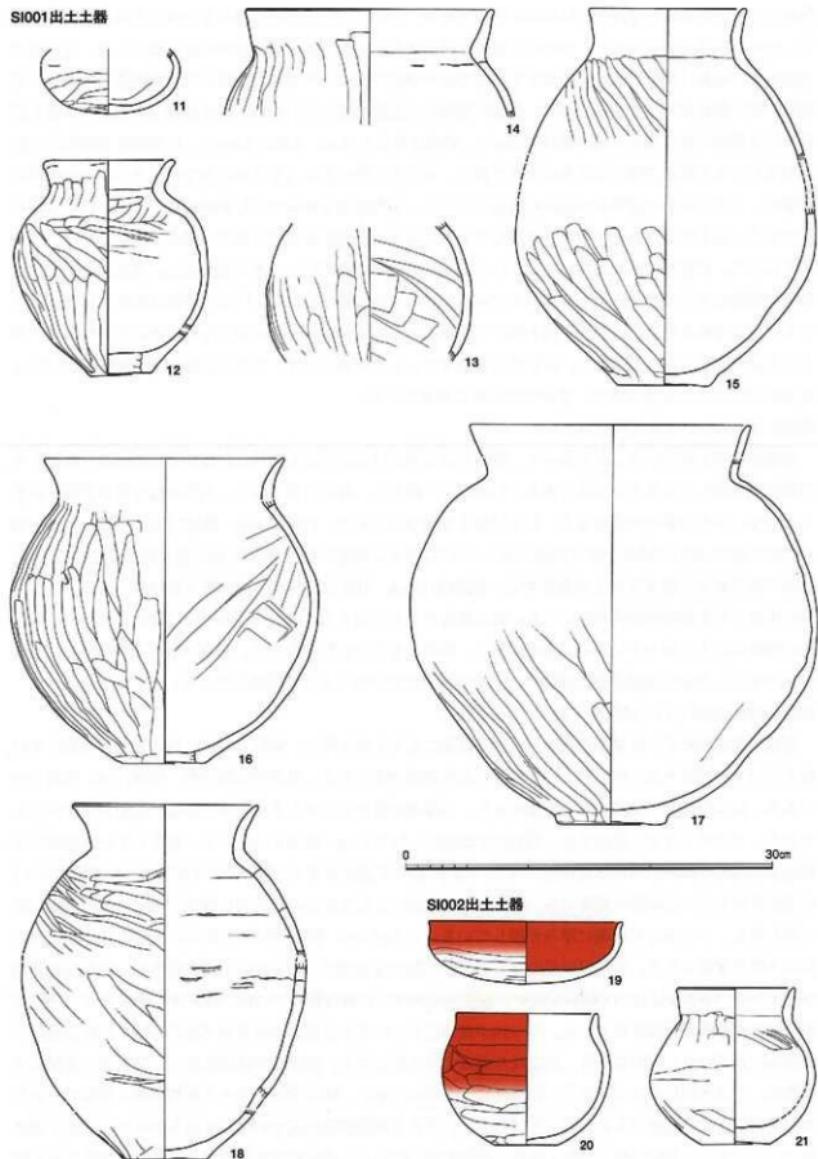
10は各破片資料にほとんど曲率がないので、かなり大型な壺を想像させる。いずれも体部上半の資料で、区画内に網目状施文が残る。Aは横位の沈線で文様帯を上下にわけ、上側は縄文のみを残っている範囲では3段、横にころがして施文する。下側には縄文を施文後に、縦の区画を左右それぞれ稻妻状に沈線で区画する。区画の外側は、他の資料では赤色塗彩を施しているので、赤色塗彩が剥落したものと思われる。AはSI002・SI008・SI019から出土したものとの接合資料で、かなり広範囲に散乱する。Bは稻妻状区画の部分資料で、区画外に赤色塗彩を明瞭に残す。確認調査時の出土資料である。Cは横位の沈線区画を残す。SI008から出土した。ほかに破片資料が8点あり、なかにはAよりやや小さい破片で、施文のない赤色塗彩のみの資料もある。同一個体は上記以外ではSI027にもある。

B 古墳時代

SI001 (第40図11～18、図版15)

壺類に比べて、供膳容器類の出土が少ない。11は丸底で、体部の張りが大きい、小型壺形土器の体部のみが残る資料である。おそらく短く立ち上がる口縁部が取り付いて、短頸壺のような器形になるのであろう。体部最大径は11.3cmで、現存高は5.4cmになる。ヘラ削りの痕跡にはにぶい光沢がある。内面の底部近くは、表面が被熱したように荒れている。12は小型の壺で、約2分の1が遺存する。口縁部は「く」の字状に直線的に開き、体部は鳩胸状に丸みをおびている。体部下半を縦方向のヘラ削りで、その上に斜め方向のヘラ削りを行っている。器高17.7cm、最大径は15.8cmになる。器面外面のほとんどが煤けて、黒くなっている。13も12とはほぼ同様、最大径が体部上位にある器形と思われる。壺の体部だけが残る。最大径は16.6cmである。体部外面は縦方向のヘラ削りで調整しており、やや硬質に焼き上がっている。14～18は大型の壺類で、形状から球胴状で、器高と最大径がほぼ同じもの(14・16・17)と、最大径にたいして器高が高くなる長胴形のもの(15・18)の二者がある。14は口縁部だけが残る資料である。推定口径20cmで、口縁

SI001出土土器



第40図 SI001・SI002出土土器

部から下に施されたヘラ削りにはぶい光沢がある。遺存している範囲には顯著な被熱痕跡は確認できない。16は口縁部を欠いており、体部は3分の1ほどを欠失している。最大径が体部中位にあり、最大径は25.0cmで、器高は推定で25cm前後である。体部はやや幅の狭いヘラ削りで縦位に行って調整している。体部の一部に焼化が確認できる程度で、器面に被熱した痕跡を残していない。17は体部上部を欠く。最大径はやはり体部中位にあり、最大径は33.0cmで、器高は推定で33cm、底径は8.2cmで、比較的安定感のある作りである。また器壁が甕の大きさに比べて薄く、もっとも薄いところで4mmしかない。全体に被熱痕跡が顯著で、とくに内面は器面が痘痕状に剥落している。調整痕跡も部分的にしか確認できない。15は遺存状態が悪く、図上で上半部と下半部を合成したものである。口縁部が直立気味で、最大径が体部中位よりやや下にある。計測値は底径を除いていずれも推定になるが、器高31cm、最大径は25cm、底径7.5cmになる。体部の調整はやや斜め方向のヘラ削りである。被熱した痕跡はないが、内面の器面は痘痕状に剥落している。17は体部上半は口縁部の一部を除いて比較的遺存しているが、それ以下は部分的にしか残らず、図上で全体を復原したものである。計測値は口径を除いて推定値になり、口径は15.2cm、体部最大径は23cm、底径6.8cmになる。被熱痕跡は、底部の内外面に顯著である。

SI002 (第40図19~21, 図版15)

造構が削平されていることもあって、図示できた資料は3点である。19は口縁部と体部の境に稜があり、口縁部が屈曲して立ち上がる壺である。口縁部を一部欠く、ほぼ完形である。内面は痘痕状に器面が剥落している。赤色塗彩は内面全面と、外側は稜まで施されている。口径15.6cm、器高5.1cmになる。20は小型の鉢形土器で、短い口縁部が直立気味に立ち上がる。体部は球胴で丸みがあり、最大径が体部中位にある。底部は平底である。約2分の1が遺存する。器高は10.8cm、推定口径11cm、推定最大径14cmである。体部外側の中位まで赤色塗彩が施されている。21は頸部がやすらぎある球胴の小型壺で、ほぼ完形である。最大径が体部中位よりやや下にあって重心が低く、厚手の作りで安定感がある。口径9.7cm、器高12.9cm、底径5.7cmである。外側に被熱痕跡が顯著で、表面の薄皮が剥がれるように剥落している。

SI003 (第41図22~31, 図版15・16)

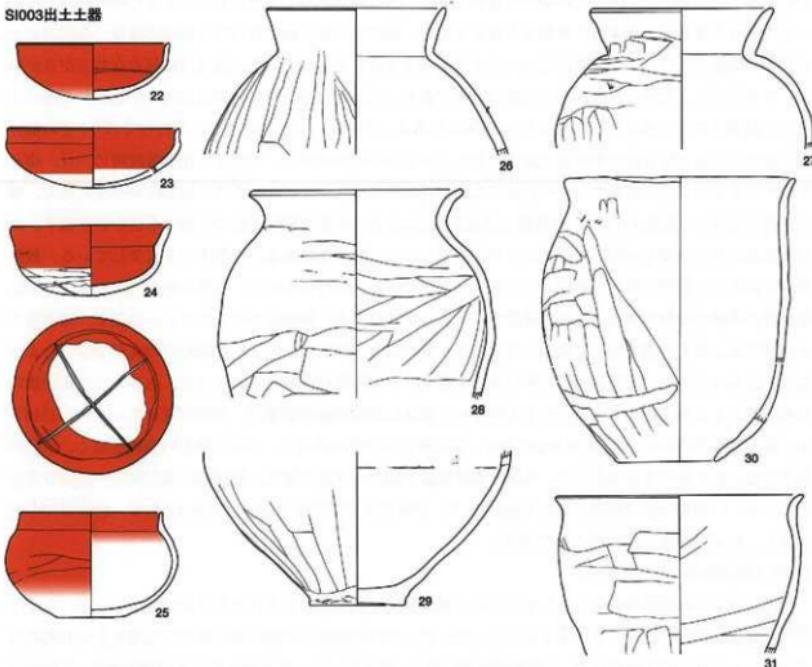
22は口縁部がわずかに屈曲しながら、直立気味に立ち上がる壺で、体部との境にはっきりした稜はない。約6分の1が遺存する。外側の上部と内面に赤色塗彩が施される。計測値は推定で、口径12cm、器高5cmである。23は体部との境に緩やかな稜をもち、口縁部が直立気味立ち上がる壺である。底面付近は欠失しており、6分の1ほどが遺存する。推定の計測値は、口径14cm、器高4cmになる。遺存している範囲では、赤色塗彩痕跡が残る。24はほぼ完形の壺で、口径に比べて器高が高く、深みのある壺である。底面に「×」の範記号がある。口縁部は体部から一体化して直線的に立ち上がる。内面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を作り出し、その部分で極端に厚みが増している。口径12.7cm、器高は5.8cmである。底部を除いた外側に赤色塗彩が施される。25は口縁部の立ち上がりが短い短頸壺で、約2分の1が遺存する。最大径は体部中位にあり、最大径に比べて器高が低い。底径は5.0cmで、口径は推定で11cm、器高は8.7cmである。外側の上部に赤色塗彩が施されている。26~29が甕類だが、いずれも部分的な資料である。26・27は口縁部が直線的に逆「ハ」の字状に開き、28は反り返るように外反する。28はやや長胴気味で、最大径が肩部付近にある。27は球胴になるであろう。口径は15cm~17cmである。29は体部下半から底部が残る資料で、27と同一個体になる可能性がある。30・31は甕で、いずれも内面調整は縦方向のヘラ削りのみで、ミガキ調整は行っていない。30は体部上半を2分の1ほどを欠いている。全体に歪な器形で、口縁部に屈曲のある部

分と直線的に立ち上がる部分があり、体部もそれに応じて歪んでいる。口径は推定で19cm、器高23.4cm、孔径8.2cmである。外面の調整は縦方向のヘラ削り後に、横方向のヘラ削り調整を加えている。31は体部上半の資料で、短い口縁部が湾曲しながら外反する。口径は推定で19cmである。

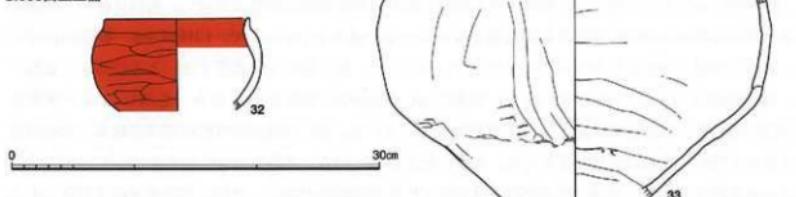
SI005 (第41図32・33)

遺構の掘込みが浅く、住居の大半がSI004に切られていることもあって、出土遺物が少なく、図示できる資料は2点である。32は短頸壺上半部の資料で、上半部が約4分の1残る。口縁部の立ち上がりは短く、直立気味に立ち上がる。最大径は体部の上位にある。口縁部の内側から外面にかけて赤色塗彩が施されている。計測値は推定で口径12cm、最大径は14cmになる。外面の一部には煤が付着する。33は壺の体部下半

SI003出土土器



SI005出土土器



第41図 SI003・SI005出土土器

部の資料で、かなり底部に近い部分である。体部の下部で「く」の字状に屈曲し、それより上は丸みがあり、それ以下は直線的にのびて底部にいたる。内外面とも被熱痕跡が顕著で、とくに底部近くは器面が赤変している。最大径は推定で14cmである。

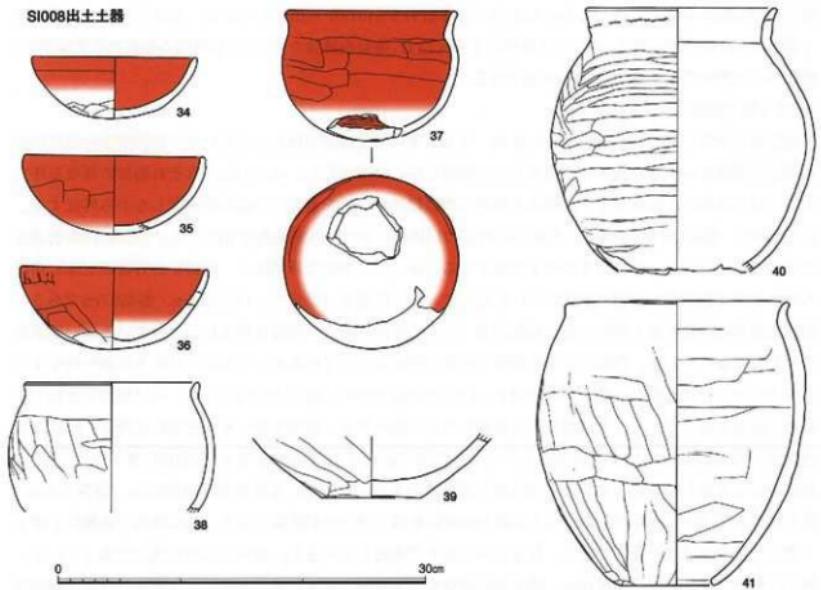
S1008 (第42図34~41, 図版16)

単独の住居で、やや深さもあったために出土資料としては、ややまとまっている。34~36は壊で、いずれも丸底のボール状で、内面を平滑に仕上げてある。そして内面全面と外面の上半分に赤色塗彩が施しているのが特徴である。34は約2分の1が遺存する。口径は推定で13cm、器高は5.1cmである。内面は一部、痕跡状に器面が剥落している。35は約4分の1が残る資料である。計測値は推定で、口径14cm、器高は6cmになる。胎土に細かい砂粒と海綿骨針を多く含む。36は約2分の1が遺存する。3点の壊のなかではもっとも作りが厚手で、外面のヘラ削りも面取を残し、製作時の粘土紐の接合痕も筋状に残り、全体に仕上げが粗い印象をうける。赤色塗彩は34・35よりもかなり黄みをおびている。37は口縁部の立ち上がりが短く、やや外反し、体部に丸みをもった広口の壺である。口径と体部の最大径がほぼ同じになる。3分の2ほどが遺存する。底面近くに6.4cm×4.5cmの穿孔がある。穿孔の打ち欠きは内面から行っており、その部分を外面からみると穿孔部分の周囲が焼けて黒くなっているのがわかる。これは穿孔の前段階に一旦、穿孔しやすくするために、穿孔する部分を中心にしてあぶった痕跡であろう。壺の上面觀はやや梢円形で、最大口径が13.8cm、器高は10.7cm、体部最大径は14.3cmになる。内面と底面を除く外面に赤色塗彩を施す。38は口縁部の立ち上がりが短い、体部にやや丸みをもった小型の壺である。体部下半を欠失している。被熱痕跡が顕著で、器面が荒れ、赤変している部分が多くある。口径は14cmで、体部の最大径は16.8cmになる。40は壺の底部の資料である。41は口縁部が「く」の字状に開き、体部がやや丸みをもった壺で、底部近くを欠損する。外面の調整は横方向のヘラ削りで、その痕跡の断面は、ちょうど彫刻刀の丸刀で削ったように丸みをもっている。底面はほぼ水平に欠いており、その破面は摩滅しているので、あるいは底面が抜けた壺を瓶として再利用しているのかもしれない。全体に被熱痕跡が顕著で、器面が荒れている。口径14.8cm、体部最大径21.6cm、現存高21.9cmになる。42は短い口縁部が外反し、体部が卵形の曲線を描く、單孔の瓶である。約3分の2が遺存する。外面の調整は縦方向のヘラ削り後に、部分的に横方向のヘラ削りを加えている。口径17.9cm、器高23.3cm、孔径7.4cmで、最大径は体部中位にあり、21.8cmである。色調はやや白っぽく、にぶい橙色(7.5YR5/3)である。

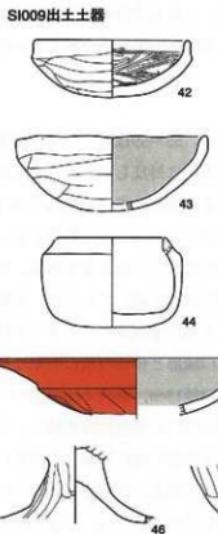
S1009 (第42図42~47, 図版16)

図示したものは供膳具を中心としているが、壺類も破片資料としてそれなりには出土している。しかしそれらは図化できるほどまで復原できなかった。42・43は口縁部と体部の境に緩やかな稜をもつ丸底の壊である。いずれも厚手の作りで、上面觀が卵形に近く、歪んでいる。42は約2分の1が遺存する。口径12.2cm、器高は4.7cmである。内面には雑なミガキ調整を施す。塗彩痕跡は確認できない。43は3分の2が遺存する。内面は粗いミガキ調整後に黒色処理を行っている。42よりやや大型で、口径15.3cm、器高6.1cmである。44は口縁部が外反しながら内側に折れ込む、鉢である。約4分の1が遺存する。ところどころ胎土で、調整痕跡をほとんど残していない。粒径0.5mm~2.0mmの赤色粒を多く含み、色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)で、部分的に灰褐色(7.5YR5/2)になっている。45・46は高壺の部分資料である。45は壊部が2分の1残り、外面に明瞭な稜をもち、硬質に仕上がっている。外面には赤色塗彩を施している、内面には黒色処理を行っているが、口縁部近くは火拂状に未処理部分が残る。脚部との接合方法は不明である。

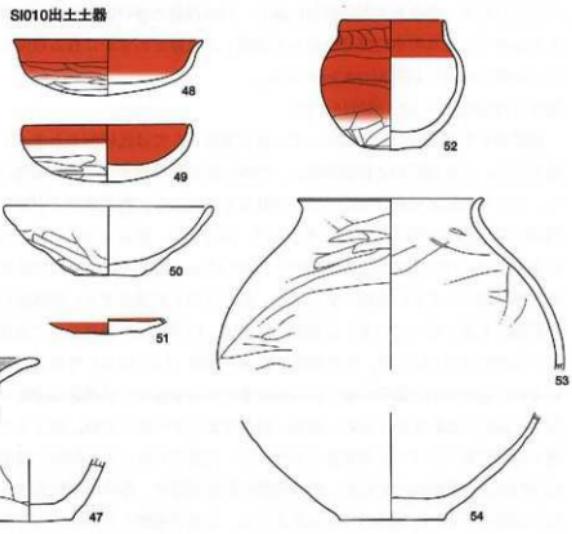
SI008出土土器



SI009出土土器



SI010出土土器



第42図 SI008・SI009・SI010出土土器

推定口径21cmで大型の部類になる。なお同一個体資料がSI019から出土している。46は「ハ」の字状に開く脚部と坏部の底面が残る。胎土に白色砂粒を多く含む。塗彩痕跡はない。47は長胴形の壺底部の資料で、全体に被熱痕跡が顕著である。底径6.6cmである。

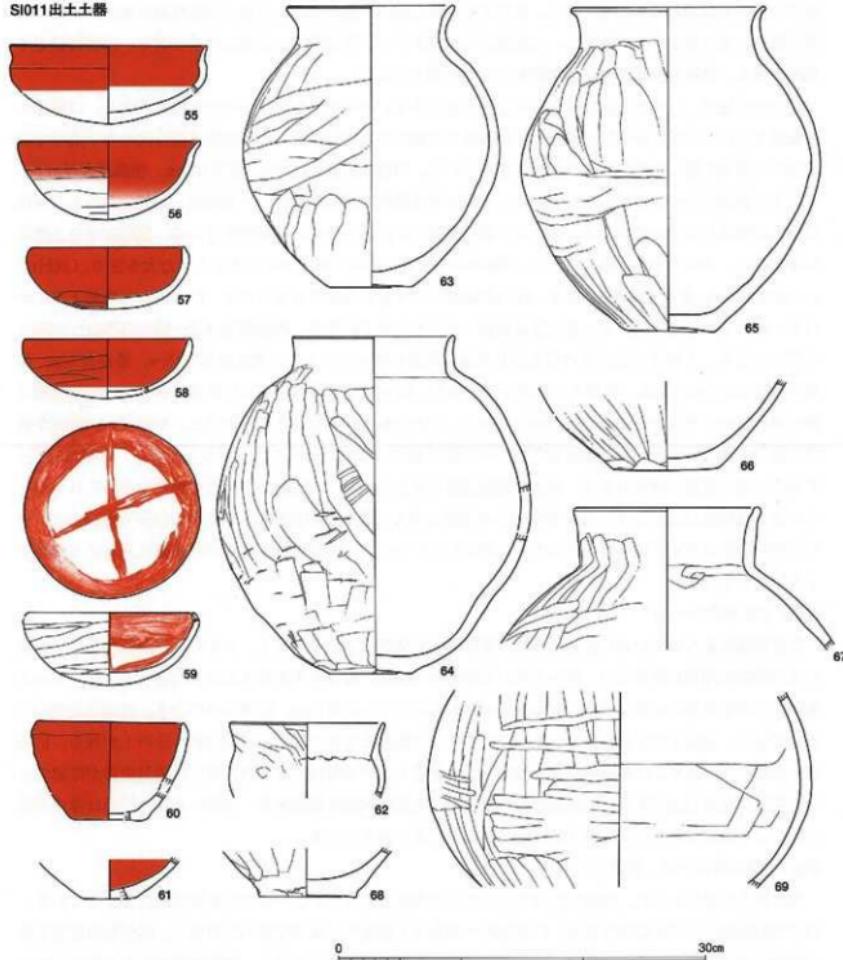
SI010 (第42図48~54, 図版16)

住居自体がほとんど削平されていたため、埋土中から出土遺物はほとんどないが、住居南側の南壁中央の掘込み周辺からややまとまって出土した土器群を中心に図示した。48~51はそれぞれ器形の異なる壺である。48は体部の一部を欠く。口縁部と体部の境に緩やかな稜をもち、口縁部が湾曲しながら外反する。口径15.5cm、器高は4.6cmである。内面から外面の口縁部にかけて赤色塗彩が施される。部分的に器面が痘痕状に剥落している。49は約2分の1が遺存する。稜のない椀状の壺である。内面から外面に上部にかけて鮮やかな赤色塗彩（赤色（10R5/6））を施している。計測値は推定で、口径13.6cm、器高6.7cmである。胎土に黒色の砂粒を多く含む。50は体部が逆「ハ」の字状に開き、底面を平底に仕上げている。口縁端部はやや厚くなっている。内面はケズリ調整で比較的平滑になっているが、外面はヘラ削りの稜を残すような仕上げで、一部に粘土紐の接合痕を残す。口径は推定で17cm、器高は5.2cmである。51は底部しか残らないが、底面を削りだして、上げ底気味に成形した壺と思われる。底面を除いて赤色塗彩が残る。52は口縁部が短く直立気味立ち上がり、体部に丸みをもった壺である。口縁部の一部を欠く。全体に薄手の作りで、口縁部をかなり薄く作りだしている。内外面に赤色塗彩を施している。各計測値は口径8.5cm、器高10.8cm、最大径11.8cm、底径5.1cmである。胎土に細かい砂粒を多く含むのが特徴である。53は頸部で極端にすぼまる壺上半部の部分的な資料である。外面はヘラ削りで調整しているが、全体にぶい光沢を放っている。胎土は繊密である。推定口径15cm、最大径の部分までは残っていると思うので、そうすると最大径は推定で28cmになり、かなり大型な部類に属す。54は球胴の壺の底部が残る資料で、これも大型の壺の部類になるであろう。工具の小口部分を使って調整した痕跡がわずかに残る程度で、明瞭な調整痕跡は残していない。底径8.5cmで、現存高は8.3cmである。

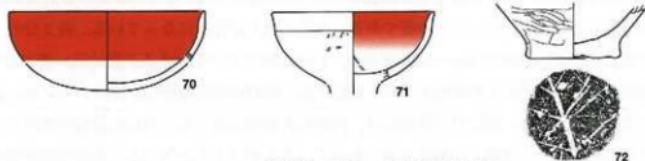
SI011 (第43図55~64, 図版16・17)

住居がやや深かったこともある、出土資料としては比較的まとまっている。55~59は壺で、すべて丸底である。55は口縁部と体部の境に、内外に緩やかな稜をもつ。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がり、ちょうど縦に間延びした「S」字状になっている。約7分の1が遺存する。遺存している範囲では内外面に赤色塗彩が残る。計測値は推定で、口径16cm、器高4cmになる。56は口縁部がわずかに外反する、完形である。内外に赤色塗彩を施す。口径15.0cm、器高は6.5cmで、口径に比べて深みのある壺である。57は口縁端部がわずかに内側に折れ込む。約4分の1が遺存する。内外面に赤色塗彩を施しているが、大部分が擦れて淡くなっている。計測値は推定で、口径12cm、器高5cmである。断面の色調はサンドイッチ状で、芯が灰色（N4/）で、その両側がにぶい橙色（7.5YR6/4）である。58は口縁部と体部の境に明瞭な稜がない。約6分の1遺存する。内外面に赤色塗彩を施す。計測値は推定で、口径13cm、器高4cmである。胎土に細かい砂粒を多く含み、雲母・海綿骨針をやや多く含む。59は上半部の内外に赤色塗彩を施し、内面の中央にさらに「×」を書き入れている。完形である。57と同様、口縁部と体部の境に明瞭な稜がない。口径13.4cm、器高6.0cmである。60は小型の鉢形土器で、部分的な資料のために、図上で全体を復原している。内面の下半部は薄皮が剥がれるように、表面が剥離している。ヘラ削りしているものの、指頭圧痕のような突起が多数ある。計測値は推定で口径12cm、器高5cmである。内外面に赤色塗彩を施す。61は、捕

SI011出土土器



SI012出土土器



第43図 SI011・SI012出土土器

鉢状の器形を想定して鉢としておく。体部下半から底部の一部が残る。内面に赤色塗彩を施す。62は口縁部と体部の境で緩やかに外反する。口縁部から体部上半の一部が残る。比較的薄手である。口径は推定で13cmになる。赤色塗彩はないが、短頸壺の一種と考えられる。

63～69は甕で、いずれも球胴状の甕になると思われる。63口縁部が「く」の字状に外反する。口縁部から体部下半にかけて部分的に欠損する。最大径が体部の中ほどにある。器面調整は縱方向のヘラ削りで調整後に、体部中位に横方向のヘラ削りを加えている。口径は推定で13.5cm、器高23.1cm、体部最大径21.0cmである。底部はやや上げ底になっている。体部下半は被熱で器面が荒れ、一部赤変した部分がある。64は口縁部が湾曲しながら外反する。体部に一部欠損部分があるものの、ほぼ完形である。底部はやや上げ底気味である。体部下半は被熱のために、器面がやや荒れている。63を一回り大きくした大きさで、口径16.0cm、器高26.8cm、最大径24.6cmである。65は口縁部がやや直立気味に立ち上がる。口縁部から体部下半にかけて、約2分の1を欠損する。最大径は体部中位よりやや下にある。器面調整は縦～斜め方向のヘラ削りで行っており、下半部では工具の削り出し部分が明瞭に残っている。口径は推定で13cm、器高27.8cm、体部最大径は26.0cmである。体部上半は焼けているが、はっきりした被熱痕跡は確認できない。66は球胴の甕の底部を残す資料である。底径は8.5cmである。67は口縁部から体部上半部が残る。やや長い口縁部が直立気味に立ち上がる。器面調整は縦方向のヘラ削り後に、横方向のヘラ削りを加えている。口径は14.5cmである。68は底部が残る資料で、あまり被熱痕跡を残していない。底面の周囲の生地がややめくれ上がっている。底径は7.8cmである。69は体部のみの資料である。最大径が体部中位にあり、推定で31cmあり、やや大型の部類に属す。ほかに小片のために図示していないが、須恵器高坏の坏部の底面と思われる資料が1点出土している。

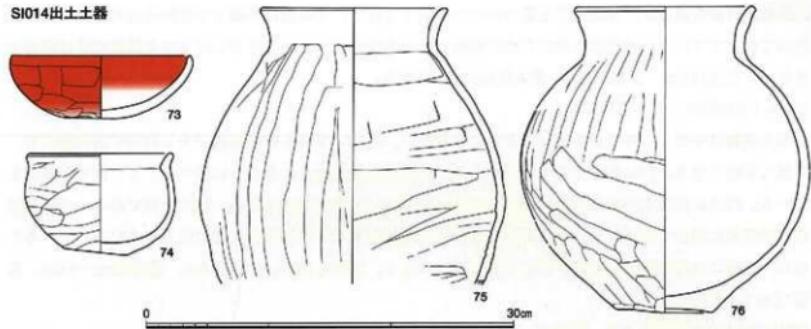
SI012 (第43図70～72)

住居が攪乱をうけていることもあって、図示できた資料は3点と少なく、いずれも部分的な資料である。70は口縁部の内側に稜をもつ、ボール状の丸底の坏である。体部上半が約5分の1遺存する。残っている範囲では赤色塗彩が全面に残る。計測値はいずれも推定で、口径18cm、器高6cmになる。71は底の中心に近い部分で、器面がわずかに反り返るので、ここでは高坏と考えておく。坏部の約8分の1が残る。口縁部と体部の境付近で、内外に緩やかな稜をもつ。遺存している範囲では、内面だけに赤色塗彩が確認できる。推定口径は13cmである。72は甕底部の資料で、底面に木葉压痕がある。内面の本来の器面は薄皮が剥がれるように剥落している。胎土には砂粒を非常に多く含んでいる。

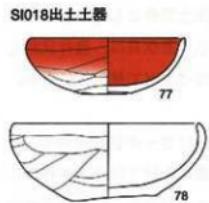
SI014 (第44図73～76、図版17)

部分的な調査にしては、貯蔵穴周囲から出土した資料を中心に少ないながらも比較的まとまっている。73は口縁端部がわずかに内湾する。口縁部の一部を欠く程度で、ほぼ完形の坏である。内外面の底面を除く範囲に赤色塗彩を施す。内面は一部がタール状にもなるほど焼けており、塗彩自体がかなり淡いためにはっきりしないが、中心部分に「×」の記号を赤色塗彩で行った形跡がある。口径14.5cm、器高は5.2cmである。74は口縁部の立ち上がりが短い、広口の壺である。かなり歪んだ作りになっている。約2分の1が遺存する。口径は推定で11cm、器高は7.8cm～8.4cmである。75は頸部でややすぼまる長胴に近い甕で、口縁部が湾曲しながら外反する。体部上半部が約4分の1遺存する。外面は被熱で器面が変色している。胎土には砂粒を非常に多く含んでいる。推定で口径は15cm、体部最大径25cmになる。76は口縁部が湾曲しながら外反する、球胴の甕である。口縁部から体部下半にかけて、約3分の1を欠損する。最大径が体部中位

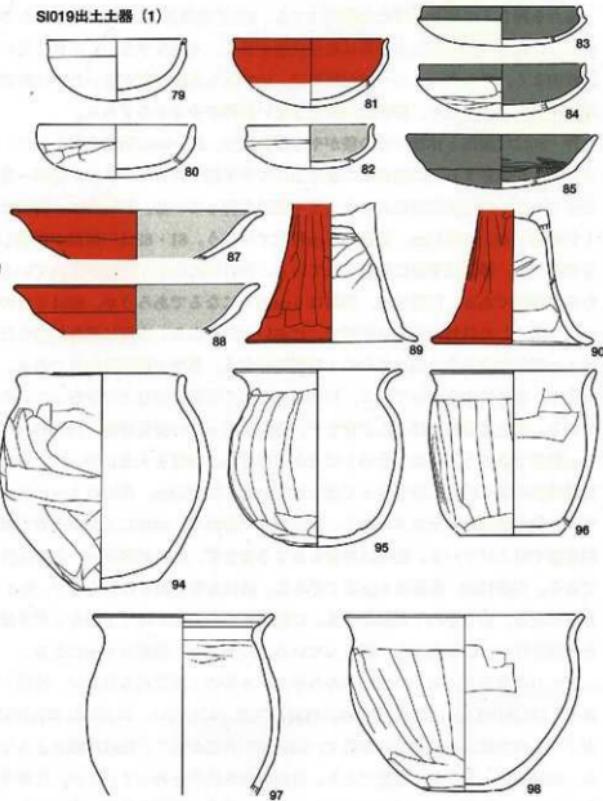
SI014出土土器



SI018出土土器



SI019出土土器 (1)



第44図 SI014・SI018・SI019出土土器 (1)

にある。外面の調整は、体部上半を縱方向のヘラ削りで行い、その後に体部下半を斜め方向のヘラ削りを行って仕上げている。底面は被熱のために赤変しているが、それ以外の部分にはさほど被熱痕跡は確認できない。口径13.9cm、器高25.2cm、最大径は23.6cmになる。

S1018 (第44図77・78、図版17)

出土遺物は少なく、坏2点を図示できたにすぎない。坏はいずれも口縁端部が少し内側に折れ込んで、底部は平底になる。77は約2分の1が遺存する。底面は生地を抉りとるように削りだして、面を作り出している。内外に赤色塗彩を施す。口径12.5cm、器高4.6cm、底径は3.9cmである。78は完形である。内面の器面は瘤状に細かく剥落している。外面はほとんど乾燥段階でヘラ削りをなでつけるように行っているために、器面上にぶい光沢がある。77よりも一回り大きく、深みもある。口径15.0cm、器高6.0cm～6.4cm、底径7.0cmである。

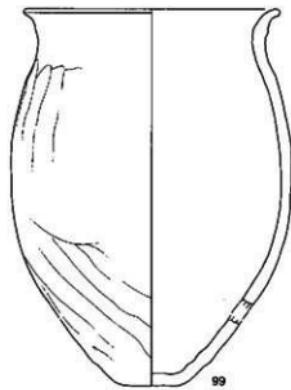
S1019 (第44・45図79～113、図版17・18)

地点を押さえて取り上げた点数だけでも、270点前後あり、1軒の住居からの出土資料としてはもっとも多い。ただし供膳形態の土器群は遺存状態が悪く、点数も少ない。それにたいして煮炊具は、遺存状態も比較的よく、量も多い。79～86が坏類で、いずれも遺存状態が悪いために計測値はすべて推定値になる。なお図示した以外にも、壺類は図示できない個体が少なからずある。

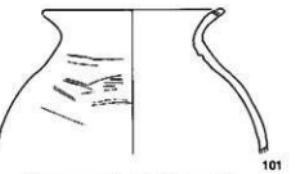
79・80は口縁部と体部の境の稜がやや不明瞭で、81～86は明瞭な稜をもつ。79はボル状の器形で、約6分の1が遺存する。口縁部はつまみ上げてやや薄く作っているが、体部～底部にかけては厚手の作りになっている。内面は比較的入念なミガキ調整を行っている。口径11cm、器高は4cmになる。80は約8分の1が遺存する。口径13cm、器高は3cm程度であろう。81・82は口縁部が屈曲して外反する。81は比較的薄手の作りで、器面は平滑に調整されている。内外面に赤色塗彩が施されている。砂粒と海綿骨針を多く含むのが特徴である。口径12cm、器高は6cm近くになるであろうか。82は8分の1程度遺存する。体部外面のヘラ削りした以外の部分は平滑で、ぶい光沢がある。内面に黒色処理を行っている。口径10cm、器高は4cm程度であろう。83は8分の1程度遺存する、薄手で精緻な作りである。とくに内面のミガキ調整は入念で、平滑に仕上がっている。体部外面を除く器面に漆仕上げを行っているが、口縁端部は擦れて消えている。胎土は砂粒をほとんど含まず、色調は白っぽい浅黄褐色(10YR8/4)である。口径13cm、器高は3cm程度であろう。84は6分の1ほどが遺存する。内面を入念に磨いて、平滑に仕上がっている。83同様、体部外面を除く器面に漆を塗って仕上げている。口径13cm、器高は4cmになる。85は5分の1ほどが遺存する。稜が器高の半分以下にある。口縁部まで含めて、全体に入念なミガキ調整を行って、さらに器面全面を漆で仕上げている。胎土は砂粒をあまり含まず、肌理が細かい。色調は白っぽくにぶい橙色(75YR)である。口径15cm、器高は4cmほどである。86は大型で深みのある坏で、ちょうど79を1.5倍したほどの大きさになる。約5分の1が遺存する。口縁部から内面にかけて丁寧なミガキ調整を行っている。内面に黒色処理を行い、口縁部にも一部及んでいる。口径16cm、器高は6cmになる。

87～91は高坏で、86・87は坏部のみが5～6分の1程度残る資料で、器形・大きさ等はほとんど同じである。口径は19.4cm・20.0cmである。内面に黒色処理を行い、外面には赤色塗彩を行っている。89・90は裾が「ハ」の字状に聞く脚部の資料で、89には天井部が残り、90は坏部とともに天井部を欠損したものである。89は裾の一部を欠く程度である。全面に赤色塗彩を行っているが、片側半分はほとんどその痕跡を消失している。裾径14.0cm、現存高11.4cmである。胎土に砂粒を非常に多く含む。90は部分的に欠損部分はあ

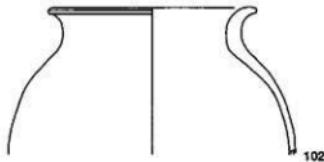
SI019出土土器 (2)



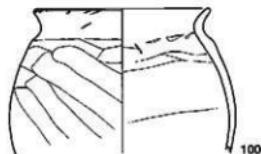
99



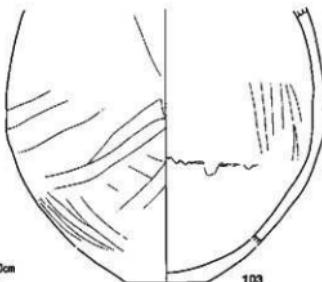
101



102



100



103

0 30cm



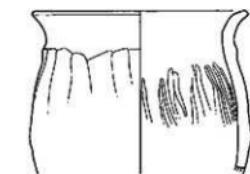
104



105



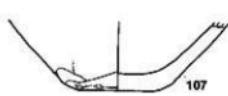
106



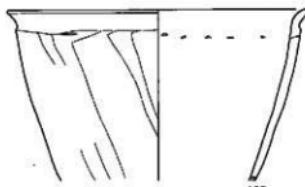
108



110



107



109



111



112

0 5cm



113

SI028出土土器



114

第45図 SI019 (2)・SI028出土土器

るもの、器形はわかる。脚の中心線が垂直線にたいしてかなり斜めになる。口径14.0cm、現存高は11.4cmになる。91は欠損部分があるが、全体のわかる資料である。脚部が短く、全高が低い。全体に厚手の作りではあってした質感がある。坏部の口縁部と体部の境には稜があるが、89・90に比べると、非常に短い。口径15.0cm、器高8.5cm、柄径10.0cmになる。器面調整後の処理痕跡は確認できない。

92~97は小型の壺あるいは鉢である。92は全体の4分の1ほどしか残らないために、図上で器形を復原したものである。全体に厚手の作りだが、調整方法は大型の壺類とかわらない。全体に被熱で赤変しており、器面の剥落も著しい。計測値はすべて推定値になるが、口径10cm、器高12cm、体部最大径は体部中位にあり、11cm程度と考えられる。93は上半部が残る。口縁部が大きく弯曲して立ち上がる。体部はヘラ削りで横方向に削っているが、それが直線的なために上面観が角張って多角形のようになっている。口径は11.1cmである。94は口縁部の立ち上がりが直立気味で、体部最大径が体部の中位にある。厚手の作りである。上半部の一部を欠損する。胎土に粒径1mm程度の赤色粒を非常に多く含む。口径13.9cm、器高17.8cm、体部最大径17.3cmになる。95はほとんど丸底の壺である。口縁部から体部下半にかけて部分的に欠損部分がある。頸部が括れて、口縁部が反り返るように外反する。全体に被熱痕跡が顕著で、器面が赤変（明赤褐色（2.5YR5/6））している。口径13.8cm、器高14.6cm、体部最大径14.4cmである。96は底部を欠く。口径と体部最大径がほとんど差がない寸胴に近く、平底で鉢状の器形になると思われる。砂粒を非常に多く含んでいる。口径13.3cm、器高は推定で14cm、体部最大径は13.0cmになる。97は長胴壺の体部上半部が部分的に残る資料である。口縁部は「く」の字状に開き、内側の屈曲部に1段稜がある。全体に被熱痕跡が顕著で、器面が剥落しており、器面も赤変（赤色（2.5YR5/8））している。口径は推定で14cmである。98は最大径が口径にあって、体部が逆「ハ」の字状に開く、鉢形の土器である。約2分の1が遺存する。被熱痕跡を残す。口径は推定で19cm、器高は14.5cmになる。

99~107は壺である。もっとも遺存状態のよいのが99である。全体の約2分の1が遺存する。99は口縁部が「く」の字状に緩やかに外反する長胴壺で、体部上半を縦方向のヘラ削り、それ以下を斜めにヘラ削りで調整している。胎土には白色を主体とする砂粒を非常に多く含み、被熱で器面が剥落した部分は脆弱になっている。口径21.0cm、器高30.8cm、体部最大径は体部中位よりやや上にあり、22.9cmである。100は口縁部が湾曲しながらやや強く外反する。上半部が約3分の1残る。口縁端部にはヘラ削りの際にできた思われる、工具のアタリが斜めに残る。胎土に雲母粒と海綿骨針を多く含む。口径は推定で14cmである。101~103は球胴状の壺の一部である。101は被熱で器面が荒れているが、縦方向のヘラ削りで調整した後、横方向にヘラ状工具の先端を押しつけながら引いた痕跡を残す。上半部の約3分の1が残る。横断面は「V」字状に近く、平滑になっている。上半部の約3分の1が残る。推定口径は15cmである。102は上半部の約5分の1程度が残る。口縁部は湾曲しながら強く反り返る。器面は被熱のためにかなり荒れている。口径は推定で16cmである。103は体部下半の部分的な資料である。内面には、工具の小口を押しあてて調整した痕跡を残している。胎土は99と非常に似ている。104~107は壺の底部のみの資料である。

108~110はすべて単孔式の瓶になるであろう。108は体部上半の部分的な資料だが、内面に縦方向のミガキ調整を行っているので、瓶とした。かなり厚手の作りである。口径は推定で17cmになる。胎土は99に似ている。109は体部が逆「ハ」の字状に開く瓶である。部分的な資料のために誤差はあると思うが、推定口径は24cm近くにもなり、やや大型の部類に属すようである。内外面とも平滑に仕上げられ、硬質な仕上がりになっている。110はほぼ完形の瓶で、口縁部が湾曲しながらやや強く外反する。内面は最終的に粗いミ

ガキ調整を行って仕上げている。口径19.3cm, 器高21.8cm, 孔径は6.8cmになる。

111～113は手捏土器で、大・中・小の大きさがある。調整痕として指頭圧痕を多く確認できるが、111には大型品のためかヘラ削り痕跡も残している。

S1028 (第45図114, 図版18)

坏1点を図示しおく。114は口縁部の一部を欠損する程度で、ほぼ完形である。底面は平底を作り出し、体部は緩やかに曲線を描きながら立ち上がっている。口縁部の内側に後をもつ。口径13.7cm, 器高4.8cm, 底径は6.0cmになる。胎土には砂粒を多く含み、器面がややざらついている。

C 奈良・平安時代

S1004 (第46図116～127, 図版18)

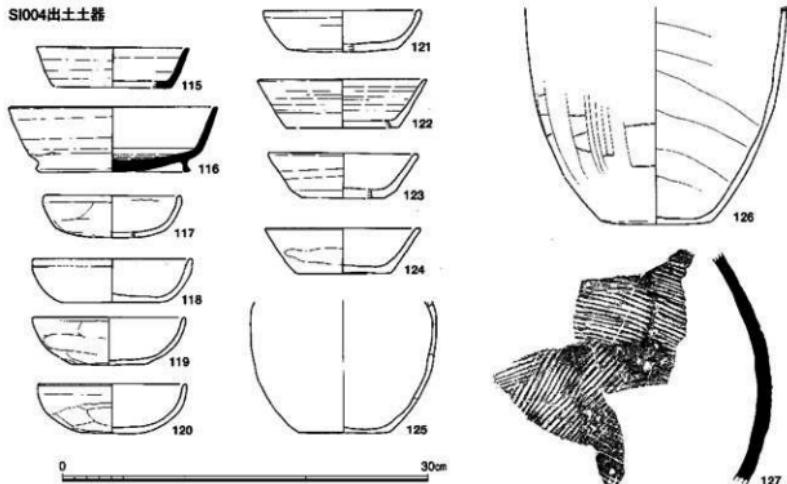
供膳具を中心にもやまとまつて出土している。また墨書き土器も4点出土している。115・116は須恵器坏で、無台のもの(115)と高台付のもの(116)の2者がある。115は体部が約4分の1と底部の一部が遺存する。体部は68°の角度で直線的に立ち上がる。底面の調整は遺存部分が少ないのでよくわからないが、回転ヘラ削りで調整している可能性が強い。胎土には海綿骨針を少しと、径0.5mm～1.0mmの灰黒色の斑文がある。計測値はいずれも推定値になるが、口径12cm, 器高3cm, 底径10cmになる。胎土等から、上総産の須恵器と考えられる。116は底面中央が高台部の張り出しことは同じ高さになる。ロクロ目は弱い。口径17cm, 器高6cmになる。胎土に雲母粒は含まず、長石粒を多く含み、長石粒は粒径が2mmを超えるものもある。色調は灰黄色(2.5Y6/2)で、やや黄みをおびる。胎土・色調等の特徴から筑波山以西の北関東産の須恵器かと思われる。

117～124は非ロクロの平底化した土師器坏で、いずれも内面には細かいミガキ調整を行っているが、赤色塗彩は確認できない。117は約5分の1が遺存する。口縁端部がやや内側に折れ込み、118は5分の1ほどが遺存する。胎土に白色砂粒を多く含むのが特徴である。119・120は体部が丸みをもって立ち上がる。119は約4分の1を欠く。口縁部内側に1か所所油煙が付着しているので、灯明器として使われたことをうかがわせる。120は4分の1が遺存する。胎土に大粒の赤色粒を含む。121は他に比べて口径にたいして器高がやや低く、径高指数は26になる。内面の器面は剥落が著しい。

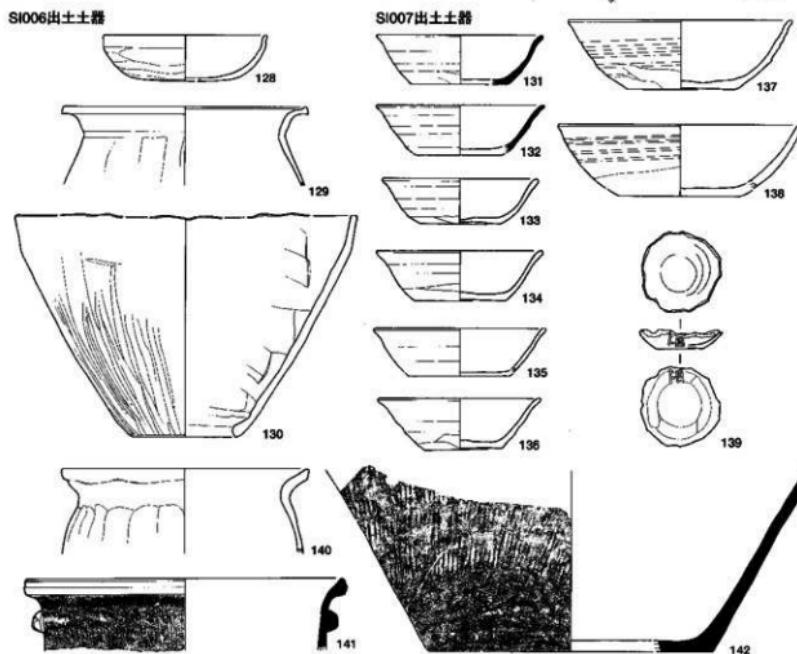
122～124はロクロ上師器である。122は体部が約4分の1と底部の一部が遺存する。体部が61°の角度で直線的に立ち上がり、内面にやや強いロクロ目を残す。胎土には雲母粒を多く含み、粒径のやや大きい赤色粒を少し含む。色調が黄色基調で、にぶい黄褐色(10YR5/3)～灰黄褐色(10YR4/2)である。123は底面のほとんどを欠失しており、体部は4分の1ほどが遺存する。同一個体と思われる破片資料では、底面にヘラ削り調整の痕跡を残す。124は完形で、静止糸切りで切り離してから、底面外周から体部下半にかけて回転ヘラ削りを行っている。体部側面から底面にかけて、白土で「+」をあらわした痕跡を残す。胎土には粒径の大きい砂粒をやや多く含み、赤色粒も少し含む。色調は明赤褐色(5YR5/6)である。

125・126は壺下半部の資料である。125は小型の壺で、かなり薄手の作りである。底径7.6cmである。126もやはり薄手の作りでもっとも薄いところで3mmの厚みしかない。また砂粒を非常に多く含み、上半部がないので詳しいことはわからないが、搬入品であろうか。なお接合しない破片資料に、口縁部の下端を残す資料が1点ある。126は外面に平行叩き目を残す須恵器壺の部分資料である。内面には當て具痕ではなく、指頭圧痕と思われる痕跡を残す。被熱痕跡が顕著で、部分的に橙色(2.5YR7/6)に変色している。

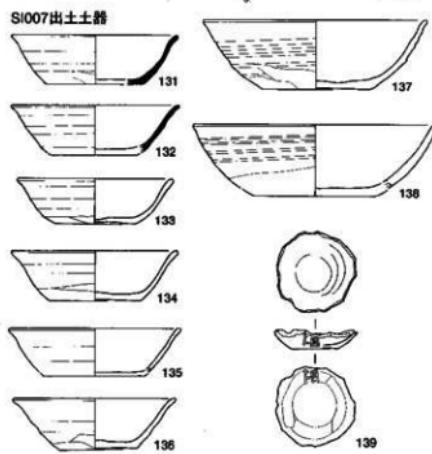
SI004出土土器



SI006出土土器



SI007出土土器



第46図 SI004・SI006・SI017出土土器

S1006 (第46図128~130, 図版19)

出土資料は少なく、3点を図示できたに過ぎない。128は非ロクロの平底化した壺である。約6分の5が遺存する。内面はミガキ調整を行っている。口径13.2cm器高3.9cmで、径高指数が30になる。色調は白っぽく、にぶい黄橙色(10YR6/4)である。129は壺の上半部が残る資料である。口縁端部を面取して「コ」の字状になり、先端部を内側へ断面三角形になるように折り返す。薄手の作りである。砂粒が多く含む、大粒の赤色粒も少し含む。推定口径は20cmである。130は壺の部分的な資料になる。体部は逆「ハ」の字状に直線的に開く。外面はミガキ調整で仕上げ、内面はヘラ削りで調整している。口縁部は本来のヨコナデ等を施した口縁部ではなく、割れ面を再調整して平滑にしたものである。破面の形状によるものなのか、先端部はやや波状になっている。そして底面も外面の末端をやはり擦って、平滑にしている。胎土には細かい白色砂粒が多く含み、雲母粒を少し含む。硬質でかなり焼き締まった印象をうける。

S1017 (第46図131~142, 図版19)

供膳具を中心に出土しており、煮炊具はカマド内から出土したものである。壺類ではなかには須恵器と土師器の姉妹が紛らわしいものもあり、ここでは硬質の焼き上がりで緻密な胎土のものを須恵器とし、131・132が該当する。133~138はロクロ土師器の壺で、非ロクロの壺は破片資料に1点出土しただけであった。完形資料が少ないので推定値が多いが、径高指数は30前後で、口底径比は2.0を中心とする。

須恵器は胎土・色調からいざれも、中原窯などを典型とする地元産の須恵器と考えられる。131は10分の1ほどしか遺存しない。底面外周と体部下半を手持ちヘラ削りで調整している。径高指数が推定で31、口底径比は1.7になる。132は体部が5分の1ほどが残る。体部下半を手持ちヘラ削りで調整している。緻密で、比較的硬質に焼き上がっている。口径は推定で14cmになる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)である。胎土に白色砂粒・黒色砂粒を多く含み、黒色粒を少し含む。

133は体部の一部を欠く程度で、完形に近い。体部下半にわずかな丸みをもつ。底部の切り離しは糸切りで、底面外周から体部下半にかけて、手持ちヘラ削りで調整している。口径12.6cm、器高3.8cmで、径高指数は30になり、口底径比は1.9になる。内面に2か所、タール状の油煙がこびりつく。胎土に砂粒を多く含み、海綿骨針・雲母粒を少し含む。134は約3分の1が遺存する。吸水率が高く、水分を含むと膨張して龟裂が走る。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)である。口径は推定値で、13cm、器高4.0cm、径高指数は30になる。135は体部のみが4分の1ほど残り、底部は消失する。胎土は130に似る。全体に被熱痕跡が著しく、赤変し、器面が剥落している部分がある。口径は推定で14cmになる。136は底部全体と、体部が4分の1ほど遺存する。底面全面と体部下半にかけて、手持ちのヘラ削りで調整している。胎土に砂粒を非常に多く含む。口径は推定で13cm、器高4.1cmで、径高指数31、口底径比2.1になる。内面に白土で「-」を表わす。137・138はロクロ成形の椀になり、同工品である。137は体部を約4分の1欠く。体部にやや丸みをもつ。体部外面に強いロクロ目を残す。底面全面と、体部下半は広い幅で、手持ちヘラ削りで調整している。口径18.2cm、器高5.8cm、底径は8.9cmである。138は体部のみが6分の1ほど遺存する。口径は推定で20cmになり、137より1割ほど大型になる。

139は上半部を打ち欠いたもので、底面から体部下半を手持ちのヘラ削りで調整しており、一見、壺のような調整痕跡を残すが、ほかに出土している壺に比べて底径がかなり小さく、本来の器形を推定するのはむずかしい。ただ体部に緩やかな丸みがありそうなので、壺というよりはむしろ小型の椀に近い形状であろうか。また内面と外面でも色調がかなり異なり、深みのある器形を想定させる要素もある。打ち欠きは

内面から行っており、破面がかなり細かく山形で、最終的には指で挟んで割ったような痕跡である。「罫」(岡の旧字体)の墨書が1文字ある。文字内容については後述する。

140は土師器の壺で、カマドの受け口に据えられていたもので、142の須恵器壺が入れ子状になって出土したものである。体部上半部しか残っていない。口縁部が「く」の字状に開き、端部を垂直気味に始末する。被熱で全体に脆弱で、ぐずぐずになっている。口径は20.3cmになる。141・142は須恵器で、141は口縁部付近しか残さないが、口縁部直下に痕跡程度の把手がつくので、体部が直線的に開く壺と考えられる。口径の3分の1しか残っていないが、把手は対に付く。口縁部直下から、彫りの浅い平行の叩き目がある。胎土に白色砂粒を多く含む。色調は黄灰色(2.5Y6/1)で、胎土・色調から地元産の製品である。142は須恵器の壺底部を残す資料で、底径は推定で23cmになり、かなり大型な部類に属す壺になる。体部は底部から直線的に開き、上部はバケツ状になるであろう。体部に平行叩き目で成形してから、底部近くを幅広く横方向にヘラ削り調整している。胎土には白色砂粒が多く、赤色粒・雲母粒も少し含む。色調は器面が暗灰色(N3/)で、芯が橙色(5YR6/6)になり、胎土・色調から地元産の製品と考えられる。接合資料の一部はSI019から出土したものである。

SI021 (第47図143~145, 図版19)

住居が比較的深く、遺存状態もよかったですにもかかわらず、図示できた資料は供膳具を中心に3点と少ない。煮炊具は破片資料でかなりある。なお図示した以外では須恵器の蓋の小片がある。143は須恵器壺の小片で、底部から口縁部にかけて約5分の1が遺存する。底部近くの外周を回転ヘラ削りで調整している。胎土には長石粒・雲母粒を少し含み、細かい黒色斑文を少し視認できる。計測値は推定で、口径14cm、器高4cm、底径は9cmで、口径底径比は1.5になる。144は平底気味になったクロロ土師器壺である。全体の約2分の1が遺存する。底面から体部下半にかけて、手持ちのヘラ削りで調整している。内外面に赤色塗彩を施す。胎土に砂粒を多く含み、ざらついている。計測値はすべて推定になるが、口径14cm、器高4cmになる。145は壺の把手と思われる部分資料である。把手は手捏状に成形され、ごつごつしており、重量感がある。体部へは貼り付けで装着している。

SI024 (第47図146~150, 図版19)

供膳具の資料が少なく、煮炊具を中心に出土している。ほかに墨書き器が1点ある。146はクロロ土師器壺の小片で、底部を欠く。雲母粒を少し含み、白色砂粒を多く含む。推定口径は13cmである。147は小型の土師器壺である。カマドに据えられていたもので、全面に被熱痕跡が顕著で、器面がかなり荒れている。体部下半を欠失する。口縁部は「く」の字状に外反し、体部はかなり丸みをもつ。口径14.2cmで、器高は推定で14cmほどになろうか。148は広口壺のような器形になる須恵器壺の、口縁部から頸部までが残る資料である。約4分の1が遺存する。折り返し口縁で、外側へは1cm強の幅で帯状に折り返し、内側には断面が三角形になるように小さくつまんで折り返している。遺存している範囲に叩き目の痕跡は残っていない。口径は推定で24cmになる。胎土には白色砂粒と雲母粒を多く含み、器面がややざらついており、諸特徴から地元産の壺である。149は長胴壺の体部上半の部分資料である。口縁端部の形状が特徴的で、口縁端部の立ち上がりが角張っており、突端ではそれが覗く折り返っている。薄手の作りで、下端では厚みが2mmほどしかない。口径は推定で18cmになる。150は須恵器壺の、口縁部直下に貼り付けられた痕跡程度の把手部分である。上下からつまみ上げて、寄せ棟のような形状になっている。

D 墨書き土器（第47図151～156、図版19・20）

奈良・平安時代の堅穴住居のうち、SI004・SI017・SI024の3軒の堅穴住居から墨書き土器が出土した。いずれも墨痕は比較的鮮明で、肉眼でもかなり判読は可能である。なお判読にあたっては、赤外線に反応するデジタルカメラで撮影し、それに画像処理を加えたものを参考とした。

151～154はSI004から出土したものである。151は小型の土師器壺の体部に正位で多文字の墨書きがある。Aは体部上半の資料で、口縁部の括れのすぐ下から書きはじめ、2行の文字の書き出しを部分を残している。右の1文字は字画が多くやや複雑に見えるが「家」で、下半は欠損している。そしてその左の破面近くにも、1文字の上部の墨痕が2点ある。左側の墨痕は縱または点の書き出しのように見え、右側は横棒か、その右端からさらに下または左へ書き続けたような墨痕である。Bは体部の破片資料だが、破片の縱方向にほとんど曲率がなく、体部のどの部分に相当するのか、これだけではわからない。やはり2行の文字行があるが、ほとんどの文字が破面に接しているために完結した字形が少なく、判読はかなりむずかしい。ここではとりあえず右行を3文字分、左行を4文字分として、便宜的にそれぞれの文字行で上から数えた文字数で1文字を表しながら説明していくことにする。

まず単独に読み切れるのは、右行では3文字目の「進」、左行では1文字目の「千」だけになる。右行2文字目は字形は完結しているが、1文字目と接する部分もあり、判読がむずかしい。字画の下半部の一部は「刀」の1画目のような鉤手の筆跡が見える。同様の筆跡は左行の上から3文字目にある。それをみると「白」か、またはそれを部分とする1文字がある。便宜的に「白」で代表して説明すると、「白」の3画目を長く下に伸ばし、最後を左へ跳ねている。そして5画目を3画目のかなり高い位置におさめている。これらの特徴は右行の2文字目の下半部と共通する。したがって右行2文字目は、「日」を下にもつ字形が考えられ、「曾」・「曹」などが候補としてあげられるであろう¹⁾。右行1文字目は大半が欠けているためにはっきりしないが、「家」・「き」などを偏とするものや、「衆」の作りの一部などに該当しそうな残画である。なお1文字目と2文字目のあいだに、右上から左下へ斜めの細い墨痕がある。1文字目の残画になるのか、あるいはさらに右側に文字列があって、その一部が流れ込んでいるのか、これだけでははっきりしない。

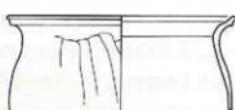
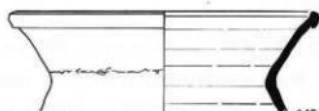
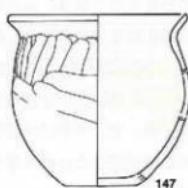
左行の2文字目も、そのほとんどを欠いているためによくわからないが、八千代市萱田遺跡群などでよくみられる「生」を丸めて書く字形の残画に似ている。3文字目は残っている範囲では、「白」になる。偏の部分については、左行を1行の流れとしてみた場合、1字目の「千」の中心線の真下よりやや右に「白」の中心がくる。「白」を作りとする字形はいくつもあり、偏自体が細長いものだから、「白」1文字の可能性もあるが、偏部分の存在も考慮に入れておいたほうがよいだろう。4文字目は残画から、該当する字形は思い浮かばない。

以上、151ではそれぞれの破片資料で2行分の文字列を残すが、Aでは1文字分しかないと明確だが、Bでは2行の文字列の中心線の延長が、平行ではなく扇状になる。末端では下へ1文字あるいは2文字で左右の行がほとんど接してしまうほどである。墨書きされた箇所が底部ですばまり、それに左右されているのだとすると、Bは壺のかなり下半部の資料になる可能性がある。またA・Bそれぞれの行の連続性という点から、上下での位置関係をみると、Bの2行を延長した位置でAの2文字分の位置をみると、行の間隔がやや狭くなるくらいがあり、A・Bそれぞれの行は直接上下につながる行ではない可能性もある。そ

SI021出土土器



SI021出土土器

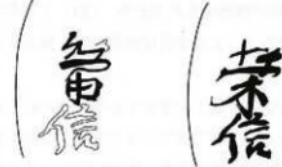


0 30cm

墨書土器



(139)



0 20cm

第47図 SI021・SI024出土土器、墨書土器

すると本来の行数は3行以上ということになり、さらにBの位置が壺の下部になるとすると、器面には相当量の字数が書かれていたことになる。

152は非クロコの土師器壺の体部外面に横位で墨書が書かれている。「巾」を偏とする字形で、「市」であれば1文字、「市」とすればさらに上にくる1文字の残画があることになる。153はクロコ土師器壺の体部外面に書かれている。筆先の流れをみると、横位に書かれたとみたほうがよいように思う。字体は不明である。154も非クロコの土師器壺の底部外面に墨痕がある。半円の弧文が横に連なり、あるいは底面の外周に沿って書かれていたものかもしれない。

139・155はSI017から出土したもので、墨痕は比較的鮮明である。155は椀の体部に、比較的大きい字体で横位に書かれている。墨痕は重ね書きされており、後に書かれたのは「榮信」と鮮明に読める。「榮」は「榮」の旧字体になる。おそらく僧侶の名前であろう。そして最初に書かれた文字は「榮」とまったく墨痕が重なり、淡いせいもある、赤外線写真でも両者の重なりを見分けるのはなかなかむずかしい。下部に「田」のような墨痕があり、その上にかなりくせのあるワ冠があるので、この部分で「富」と判読しておきたい。その上は「久」や「加」などをくずした字形にみえる。いずれにしても「富」に関連する、吉祥句に類する1字がふさわしいであろう。

139は打ち欠き土器の体部外面の下端に、横位に書かれている。欠画があるが、岡の旧字体の「豈」である。なお打ち欠く前の器形はある程度深みのある器形を想像させるが、そういう器形であれば、通常、体部側面の中央付近を中心にして墨書きされるのが普通である。139では底部の立ち上がりから打ち欠いて残った、かなり狭い部分に書き込まれているのが特徴である。かりに土器を打ち欠く前に墨書きをしていたとすると、かなり際どく土器を打ち欠いていることになる。むしろこの場合は、土器を打ち欠いてから墨書きを行ったと考えるのが妥当であろう。

156はSI024から1点だけ出土したもので、墨痕はやや淡い。クロコ土師器壺の口縁部に正位で書かれたものである。残っているのは縦に長い「カ」で、おそらく欠けたその右側に「口」があって、本来、構成される1文字は「加」の1文字になる可能性が高い。

第2節 土製品

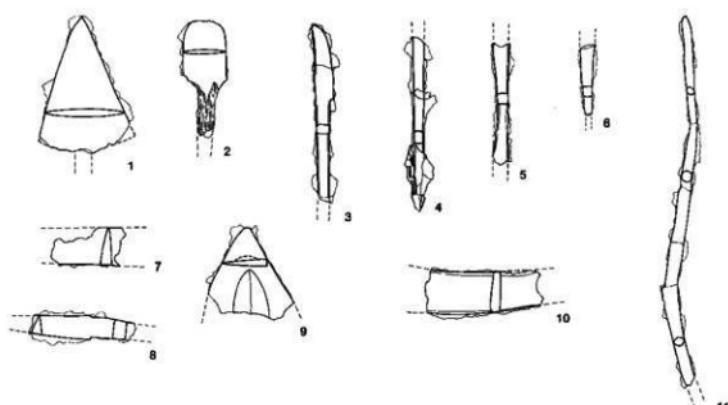
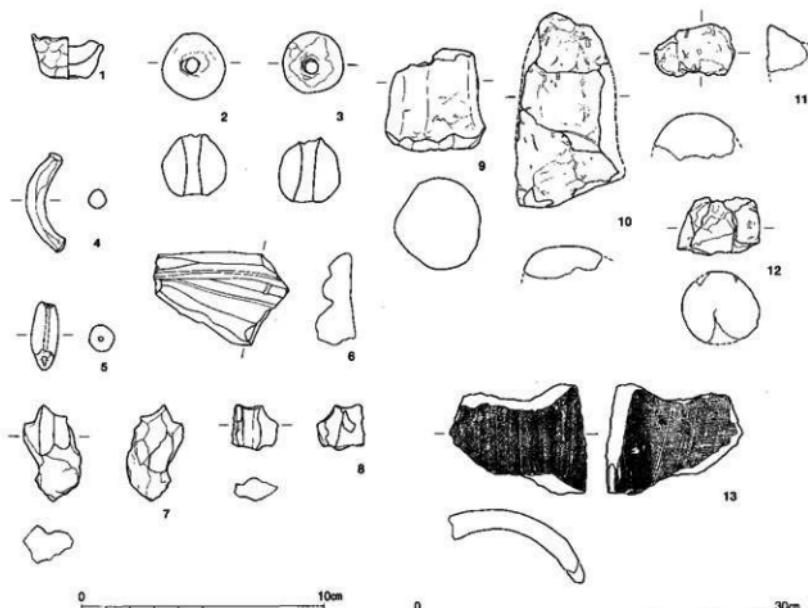
土製品には支脚・土玉・管状土錘・瓦などがあるが、古墳時代の竪穴住居からの出土資料が多い。以下では土製品の種別に説明を加えていくことにする。

A ミニチュア土器（第48図1、図版20）

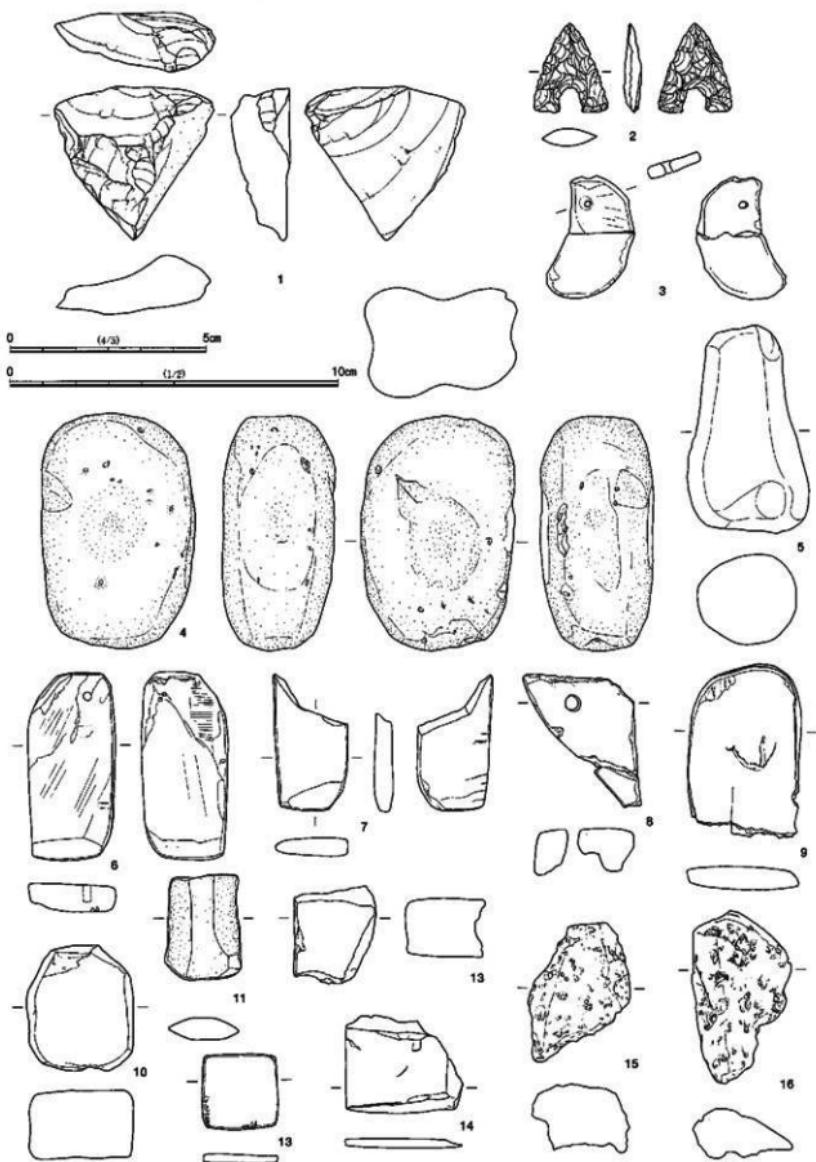
1点図示した。1は壺または椀を模したもので、外面には指頭圧痕が残り、体部下半には細かいヘラ削りで面取りを行っている。口縁端部は平坦ではなく、凹凸がある。内外面に赤色塗彩を施している。SI011から出土したものである。ほかにSI007からも、小片が1個体2点が出土している。壺もしくは皿状で、赤色塗彩は確認できない。

B 土玉（第48図2・3、図版20）

完形品が2点出土した。大きさ・重量とも似ており、いずれも手捏状の凹凸が外面に残る。2はSI003出土のもので、孔の片側だけに成型時の生地のめくれ返りがある。表面は比較的平滑で、硬質に焼き上がっている。重量は14.39gである。3はSI012から出土したもので、表面に凹凸があるものの、やや光沢を放つほど平滑に仕上がっている。重量は13.68gである。



第48図 土製品・金属製品



第49図 石製品

C 棒状土製品（第48図4, 図版20）

1点だけ出土した。4は長さ4.5cmの粘土組を弓状に湾曲したもので、完形である。SI011のカマドの脇から出土した。重量は3.14gである。

D 管状土錐（第48図5, 図版20）

1点だけ出土した。5は約2分の1が遺存する。孔径は細く1.5mmで、軟質の仕上がりである。表面は部分的にやや焼けている。重量は2.51gである。SI019からの出土品である。

E 土器砥（第48図6, 図版20）

6は土器片を再利用したもので、刃先を研いだような痕跡が断面「V」字の溝が、鋭角に交差している。図の上面の破面にも擦った痕跡を残す。SI019から出土したものである。もっとも厚みのあるところで、1.7cmの厚みがあるので、素材としたのは甕・壺等の大型品と思われる。ただし裏面（内面）がかなり平滑に調整されているので、瓶の可能性が高い。胎土には砂粒と雲母粒を非常に多く含み、そのためか研いだと思われる面でもややざらざら感を残しており、砥石だとてもかなり粗く研ぐ段階のものになるであろう。

F 瓦塔（第48図7・8, 図版20）

第1トレンチから2点出土した。ただきわめて小片のために、瓦塔と断定するには躊躇する部分もある。ただ表面の半截竹管で引いた痕跡や裏面の細工痕跡など、細部の特徴が極めて瓦塔に近いので、ここでは瓦塔とみなして取り上げておく。瓦塔とすれば、いずれも屋蓋部の資料になる。

7は表面に、丸瓦列と平瓦列と思われる成形痕跡を残すが、いずれも列の半分までしか残っていない。瓦1枚ごとの押し引き痕跡は確認できない。裏面はほとんどが破面で本来の面がわずかしか残っていないが、残っている範囲では表面の瓦列に平行して、断面半円の溝状の窪みが1条残る。瓦塔とすれば垂木の表現になるかもしれない。硬質で、須恵質に焼き上がっている。色調もにぶい黄橙色(10YR6/3)になる。8はさらに小片で1.5cm×1.5cm程度しか残っていないが、表面に瓦列と思われる竹管による成形痕跡がある。また瓦列と平行して側面が残っているので、堂等の切り妻造の屋根形態ということになる。裏面の痕跡はやはり7と似た痕跡を残す。厚みが非常に薄く、もっとも厚いところでも8.5mmしかない。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)だが、かなり硬質な仕上がりである。

G 支脚（第48図9～12, 図版20）

カマドをもつ住居がそれなりの数であるにもかかわらず、支脚の出土量は非常に少ない。支脚はいずれも砂を多く含み、ほとんど水洗すらできない状態のものが多く、保管中に崩壊したものもあり、図示できた資料は少ない。なおSI017からは石製の支脚と考えられる製品が1点(5)出土している。

4点を図示した。9・10はSI008の出土資料で、SI008から最低2個体の支脚が出土していることになる。また11はSI005の出土資料である。12は11E42から出土したもので、遺構の帰属が判然としない資料になる。いずれも下端部を残す資料で、象の足のような、底面が踏ん張るような形状である。9はカマドの中央に立った状態で出土したもので、上半部を欠失している。表面にカマド材がこびりつき、そこにスサの痕跡を多く残す。重量315gで、ほかに13点、106gの未接合資料がある。10はほぼ全高がわかるものだが、後半分をほとんど欠失している。最大径は9cm近くになり、かなり大型の部類に属す。中軸にたいして底面が斜めになる。上端部は丸みをおびている。表面にはスサ状混入物の痕跡を残す。胎土に砂が多いものの、他の支脚に比べると少ないほうである。重量296gで、未接合資料は6点、29gある。ほかに1点同一個体と思われる、上端部の一部を残す資料が1点ある。11は上端部が残る資料で、上端部を弧状に窪ませてい

る。重量75gで、接合できなかった資料が多く、25点で、108gある。12は上部・下部を欠損する。胎土に細かい砂粒を多く含むが、表面は比較的整っている。重量126gで、未接合資料は7点、40gある。

これら以外に図示できなかった資料を以下に列記しておく。SI09からは2個体分で、6点91gあり、1個体は比較的緻密で下端部の一部を残す資料になる、SI020の出土資料は、摩滅しており、詳細は不明である。2点で25gある。

A 瓦 (第48図13、図版20)

表探資料で丸瓦の一部が1点だけ出土している。凹面には布目压痕が残り、側縁近くを幅広くヘラで削っている。布目にはとくに捺れた形跡は確認できない。凸面はヘラ削り調整で、部分的にカマド構築材と思われる砂粒がこびりついているので、おそらくカマド構築材として持ち込まれたものであろう。なお断面には粘土紐による成形痕跡はないので、粘土板作りで成形したものと思われる。全体には酸化炎窓囲気の色調だが、凸面の一部には還元炎窓囲気に焼き上がっている部分もある。胎土には白色砂粒を多く含む。

第3節 金属製品 (第48図1~11、図版21)

図示した金属製品はいずれも鉄を素材とする。1~6は鉄錆で、1~3が刃部を残す資料である。1は広身の長三角形錆で、棒状部は付け根部分で欠損している。その断面はかなり扁平で薄い作りである。2は広身の剣身形錆である。左右の返り部分の先端を欠損している。棒状部が短い短頭錆で、棒状部に木質が銹着しており、矢柄に直接挟んだ痕跡を残している。3は細身の片刃箭で、刃部と棒状部の境に直角に近い闊をもつ。4~6はいわゆる長頭錆の、棒状部や茎部分を残す資料である。4は棒状部から茎尻まで残り、茎には木質が部分的に残る。5は棒状部のみを残す資料である。6は茎部の端部を残す資料で、木質が銹化して残る。第5トレンチより出土したものである。7・8は刀子で、8では柄部が残る。9は鎌の先端部と考えられる資料で、さらに鉄錆状の鉄製品が銹着している。10は断面が長方形の、板状の鉄製品である。11は全長が152mmの、断面が丸い棒状の鉄製品である。各出土遺構は、3がSI002、1・4がSI004、5・10・11がSI017、2がSI020、7・8・9がSI021、6が第5トレンチの出土になる。なお図示した以外に、第10トレンチから錢文が不鮮明な寛永通宝(「新寛永」)が1点と、SI013からキセルの吸い口部分が出土した。

第4節 石製品

石製品としては旧石器・石錆など縄文時代以前の資料がわずかにあり、それ以降の資料としては石製模造品・砥石などがある。砥石を除いては、種別に単数でしか出土していない。なお軽石が4点出土しているが、とくに加工痕は認められない。

A 旧石器 (第49図1、第1表、図版21)

1は確認調査時に10E77で出土し、周囲を拡張して精査したが、出土したのはこの1点だけであった、したがって今回報告するなかでは唯一の旧石器ということになる。記録にはVI~VII層相当の層位から出土したとある。背面は主剥離面にたいして右側面と下方向からの剥離面と原礫面で構成される。左側縁には連続的な剥離痕があるので、調整されたものと思われる。

B 石錆 (第49図2、第1表、図版21)

2は2等辺三角形の無茎石錆で、基部を逆「U」字状に深く抉っている。チャートを素材とする。

C 石製模造品（第49図3, 第1表, 図版21）

3は半円状の勾玉を模したものである。二つに折損している。表裏・側面には細かい擦痕が残る。全体に手擦れであろうか、にぶい光沢をもち、とくに側面からその周囲の面に顕著である。

D 凹石（第49図4, 第1表, 図版21）

4はやや多孔質の安山岩を素材とする。表裏・側面に4か所、長円形の浅い窪みがある。それぞれの面は比較的平滑になっているが、擦痕はとくに視認できない。手に持つと、ずっしりとした重量感がある。

E 支脚（第49図5, 第1表, 図版21）

5は乳棒状の石製品である。砂岩を素材とするが、砂粒の圧着が弱いために、砂粒がばらばら落ちてしまうような状態である。とくに被熱痕跡は確認できないが、素材と形状からとりあえず支脚としておく。

F 砥石（第49図6～14, 第1表, 図版21）

形態としては、角柱状のものと、扁平なものに大別できる。角柱状のものは砂岩を素材とし、扁平なものは粘板岩を素材とする傾向がある。穿孔したものが2点あり、6は表裏の同一か所で、片側に深い穿孔が1か所、裏面に2か所穿孔痕跡がある。しかしいずれも貫通した穿孔ではない。なお6は形状は磨製石斧に似るが、刃部に相当する部分は面取りされている。8は通常よくみられる穿孔である。

G 軽石（第49図15・16, 第1表, 図版21）

4点出土し、そのうち遺存状態のよいものを2点図示した。

注1 嵐谷修・金井之恭 1990『行書草書大字典』柏書房

第1表 石製品観察表

番号	出土地点	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	10E77-1	リタッヂドフレイク	3.91	4.08	1.50	17.79	安山岩	
2	SI004-0037	石礫	2.30	1.87	4.3	1.39	チャート	無基
3	SI001-9	石製模造品	3.10	1.69	0.31	4.10	滑石	勾玉
4	SI004-17	凹石	9.53	6.17	4.50	484.92	安山岩	
5	SI017-30	支脚	8.12	4.84	4.83	220.02	砂岩	
6	SI011-45	砥石	7.55	3.37	1.04	63.82	粘板岩	未貫通の穿孔3か所
7	SI002-049	砥石	5.55	2.92	0.64	15.64	砂岩	折損、擺方内出土
8	SI017-001	砥石	5.21	4.27	2.35	49.62	凝灰岩	折損、穿孔1か所
9	SI019-001	砥石	7.11	4.55	1.14	54.84	粘板岩	折損
10	SI004-75	砥石	5.75	4.28	2.91	101.03	砂岩	
11	SI007-10	砥石	4.29	3.16	1.00	19.24	砂岩	折損
12	SI018-3	砥石	3.10	3.07	0.62	8.82	砂岩	側面4面面取り
13	SI004-18	砥石	3.70	3.31	2.77	47.95	砂岩	折損
14	SS001-1	砥石	3.95	4.79	0.36	11.45	粘板岩	折損
15	第4トレンチ-2	軽石	5.86	4.03	2.99	8.26		折損
16	SI006-11	軽石	7.08	4.10	2.25	8.06		
	SI019-1	軽石	4.39	3.92	2.74	7.76		
	SI019-34	軽石	3.98	2.42	1.06	0.61		

第4章 まとめ

第1節 弥生時代

弥生時代の遺構としては、竪穴住居と方形周溝墓があり、そのなかで確実に遺構と遺物が伴うのがSS001である。出土した壺（1）は、中期後半の宮ノ台期に属するものである。この種の文様構成を採用した類例は少なく、比較資料に乏しいが、東金市道庭遺跡SI-1からほぼ同じ文様構成の土器が、羽状縄文の破片資料とともに出土している²。したがって壺（1）は斜縄文から羽状縄文に移行した段階というのがひとつ目の目安になる³。また同じく道庭遺跡では、宮ノ台期の最終末に北関東系土器がかなり多くみられるようになるという傾向が指摘されている⁴。今回の出土資料のなかには、北関東系の土器は唯一（8）の資料がある程度で、非常に少ない。そうした動向に、今回の出土資料を当てはめれば、北関東系土器が多く伴出する直前段階に位置づけられるであろう。以上から壺（1）は、宮ノ台式でもやや新しい段階ではあるが、最終末まではいかない資料といえよう。なおこの種の備文を主文様とする出土例は、文様構成がやや異なるが佐倉市大崎台遺跡にある⁵。出土量はやはり少ないが、波状文と弧文から文様が構成されているものである。

第2節 古墳時代

炉をもつ住居の段階から集落がはじまる。SI001が唯一の住居で、壺類を主体に出土している。出土した壺のなかには、(16・17) のように器高と最大径がほぼ同じものがあるので、中期でもやや新しい段階の資料と考えておきたい。またSI014は厨房施設が判然としないが、壺の構成がSI001と共通するので、SI014も同じ段階の住居と考えておきたい。なおSI014から出土した（77・78）の平底の壺もほぼ同様に考えておきたい。

そしてカマドを敷設する段階になって住居の数が徐々に増加する。出土した壺類には赤色塗彩を施したもののが多数をしめ、後期のなかでも古い段階の様相をみせている。そのなかで器種構成をみると、短頸壺とした一群の存在が注意を引く。ほとんどのものが赤色塗彩を施しており、SI002・SI003・SI005・SI008・SI010・SI011・SI014から出土している。これらの住居では、いずれも遺構どうしが重複する例はない。ただしSI012からは短頸壺こそ出土していないが、SI011に切られ、住居の形態もカマドの対向壁に張り出しをもつので、SI012もこの一群に加えることができる。これらから出土した壺類を一概に系統立てるのはむずかしいが、SI008では壺類が半球状の丸底の壺だけで構成され、確定な須恵器模倣壺は出土していない。SI012・SI014・SI018・SI028の土器様相もほぼ同様と考えられ、これらのなかではもっとも古く位置づけられるであろう。とりあえず5世紀後半で、次期との継続性を考慮すれば、5世紀後半でも新しい段階の土器群と考えておきたい。

次の段階に位置づけられるのが、壺の口縁部が「S」字状に緩やかに屈曲する壺が出土したもので、口縁部が直立気味のものと外反するものとがある。SI002・SI003・SI011などから出土している。SI005出土の短頸壺（32）は、SI002出土の短頸壺とはほぼ同じ形態であることから、SI005もこの段階に相当すると考えられる。須恵器模倣壺出現段階の土器群で、5世紀末～6世紀初頭に位置づけられるであろう。そして

SI010の出土資料にも短頸壺が出土しているが、壺類はやや平底化しているので、これらよりは新しい段階になるであろう。

SI019出土の土器群が、次の段階に相当する。壺類には口縁部に明瞭な稜をもち、赤色塗彩のものとともに黒色処理を施すものが表れ、平底化したものもみられるようになる。また高壺は(91)のように前代からの系譜を引く短脚のもの(91)に加えて、長脚で中空のもの(89・90)がみられるようになる。これらの諸特徴より、6世紀後半の年代が考えられる。

そして壺が小型化し始める段階の資料がSI009の出土資料になる。出土した壺は、それまでの壺の口径が13cm~14cmなのにたいして、12cmほどしかない。ただし伴出した高壺(45)は、口径が大きく、口縁部が強く外反し、やや古手の様相を示している。とりあえずここでは7世紀前葉の年代を考えておきたい。

このように八幡神社南(1)遺跡では、古墳時代後期でもやや古い段階から集落が展開し始め、その後には集落のピークを迎えてしまい、7世紀代になると集落が非常に希薄になるのが特徴である。6世紀後半以降に集落のピークを迎える例が多いなかで、それらとは集落の盛期がやや早くなるのが特徴である。

第2節 奈良・平安時代

奈良・平安時代の様相は、出土遺物も比較的少なくかなり断片的で、しかも断続的な様相である。もっとも古く位置づけられるのがSI004の出土資料である。須恵器の高台付壺(116)は口径が大振りで、底面中央が高台部とほぼ同じにある。非クロロの土師器(117~120)は平底気味で、体部に丸みがある。クロロ土師器は(123)を除けば、口底径比は1.5~1.6になる。須恵器の評価の仕方によっては、年代がやや前後するかもしれないが、ここではとりあえず8世紀中葉という年代を提示しておきたい。SI006から出土した非クロロ土師器壺(128)も、このなかにおさまるであろう。またSI021出土の須恵器壺(143)は口底径比が1.5になり、8世紀中葉という年代がひとつ目安になるが、共伴したクロロ土師器壺(144)は、一般に8世紀第2四半期といっている初源的なものよりやや深めだと思うので、ここでは8世紀第3四半期としておきたい。

9世紀代では、SI024出土の土師器壺(146)が、体部の傾きから9世紀第2四半期程度と考えられる。またSI017の出土資料では、壺類の口底径比は平均で1.9になる。共伴する楕円の大振りの壺は、器高にたいして口径がやや大きく、内面の磨き調整や黒色処理も省略されているので、これらの特徴を踏まえて9世紀第3四半期と考えておきたい。したがってこの時期が、今回報告した集落の終焉時期ということになる。なお9世紀代の資料も決して多くはないが、通常9世紀代の器種構成のひとつの変化として、壺類の出現があるが、今回の出土資料のなかにはその破片すら確認できなかった。他の器物でその代用したのか定かではないが、器種構成の欠落は地域的な特性として注意しておきたい。

注 1 城田義友 1998「東金市道庭遺跡－農業大学校バイテク棟埋蔵文化財調査報告書」(財)千葉県文化財センター

2 小倉淳一 1996「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」「史館」第27号 史館同人

3 小高春雄ほか 1983「道庭遺跡」第1分冊 道庭遺跡調査会

4 柿沼修平 1996「大崎台遺跡の研究Ⅳ」「方形周溝墓・環濠・溝出土の土器の類型」「奈和」第34号 奈和同人会

写 真 図 版

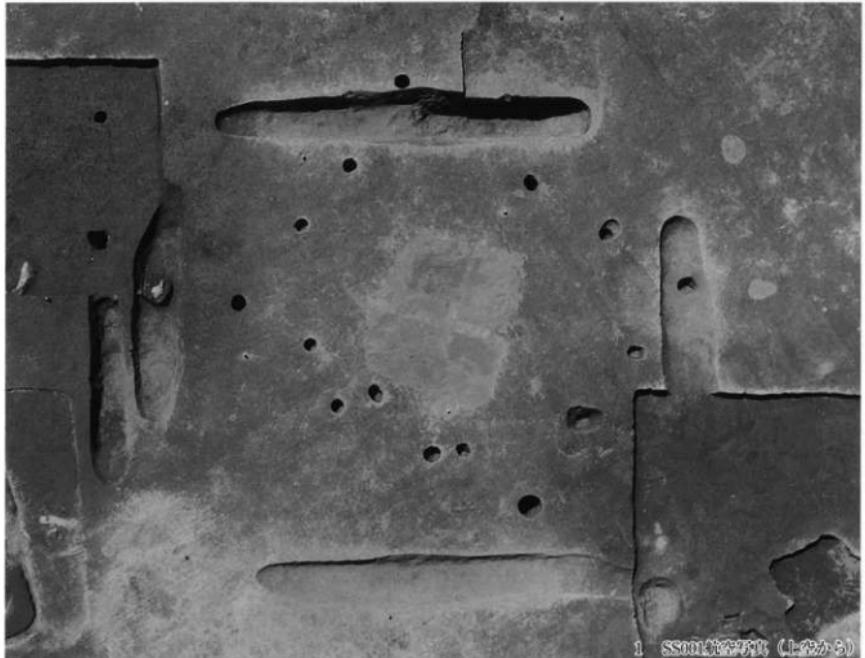


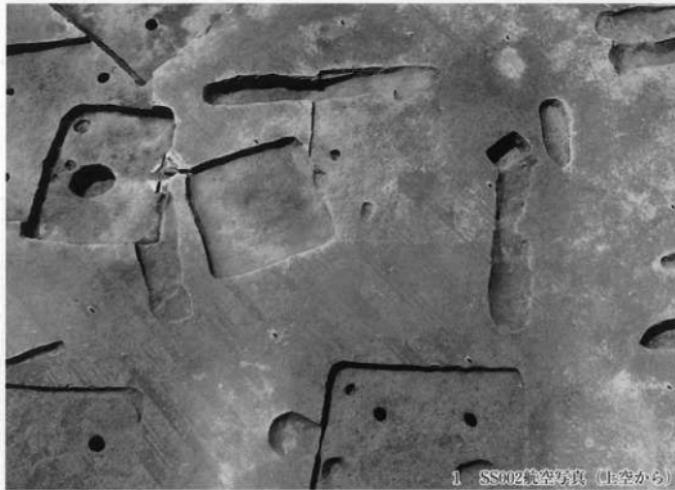


1. 豊後國の農地 (山口村)



2. 豊後國 (山口村)





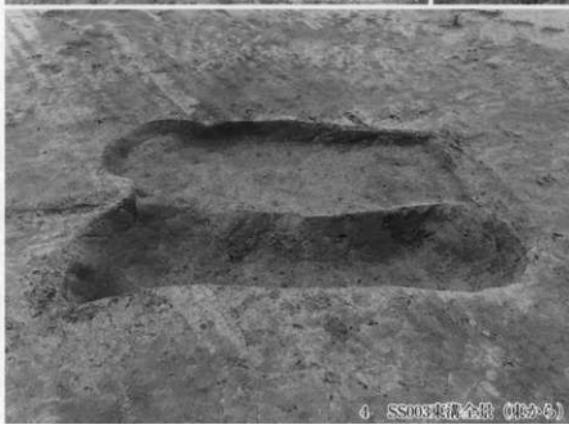
1 SS002航空写真(上空から)



2 SS002西溝全景(北西から)



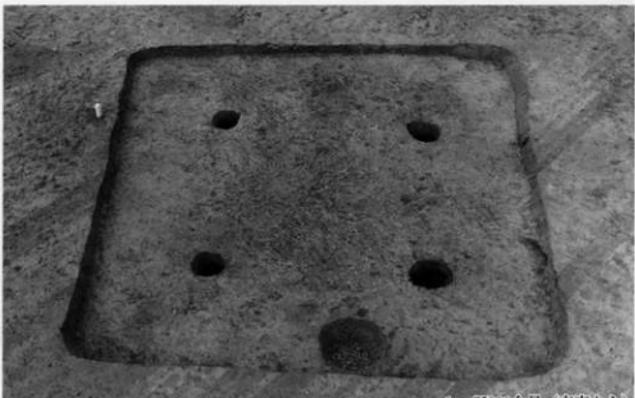
3 SS002北溝全景(西から)



4 SS003東溝全景(東から)



5 SS003北溝全景(東から)



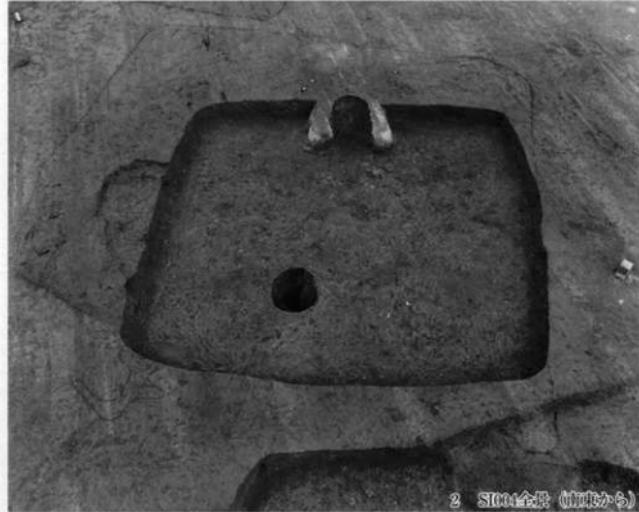
1 S1001全景（南東から）

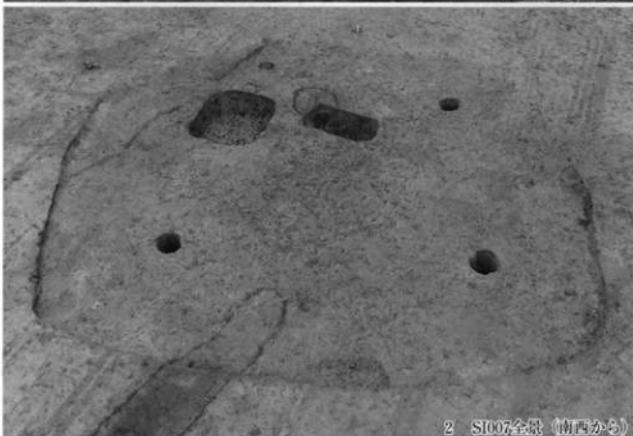


2 S1001遺物出土状況（北東から）



3 S1002全景（南西から）







1 S109全景(南東から)



2 S1010全景(北西から)



3 S1010出土物出土状況(北西から)



1 SI011全景(南西から)



2 SI012全景(南東から)



3 SI013全景(北西から)



1 SI014全景(南東から)



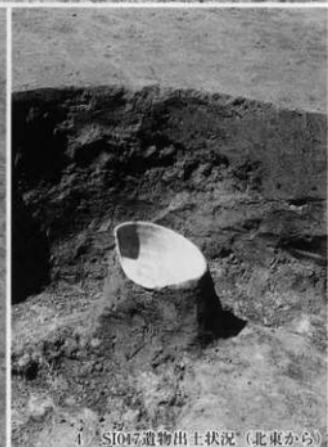
2 SI015全景(北東から)



3 SI016全景(北西から)



4 SI017全景(南から)



5 SI047遺物出土状況(北東から)



1 SI018全景 (南東から)



2 SI018遺物出土状況 (北から)



3 SI019全景 (東側から)



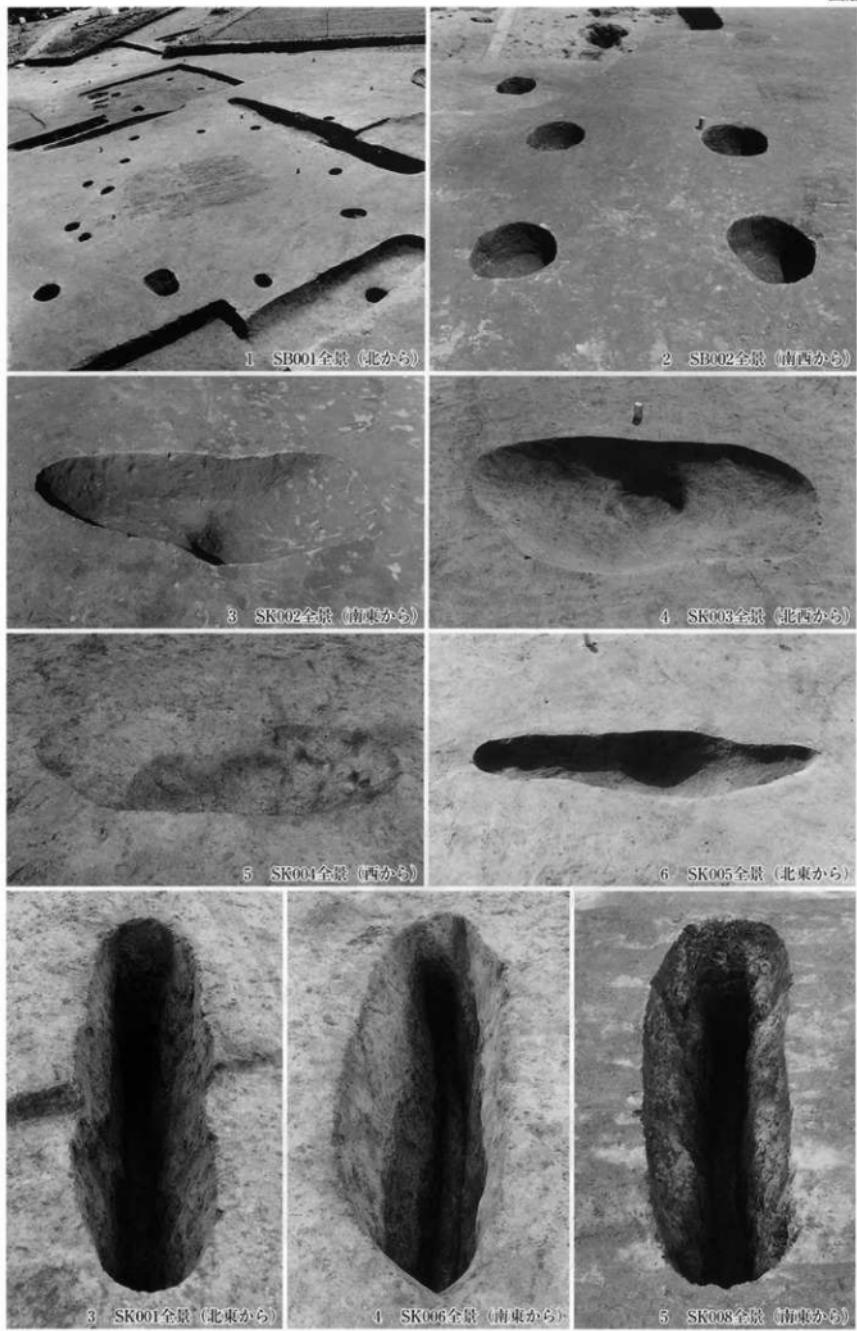
4 SI019カマド全景 (東側から)

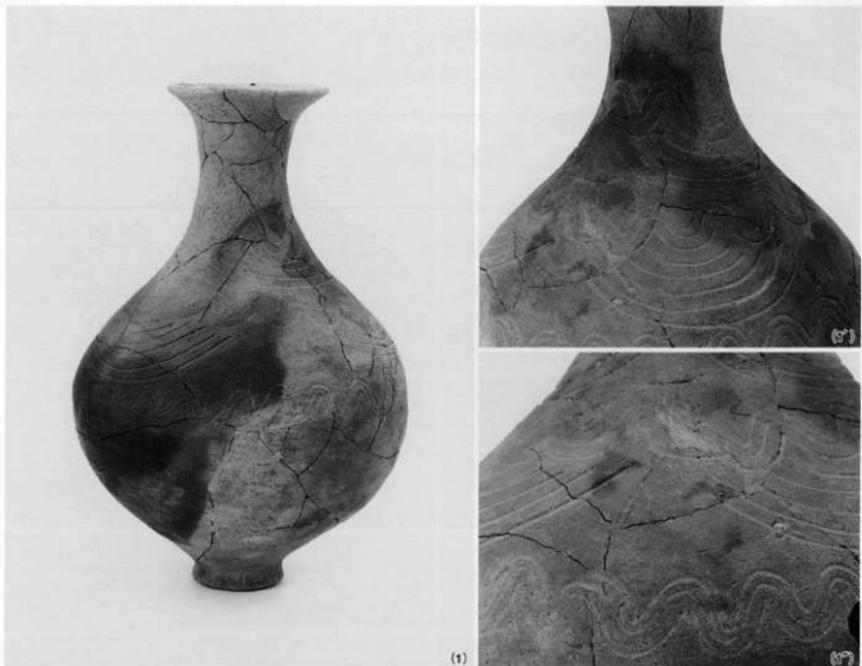


5 SI019南柱穴全景 (北西から)

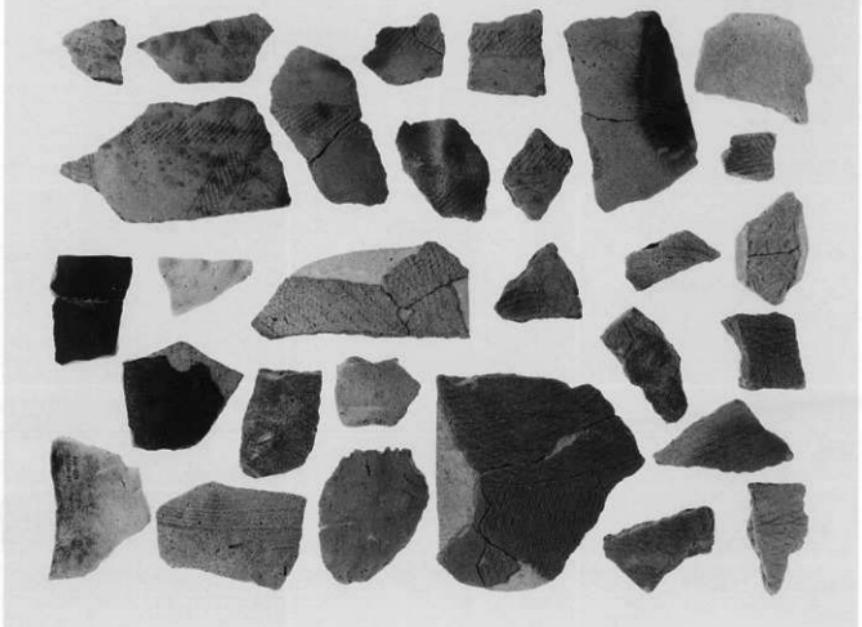
図版12

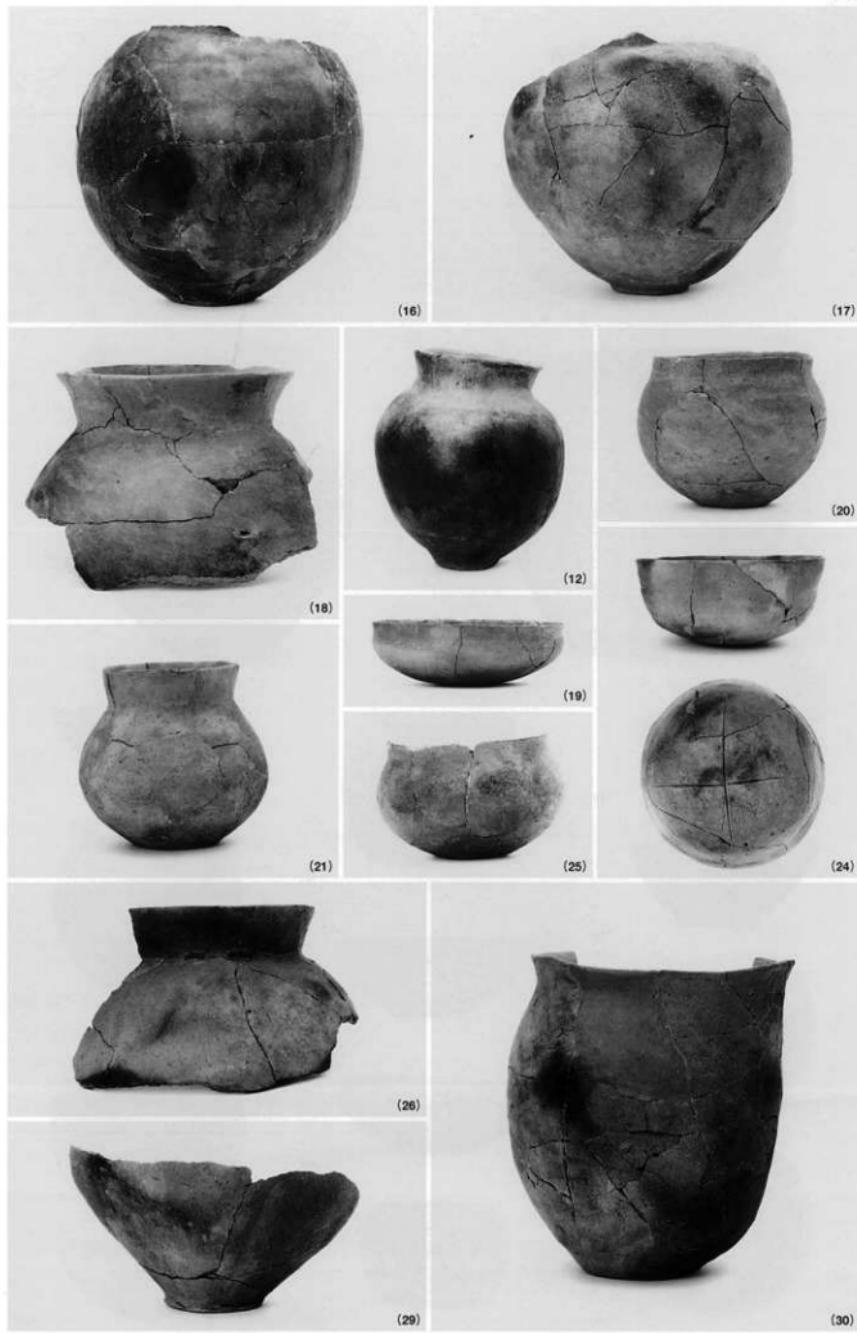






弥生土器







(26)



(27)



(40)



(41)



(34)



(38)



(48)



(36)



(43)



(52)



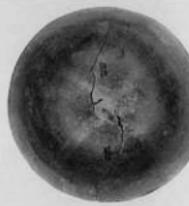
(42)



(37)



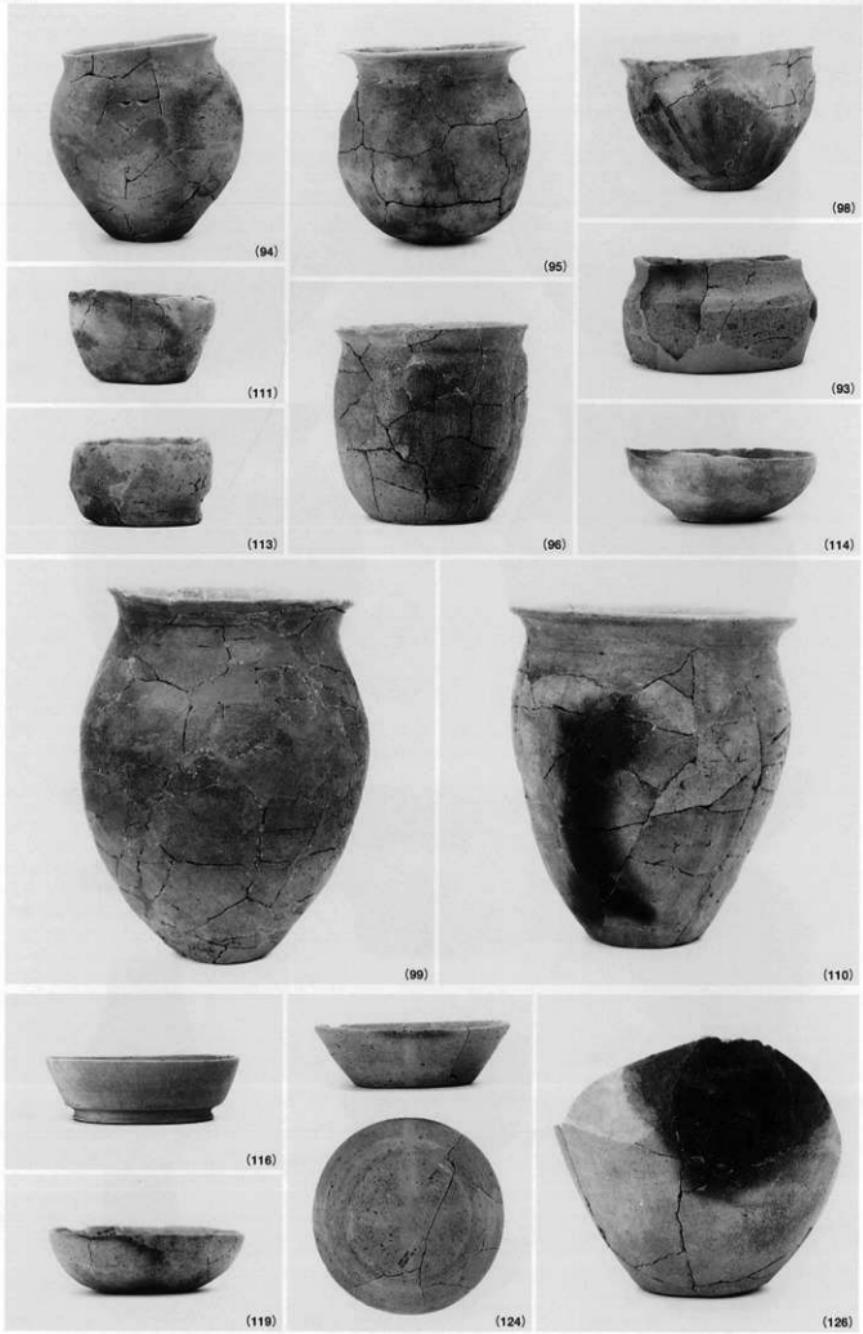
(44)

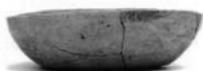


(56)









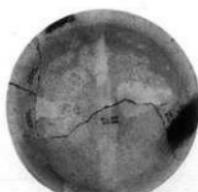
(12)



(13)



(137)



(136)



(139)



(140)



(141)



(143)

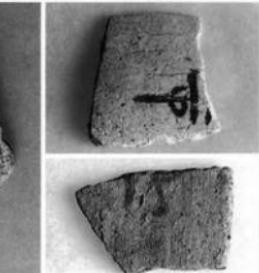
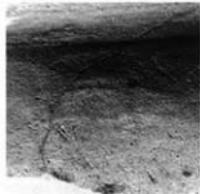


(144)

(147)



(148)

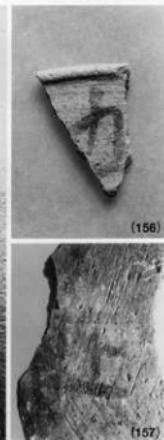




(155)



(156)

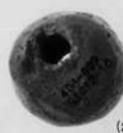


(157)

土製品 (1)



(1)



(2)



(3)



(5)



(4)



(6)



(7)



(8)

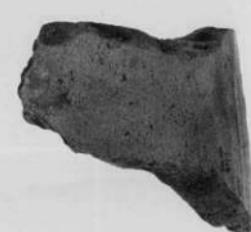
土製品 (2)



(10)

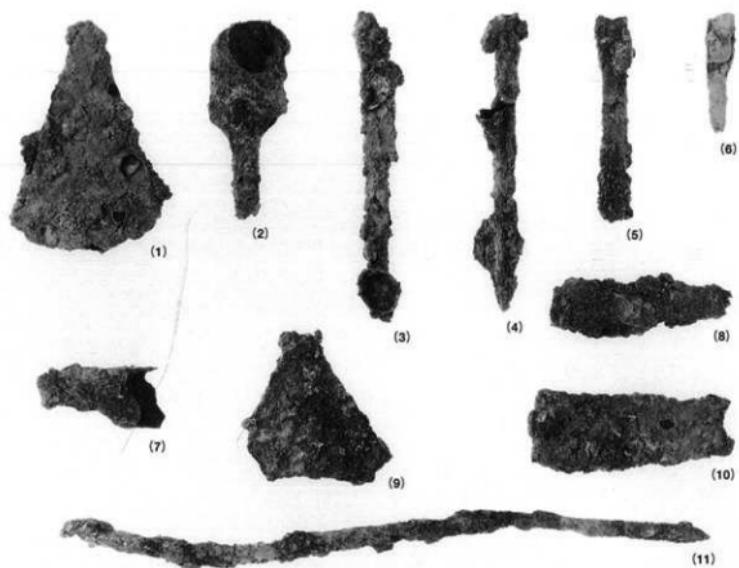


(9)

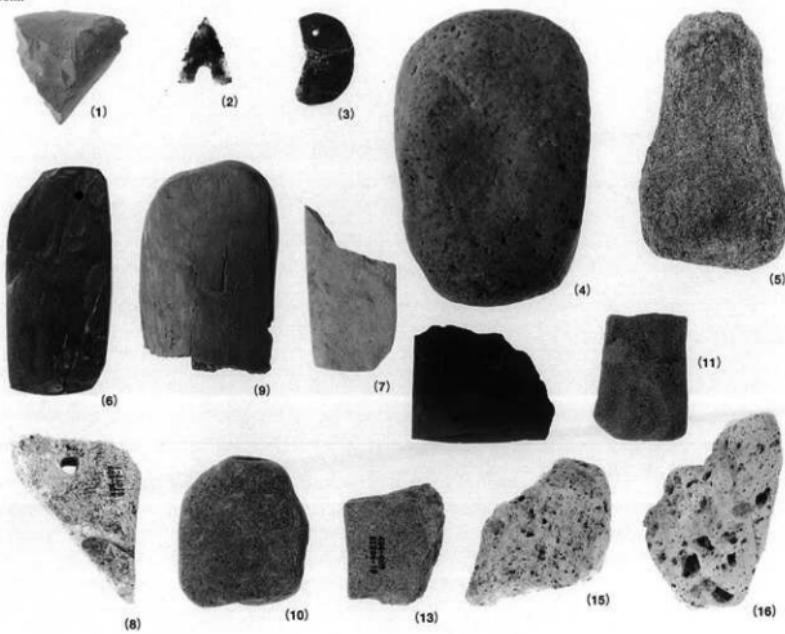


(13)

鉄製品



石製品



第 2 編

—山武郡成東町八幡神社南(2)遺跡—

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯

八幡神社南遺跡（2）の整理作業から報告書刊行までの作業は、平成16年度と平成17年度の2か年にまたがっている。その間の調査組織及び発掘調査と整理作業の担当者は以下のとおりである。

発掘調査

平成16年度 東部調査事務所長 鈴木 定明 調査担当者 土屋潤一郎

調査遺跡 八幡神社南（2）遺跡

整理作業

平成17年度 東部調査事務所長 鈴木定明 整理担当者 今泉 淳

整理遺跡 八幡神社南（2）遺跡 水洗・注記から報告書刊行まで

なお調査地の位置・歴史的環境・調査の方法・整理の方法等の項目については、本書の第1編と重複するため、説明を省略した。

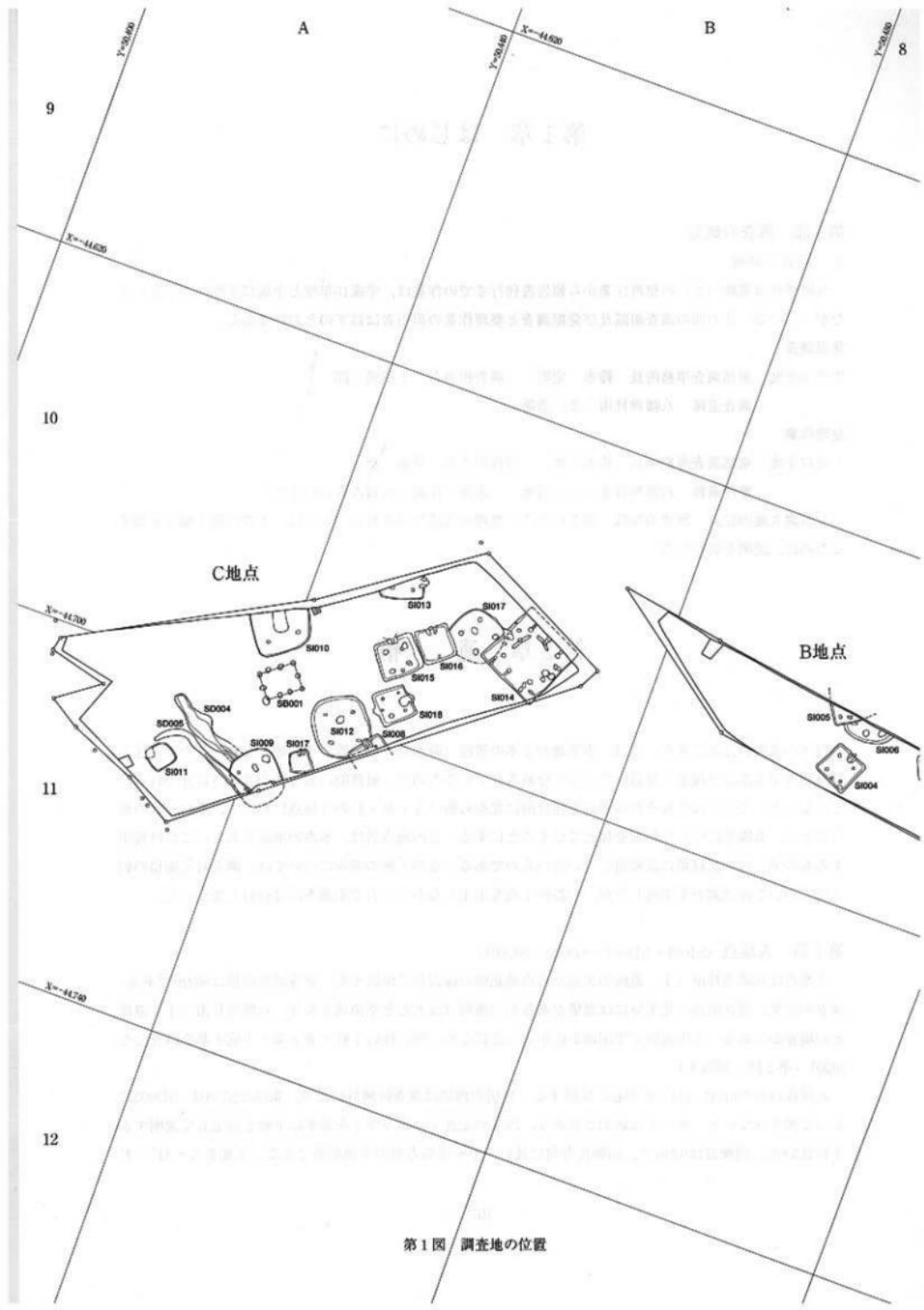
第2章 遺構

以下の説明の記述にあたっては、事業地が2本の管路（吸水管・送水管）予定地になり、そのうち送水管に相当する部分は現道（林道）によって分断されているために、最終的に調査地が3地点に分かれることになった。ここではそれぞれの地点を便宜的に北から順にA・B・Cの3地点にわけて、それぞれの地点ごとに、遺構等について解説を加えていくことにする。この地点名は、本書の解説にあたってだけ使用するもので、他の記録類には使用していないものである。なお下層の調査については、調査対象面積の約2%について確認調査を実施したが、石器が1点も出土しなかったので本調査には移行しなかった。

第1節 A地点 (SI001・SD001～SD003・SK001)

A地点は八幡神社南（1）遺跡の北辺から台地北側の縁辺部に位置する。調査対象面積は662m²である。調査の結果、調査地点の北半分には遺構があるが、南側はほとんど空閑地となり、八幡神社南（1）遺跡との境界からある一定の範囲で空閑地が広がることになる。竪穴住居1軒・溝2条・土坑1基を調査した。SI001（第2図、図版1）

北側緩斜面の8D45・8D55を中心位置する。住居の西隅は調査区域外になり、東隅はSD002・SD003によって壊されている。カマドは新旧2基あり、以下の記述では新カマドを基準に主軸を設定して説明する。主軸長5.8m、副軸長は6.2mで、副軸長方向に長い、やや歪な方形の平面形態である。主軸をN-41°-E



第1図 調査地の位置

C

D

E

7

A地点

8

F

9

X=-44.620

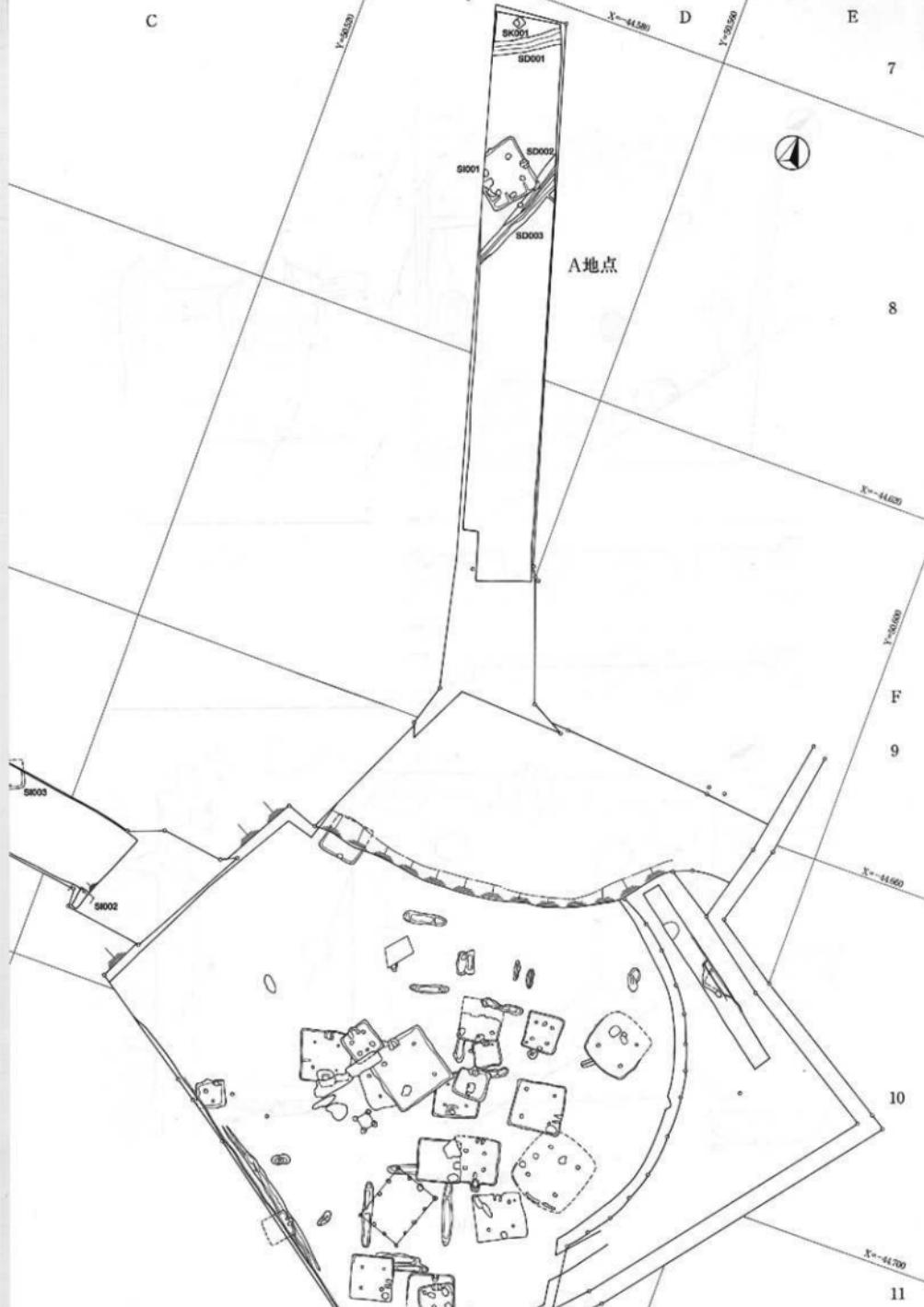
10

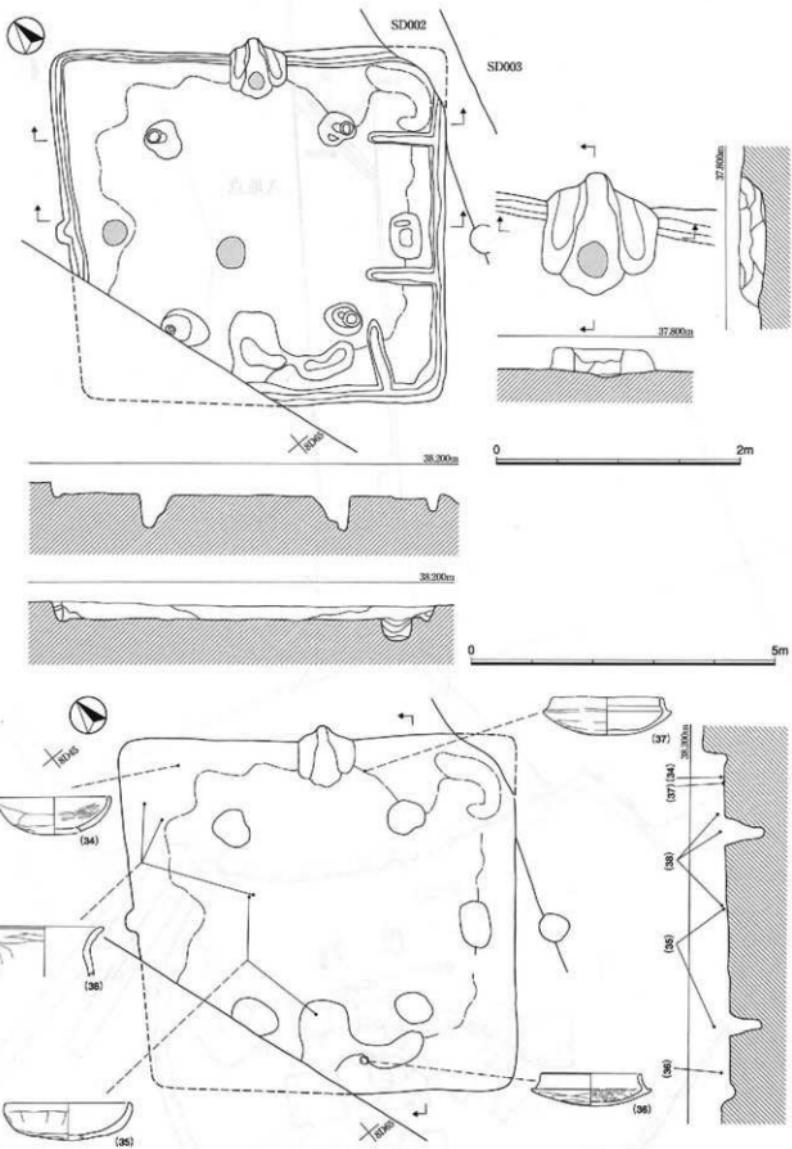
X=-44.720

11

Y=30520

Y=30560

SK001
SD001
SD002
SD003



第2図 SI001

にとる。深さは32cmである。埋土は粒径5mm～10mmのロームブロックを多く含む暗茶褐色土を主体とし、その性状からほとんどは埋戻し土と考えられる。主柱穴は対角線上の4隅近くに4本ある。柱穴は径60cm～80cmで、不定型な平面形態の掘形である。深さは南柱穴がもっとも深く65cmで、それ以外は50cm前後の深さである。それぞれの柱穴の掘形には、住居の内側に向く部分に中端がある。なおこれらの柱穴には、明らかに柱を据え替えた痕跡を残していない。壁溝は調査した範囲では全周し、旧カマド部分にも敷設する。また住居の南東壁を中心に、壁溝へ直角に取り付く根太溝を3条確認した。幅は壁溝よりもやや広い。カマド対向壁の西南壁中央の床面には、床面より数cm高い、幅の長い土手状の高まりがアーバ状に広がる。カマドに対置することから、出入口に間連する施設かもしれない。床面の硬化範囲は、煙際を除いたほとんど全面に広がる。床の中央部に、径50cmほどで焼土が広がり、調査時の所見では炉跡とするが、詳細な記録がないため、詳細は不明である。なお旧カマドの対向壁になる南東壁の中央にある長方形の落ち込みは、その位置関係から旧カマド敷設段階の梯子穴と思われる。38cm×78cmの丸丸長方形で、北側に中端があり、深さは34cmである。

新カマドは壁を20cmほど掘りくぼめて煙道とし、左右の袖は比較的遺存状態は良好であった。袖は山砂をおもな構築材とする。内部には顕著な被熱した痕跡はなかった。カマド内及びその周辺からは、とくに目立った出土遺物はなかった。旧カマドは北西壁中央よりやや南寄りにある、煙道部の地山を掘り窪めた部分と火床部しか残っていなかった。出土遺物はさほど多くはないが、比較的遺存状態のよい坏類(34～36)が床面近くから出土している。接合資料のうちいくつかは、住居中央の床面近くで出土した資料と、住居周縁部で床面よりやや浮いた資料とが接合しているので、これらは住居廃絶後の堆みに廃棄されたものと思われる。

SD001（第1図）

調査区の北端を東北から南西へ、やや弧を描きながら走行する。上端幅80cm、深さ50cm程度で、丸みをもった底面から緩やかに立ち上がる。最下層には黒褐色土、上層には褐色土が堆積していた。

SD002・SD003（第1図）

SD002・SD003は2条の溝が平行しながら重複する。また一部でSI001と重複し、SI001を切っている。断面観察の結果では、SD002がSD003に切られる。SD002は深さ30cmほどで緩やかに立ち上がる。SD003は上端幅110cm、深さ50cmほどで、幅の狭い底面から約45°の角度で立ち上がる。最下層に10cmの厚みでロームブロックを多く含む黒褐色土が堆積し、この上面が硬化面となり、路面を構成していたものと思われる。

SK001（第1図）

SD14の台地縁辺部に位置する。1辺50cmの方形の土坑である。深さは65cmほどで、最深部が西側の隅にある。

第2節 B地点 (SI002～SI006)

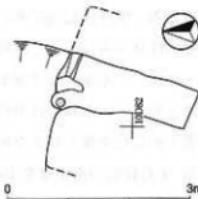
B地点は八幡神社南（1）遺跡の西北部から西北へのびる調査区で、西側の台地縁辺部に向かって、やや傾斜する。八幡神社南（1）遺跡の西北部とは、約2mの比高で低くなる。調査対象面積は544m²である。調査した遺構は調査区の東側に集中し、竪穴住居が弥生時代1軒、古墳時代後期1軒、奈良・平安時代3軒あり、それ以外にSD004・SK002がある。

SI002 (第3図)

10D81・82を中心に位置し、住居の大半が調査区外になり、カマドの右側とそれに続く北壁の一部を調査できただけで、規模等については不明である。主軸はN-10°-Eにとる。北壁には壁溝がある。カマドは地山を10cmほど掘りくぼめて煙道部とし、火床部に焼土が堆積する。出土遺物はとくにない。

SI003 (第4図、図版1)

10C57・58を中心にあり、住居北隅からカマドの部分にかけて調査区外になる。住居の主軸長は3.1m、副軸長が3.2mで、ほとんど正方形の平面形態



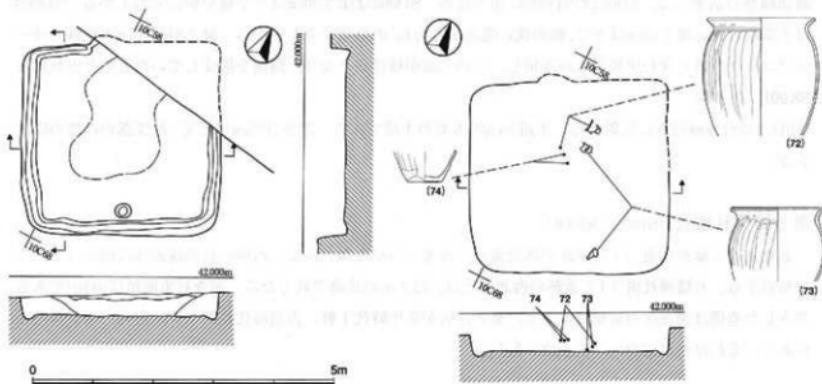
第3図 SI002

である。主軸をN-28°-Wにとる。深さは42cmほどになる。埋土は粗いローム粒を含む褐色土及び暗褐色土が堆積していた。主柱穴はない。幅の広い壁溝が、カマドを除いて全周する。カマドの対向壁のはば中央の床面には、深さ10cmで、径20cmの円形の掘込みが1か所ある。カマドとの位置関係から、梯子穴と考えられる。床面の硬化範囲は、住居中央部の狭い範囲に広がる。焼土や炭化材は確認できなかった。カマドは北壁のはば中央にあるが、住居廃絶時に破壊されたためか、本来の形状を復原できるような状態では構築材が残っていなかった。かろうじて調査できたのは、煙道部の掘込みと思われる部分だけである。

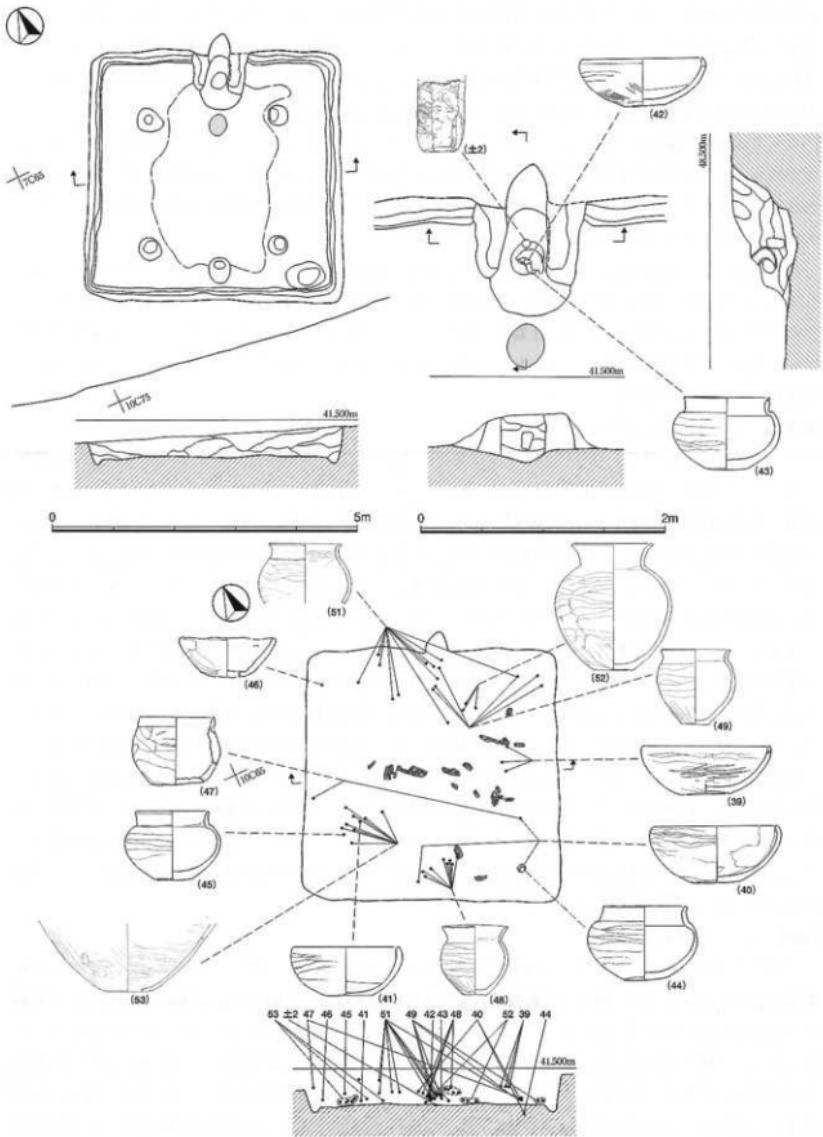
出土遺物は、カマド前面から中央部にかけて、おもに土師器甕類が散漫に出土している。カマド前面から出土した土師器甕(73)は床面に近いが、72・74の接合資料は床面よりやや浮いて出土している。

SI004 (第5図、図版2)

10C65・66を中心に位置し、SI005・SI006の南に位置する。住居の主軸長・副軸長とも4.1mで、方形を規範とする平面形態である。主軸をN-23°-Eにとる。調査区が西に傾斜しているために西側では深さが浅くなるが、残りのよい東側では約45cmの深さになる。埋土は1cm~3cmのロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。また床面から炭化材が出土している範囲では、炭化材の土化したものが周囲に広く堆積していた。主柱穴は住居の対角線上の4隅にある。いずれも円形の掘形で、北柱穴がもっとも掘形径が大きく44cm前後あり、それ以外は30cm~37cmの掘形径である。深さは比較的一定しており、81cm~86cmである。またカマド対向壁の南壁中央の床面には長径42cm、深さ25cmの梯子穴と考えられる掘込みがある。貯



第4図 SI003



第5図 SI004

藏穴は住居の南隅にあり、長径63cm、短径43cmの長円形の掘込みである。深さは32cmある。内部からほぼ完形の土師器短頸壺（44）が出土した。壁溝はカマドを除いて全周する。床面の硬化範囲は、主柱穴に囲まれた範囲に広がる。住居中央部を中心に炭化材が出土しているが、住居の副軸方向に並ぶものが多い。おそらく屋根の構築材の一部と思われるが、部位の推定まではむずかしい。

カマドは比較的遺存状態がよく、内部には半分に欠けた支脚（土2）と、その上に小型甕（49）の下半部が残り、その周囲から土師器の壺（42）・短頸壺（43）が出土した。煙道部は35cm地山を掘り抜き、43°の角度で立ち上がる。両袖は黄白色の山砂を構築材としている。袖の内面には顯著な被熱痕跡はなかったが、火床部には焼土ともに灰の堆積を確認した。

出土遺物のうち接合資料は、住居中央を除く、四周に個体ごとにある程度のまとまりをもちらながら出土しているのが特徴である。埋土の性状から判断すると、住居の埋戻しを行った可能性が強いので、住居の壁際を埋め戻した時点で、これらの土器類が投棄されたのであろう。またカマドについても、支脚を残しているものの、使用時の状態ではないし、カマド内に壺類まで納めているので、こうした痕跡がカマドの廃絶行為を物語るのであろう。

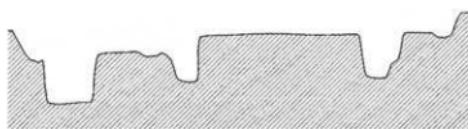
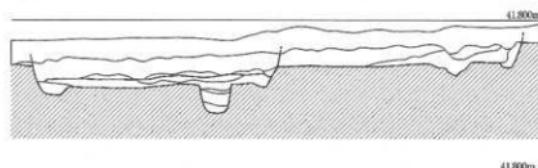
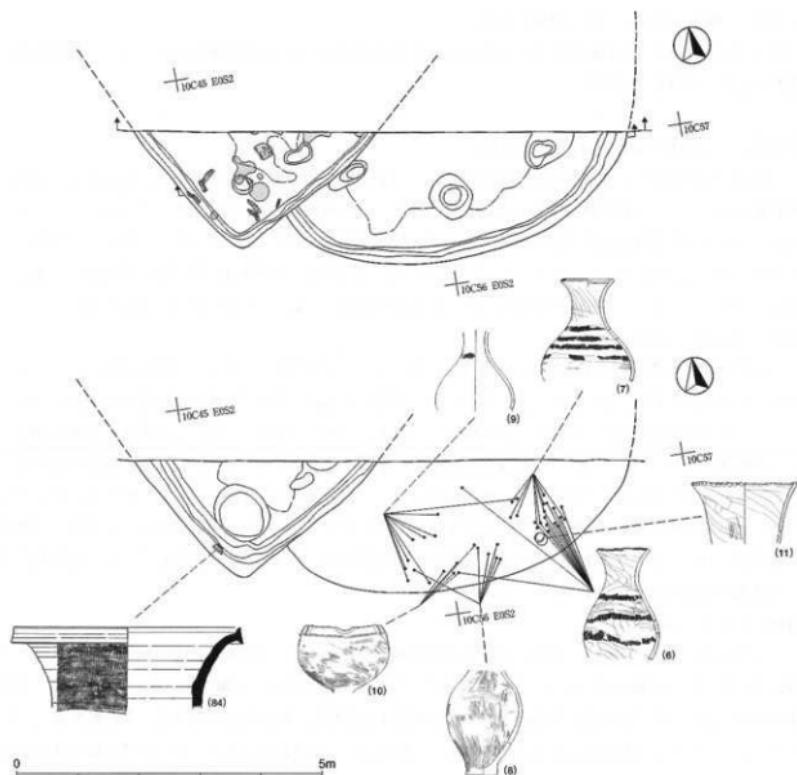
SI005 A・B（第6図、図版2）

10C45・55を中心に位置し、住居の北半分は調査区域外になる。弥生時代の堅穴住居SI006を切って構築されている。調査した範囲では、掘形はそのまま、床だけ貼り替えている。したがって以下の説明では、新旧2時期の住居を、新しい床の住居をA、古い床の住居をBとして説明する。住居の規模は、南東壁にある掘込みを梯子穴として、それを住居の中心として左右に折り返すと、約3.6m四方の規模と推定できる。主軸をN-31°-Wにとる。SI005 Aの深さは35cmである。埋土は粒径5mm~10mmのロームブロックをやや多く含む暗茶褐色土がほとんどをしめ、床面近くに焼土・炭化粒を含む暗茶褐色土が堆積していた。住居の南隅に主柱穴の1本があり、径33cm、深さは30cmになる。ほかの3隅にも主柱穴があって、主柱穴は4本構成をとるのであろう。梯子穴と推定した掘込みは、長径50cm、短径23cmのソラマメ形である。深さは16cmである。壁溝は調査した範囲では確認できた。床面の硬化範囲は住居の中央付近に広がる。カマドについては、梯子穴の想定が正しければ、その対向壁になる北西壁にカマドが敷設されたと推定できる。

SI005 Bは、SI005 Aの床面から13cm下にある。南隅にはSI005 Aの主柱穴と重なる位置に円形の大きい掘込みがある。長径97cm、深さは80cmで、底面は比較的平坦で、貯蔵穴の可能性がある。また調査区の境界にも、円形の掘込みの一部が表れている。深さは46cmで、ロームブロックを含む褐色土と暗茶褐色土が互層になっている。壁溝はSI005 Aの壁よりもやや幅広になる。遺物の出土状況は比較的散漫だが、南西壁際から施釉した須恵器壺（84）が出土した。

SI006（第6図、図版2）

10C55・56を中心に位置し、住居の北側4分の3は調査区外になり、西側の一部はSI005に切られ、遺存状態は必ずしもよくない。調査した範囲から規模等を推定すると、主軸7.0m、副軸6.3m前後で、小判形の平面形態と思われる。主軸はN-3°-Eにとる。埋土は5mm~10mmのロームブロックを含む褐色土を主体とする。主柱穴が主軸に直交する位置に2本あり、深さはいずれも72cmである。また住居南側の主軸線上には梯子穴と考えられる掘込みがある。長径75cm、深さは主柱穴よりも浅く、57cmである。埋土は暗茶褐色土を主体とし、上層には山砂をブロック状に含む。炉は調査区外の、梯子穴の対向位置よりも住居内側に敷設されていたものと思われる。壁溝は調査した範囲では、壁直下にすべて取り付く。床面の硬化範囲



第6図 SI005・SI006

は主柱穴と梯子穴を結んだ線の内側に広がる。

住居の壁際を中心とした範囲にもかかわらず、出土遺物は調査したほぼ全域から出土し、接合資料は比較的まとまって出土している。

第3節 C地点 (SI007~SI018・SB001)

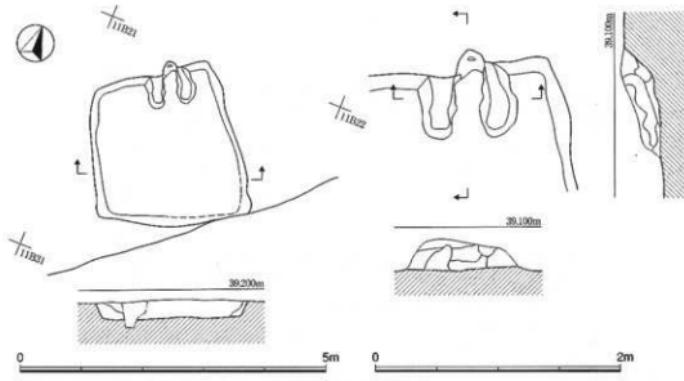
C地点は林道を挟んでB地点の南西に位置する。南東から台地縁辺の北西に緩やかに傾斜する。調査対象面積981m²である。現況は杉林で、比較的プライマリーに土層が堆積し、ソフトローム上面にはテフラに相当する可能のある層を確認できた。調査区のほぼ全域に遺構があり、また調査地内に排土場所が確保できなかったので、調査はスイッチバックで行うことになった。調査した遺構は、堅穴住居が弥生時代4軒、古墳時代後期3軒、奈良・平安時代が5軒、古代の掘立柱建物が1棟と、かなり稠密に遺構がある。

SI007 (第7図、図版3)

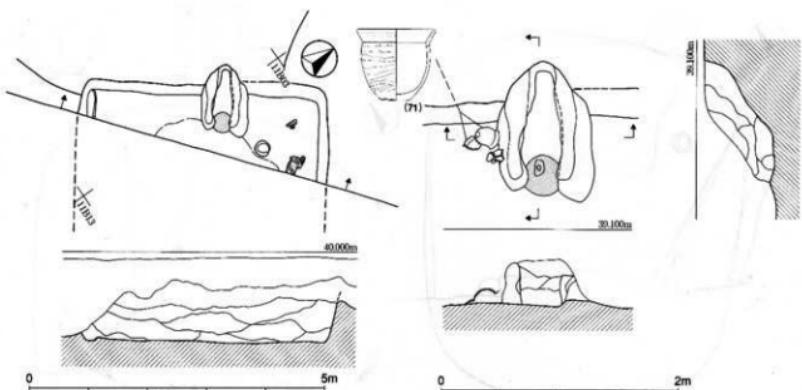
11B21にある。主軸長2.4m、副軸長が2.3mでかなり小振りな堅穴住居である、南隅が鈍角になり、やや台形の平面形態である。主軸をN-28°-Wにとる。深さは30cmほどである。埋土は粒径10mm~20mmのローラムブロックをむき暗茶褐色土を主体とする。住居内部には、主柱穴・壁溝ではなく、また床面には硬化範囲もとくに確認できなかった。カマドは北西壁の中央よりやや東寄りにある。両袖は黄白色の山砂を構築材とする。煙道部は壁を20cmほど掘り込んで煙道部としている。内部には天井部の崩落土と思われる土が堆積していたが、全体に被熱の痕跡は希薄で、火床部に相当する部分にもブロック状になっている焼土を確認した程度である。おそらく住居廃絶時に、支脚などとともにカマド内部も片づけられてしまったのだろう。出土遺物は住居床面から散漫に出土している。

SI008(第8図、図版3)

11B01・02に位置し、住居の南側の大半が調査区域外になる。また弥生時代の堅穴住居SI012を切って構築されている。副軸長が4.2mで、方形を規範とする平面形態である。主軸をN-52°-Wにとる。深さは53cmほどある。埋土は上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、床面近くで焼土粒・炭化粒を多く含むようになる。カマドの左前面に主柱穴が1本ある。径25cmで、深さは63cmある。その周辺には炭化材が散



第7図 SI007



第8図 SI008

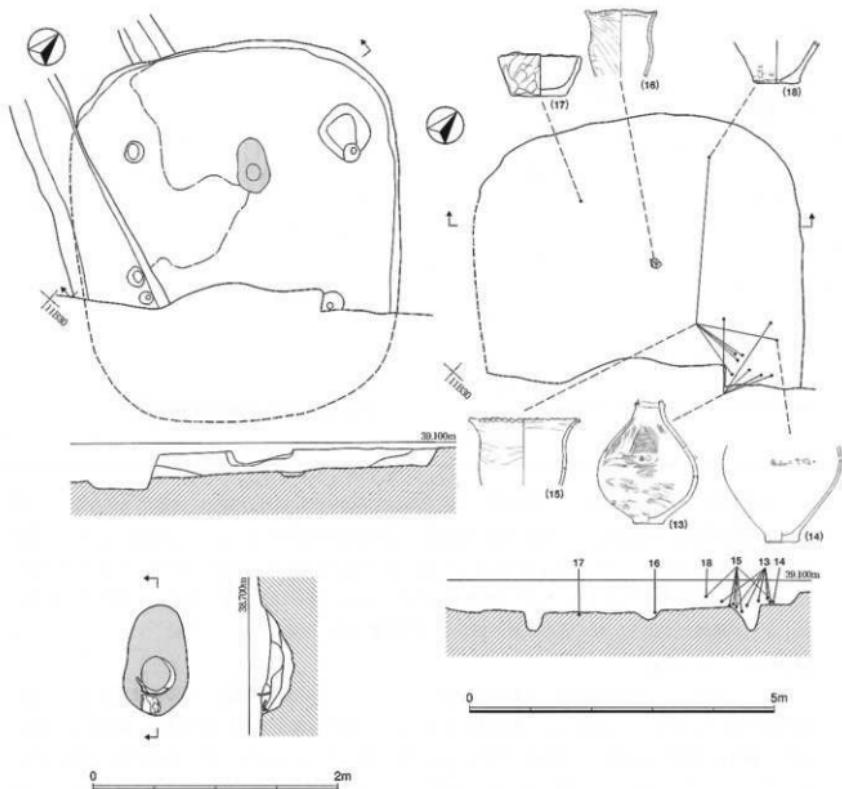
乱し、なかには板状の炭化材もある。南西壁に壁溝を確認したが、それ以外の部分には確認できなかった。床面の硬化範囲はカマド前面から住居中央部に広がる。カマドは北西壁の中央よりやや東寄りにある。煙道部は地山を約30cm掘りくぼめ、煙道の先端部近くまで袖の構築材が続く。両袖は黄白色の山砂を構築材とし、両袖の内側は被熱で赤変していた。両袖の先端部に挟まれ部分に火床部があり、中央には土製支脚（土3）が横倒して出土した。また左袖外側からは小型壺（71）が完形で出土した。

SI009（第9図、図版3）

11B20を中心とし、台地縁辺部に位置する。住居の約3分の1が調査区域外になる。また上面の一部にSD004・SD005が走行し、南東壁の一部が削平されている。規模は推定で、主軸長6.1m、副軸長が5.2mになる。脇部にさほど丸みではなく、隅丸長方形の平面形態であろう。主軸をN-45°-Wにとる。深さはもっとも深いところで35cmになる。埋土は粒径5mmのロームブロックを少し含む暗褐色土が主体である。下層と壁際には炭化粒を含む。主柱穴は南主柱穴を除く3本が床面で確認できるが、南主柱穴についてはSD005の底面にある同規模の掘込みが相当するのか、それとも調査区域外になるのか、判断がむずかしい。かりにこれらを主柱穴とすると、4本の主柱穴を結んだ線はやや台形になる。床面上の3本の主柱穴はいずれも径30cmほどで、深さは32cm～35cmである。なお北主柱穴の西北にはさらに大きい掘形が取り付くが、主柱穴との関連は不明である。壁溝はない。床面の硬化範囲は南壁側を除いて壁際まで広がる。炉は西・東主柱穴を結んだ線の中央部内側にある。長径90cm、短径26cmで、主軸方向に長い長円形である。炉内の北側には火床部を囲むように壺（16）の破片を並べ、土器片囲い炉としている。

SI010（第10図、図版4）

10A89を中心に位置する。住居の北半分が調査区域外になる。規模は副軸長が6.6m、長軸長は推定で7m前後になるであろう。平面形態はSI009と同様、主軸方向にやや長い隅丸長方形である。主軸をN-32°-Wにとる。床は平坦ではなく、住居中央に向かって段をもつほどではないが徐々に深くなり、もっとも深いところで50cmほどの深さがある。埋土は粒径5mm～10mmのロームブロックを多く含む暗褐色土・褐



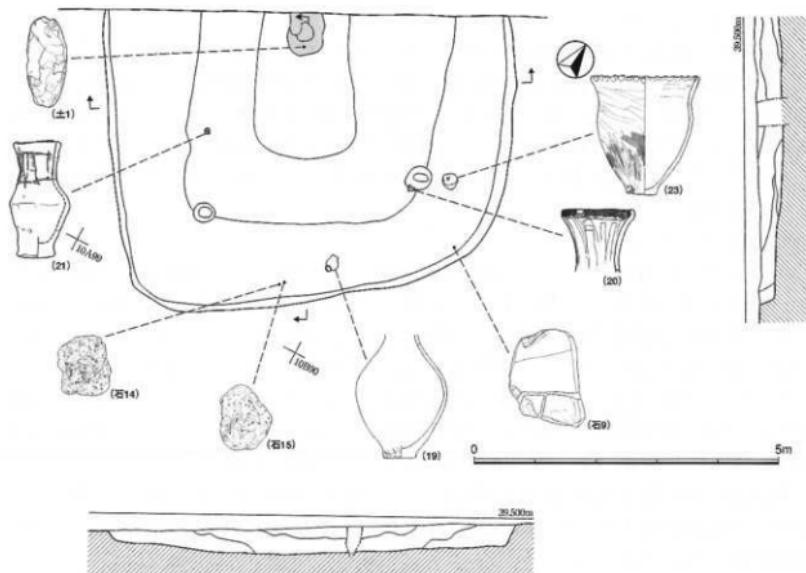
第9図 SI009

色土が主体である。埋土の性状から埋め戻された可能性が強い。主柱穴は2本あり、炉の位置から考えて北側の2本は調査区域外になって、主柱穴は4本あったものと思われる。径は34cm~40cmで、深さはいずれも92cmある。床面には硬化範囲はとくになく、豊溝も確認できなかった。炉は調査区の境界にあり、北半分が調査区域外になる。炉は西・東主柱穴を結んだ線の中央部内側に敷設されたものであろう。短径58cmで、5cm前後の掘込みがある。内部から土質支脚(土1)が1点出土した。

出土遺物は、おもに住居中央以外の部分から出土しており、遺存状態のよい資料もある。壺(19)・甕(23)はほぼ形を保ち、(19)は横倒しで、(23)は口縁部を下にした伏せた状態で出土した。

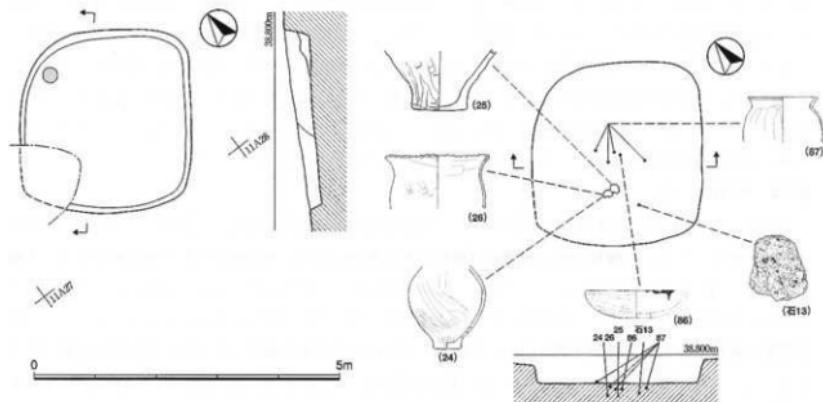
SI011 (第11図、図版4)

11A18にあり、台地縁辺の斜面部に位置し、谷側の確認面とは高低差が41cmある。規模は長軸長が3.0m、短軸長2.8mで、隅に丸みをもつ長方形である。長軸方向の方位はN-40°-Eである。床面が傾斜にしたがって谷側に低くなるが、山側のもっとも深いところで深さは45cm、谷側では19cmになる。埋土は褐色土



第10図 SI010

を主体とし、山側の堆積土に粒径10mm～20mmのロームブロックを多く含むようになる。住居内部には、カマド・炉の痕跡はなく、壁溝も確認できなかった。ただし床面は比較的平坦で、住居の北側には、径18cmの範囲で焼土が堆積していた。このようにはっきりした居住痕跡はなかったが、調査時の所見に基づいて、



第11図 SI011

住居として取り扱っておく。

出土遺物には弥生時代の資料と奈良・平安時代の資料が混在して、住居中央の床面近くから出土している。単独の遺構としては出土資料の内容があまりにもかけ離れているので気になるところである。弥生時代の資料としては壺(24・25)・甕(26)があり、ある程度の遺存状態がある。奈良・平安時代では土師器甕(87)が、上半部がある程度残る。ここでは遺存状態のよい弥生時代の資料群から、弥生時代の遺構と考えた。奈良・平安時代の資料については、断面観察では明らかではなかったが、何らかの掘込みがあった可能性も考えられる。

SI012 (第12図、図版4)

11B01・02を中心に位置する。住居の南隅付近がSI008によって切られる。主軸長6.9m、副軸長が6.4mで、隅に丸みをもつ隅丸方形の平面形態である。主軸をN-33°-Wにとる。深さ33cmである。埋土は粗いローム粒が多く含む暗褐色土を主体とする。床面近くには炭化粒を含むようになる。主柱穴は4本ある。いずれも掘形は丸みに強い長方形で、長軸40cm~55cm、短軸は23cm~27cmになる。掘形の形状から推定すると、柱材の横断面は長方形になって板状のものが使用されたのであろう。壁溝は南側の一部を除いて確認できた。床面の硬化範囲はとくにない。炉は住居中央からやや北に寄った地点にある。長径90cm、短径72cmで、卵形の平面形態である。炉の内側には被熱で赤化して、硬化した範囲がある。

出土遺物は南壁の周辺に比較的集中する傾向がある。ただし大型の壺(27)の接合資料の大半は、炉の内部及びその周辺に集中し、その一部が南壁近くから出土している。なお住居の北西隅からは、完形の片刃磨製石斧(石3)が出土した。

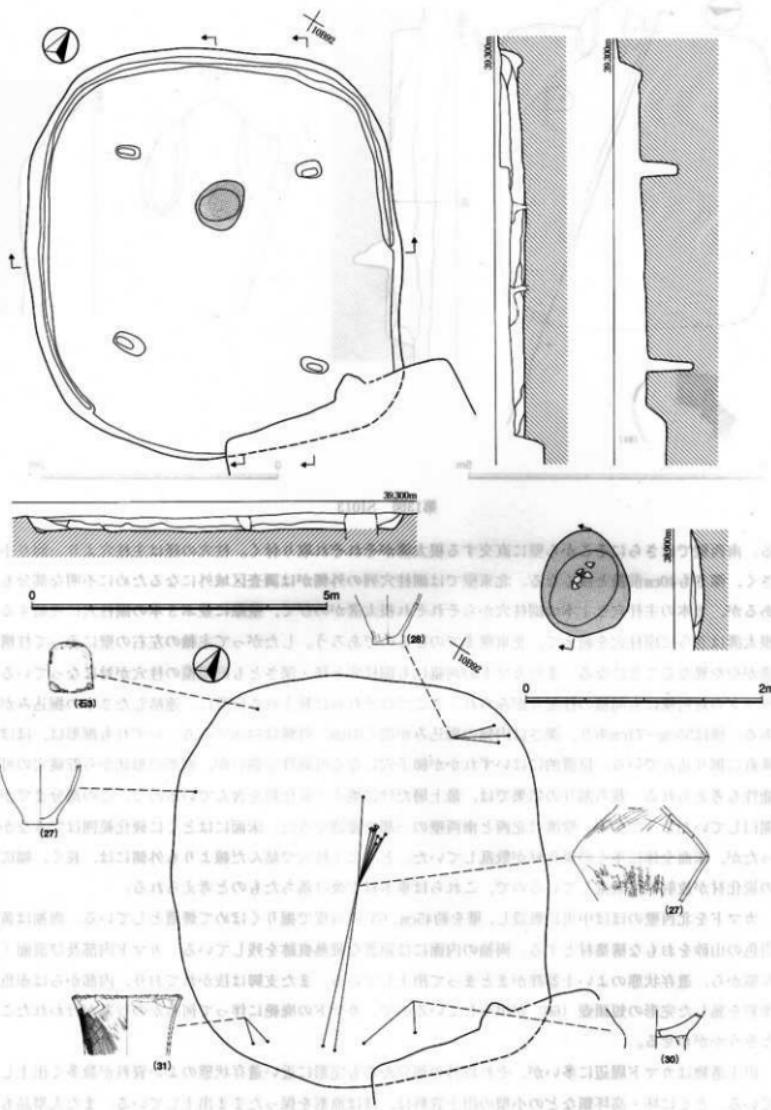
SI013 (第13図、図版4)

10B52を中心とし、住居の北約3分の2が調査区域外になる。主軸長5.0m、副軸長もほぼそれと同程度の長さになって、隅に大きな丸みをもった隅丸方形の平面形態と考えられる。主軸をN-72°-Eにとる。深さ40cmで、比較的平坦な床面である。埋土は粗いローム粒を少し含む暗褐色土を主体とし、カマド付近にカマドの構築材が流れている。主柱穴は2本を調査し、南東主柱穴は長径47cm、短径40cmの卵形で、深さ60cmで小さい下端になる。壁溝はなく、床面の硬化範囲はカマド前面から主柱穴に囲まれた範囲よりもさらに外側に広がる。カマドは東壁にあり、おそらく東壁中央よりは南に寄った地点に敷設されているようである。南壁への掘込みは大きく、約40°の角度で煙道部から両袖の中程まで掘り込んでいる。両袖は黄白色の山砂を構築材とし、左袖の内側には被熱によって部分的に赤変していた。またカマド内の下層にはブロック状の焼土と灰の堆積を確認できた。火床部はカマドの中央より左に寄ったところにある。

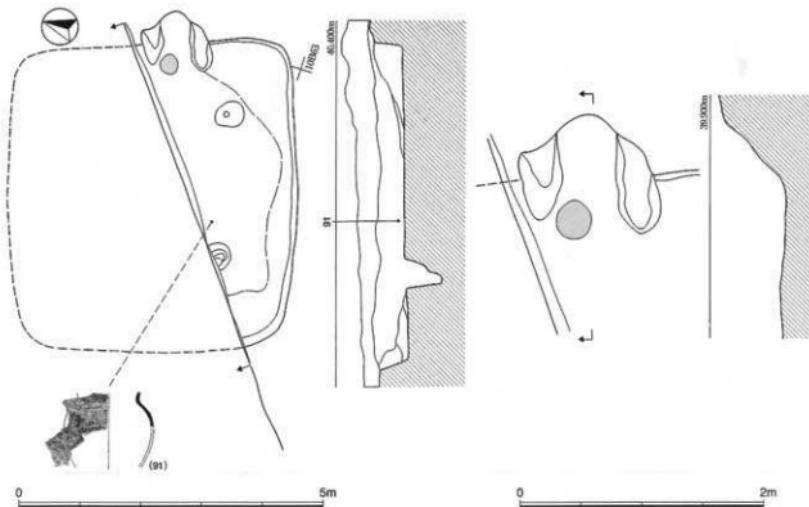
出土遺物は南西隅にやや集中して出土しているが、図示できる資料は非常に少ない。

SI014 (第14図、図版4)

10B85を中心とし、調査区の北東隅にあって北東壁が調査区域外になる。弥生時代の竪穴住居SI017の一部を切っている。主軸長7.8m、副軸長は推定で8m前後になり、方形のやや大型な住居になる。主軸をN-64°-Wにとる。深さはもっとも深いところで40cmある。埋土は粒径5mm~10mmのロームブロックを含む暗茶褐色土を主体とし、炭化粒が混じる。柱穴等については、住居がやや大型なこともあって、やや複雑な構成である。主柱穴は深さが1mを超える、住居の4隅に4本ある。北・東柱穴のあいだにはさらにもう1本、副柱穴が存在する。主柱穴は径43cm~50cmの円形で、もっとも深いのが西柱穴で1.26mある。主柱穴とは別に、主軸にたいして左右の壁とのあいだには1列3本の副柱穴と考えられる掘込みがあ



第12図 SI012 地質構造 (28-31) 距離不規則、東～西の断面

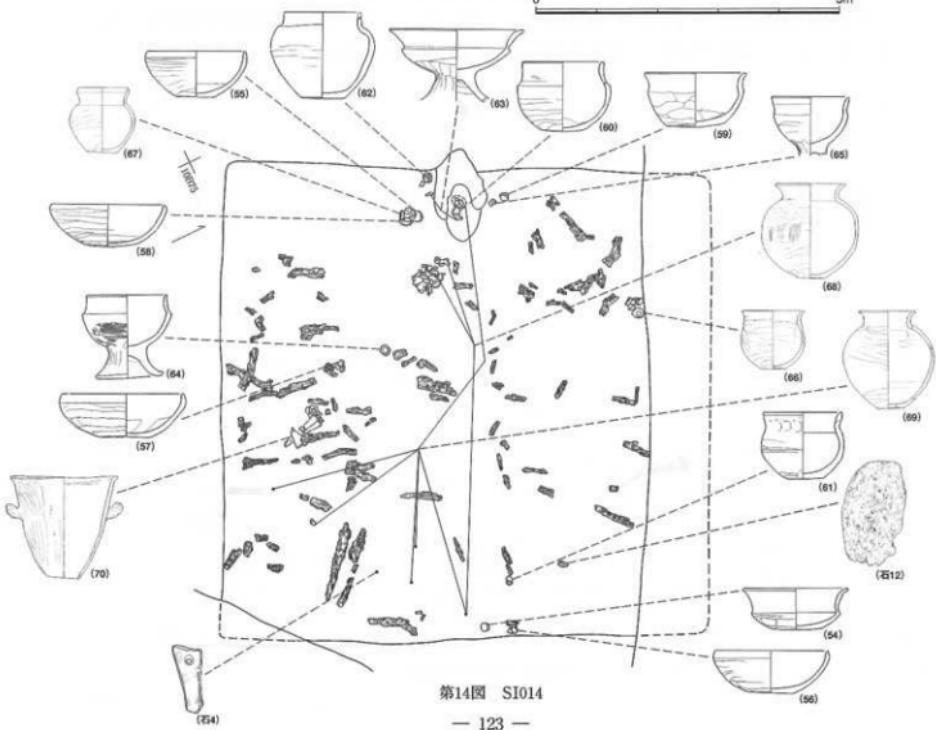
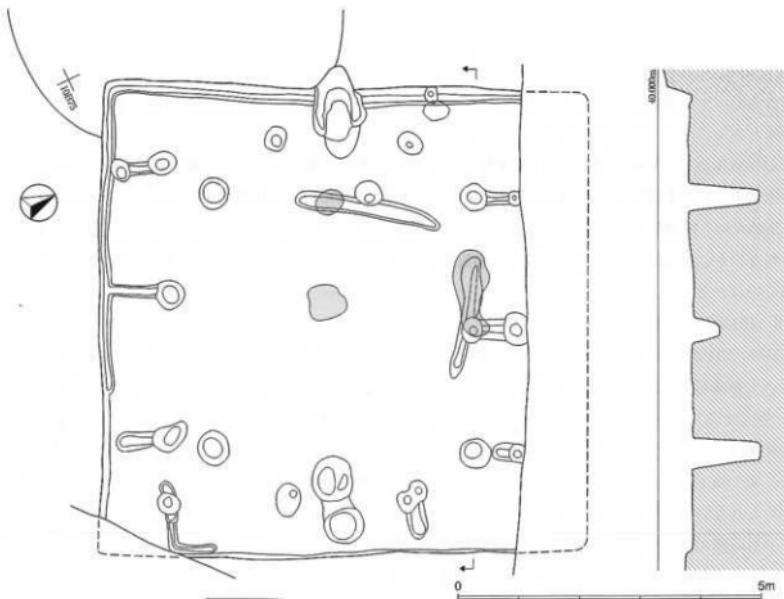


第13図 SI013

る。南西壁ではさらにそこから壁に直交する根太溝がそれぞれ取り付く。柱穴の径は主柱穴より一回り小さく、深さも40cm前後と浅くなる。北東壁では副柱穴列の外側がは調査区域外になるために不明な部分もあるが、2本の主柱穴と1本の副柱穴からそれぞれ根太溝がのびて、壁際に並ぶ3本の副柱穴に連結する。根太溝はさらに副柱穴を超えて、北東壁までのびるのであろう。したがって主軸の左右の壁にそって柱構造がやや異なることになる。またカマドの両脇にも副柱穴と径・深さとも同規模の柱穴が対になっている。カマドの対向壁にも同様の柱配りがみられ、ここではそれらに挟まれる位置に、連結した2本の掘込みがある。径は55cm～71cmあり、深さは内側の掘込みが深く64cm、外側は44cmである。いずれも掘形は、ほぼ垂直に掘り込んでいる。位置的にはいずれかが梯子穴になる可能性が強いが、掘形の形状から貯蔵穴の可能性も考えられる。裁ち割りの結果では、最上層だけに焼土・炭化粒を含んでいるので、この部分までが開口していたようである。壁溝は北西と南西壁の一部で確認できた。床面にはとくに硬化範囲はできなかったが、床面全体に多くの炭化材が散乱していた。とくに主柱穴で結んだ線よりも外側には、長く、幅広の炭化材が放射状に散乱しているので、これらは垂木材が焼け落ちたものと考えられる。

カマドを北西壁のほぼ中央に敷設し、壁を約45cm、63°の角度で掘りくぼめて煙道としている。両袖は黄白色の山砂をおもな構築材とする。両袖の内面には顕著な被熱痕跡を残している。カマド内部及び前面・左脇から、遺存状態のよい土器群がまとまって出土している。また支脚は抜かれており、内部からは赤色塗彩を施した完形の短頸壺(60)が出土しているので、カマドの廃絶に伴って何らかの行為が行われたことをうかがわせる。

出土遺物はカマド周辺が多いが、それ以外の部分からも完形に近い遺存状態のよい資料が数多く出土している。とくに壺・高壺類などの小型の出土資料は、ほぼ原形を保ったまま出土している。また大型品も完形に近く、甕・把手付瓶(68・70)の接合資料は散布範囲が比較的まとまる。それにたいして甕(69)



第14図 SI014

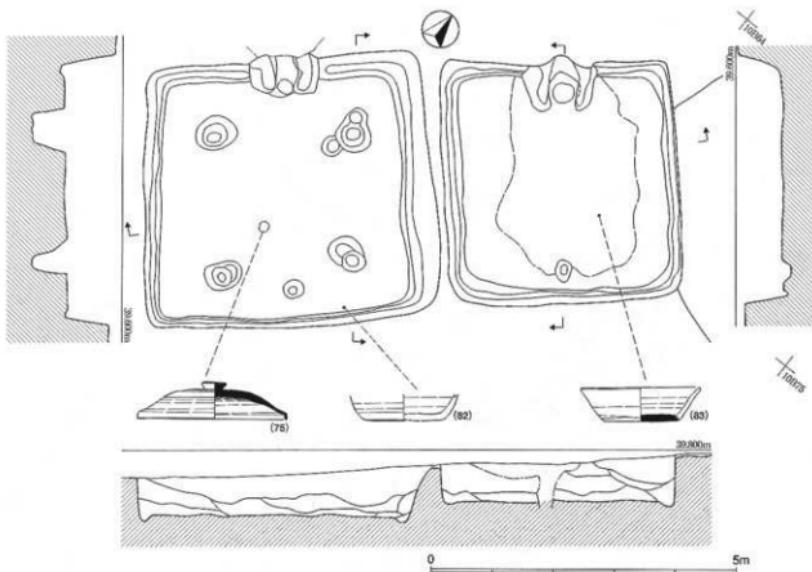
の接合資料はやや散乱し、破片の一部はカマド内からも出土しているので、これもカマド廃絶に伴う行為の一端とみることができるかもしれない。

なお住居床面に、SI014の構造とは無関係と思われる壁溝状の掘込みを4か所確認した。とくに南隅の1か所は直角に折れ曲がり、それぞれが長方形の一部に当たはめられる位置関係にある。それにしたがえば、長軸6m、短軸が5mほどで、主軸はN-64°-Wになる。古い住居の壁溝だけを部分的に残す痕跡かもしれないが、内部には厨房施設や柱穴等の痕跡はみつからなかったので、ここではその可能性を指摘しておくのにとどめる。

SI015（第15図、図版6）

10B72・73に位置する。東北の隣には同規模のSI016が、軒筋をあわせて隣接する。南にはSI018が近接する。主軸長4.3m、副軸長は4.7mで、副軸長方向にやや長い、ほぼ方形の平面形態である。主軸をN-38°-Wにとる。深さはもっとも深いところで82cmある。埋土は粗いローム粒を含む暗褐色土を主体とし、床面近くで焼土粒を少し含む。主柱穴は対角線上の4隅に4本ある。柱穴は径60cm程度の円形を基本とするが、北・南主柱穴は2本以上の柱穴の掘形が重なり、長軸73cmほどになる。あるいは柱の据え換えの痕跡かもしれない。南・西主柱穴の深さは46cmで、北・東主柱穴はそれより深くなり、56cmの深さになる。カマド対向壁の南東壁中央の壁際には、径34cm、深さ25cmの梯子穴がある。壁溝はカマドを除いて全周する。床面に硬化範囲はとくになく、焼土・炭化材の散乱も確認できなかった。

カマドは北西壁のほぼ中央にある。煙道部の大半が攪乱されている。両袖は、基層部分の地山をいく分掘り残している。両袖は灰褐色の山砂を構築材としている。両袖の内側は被熱によって赤化していた。カ



第15図 SI015・SI016

マド内部からはほとんど出土遺物はなく、支脚も抜かれていた。出土遺物としては、完形に近い須恵器蓋(75)が住居中央の、床面から10cmほど浮いた状態で出土した。

SI016 (第15図、図版6)

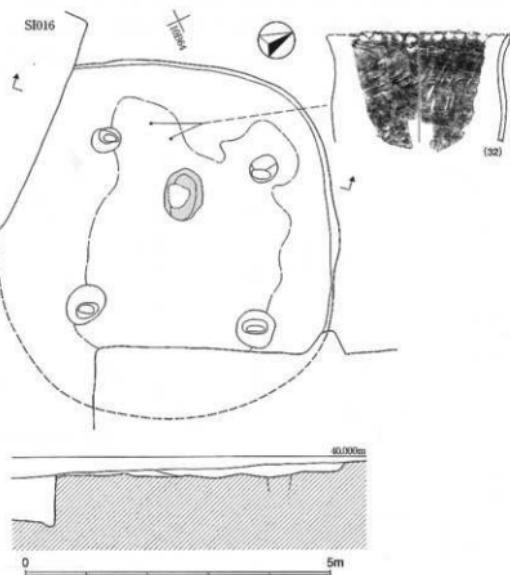
10B63・64を中心位置する。西南の隣には同規模のSI015が隣接する。東側には弥生時代の堅穴住居SI017が重複する。主軸長3.9m、副軸長は3.8mで、ほぼ方形の平面形態である。主軸をN-42°-Wにとる。深さはもっとも深いところで68cmあり。SI015との床面とは25cmほどの高低差で高くなる。埋土は粒径10mm~30mmのロームブロックを多く含む褐色土を主体とし、その性状からほとんどが埋め戻し土と考えられる。主柱穴に相当する掘込みではなく、カマド対向壁の南東壁中央の壁際には、径40cm、深さ16cmの梯子穴がある。壁溝はカマドを除いて全周する。床面の硬化範囲は、カマド前面から壁際にかけて細長く確認できた。

カマドは北西壁のほぼ中央にある。釐を15cmほど掘り込んで煙道部とする。両袖の基層部は、SI015と同様に、地山を数cm掘り残す。両袖は灰黄色の山砂を構築材とする。両袖の内側に被熱した痕跡は残っていなかったが、火床部の最下面から5cmほど浮いた部分に焼土の堆積を確認できた。おそらく最終的な火床面と思われる。カマド内部からはほとんど出土遺物はなく、支脚も抜かれていた。

SI017 (第16図、図版5)

10B64を中心位置し、東側をSI014に、西側をSI016に切られ、住居が浅いこともあって遺存状態はよくない。規模は推定で、主軸長5.8m、副軸長は5.5mになり、平面形態は隅に大きく丸みのある、小判を寸詰まりにしたような形態である。主軸をN-64°-Wにとる。深さは19cmほどである。埋土は粗いローム粒を含む褐色土～暗褐色土である。主柱穴は住居の隅に近い部分に円形の掘形が4本ある。東側の2本の径がやや大きく63cm~68cm、北側2本の径はいずれも46cmになる。深さは69cmと一定する。壁溝は確認できなかった。床面の硬化範囲は、主柱穴に囲まれた範囲を中心に広がる。

炉は住居の中央よりやや西北にある。長径83cm、短径63cmで、橢円形の平面形態である。火床の掘込みは7cmほどで、中央部は被熱により顯著に赤化していた。出土遺物は非常に少なく、図示できたの



第16図 SI016

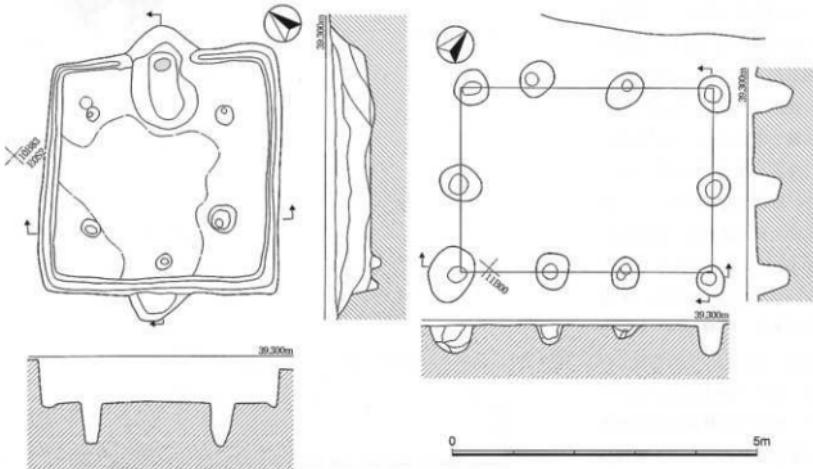
は堺（32）の破片資料1点だけである。

SI018（第17図、図版6）

10B83・93を中心とし、SI015とSI008に挟まれて位置する。主軸長4.0m、副軸長は3.9mのほぼ方形の平面形態である。主軸をN-47°-Eにとる。深さはもっとも深いところで73cmあり、掘込みの深い竪穴住居である。埋土は粗いローム粒を含み、上層が暗褐色土、下層が褐色土になる。主柱穴4本が住居の各隅近くにある。南主柱穴の径がもっとも大きく45cmあり、深さも70cmある。それ以外の主柱穴は、径は35cm内外で、深さは57cm~67cmである。カマド対向壁の南東壁中央の壁際には、径28cm、深さ16cmの梯子穴があり、それよりさらに住居の外側には深さ20cmの半円形の掘込みがある。これが直接造構に伴うとすれば、梯子穴と考えるのが妥当であろう。ただし垂直に掘り込まれているので、板状の梯子をそのまま斜めにいれる構造ではなかったようである。壁溝はカマドを除いて全周し、床面の硬化範囲は、カマド前面から、カマド対向壁に向かって広がっている。カマドは北東壁のはば中央にあるが、住居の廃絶に伴ってほとんど破壊されたらしく、カマド構築材が周囲に散乱していた。ただし火床部は明瞭に残り、カマドの奥壁近くに径30cmほどの範囲で焼土が堆積していた。出土遺物は小片の破片資料が多く、図示できる資料は少なかった。

SB001（第17図）

10A99・10B90を中心とし、SI010・SI012のあいだに位置する。側柱構造の掘立柱建物で、桁行3間×梁行2間になり、桁行長4.12m、梁行3.00mになる。柱筋のとおりは比較的よいが、柱間寸法にはやや出入りがある。梁行では北の間が南の間より20cmほど長くなり、桁行では東1間はそろうが、西の間の柱間寸法には50cm近い開きがある。掘形はやや不定型な円形で、径は大きいもので90cm、小さいもので50cmになる。深さは32cm~50cm前後あり、隅の柱がやや深くなる傾向がある。柱痕跡は不明で、柱穴の底面にも柱のアカリの形跡はなかった。



第17図 SI018・SB001

第3章 遺物

以下の説明にあたっては、時代ごとに土器類から順次素材別に説明を加える。ただし旧石器と考えられる資料については、時代としての節は設けず、石製品の項目のなかで説明することとした。

第1節 土器類

A 縄文時代

縄文時代の遺構は確認できなかったが、B地点の西端部近くの10C52を中心に、浮島2式～3式に相当する小片がややまとまって出土した。なお八幡神社南(1)遺跡では竪穴を数基調査したものの、縄文土器は1点も出土していない。

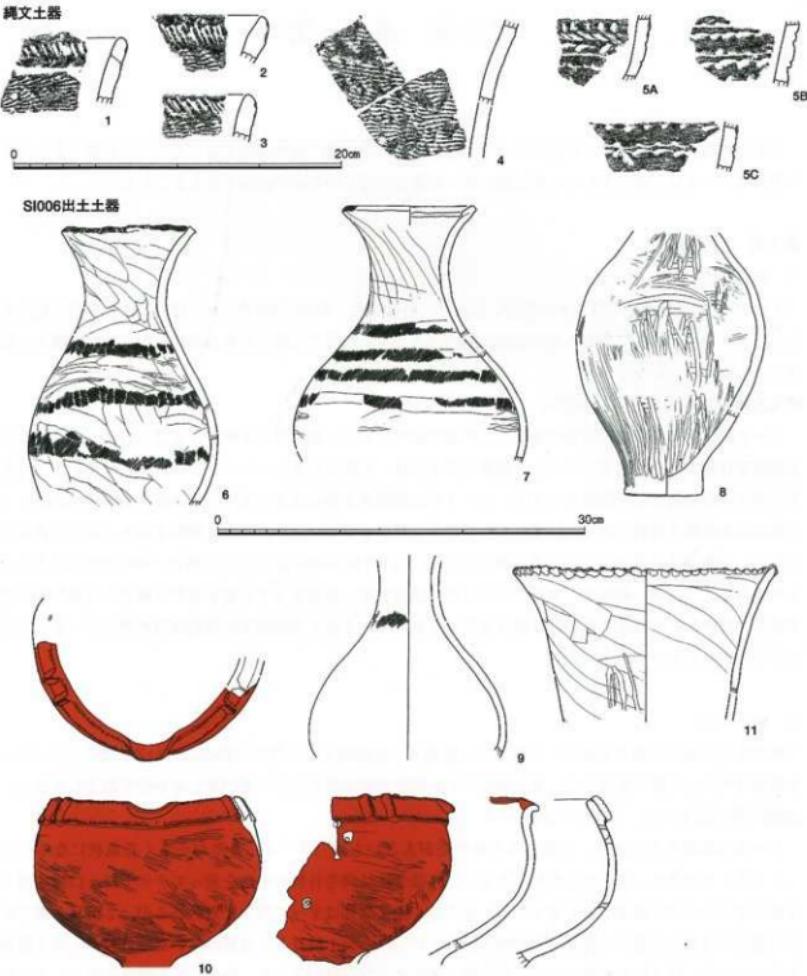
縄文土器 (第18図1～5、図版12)

1～3は、尖頭気味の口縁部の端部に斜め短刻線列をもつ。短刻線は半截竹管を押し引きし、確認できる範囲では左から右へ施文している。刻線列の下には、有肋の貝殻をコンパス文のように支点を上下に変えながら、密に施文した縦線文である。2・3では刻線施文部と地文のあいだには緩やかな稜がある。4は地文のみを残す資料である。いずれも砂粒が多くザラザラしており、胎土に纖維を含み、細かい雲母粒が多い。いわゆる「植房式」の特徴を備えている。3が11A18から出土した以外は、10C52から出土したものである。5は同一個体で、中央部を抉った半截竹管で、支点を上下に変えながら施文した変形爪形文である。ほかに同一個体と思われる破片資料が4点あり、うち1点の小片には刺突列を残している。10C52から出土したものである。

B 弥生時代

弥生時代の堅穴住居はB地点・C地点に5軒あり、比較的良好な資料が出土している。またSI011からも奈良時代の土器群に混在して、遺存状態のよい弥生土器が出土しているので、あわせて紹介しておく。SI006 (第18図6～11、図版7・8)

6～9は細頸をもつ壺で、口径と最大径の差が大きいもの(7・9)と差が小さく花瓶状になるもの(6・8)がある。6は下半部を欠失する。体部全体は刷毛目板の小口を使ってナデつけ、口縁端部と体部上半には3段の斜縄文帯を施文する。おそらく施文原体はすべて同一と思われるが、2段目の縄文帯の大部分にはさらに細かい縄文が部分的に表れている。なお1段目と2段目のあいだには粗いミガキ調整を行っている。胎土はやや砂っぽく、白色粒・黒色粒と雲母粒が目立ち、海綿骨針も確認できる。基本的な色調はぶい黄褐色(10YR5/4)である。7は体部下半を欠損する。折り返し口縁で口縁端部に縄文を施文する。頸部を除く体部上半に斜縄文帯が4段ある。調整はナデしており、斜縄文帯のあいだと頸部下半にミガキを施している。なお頸部下半には幅約1cmで帯状に器面が脱色している。1か所で「X」字状に交差し、おそらく器体をくるんでいたカゴ状編み物が密着した痕跡だと思うが、それ以外の部分は不明瞭である。胎土はややざらつき、白色砂粒を多く含む。基本的な色調は明褐色(7.5YR5/5)である。8は下半部を欠損する壺である。無文で、器面全体を撫で付けて調整してから、下半部を中心に細かいミガキ調



第18図 縄文土器・SI006出土土器

整を行っており、器面ににぶい光沢がある。胎土には白色砂粒を多く含み、海綿骨針をわずかに含む。体部上半は煤けて黒くなっているが、下半部は暗赤褐色（2.5YR3/4）である。9は体部中位と、図示はしていないが同一個体と思われる底部が遺存する。頸部の下端に1条の縄文帯が巡る。ナデ調整後にミガキ調整を行っている。器面は割れて剥落している。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）、内面は褐灰色（10YR4/1）である。胎土には雲母粒と纖維をやや多く含む。10は片口鉢の鉢部が約5分の2残る資料である。底面を

欠損しているにしては、縁辺の調整が確認できず、末端の反り返りがやや強いので、おそらく台付の鉢になるであろう。片口部は口縁端部の生地を外へつまみ上げて折り返している。口縁部は複合口縁で、遺存している範囲では左右一対に、2本1組の棒状浮文を貼り付け、片口部を除いた口縁部の上下と浮文部に刺突状の細かい刻みを施す。体部外面は入念なミガキ調整を行って、口縁端部から全体に赤色塗彩を施している。また片口の左側の体部側面には3か所、焼成後に外側から穿った穿孔がある。胎土には黒色粒を多く含み、海綿骨針・雲母粒を少し含む。内面の色調は明赤褐色(5YR5/6)である。

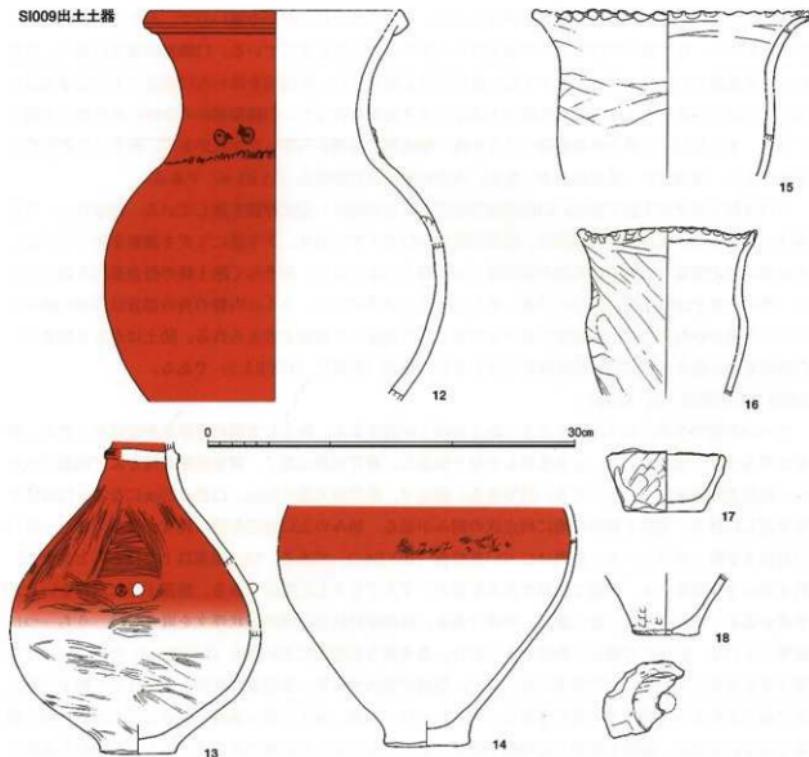
11は体部上半が残る壺である。口縁部は棒状工具による細かい交互押捺を施している。口径21cm、残存高は13cmになる。体部外面の調整は、刷毛目板の小口でナデしており、下半部にミガキ調整を行っている。部分的に煤が吸着している。なお下端に新しい破面もあるものの、おそらく粘土紐の接合部分と思われるが、その位置では水平に割れている。そして破面が平滑になり、とくに内側の角の部分は斜めに面取されている部分があるので、破損後に破面を調整して再利用した痕跡と考えられる。胎土はかなり緻密で、白色粒を多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調は暗褐色(10YR3/3)である。

SI009 (第19図12-18、図版8)

12~14が壺である。12は底部を欠き、約2分の1が遺存する。胎土に大粒の砂粒を非常に多く含み、器面がざらつき、荒れている。赤色塗彩もかなり剥落し、遺存状態は悪く、調整痕跡をほとんど確認できない。体部が球胴状で、頸径の大きい壺である。推定で、体部最大径は28cm、口径は20cmになる。口縁部は折り返し口縁で、頸部と体部の境に列点状の刻みが巡る。刻みの上には部分的に繩文が残り、また一対の円形浮文を貼り付けている。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)である。13は頸部以上をほとんど欠失し、約4分の3が遺存する。細頸で体部が丸みをおび、すんぐりとした器形である。頸部下半に刻みをいたれた突帯が巡る。器面全体を入念に磨き、平滑である。体部中位には一対の瘤状浮文を取り付け、うち一つは剥落している。胎土には細かい砂粒を多く含む。基本的な色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。14は体部上半を欠失している。やや薄手の作りだが、器面が荒れており、赤色塗彩痕跡もかろうじて繩文の施文部にめり込むように残っているにすぎない。これも11と同様、水平に近い破面を構成しており、11ほど顕著ではないものの、破面を調整した痕跡を確認できる。再利用した痕跡であろう。胎土には砂粒と纖維を非常に多く含む。色調はにぶい黄橙色(10YR5/4)~褐灰色(10YR4/1)である。

15は上半部が残る壺である。口縁部は九棒状工具による交互押捺を行っている。口径は23cmになる。刷毛目板の小口でナデで調整している。外面には部分的に煤がこびりついている。胎土は白色系の砂粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。色調はにぶい黄褐色(10YR4/3)~褐色(7.5YR4/4)である。16は粗製の壺で、上半部が約4分の1残る。口縁部は折り返し口縁で、交互押捺が施されている。調整は刷毛目板の小口によるナデで仕上げている。土器片廻い炉に使用されていたために、被熱痕跡が顕著で全体に赤化し、脆弱で、器面の剥落が著しい。胎土は白色砂粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。色調は橙色(5YR6/6)である。17は小型の鉢で、ほぼ完形である。上面觀はやや卵形で、最大径9.6cm、器高5.0cmである。器面は刷毛目板の小口でナデで仕上げている。白色系・黒色砂粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。色調は褐色(7.5YR4/6)である。18は底面に焼成後の穿孔があるものである。底径が5cmとやや小さく、厚みも薄いので、やや小型の壺と思われる。胎土には白色砂粒と纖維を多く含み、海綿骨針を少し含む。色調は褐色(2.5YR4/4)である。破片資料として出土しているものに纖維を含むものが多い。

SI009出土土器



SI100出土土器



第19図 SI009・SI100出土土器

SI010 (第19図19~23, 図版8~10)

19は頸部を欠く壺である。最大径は19cmで、器高は30cm前後になるであろう。装飾的な痕跡はなく、刷毛目調整だけで仕上げている。全体に器面の荒れが著しく、底部内面は赤化している。また底面から4cmより上が煤けており、体部下半は痘痕状に器面が剥落している。胎土は白色砂粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。色調はにぶい黄褐色 (10YR4/3) を基調とする。20は壺の頸部が残る資料である。口径は8cmである。口縁の上端部と側面に繩文が施文されている。口縁端部は施文によって、生地が内側にめくれ返っている。器面は刷毛目板の小口で、粗く調整されている。胎土は白色砂粒を多く含み、海綿骨針・繊維を少し含む。色調は外面が黒褐色 (2.5YR3/1) で、内部は黄灰色 (2.5Y4/1) である。21は器高13.6cm、体部最大径7.0cmになる小型の壺で、口縁部の一部を欠く程度で、ほぼ完形である。体部は「く」の字状に強く屈曲し、上下から生地をつまみ出して成形しているようである。頸部には繩文施文後に、綱の沈線を引き、その上下に沈線を巡らせて区画を描出し、交互に区画内を磨消している。胎土は白色砂粒・雲母粒・海綿骨針を含む。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) である。22は口縁端部に刻みを巡らし、それ以下を刷毛目板の小口部分でナデている。口径は14cmである。なお直接接合しない資料で、同一個体と思われる資料があるが、それは頸部から体部との境近くが残り、体部にかけて裾広がりになる。施文はないが、想定される形状から、ここでは壺の一部と考えておきたい。いずれも内面は器面の剥落が著しい。胎土には白色系・黒色系砂粒を多く含む。色調は明赤褐色 (YR5/6) ~ 黄灰色 (2.5Y4/1) である。23は完形の壺である。口縁部は左手の指頭による交互押捺で、一部爪のアタリが残る。体部全体は刷毛目板の小口によってナデしており、下にくにつれ刷毛目状になる。下半部にはミガキ調整を施している。体部上半は全体に煤けており、部分的に炭化物がこびりついている。器高24cm、口径22cm、底径は6cmになる。胎土は白色砂粒を多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) である。

SI011 (第20図24~26, 図版8)

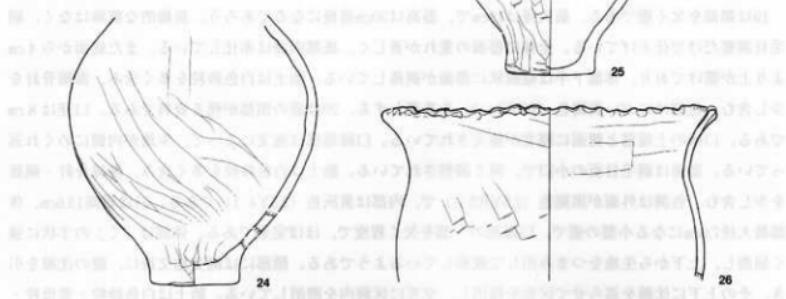
24は体部が球胴状に丸みをもつ壺で、頸部を欠失している。器面全体を刷毛目板の小口でヘラ削りのように調整している。体部最大径21cm、現存高は23cmになる。胎土は白色砂粒多く含み、繊維を少し含む。色調は明赤褐色 (5YR5/6) である。25は壺の底部を残す資料である。調整はヘラ削りの痕跡を残す。胎土は白色砂粒を多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調は明褐色 (7.5YR5/6) である。26は壺の口縁部が約3分の1残る。口縁部はヘラ状工具によって交互押捺を施している。外面はヘラ削りを行っている。全体に煤けており、部分的に炭化物が吸着している。胎土は白色系砂粒を非常に多く含み、雲母粒・海綿骨針・繊維を少し含む。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/4) である。

図示した以外に、曲率がほとんどない壺の破片がある。胎土に砂粒を非常に多く含んでざらつき、繊維も多く含む。破片の曲率からかなりの大きさを想像させるが、破片の厚みはせいぜい7mm程度しかない。

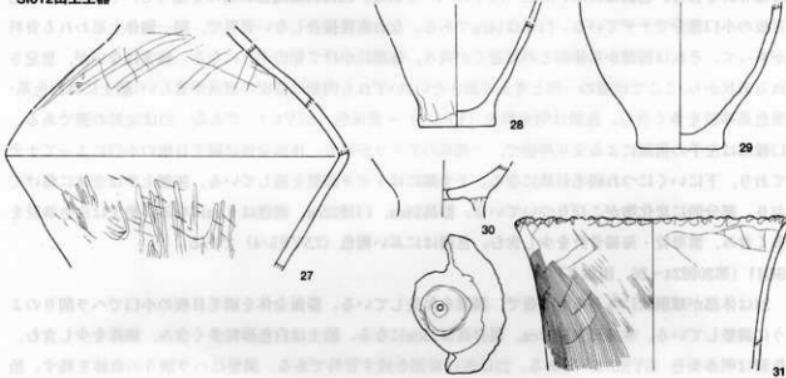
SI012 (第20図27~31, 図版9)

27は体部中位が「く」の字状に直線的に屈曲し、頸部が太くなる壺の部分資料である。体部の最大径は推定で29cmになる。器面全体の調整は刷毛目板の小口でナデしており、下半部にミガキ調整を加えている。上半部の器面には脱色した状態で、幅1.0cm~1.2cmのカゴ目が残るが、下半部には確認できない。内面は赤化しており、器面がかなり剥落し、荒れている。胎土は白色砂粒を多く含み、海綿骨針・繊維を少し含む。色調は赤褐色 (2.5YR4/6) である。28・29は壺の下半部が残る資料である。28は底部から直線的に立ち上がる器形である。器面全体が赤化して、荒れている。29は丸みをおびた体部である。器面外面は痘痕状に

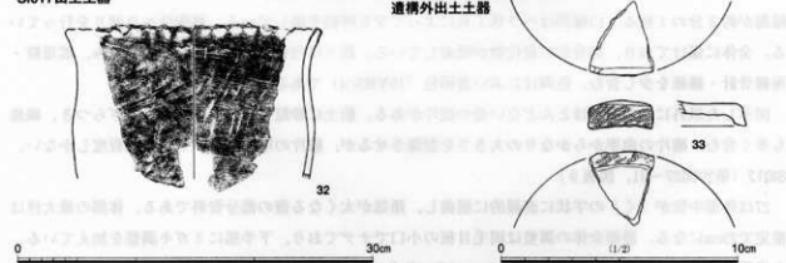
SI011出土土器



SI012出土土器



SI017出土土器



第20図 SI011・SI012・SI017・造構外出土土器

剥落している。上部には煤が吸着している。胎土はやや特徴的で、粒径0.5mm～3.0mmの赤色粒を多く含み、纖維を少し含む。30は台付鉢の鉢部と台部の接合が残る資料である。鉢部の底面に焼成後の穿孔がある。

おもに下面から穿孔し、上面からは補足的に行っている。全体に被熱痕跡が顕著で器面がざらついている。31は上部が約3分の1残る壺である。口径は推定で23cmになる。口縁部は丸棒状工具で交互押捺を行っている。器面調整は刷毛目板の小口でナデ調整をしているが、工具のアクリの強い部分が刷毛目状になる。胎土は白色砂粒・雲母粒・海綿骨針を含む。全体に被熱で黒ずんでおり、上部には炭化物がこびりついでいる。本来の色調は明褐色(7.5YR5/6)である。

SI017 (第20図32)

1点だけを図示した。32は壺の部分的な資料になる。口径は推定で21cmになる。口縁部は指頭による交互押捺を行っている。器面調整は刷毛目板の小口でナデしているが、表裏とも小口を一旦強く押し当ててナデつけるのが特徴である。調整を行った部分にはにぶい光沢があり、かなり生地が乾燥した段階で調整したことを見かがわせる。やはり全体に黒ずみ、本来の色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)になる。胎土は白色砂粒を非常に多く含み、雲母粒・海綿骨針も少し含む。

遺構外出土土器 (第20図33)

弥生時代よりも後代の堅穴住居から少なからず弥生土器が出土しているが、ここではC地点のSI009のすぐ西の11A18から出土した、蓋と考えられる小片を1点図示しておく。かなり小型の製品で、厚みも4mmほどしかない。中央部にむかってやや反り返り、あるいはつまみ状のものがあったのかもしれない。端部側面と下面に繩文を施す。色調は明褐色(7.5YR5/6)である。胎土は白色砂粒・雲母粒・海綿骨針を含む。なお11A18からは、ほかにカゴ目を残す蓋の小片が出土している。

C 古墳時代

古墳時代の堅穴住居はA地点～C地点に点在し、とくにC地点には5軒のうち3軒までがある。なかでもSI014からは遺存状態のよい土器群がかなりまとまって出土している。

SI001 (第21図34～38、図版9)

体部と口縁部の境に稜のない壺(34・35)と稜のある壺(36・37)がある。34は丸底気味で、底部との境は粗いヘラ削りで面取されている。内面にはミガキを施している。約4分の1が遺存し、口径は推定で13.1cm、器高4.1cmである。胎土には白色砂粒を多く含み、色調は灰黄褐色(10YR4/2)である。35はやや平底気味で、粗いヘラ削りで調整されている。約5分の1が遺存する。推定口径14.2cm、器高は4.2cmである。胎土には白色砂粒を多く含み、色調はにぶい褐色(7.5YR4/3)である。36は完形で、口径11.8cm、器高は3.8cmである。底面は扁平気味で、稜が鋭く作出されている。内面は入念なミガキが施され、漆仕上げで黒色に処理されている。胎土にはやや大粒の白色砂粒を多く含む。色調は褐色(7.5YR4/3)である。37は欠損部分がややある程度で、ほぼ完形である。36よりも肉厚の作りで、口径12.6cm、器高は4.3cmである。内面と口縁部外面にミガキ調整を行っており、部分的に黒褐色になっている部分があり、黒色処理を志向したものかもしれない。胎土は36に似る。色調は褐色(7.5YR3/1)である。38は小型の壺の口縁部を中心にして残す資料である。口径は推定で14cmになる。被熱によって器面がかなり荒れている。胎土には砂粒を多く含み、色調は明赤褐色(5YR5/6)である。

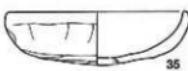
SI004 (第21図39～53、図版9・10)

39～42は体部が丸みをもって立ち上がり、底面が平底になり、口縁部はわずかに内湾する壺である。調整はヘラ削り後にナデ調整で仕上げるのを基本とする。いずれも赤色塗装があり、外面は底面を除く全

SI001出土土器



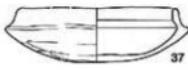
34



35



36

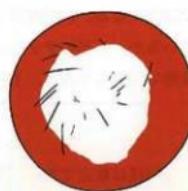


37



38

SI004出土土器

0
30cm

40



41



42



43



44



45



46



47



48



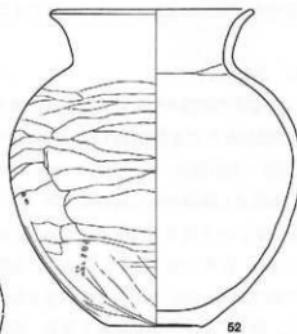
49



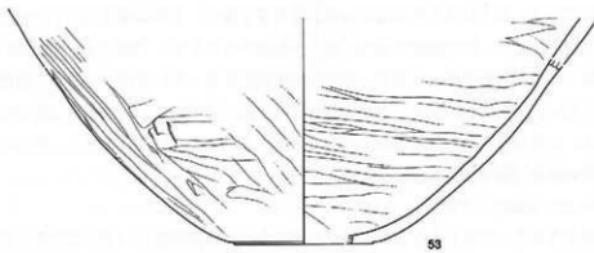
50



51



52



53

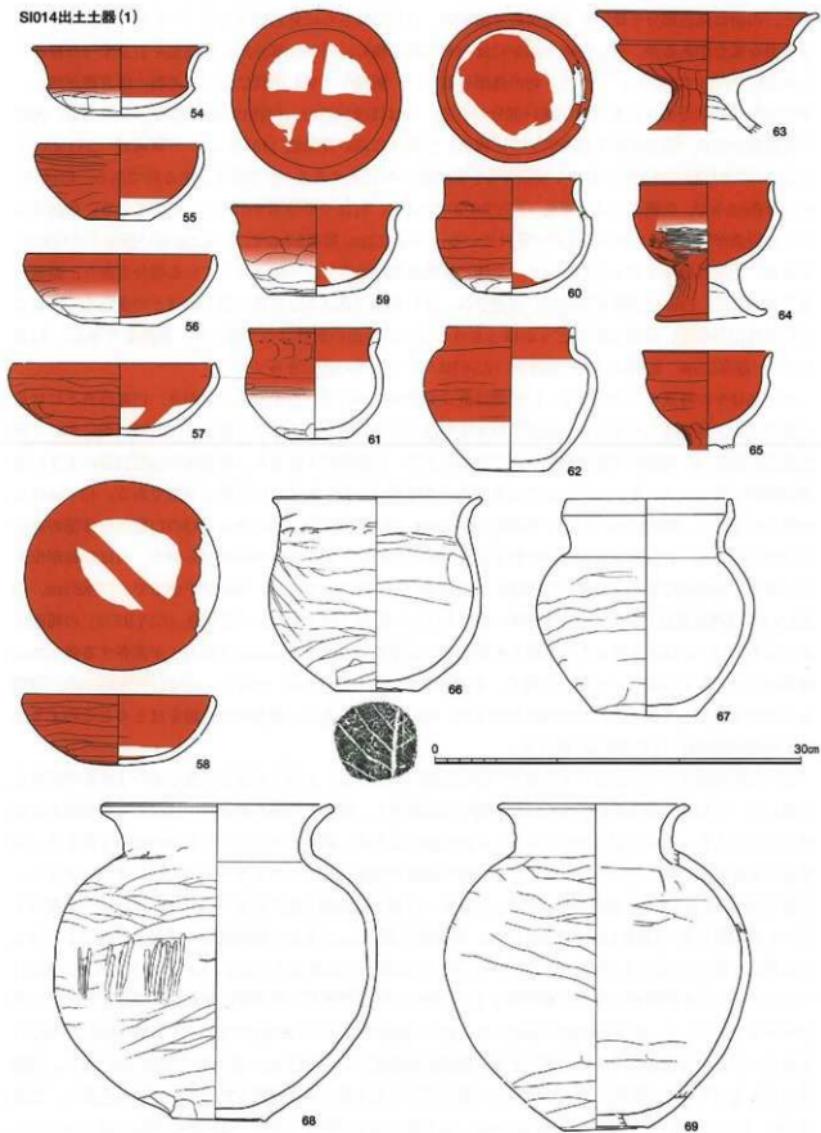
第21図 SI001・SI004出土土器

面と、内面は見込部分を除いて赤色塗彩を施すが、40だけはさらに見込部分にも「-」の赤色塗彩がある。不鮮明な部分があるが、引き始めの部分には色を鮮明に残し、引いた部分からは穗先を引きずった程度にしか痕跡が残っていない。また39・42の体部外面には、断面が「V」字状になった刃物の研ぎ跡が残り、39には厚みの3分の1に及ぶほど深い部分がある。39はほぼ完形で、口径15.1cm、器高5.6cmになる。内面の見込部分には、螺旋状に工具のアタリが残る。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）～黄褐色（2.5YR5/4）である。40は体部上半を約4分の1欠損する。39は他の坏に比べると、やや深みがある坏である。口径14.2cm、器高6.5cmで、色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）である。41はやや小ぶりの坏で、完形である。体部側面に一部炭素が吸着し、下半部は器面が荒れている。口径12.3cm、器高5.7cmで、色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）である。42は口縁部を約3分の2欠く。全体に被熱痕跡が顕著で、一部赤化している部分もあり、器面の荒れが著しく、内面は器壁が薄膜状に剥離する。なお内面の見込部分には、径2cmほどの赤色塗彩に似た淡い痕跡が残るが、塗彩痕跡かどうかはつきりしない。外面の調整はヘラ削り後、無調整である。口径14.1cm、器高5.5cm、色調はにぶい黄橙色（7.5YR6/3）で、粗い砂粒を多く含む。

43～45はやや特異な器種になる。口縁部は直立気味かやや外反しながら立ち上がり、口縁部直下には鋭い稜があり、体部は丸みをもち、底面は小さな平底にしている。外面の上半部から口縁部内面にかけて赤色塗彩が施され、外面の調整は坏類と同じ手法による。口縁部がすぼまり、球胴状の体部内部に大きい空間が確保されていることから、ここではとりあえず短頸壺としておく。いずれも完形である。43・44はほぼ同じ大きさで、口径9.7cm～9.9cm、器高8.4cm～8.6cm、体部最大径12.5cmになる。43の口縁部と体部のあいだで強く屈曲し、特徴的である。43は胎土に粗い砂粒が非常に多く器面がややざらつき、44は砂粒が少なく、滑らかな器面である。なお44の内面には炭化物がこびりついている。45はやや小型で、口径8.1cm、器高8.1cm体部最大径11.1cmになる。色調はいずれもにぶい褐色（7.5YR5/4）～灰褐色（7.5YR5/2）の範囲におさまる。46・47は粗く削ったヘラ削り痕跡をそのまま器面に残す。46は約6分の1が遺存する鉢である。体部が逆「ハ」の字状に、直線的に開く。色調は明赤褐色（5YR5/6）である。47は口縁部を欠き、体部も4分の1ほどを欠損する。やや肉厚の作りで、内面の調整も粗く、成型時の痕跡をほとんどそのまま残す。色調は明褐色（7.5YR5/6）になる。

48～53は壺類で、48・49はやや小型で、53は大型の壺になる。53は上半部を消失しているので不明な点が多いが、それ以外の壺はいずれも口縁が緩やかに外反し、頸部と体部の境がやや括れる。最大径がほぼ体部中位にあり、体部の形状は球胴状もしくは鳩胸状になる。調整は体部上部を横方向のヘラ削りで、底部近くを縱方向のヘラ削りを行っている。48は口縁部が器高に比べて高く立ち上がる。ほぼ完形である。口径13.3cm、器高14.2cm、体部最大径13.8cmになり、口径と体部最大径にあまり差がない。49は上半部の4分の1を欠損する。口径13.8cm、器高15.3cm、体部最大径16.0cmになる。被熱痕跡が器高の3分の1より上の器外面に顕著で、赤化し、器面が荒れている。胎土には細かい砂粒を多く含む。色調は暗赤褐色（5YR3/4）である。50は上半部の約4分の3が遺存する。口径は14.6cmである。器外面にやや被熱痕跡をとどめ、器面がやや荒れている。胎土には粗い砂粒を多く含み、色調はにぶい黄橙色（5YR4/6）～灰黃褐色（10YR4/2）である。51は上半部が約4分の1遺存する。計測値は推定で、口径17.3cm、体部最大径19.2cmになる。口縁部の立ち上がりはやや直線的で、ヨコナアの弱い部分に粘土紐の接合痕跡を残す。52はほぼ完形で、口径16.7cm、器高25.8cm、体部最大径24.0cmになる。底面近くに被熱痕跡を残し、使用時に支脚があたっていたためであろう、底部外面に半円形に変色した部分がある。また体部側面には、ヘラ削りでほとんど消され

SI014出土土器（1）



第22図 SI014出土土器（1）

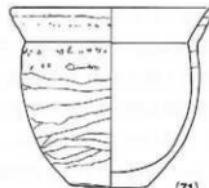
SI014出土土器(2)



(70)



SI008出土土器



(71)

0 30cm

第23図 SI014(2)・SI008出土土器

てしまっているが、縦方向に縄を押捺したような痕跡がところどころにある。色調は明褐色(7.5YR5/6)である。53はかなり大型の壺の部分的な資料で、体部最大径は49cm以上はある。上半部については同一個体と思われる破片資料を確認できなかったので、まったく不明である。遺存している範囲には被熱痕跡はなく、器面は平滑である。また内面も横方向に入念なナデを行っている。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)～明赤褐色(5YR5/6)である。

SI014 (第22・23図54～70, 図版10・11)

54～58が壺で、いずれも赤色塗彩が行われている。54は平底で、口縁部が器高の2分の1以上あり、強く外反する。完形である。口縁部と体部の境の稜は鋭く、体部をヘラで削った生地が、一部、口縁部側にめくれ返っている。また口縁端部も短く折り返して玉縁状に始末し、全体に精緻な作りである。なお内面見込とその周間に、赤色塗彩の色調とは異なる、橙色(5YR6/6)の塗彩痕跡が、赤色塗彩に上書きされたように残る。見込部分は「」字状になり、「-」と同じ痕跡だとすれば、色調の異なる顔料、あるいは化粧土で「-」を書き加えたことになる(図版10)。口径14.4cm、器高11.3cmである。胎土には砂粒が多く含み、粒径1mmの赤色粒をやや多く含むのが特徴である。55～58は平底で体部に丸みをもち、口縁端部がわずかに内湾する。いずれも完形に近く、57・58が5分の1程度の欠損部分がある。55は口径13.2cm、器高6.2cmで、口径に比べて器高が高く、深みのある壺である。56・58は口径15.3cm、器高5.7cm～5.8cmで、ほぼ同寸法になる。57は口径16.4cm、器高5.8cmで、口径がやや大きくなる。内面の赤色塗彩は57・58の見込に「-」があり、56は内面全面、55は見込を除いた部分にある。

59は鉢で、口縁部が外反し、大きい底部を作り出している。完形である。外面の口縁部以下は、被熱で焼け、器面と赤色塗彩が剥落している部分がある。内面の見込には「+」の赤色塗彩があり、さらに細い穂先で、淡橙色(5YR8/4)の顔料で塗彩した痕跡を確認できる。口径13.8cm、器高7.4cm、体部最大径13.8cmになる。色調はにぶい橙色(5YR7/4)である。60は短頸壺で、ほぼ完形である。器高に比べ口縁部が高く、口縁部と体部の境に明瞭な稜を作り出す。口縁端部も短く折り返し、54と同じ成形手法がうかがえる。内面の見込には、赤色塗彩で長円形を描いている。口径11.0cm、器高9.5cm、体部最大径12.7cmになる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)～灰褐色(7.5YR4/2)である。胎土には砂粒を多く含む。61は口縁部が緩

やかに「く」の字状に屈曲し、体部にやや丸みをもつ、短頸壺である。完形である。内面の見込部分は煤けて黒くなっている。外面上半から、口縁部内側にかけて赤色塗彩が施される。口径10.5cm、器高9.0cm、体部最大径10.7cmで、口径と体部最大径がほぼ同じになる。色調は明褐色（7.5YR5/6）である。62は上半部を約3分の1欠く、短頸壺である。最大径が体部上位にあり、鳩胸状の体部である。口縁部と体部の境には明瞭な稜をもつ。外面上半部から口縁部内側にかけて赤色塗彩を施す。口径は推定で10.3cm、器高11.8cm、体部最大径14.1cmになる。色調はにぶい赤褐色（5R4/4）である。

63～65は高坏になる。63は脚部の裾を欠損する。坏部の形態は54の坏の口縁部をさらに強く外反させた形態に似る。口縁部と体部の境の稜は鋭く、口縁端部はわずかに折れ返っている。口径は17.8cmである。胎土には白色系の砂粒を非常に多く含む。色調は橙色（5YR6/6）である。64は60の短頸壺を、縱方向に一回り小さくし、それに短い脚部を付けた形態である。脚部の裾端部をやや欠く、ほぼ完形である。脚部内面を除いた全面に赤色塗彩が施される。坏部外面には横・斜め方向に、断面「V」字状になった刃物の研ぎ跡を残し、その周囲の赤色塗彩は消滅している。口径11.0cm、器高11.3cm、底径9.1cmになる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）である。65は坏部のみ遺存する。口縁部と体部の境には緩やかな稜をもつ。脚部との接合部は細く、華奢な印象をうける。脚部内面を除く、残っている範囲には赤色塗彩が施され、その色調はやや橙色がかっている。口径は10.4cmである。色調は橙色（5YR6/6）である。

66・67は小型の壺である。66は上半部を約3分の1欠損する。口縁部は緩やかに外反し、体部にやや丸みをもつ。体部最大径と口径にあまり差がなく、体部最大径は中位よりやや下にある。側面の片側に顕著な被熱痕跡を残すが、全体に器面は荒れている。底面に木葉压痕を残す。口径16.8cm、器高15.8cm、体部最大径16.6cmになる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）～明褐色（7.5YR5/6）である。67はほぼ完形で、口縁部の作りが特徴的である。体部から「く」の字状に開いた口縁は、端部で内反する。体部は底部から直線的にのびて、体部最大径が体部の中位より上にあって、やや鳩胸状の形態になっている。被熱で器面が荒れ、胎土には砂粒を多く含んでいるために、器面がざらつく。口径13.3cm、器高17.7cm、体部最大径17.8cmになる。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）～にぶい褐色（7.5YR5/4）である。

68・69は球胴状の壺で、68はほぼ完形で、最大径は体部中位にあり、その部分が左右に強く張り出す。器面調整は横方向にヘラ削りを行い、部分的にミガキ調整を加え、器面にはにぶい光沢が部分的にある。また底面の周縁が迫り出し、やや上げ底気味になる。被熱痕跡はほとんど確認できない。胎土に砂粒を多く含む。口径18.3cm、器高26.0cm、体部最大径26.4cmになる。色調は橙色（7.5YR6/6）である。69は3分の1を欠損する。最大径は体部中位より上にある。被熱痕跡は体部中位に一部あるが、さほど顕著ではなく、器面のヘラ削り調整痕にはにぶい光沢がある。内面は器面が痘状に剥落している部分がある。口径は推定で14.9cm、器高26.7cm、体部最大径25.1cmになる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）である。

70は単孔の把手付壺で、ほぼ完形である。体部は底部からほぼ直線的に逆「ハ」の字状に開き、口縁部がやや外側に開く。孔部にいくにつれ器壁が薄くなり、孔端部は3mm程度の厚みしかない。把手は接合時の観察で挿入式¹³であることを確認しているが、器面の内外に、その痕跡をまったくとどめていない。左右の把手は、径3cmほどの棒状にした粘土を、器面にたいしてほぼ直角に挿入し、それぞれ外側を上方に折り曲げ、接合部には粘土を断面三角形に追加して補強している。上面觀は橢円形に近く、把手の位置はその中心線からずれる。また把手の左右の位置関係も、対向位置から約14°ずれ、体部の形状や把手の位置関係がかなり歪である。器面の一部に橙色の火棒痕跡をとどめる。口径28.0cm～30.1cm、器高27.7cm、孔径は

8.6cmで、ほぼ正円である。色調は褐色（7.5YR4/3）～黒色（7.5YR2/1）である。

S1008 (第23図71, 図版11)

1点だけ図示した。71は小型の壺で、ほぼ完形である。口縁部は器高に比べて高く立ち上がり、「く」の字状に外反し、最大径が口径にある。体部の調整はヘラ削り後に丁寧にナデしており、ミガキ効果でにぶい光沢を発している。また口縁部には粘土紐接合痕が残る。被熱の痕跡はさほど顯著ではないが、内面の上半は黒く焼けている。口径16.5cm、器高14.7cm、体部最大径14.6cmになる。色調は明赤褐色（5YR5/6）である。なお71以外の出土資料は弥生土器も含めてほとんどが小片の資料だが、なかに1点だけ7世紀後半～8世紀代と考えられる壺の小片が2点あるので、あるいは8世紀代まで降る資料かもしれない。

D 奈良・平安時代

奈良・平安時代の堅穴住居はB地点・C地点に8軒あるが、総じて土器類の出土量は多くない。

S1003 (第24図72～74)

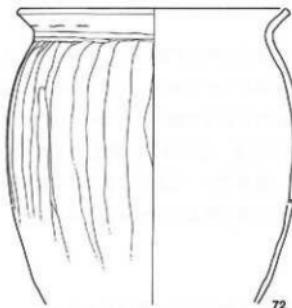
長胴形の壺のみ、3点を図示した。72は上半部が約3分の1遺存する。口縁部は「く」の字状に、直線的に外反する。最大径は体部のかなり上位にある。器面調整は継のヘラ削り後にヘラナデを行っている。器面外面には被熱痕跡をほとんどとめていないが、内面には器面が痘瘻状にはじけた痕跡がある。計測値は推定で、口径22.4cm、体部最大径24.0cmになる。色調は明赤褐色（5YR5/6）～灰褐色（5YR4/2）である。73は上半部が約5分の4遺存する。口縁部は体部から緩やかに曲線を描くように外反し、端部には左右から生地をつまみ上げて突帯状に作り出している。体部はやや丸みをもつ。口径18.2cm、体部最大径19.9cmになる。色調は褐色（7.5YR4/6）～暗褐色（10YR3/3）である。74は底部が残る資料である。体部を縱方向にヘラ削りし、底部近くを横方向に削って調整している。底径は6.2cmである。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）～褐色（10YR4/6）になる。なおその他の破片資料のなかには、壺類等の破片は出土していない。

S1015 (第24図75～82, 図版12)

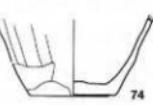
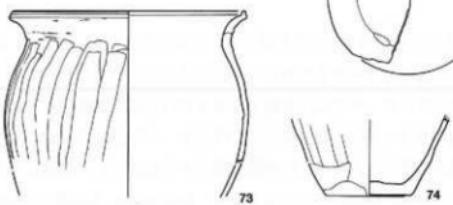
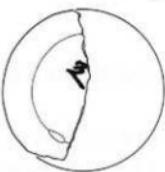
75・76は須恵器の蓋と壺である。75はほぼ完形である。天井部は回転ヘラ削りによって平面を作り出し、その中央に擬宝珠形のつまみをもつ。つまみの頂部は縁部とほぼ同じ高さで、扁平になる。縁部は強く曲がって、下方に鋭く突出する。口径17.5cm、器高4.5cmで、やや大型の部類に属す。色調は灰白色（5Y7/1）である。胎土には粒径1mm～5mmの長石粒をやや多く含み、径1mm～2mmの黒色斑文を確認できる。なお雲母粒・海綿骨針は確認できないので、筑波山麓以西の製品であろう。76は体部が直線的に逆「ハ」の字状に開き、下端部の底部と体部の境付近が、やや鋭く稜になって突出するのが特徴である。それより以下は丸みをもって底面にいたる。約5分の1が遺存する。計測値は推定で、口径12.9cm、器高3.8cm、底径8.0cmになる。暗灰黄色（2.5Y5/2）である。胎土には雲母粒・長石粒を非常に多く含み、赤色粒を少し含む。胎土・色調から常陸産の須恵器と考えられる。

77～82が土師器壺で、77・78が非口クロ成形の壺である。78は底面の中央付近に「足」と墨書している。約3分の1が遺存する。底面はほぼ平底だが、体部と底部の境は不明瞭である。体部はやや丸みをもつ。内面を入念に磨き、平滑になっている。本来は全面に赤色塗彩が施されたものと思われるが、かなり生地の色調に馴染んでしまっている。計測値は推定で口径12.7cm、器高3.9cmになる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）である。胎土に白色砂粒を非常に多く含む。78は6分の1ほどが遺存する。体部に丸みをも

SI003出土土器



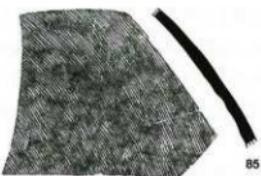
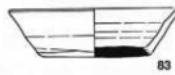
SI015出土土器



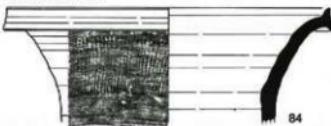
0

30cm

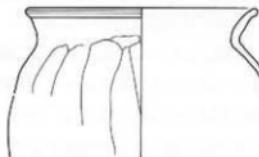
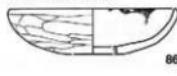
SI016出土土器



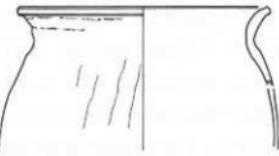
SI005出土土器



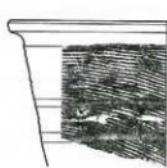
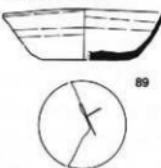
SI011出土土器



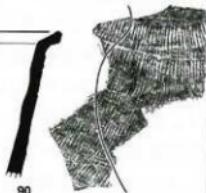
SI007出土土器



SI018出土土器



SI013出土土器



第24図 SI003・SI015・SI016・SI005・SI011・SI007・SI018・SI013

って逆「ハ」の字状に開き、底面を平底に削りだしている。内面は磨き、外面はヘラ削りのままで、砂粒が多いためか器面がざらついている。計測値は推定で口径12.5cm、器高2.9cm、底径は7.6cmになる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）である。

79～82がクロ成形の壺である。79は体部下端から底面にかけて回転ヘラ削りで調整し、底面の中央部にかけてやや突出する。計測値は推定で口径13.1cm、器高4.1cm、底径8.0cmになる。色調は明赤褐色（5YR5/6）である。胎土に白色系の砂粒を非常に多く含み、黒色粒を少し含む。80～82は内外面に赤色塗彩を施す。80は約5分の1が遺存し、体部と底部の境付近は器面がやや剥落している。器面は非常に滑らかである。計測値は推定で口径12.9cm、器高3.7cmになる。色調は灰黄色（2.5YR7/2）である。81は8分の1程度が遺存する。内面の上半部には入念な磨きを行って、にぶい光沢がある。計測値は推定で口径13.3cm、器高3.8cm、底径8.5cmになる。色調は橙色（7.5YR6/6）である。82は底部から下半部の残る資料である。静止系切りで切り離し後に、底面から体部下端部に回転ヘラ削りを施している。被熱のためか、部分的に赤化しており、器面も荒れている。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）である。これら以外にも図示はできないが、赤色塗彩を施した壺の破片資料が数個体分はある。

SI016（第24図83）

1点だけを図示した。83は約3分の1を欠く須恵器壺である。体部は底部からやや丸みもって逆「ハ」の字状に開き、体部と底部の境には76と似た、やや突出する稜がある。底面は一方向からの手持ちヘラ削りを行っている。計測値は口径14.0cm、器高4.0cm、底径8.7cmで、口底径比は1.6、径高指数は29になる。76とかなり似通ったプロポーションをもつ。器面の内外が焼けており、底面内部は器面が剥落している。色調は灰黄色（2.5YR6/2）で、軟質である。胎土に白色砂粒を多く含み、細かい雲母粒・海綿骨針を含む。また黒色斑文も確認できる。胎土・色調から常陸産の須恵器であろうか。なお出土した破片資料の多くは壺類がしめるが、そのなかに赤色塗彩土師器壺、長石粒・雲母粒を多く含む須恵器壺の小片などがある。

SI005（第24図84・85、図版12）

破片資料を2点図示した。84は壺の頸部を残す資料で、約5分の1が遺存する。器面の釉色は、中世陶器を思わせる、チョコレート色に近いのが特徴である。口縁端部を上下に鋭くつまみ出して、それぞれの断面が2等辺三角形になる。細かい平行叩きで成形し、それをナデ消している。外面は色調が鉄釉系の灰赤色（10YR4/2）の釉に覆われ、口縁部にはにぶい光沢がある。頸部には均質な釉が定着している。口縁部内面は釉の色調が一定ではなく、上半部には浅黄色（2.5Y7/3）の釉色が地となって灰赤色の釉と混在し、下半部には灰赤色の釉が安定してかかっている。芯部は黄灰色（2.5Y6/1）で、黒色斑文がある。硬質に焼き締まっている。口径は推定で26.5cmである。釉色・胎土から猿投窯の、赤茶系の釉色を志向した、本格的な施釉陶器成立直前の陶器の一種と考えられる。同系統の資料はSI018の出土資料のなかにもある。85は外面に平行叩き目が残り、内面は同心円文の当て具痕をナデ消している。色調は灰白色（2.5Y6/1）である。出土資料としては、ほかに土師器壺・瓶類に混じって、クロコ土師器壺の小片が数個体分ある。

SI011（第24図86・87）

86は、やや丸底の非クロコの土師器壺である。約4分の1が遺存する。口縁端部に油煙墨が付着する。計測値は推定で、口径13.6cm、器高3.7cmである。色調はにぶい黄褐色（10YR7/4）である。87は土師器壺の上半部が約4分の3残る資料である。口縁端部がやや肉厚になる。計測値は推定で、口径18.3cm、最大径は体部の上位にあり、体部最大径22.0cmになる。被熱で全体に変色しているが、およそ色調はにぶい褐

色（7.5YR5/4）である。また図示できなかったが、土師器壺で底部を除く下半部が残る資料が1点あった。胎土に粗い砂粒を多く含むこともあって、被熱によってかなり脆弱になっている。また坏類では、赤色塗彩したロクロ土師器壺の底面が残る資料が1点あった。

SI007（第24図88、図版12）

土師器壺を1点図示した。88は上半部が約3分の2遺存する。口縁端部を上方につまみ上げて、わずかに突出し、外側には面ができる。口径は20.1cmで、最大径は体部上位にある。色調は赤褐色（2.5YR4/6）になる。そのほかの出土資料としては、外面に赤色塗彩した非ロクロの土師器壺の小片が1点ある。

SI018（第24図89・90、図版12）

89は須恵器壺である。約5分の3が遺存するが、焼成時の焼き歪みがあって、かなり歪になっている。体部は逆「ハ」の字状に開き、口縁部がやや外反する。体部下端から底面は回転ヘラ削りを行い、底面中央には狭い範囲なので不確かだが、回転糸切り痕を残しているかもしれない。また底面中央には「+」の範記号がある。計測値は推定値も含めて、口径12.5cm～13.3cm、器高4.2cm、底径は6.8cm～7.0cmになる。胎土には白色系砂粒をやや多く含み、海綿骨針・雲母粒を少し含む。色調は灰黄褐色（10YR5/2）～黄灰色（2.5Y6/1）で、やや軟質な焼きである。胎土・調整から常陸産の須恵器であろう。90は口縁部が短く外反し、体部は直線的に立ち上がってバケツ状になる、甌あるいは甌である。体部は平行叩き目で、横方向の叩き目として表れる。口径は推定で25.6cmである。胎土には長石粒と大粒の雲母粒を多く含む。色調は灰色（7.5Y5/1）で、胎土・色調から常陸産の須恵器であろう。図示した以外にロクロ土師器壺の破片資料が数点あり、底面に回転糸切り痕をそのまま残すものと、底面と体部下端を手持ちヘラ削りで調整するものとがある。なお赤色塗彩したロクロ土師器壺の破片が1点あるが、遺構に直接伴うものではないであろう。なお前述したようにSI005出土の84の壺と同系統になる猿投産施釉陶器初期段階の破片資料が1点ある。小片のために図示していないが、器面は平行叩き目で成形し、その上に黒褐色（2.5Y3/1）の透明感の強い釉薬がかかる。とくに叩き目の窪みには、釉色が濃んでさらに黒みを増す。釉はガラス質で、光沢がある。内面には自然釉が薄くかかり、黒色斑文も多く確認できる。硬質に焼き締まっている。10B90出土資料との接合資料である。

SI013（第24図91）

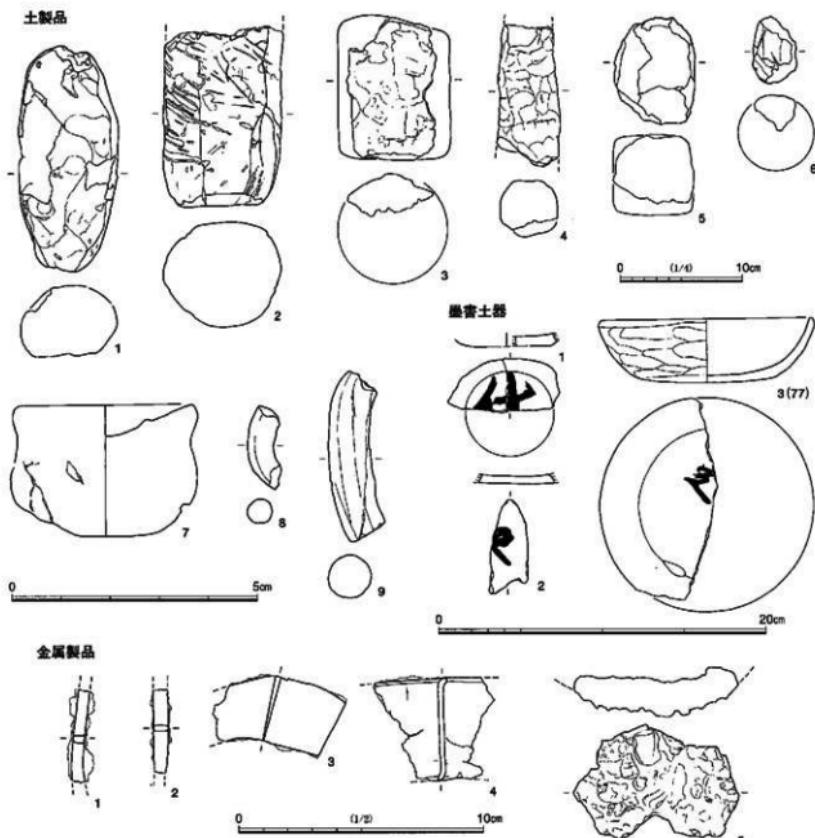
91は体部に丸みをおびる須恵器壺で、肩部はややなで肩気味である。体部には平行叩き目を施す。器面は黒褐色（2.5Y3/1）、芯部は黄灰色（2.5Y4/1）である。やや硬質な焼き上がりである。胎土・色調から千葉市域産に代表されるような地元産の須恵器であろう。ほかに須恵器・土師器の小片が20点ほどあり、住居の時期とはずれるが、赤色塗彩を施した非ロクロ・ロクロ土師器などもある。

第2節 土製品

土製品のほとんどは住居から出土した支脚がしめ、墨書き器が3点あった。

A 支脚（第25図1～6、図版13）

1はSI010の炉内から出土したものである。本来はいくつか組み合って使用されたものであろう。コップベパンを押しつぶしたような形状で、全長は18.6cmになる。部分的に欠損部分はあるが、重量は817gになる。図上で右反面が、被熱によって赤化しているものの、器面の荒れは少ない。胎土には細かい砂粒を多く含み、器面は平滑である。2は片側の端部を欠く、円柱形の土製支脚である。表面には禾本科植物の



第25図 土製品・墨書き器・金属製品

基を斜めに押し付けたような痕跡があり、簡単に面取されている。ただし胎土の内部には纖維を混和剤として混入した形跡は確認できない。表面はそれなりの強度を保っているが、内部はずくずくである。胎土には砂粒を多く含み、表面がざらついている。SI004のカマド内から出土した。重量は1,147 gになる。3は径9 cm前後の円筒形土製支脚の部分的な資料である。上下の端面の一部を残しているので、全高は12 cm前後になる。内部にはスサの混入が認められる。砂粒を多く含み、表面にはカマドの構築材がこびりついている。重量は217 gである。SI008のカマドの火床部から横倒しになって、出土したものである。4は縦長の截頭円錐形に近い形態の支脚で、両端を欠く。表面には指頭圧痕が多く残り、でこぼこしており、手のひらのなかで握るように製作されたことを想像させる。胎土には大粒の砂粒を非常に多く含むが、表面は比較的平滑で、被熱痕跡もあまりない。重量は243 gである。SI001のカマドの左斜め前の、床面よりやや

浮いた状態で出土しているので、カマド内から抜かれていることになる。5は角柱形支脚の部分的な資料である。脆弱なせいもあると思うが、全体に摩耗が著しい。胎土は3に似る。SI008から出土したものである。重量は191gである。6は支脚にしては精緻な作りなので、高壺の円柱状脚部の可能性もあり判断に迷うが、赤色塗彩痕跡がないので、ここでは支脚としておく。遺存している範囲では、径は6.5cm前後になる。重量は43gになる。SI003から出土したものである。

B ミニチュア土器（第25図7）

7は分厚い底部から口縁部がわずかに張り出す。したがって内部はやや窪む程度の空間しかない。口縁部はほとんどを欠損している。底部外面はややごつごつしている。被熱痕跡がやや残る。SI001から出土したものである。

C 棒状土製品（第25図8・9、図版13）

8・9は弓状にやや湾曲する、棒状になった土製品である。いずれも表面は平滑にナデられている。それぞれ端部を欠失しているために全長は不明である。

第3節 墨書き土器（第25図1～3、図版12）

1は土師器壺の底部外面に「代」と考えられる字体の上部が残る資料である。かりに「代」とした場合、5画目の点の打点が不明瞭で、3画目の跳ねと同一になっている。墨痕はやや淡くなっている。底面には回転糸切り痕が無調整のまま残る。SI005の出土資料である。2は器面にほとんど曲率がなく、内面が平滑なので、壺の底面に墨書きされたものと思われる。字体の半分近くを欠損しているので判読はむずかしいが、3の「足」の字形なども候補の一つになるのかもしれない。SI013から出土した。3(77)は、非クロ上師器壺の底面に、比較的鮮やかな墨痕で「足」の一字が残るものである。

第4節 金属製品（第25図1～4、図版13）

金属製品としたものは、鉄製品が9点ある。なかにはB地点西端の10C52から出土した、厚みのある製品の残欠が4点ある。これらは銹化がさほど進行していないので、新しい時期の所産と考えて、今回の報告からは除外した。なお集落でしばしば散見する刀子などは、今回の資料のなかには見あたらなかった。

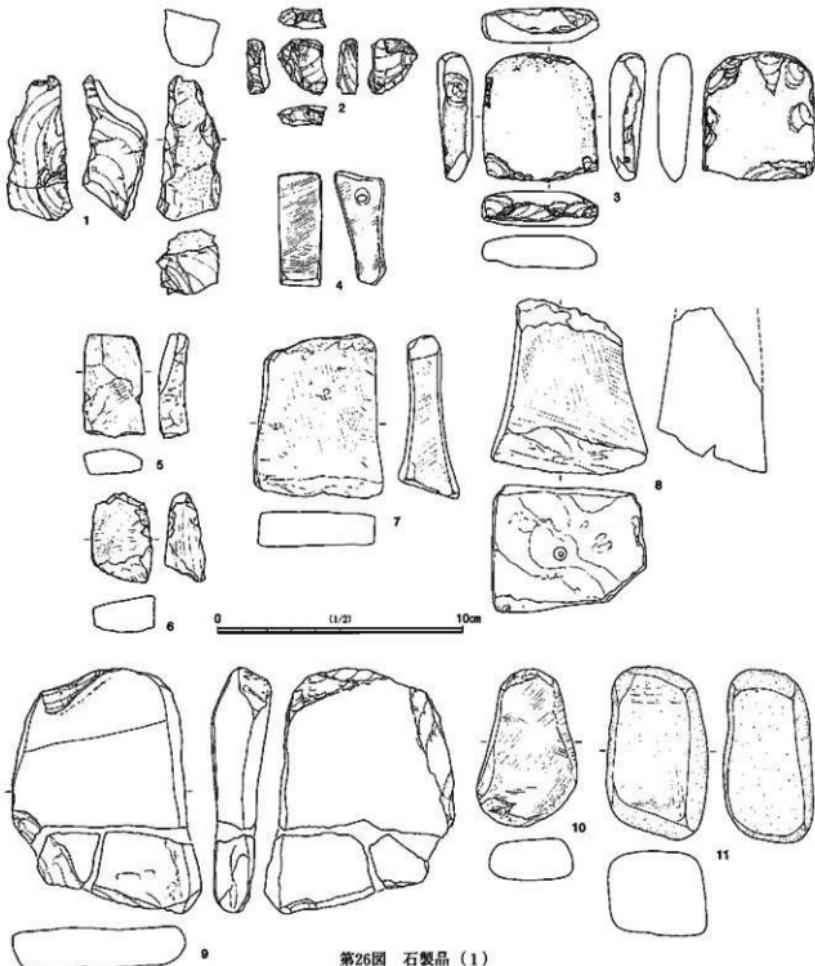
1・2は鉄錆の棒状部を残す、部分的な資料である。2は断面がやや長方形になるので、鉄錆ならば刃部が片刃箭になるであろう。また工具の一種になる可能性もある。X線を透過しても、いずれにも突起のような痕跡は確認できなかった。1はSI016、2は10B92から出土したものである。3は薄板を素材とした草刈鎌である。先細りしているので、先端部に近い資料である。SI014から出土したものである。4はやや湾曲した、厚手の板状になった製品である。上・下端を短く交互に折り返している。表探資料である。5は椀形鍛冶滓の部分的な資料である。下面が遺存し、5mm程度の木炭痕が残り、細かい気孔を残す。全体に銹化が進行している。重量は73.06gである。10C52から出土したものである。

第5節 石製品（第26図1～4、図版13）

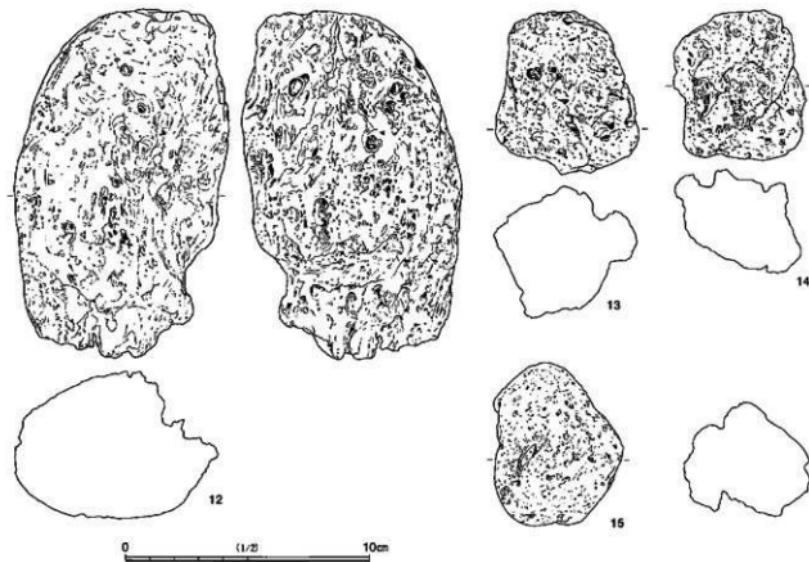
1は住居内から出土した、礫の表面に近い部分を使用した石核で、大形剥片の再利用かとも思われる。裏面に礫面を残す。大きく横幅に剥がされた剥離面を打面として2～3面、小さい剥片を剥ぎ取った、調整のための小剥離も認められる。旧石器時代の石核である可能性が強い。2は左側側面に沿って調整され

た小剥離痕を確認できる。また右側縁は剥片剥離と同時に折れたものと思われる。縄文時代の所産か。3は弥生時代の扁平片刃石斧の完形品である。刃部を除く各面は、入念な研磨を行っている。研磨痕は非常に細かいが、肉眼で確認できないほどではない。刃部は使用による細かい剥離が生じている。また被熱によって変色した部分があり、にぶい赤褐色(5YR4/3)に変色している部分がある。

4～9はいわゆる砥石で、4～6がやや小型で、7・8は撥形で大型な部類に属する砥石である。4には懸垂用の穿孔が1か所貫通している。5・6の片面には、石材の切断痕が、粗い条痕となって残る。8は先端部を欠損後も研ぎ面を作り出しており、その中央部には深さ4mmほどの深さまで穿孔している。9は



第26図 石製品(1)



第26図 石製品（2）

目の粗い、扁平な砂岩を砥石として利用したものである。10は扁平な捺円窓を素材としている。11は磨石で、敲打痕が残る。12～15は軽石で、いずれも多孔質な軽石を使用している。12がもっとも大きく、遺存部分だけで14cm近くあるので、本来は全長が20cm程度はあったのであろう。全長に比べて扁平なので、細工痕跡ははっきりしないが、両面を成形して薄くしたものであろう。

注1 稲田孝司 1976 「遺物」「飛鳥・藤原宮調査報告Ⅰ」 奈良国立文化財研究所

第1表 石製品観察表

番号	出土番号・ 出土地点	種 别	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
1	SI016-1	石核	6.02	2.57	2.25	35.93	珪質頁岩	旧石器時代か?
2	SI013-1	リタッヂドフレイク	2.40	1.86	0.85	3.52	黒曜石	縄文時代か?
3	SI012-31	扁平片刃石斧	5.22	4.65	1.44	68.81	硬砂岩	
4	SI014-27	砥石	4.46	1.96	1.73	22.23	凝灰岩	穿孔あり
5	SI014-1	砥石	4.25	2.40	1.07	17.87	凝灰岩	
6	SD002-1	砥石	3.68	2.42	1.48	15.27	凝灰岩	
7	SI005B-2	砥石	6.60	5.24	2.34	82.35	凝灰岩	
8	SI017-1	砥石	7.02	6.15	4.83	210.24	凝灰岩	
9	SI010-21	砥石	10.42	7.71	2.08	173.44	砂岩	
10	IIA27-1	砥石	6.45	3.90	1.58	50.83	砂岩	
11	SI005-3	磨石	6.97	3.82	3.65	177.22	安山岩?	
12	SI014-22	軽石	13.86	8.02	6.11	170.89	軽石	
13	SI011-18	軽石	6.79	5.76	5.38	30.94	軽石	
14	SI010-15	軽石	6.20	5.32	4.55	41.63	軽石	
15	SI010-22	軽石	6.76	5.66	4.73	33.86	軽石	

第4章 まとめ

今回の調査は台地上の遺跡のごく一部を調査したに過ぎず、出土資料からも連続性がうかがえるので、遺跡の全体像を素描するのは無理だが、気づいたことについて述べておきたい。

第1節 弥生時代

八幡神社南（1）遺跡では、墓域が主体で生活遺構が少なく、遺構に遺物が伴っていたのが方形周溝墓SS001の1基だけだったのにたいして、八幡神社南（2）遺跡では生活遺構がすべてをしめるために、土器類の出土も多かった。そしてそのほとんどをしめるのが、中期後半の宮ノ台期の特徴を備えた土器群になる。いずれも在地化した要素が強く、なかには頸部に突帯をもつ壺（13）のように、房総半島の特徴の一つといわれているもの例もある¹⁰。ただしもう一つの房総半島の特徴といわれる特殊な羽状縄文を施した例はなく、むしろ斜縄文を多条に施した例（6・7）があり、羽状縄文の段階より後出的な要素をうかがえる。なお今回の資料にも北関東系の資料はほとんどみられないで、宮ノ台期でも終末に近い段階の資料群といえよう。なお（10）の台付と考えられる鉢形土器は、成田市押畠子の神城跡に類例がある¹¹。

第2節 古墳時代

古墳時代の土器については、後期を中心にこれまで共伴する須恵器などをメルクマールにいくつかの編年案が提示され、そこに地域性までが考慮されるようになって、格段と成果をあげつつある¹²。今回の出土資料のなかには明らかに須恵器を作う事例がなく、遺構自体も連続性が希薄なこともあって、それらの成果を援用しながら、各住居出土の土器群について簡単にまとめておきたい。

今回出土した資料は、須恵器模倣壺出現段階からのものになる。もっとも古く位置づけられるのが、SI004・SI014の出土資料で、出土点数が多く、器種も豊富で、良好な一括出土資料となる。壺・高壺類はすべて赤色塗彩され、壺類は体部に丸みをもち、全体に深みがある。なかでも有段口縁の壺（54）は、口縁部の立ち上がりが器高の2分の1以上ある。ただしこの壺も含めて壺類の多くが丸底ではなく、平底に作る点に特徴がある。当該期の山武郡域では丸底の壺が主流であることを考えると、やや異質な土器群といえよう。ただし胎土等には特有な混和材は確認できないので、とりあえずは在地産という枠組みのなかで考えておく必要があるだろう。前代には平底の壺も散見するので、おそらくその系譜が地域的に色濃く残ったのであろう。また器種構成では壺類に加えて、ここでは短頸壺としたもの（43～45・60～62）を伴うのも特徴の一つである。今回の調査資料では、赤色塗彩した典型的なものは、ほぼこの段階で消滅してしまうと考えられる器種である。これも前代の器種の系譜をひくものであろう。

また壺類のなかには内面の見込部分に「+」・「-」を赤色塗彩で書き入れているものが、それなりの頻度で出土しており地域的な特徴である。これまでの成果で、これらの特徴をもつ土器群が木戸川・高谷川の中流域に挟まれた芝山町域を中心に分布することがすでに指摘されているが¹³、今回の調査地はその水系までも越えることになる。分布域については、まだまだ調査資料の地域的・時期的な蓄積精度の偏在性ということとも考慮しなければならないのは事実だが、今回の出土資料は単独の出土例ということでもないの

で、これまでいわれてきた分布域がさらに南に広がることを示唆しているといえよう。

須恵器模倣壺の出現する前後を5世紀末～6世紀初頭というなかでおさえても、これらにはまだ前代的な様相が色濃く残るので、そのなかでも古い段階の資料群と考えておきたい。次の段階に位置づけられるのが、SI001の出土資料になる。資料数は少ないが、壺には赤色塗彩のものではなく、黒色処理したもののがみられるようになる。須恵器模倣壺はやや扁平な底面になるものの、まだ小型化はしていない時期になる。また器種の一部に須恵器蓋を模したと思われる枕状のものが加わるので、これらの土器群については6世紀後半の年代を考えておきたい。

第3節 奈良・平安時代

出土資料は総じて少なく、一概に土器の様相を決めかねる側面もあるが、とりあえず主要な土器群についてまとめておきたい。もっとも古く位置づけられるのが、SI010出土の土師器壺(86)である。底面は平底に近い丸底で、口径にたいして深みがあり、8世紀第1四半期と考えておきたい。ただしSI010からは比較的遺存状態のよい弥生土器も出土しているので、これが遺構の時期を決定するものとはいえない。そして次の段階に位置づけられるのが、住居の規模が似通った、隣接するSI015・SI016の2軒の住居から出土した土器群である。SI016からは、須恵器壺・蓋、そして土師器壺にはロクロ成形で内外面に赤色塗彩したものも出土しており、良好な一括資料になる。須恵器蓋(75)は口径が17.5cmある、やや大形のものである。また須恵器壺は口底径比が1.6、径高指数が29.5で、須恵器の諸特徴をみただけでも、8世紀第3四半期とする特徴をよく備えているといえよう。器面の内外に赤色塗彩したロクロ土師器壺のなかには、須恵器の器形と共通するもの(81)があり、塗彩がない場合でも、(79)の土師器壺のように須恵器壺と共通するプロポーションをもつものがある。またSI016出土の須恵器壺(83)も(76)とほぼ同寸法の須恵器壺になることから、ほぼ同じ年代と考えておきたい。

なおSI005から出土した施釉陶器成立直前の壺口縁部の資料(84)は、部分的な資料で、伴出遺物もないために詳しいことはわからないが、これを単なる須恵器としてみれば、口縁端部の始末の仕方などから8世紀第3四半期を中心とした年代がひとつの候補となるであろう。この種の施釉陶器成立直前段階の製品は、最近県内でもその存在が明らかになってきているが、時期的には8世紀第4四半期以降が主流になるようである¹⁾。それらに照らすと、今回の資料はそれよりもやや古い段階の資料ということになる。

その後、9世紀代まで良好な資料はない。9世紀代ではSI018の資料が該当する。出土した須恵器は焼き歪みが大きく厳密性に欠けるが、底径は口徑のほぼ2分の1になるので、9世紀第2四半期と考えておきたい。なおSI003の出土資料は、壺類等がないためにはっきりしないが、(73)の壺は口縁端部をつまみ上げ、最大径が体部上半にあるので、9世紀前半の所産と考えておきたい。

注1 犬木 努 1992「宮ノ台式基礎考－施文帶の検討を中心として－」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第11号

2 斎藤主悦ほか 1988『押畠子の神域跡発掘調査報告書』(財)印旛都市文化財センター調査報告書第24集

3 小沢 洋 1992「上総地域の鬼高式土器」『月刊考古学ジャーナル』No.342 ニュー・サイエンス社

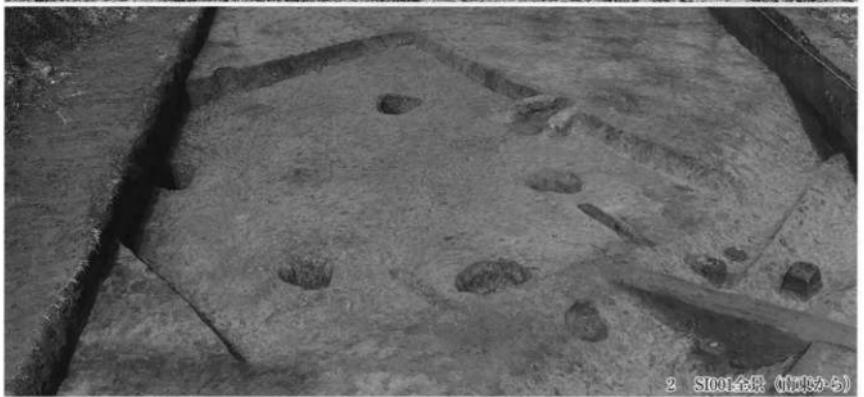
4 福岡 元 1988「古墳時代後期の赤彩土器について(序)」『竹籠』第5号 北総たけべらの会

5 浅利幸一ほか 2003『上総国分寺跡調査報告書IX 市原市稻荷台遺跡』市原市教育委員会

斎藤孝正 2000「越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器」『日本の美術』第409号 至文堂

白井久美子ほか 2004「千葉市親音塚・地蔵山遺跡(3)」(財)千葉県文化財センター

写 真 図 版





1. SI004全景(東から)



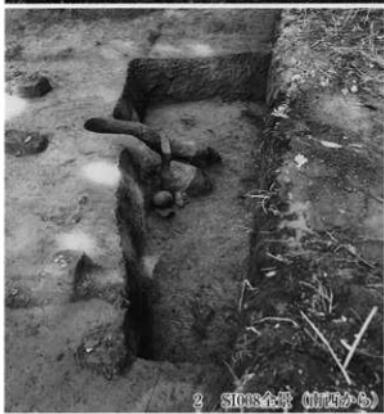
2. SI004カマド全景(南から)

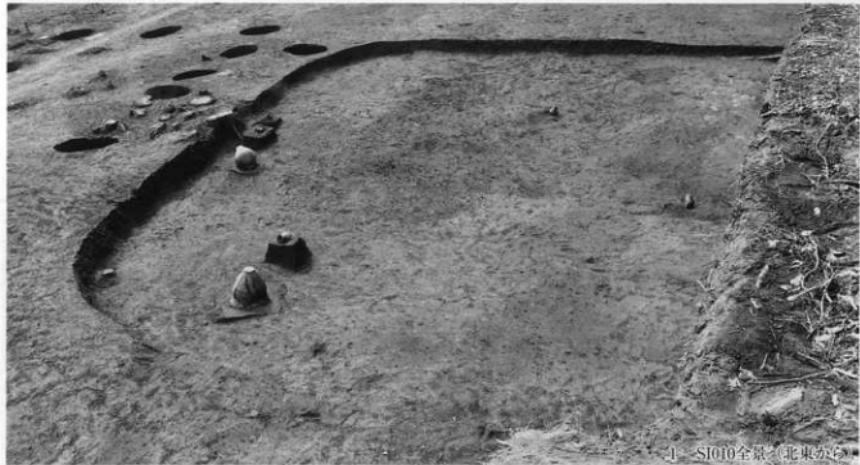


3. SI04植物出土状況(南西から)



4. SI05・SI06全景(南東から)





1 SI010全景(北東方向)



2 SI011全景(南方向)



3 SI012全景(北西方向)







(7)



(6)



(8)



(13)



(10)



(11)



(15)



(14)



(16)



(19)



(23)



(17)



(25)



(26)



(28)

(29)



(30)



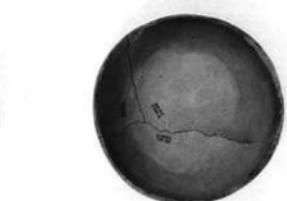
(31)



(36)



(37)



(42)



(40)



(39)



(41)



(45)



(43)



(49)



(44)



(47)





(64)



(65)



(63)



(70)



(70)

(70)



(68)



(69)



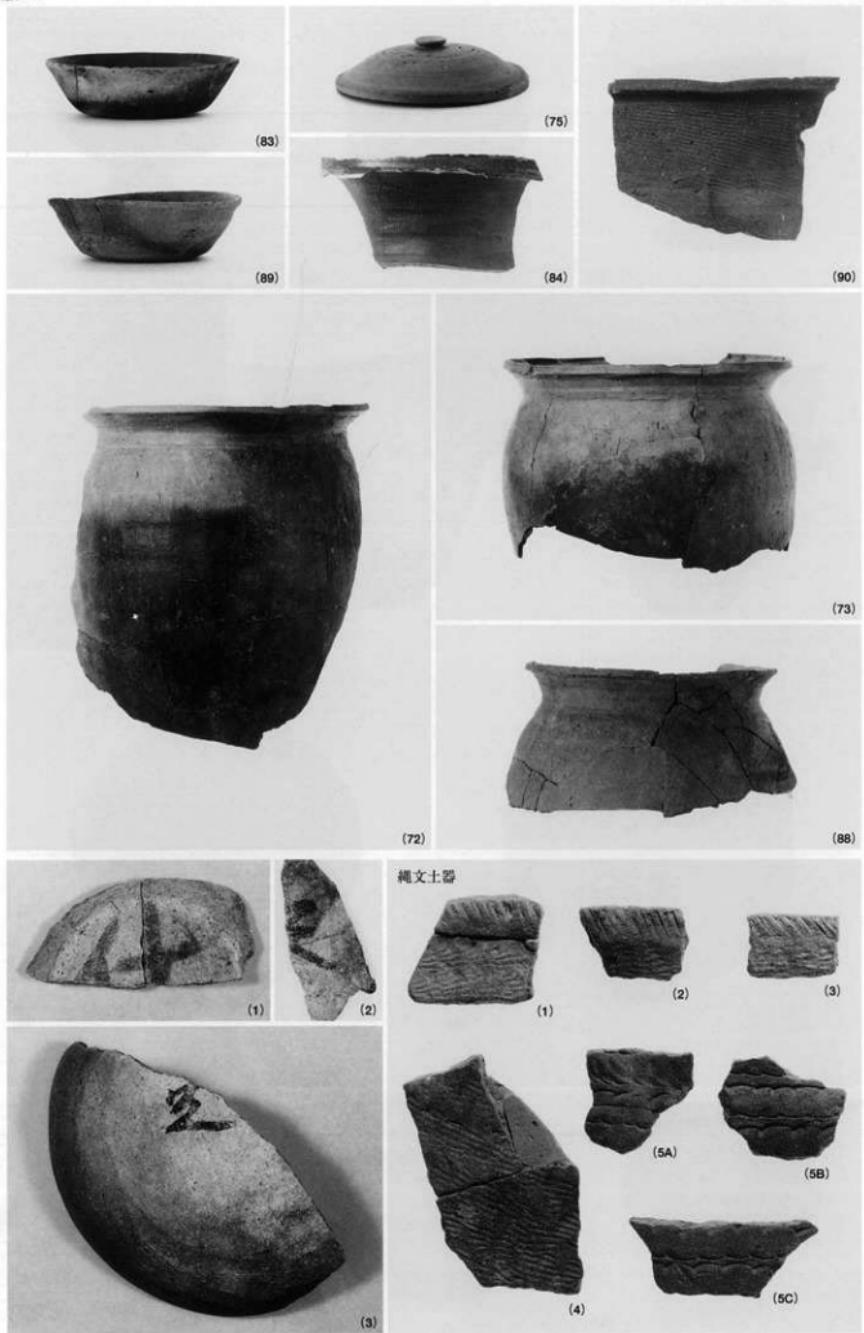
(66)

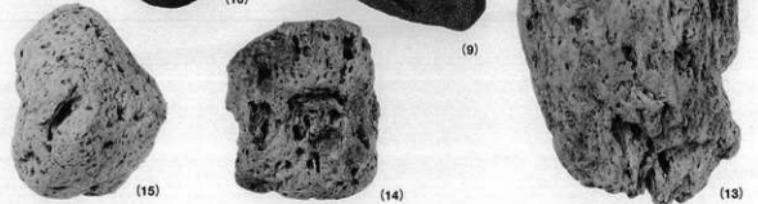
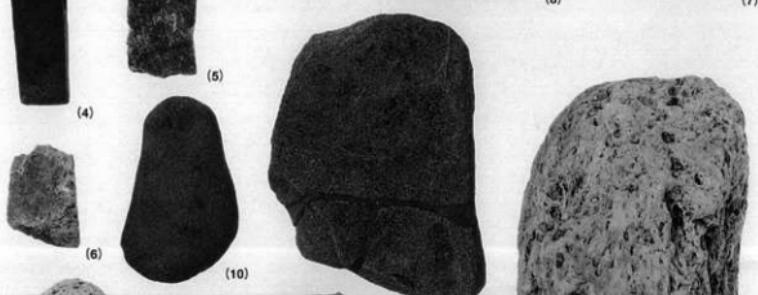
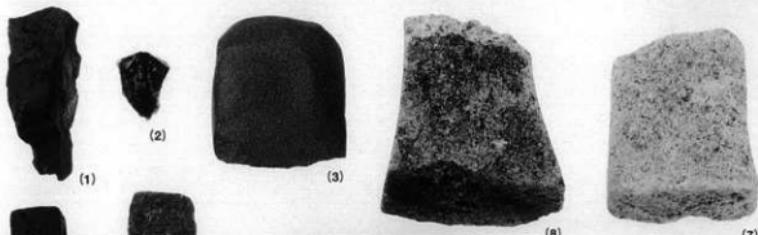
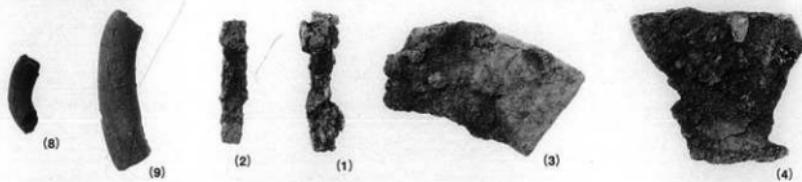
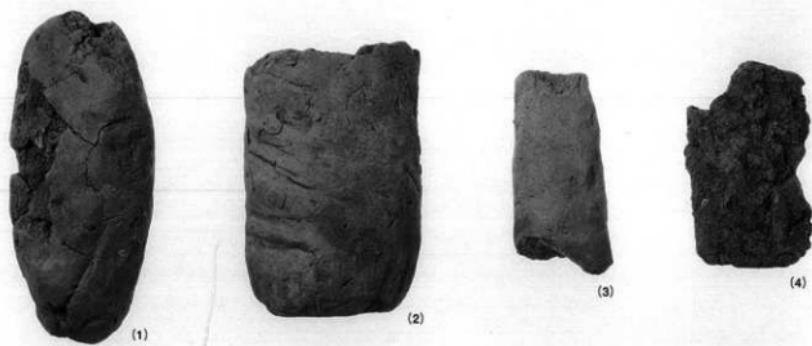


(67)



(71)





報告書抄録

ふりがな	りょうそうのうぎょうすいりじょうだい3ようすいきじょうけんせつこうじまいぞうぶんかさいちょうさはうこくしょ】						
書名	両總農業水利事業第3揚水機場建設工事埋蔵文化財調査報告書1						
副書名	山武郡成東町八幡神社南(1)遺跡・山武郡成東町八幡神社南(2)遺跡						
卷次	1						
シリーズ名	千葉県教育振興財團調査報告						
シリーズ番号	第528集						
編著者名	今泉潔						
編集機関	財團法人千葉県教育振興財團						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市庵渡809-2				TEL.043-422-8811		
発行年月日	西暦2006年3月24日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
八幡神社南(1)遺跡	千葉県山武郡成東町成東字廣台2,344-1ほか	12404 市町村: 遺跡番号 009	35度 51分 57秒	139度 54分 39秒	20040201~ 20040531	1,856m ²	揚水機場建設に伴う事前調査
八幡神社南(2)遺跡	千葉県山武郡成東町成東字廣台3,261-1ほか	12404 013	35度 51分 55秒	139度 54分 49秒	20050201~ 20050325	2,187m ²	揚水機場建設に伴う事前調査
日本測地系による	日本測地系による						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
八幡神社南(1)遺跡	貝塚・ 集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	旧石器集中地点 陥穴 方形周溝墓 堅穴住居 堅穴住居 掘立柱建物 土坑	1地点 5基 3基 3軒 19軒 6軒 2棟 4基	旧石器(リタッヂドフレイク) 弥生土器(中期後半) 土師器・須恵器 墨書き土器 石製品(石錐・石製模造品・磨石等) 土製品(支脚・土玉・管状土錐・瓦塔・瓦等) 金属製品(鉄錐・刀子)	弥生時代中期後半に堅穴住居とともに方形周溝墓が造営され、6世紀代に集落の盛期を迎え、9世紀後半まで断続的に集落が営まれる。	
八幡神社南(2)遺跡	包蔵地・ 集落跡	旧石器時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	堅穴住居 堅穴住居 堅穴住居 掘立柱建物	5軒 4軒 8棟 1棟	旧石器(リタッヂドフレイク) 弥生土器(中期後半) 土師器・須恵器 墨書き土器 石器(磨製石斧・砥石・磨石等) 土製品(支脚・ミニチュア土器等)	八幡神社南(1)遺跡周縁部の集落で、ほぼ同じ変遷をたどる。	

千葉県教育振興財団調査報告第528集

両総農業水利事業第3揚水機場建設工事

埋蔵文化財調査報告書1

—山武郡成東町八幡神社南（1）遺跡—

—山武郡成東町八幡神社南（2）遺跡—

平成18年3月24日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 関東農政局両総農業水利事業所
東金市松之郷2,333

財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町1-10-6
